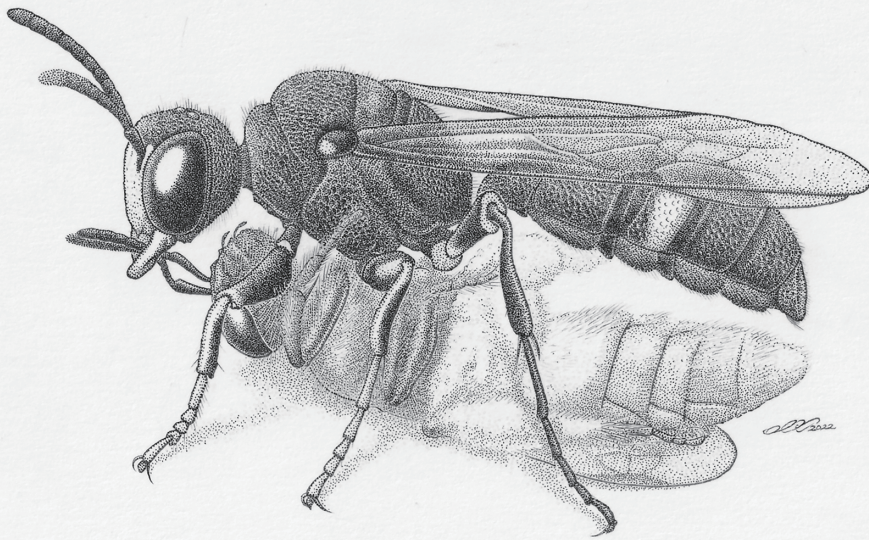


すかれおひ

Sugare-oi No. 9



第9号

膜翅目研究会

Hymenopterists Research Association, Japan

December 2025

すがれおい 第9号

目次

学術報告

渡部晃平・福富宏和：石川県におけるタイワンヒラアシキバチ（ハチ目、キバチ科）の初記録と北限の更新	1
阿部純大：日本産シリボソクロバチ科の目録と属までの検索表	4
廣瀬勇輝：マルモンツノヤセバチ（ハチ目ツノヤセバチ科）の本州からの初記録	25
廣瀬勇輝・鞠子けやき：キンケセダカヤセバチ（ハチ目セダカヤセバチ科）の追加記録	27
廣瀬勇輝・荒井 周：オオスカシバから羽化したスマトラカモドキバチとその二次寄生蜂キスジセアカカギバラバチ	31
渡辺恭平：日本産 Cryptini (ヒメバチ科トガリヒメバチ亜科) の同定資料:6. <i>Cryptus</i> group (II)	35
半田宏伸・三田敏治：本邦より見出されたベッコウカマバチ（和名新称） <i>Echthrodelphax rufus</i> Olmi, 1984 について	49
半田宏伸・田悟敏弘：埼玉県初記録のニセツヤセイボウ属2種について	52
半田宏伸：イタミツヤセイボウの新たな分布記録と若干の考察	56
外村俊輔・久末 遊：徳島県の博物館の粘着板トラップで捕獲されたヤマトナナフシヤドリバチの記録	60
上森教慈：屋久島のアマミキバネクモバチ	63
浦野航平・杉浦真治：ワタナベツチバチの寄主と化性	65
上森教慈：群馬県みなかみ町におけるフクイアナバチの記録	73
上森教慈：シロウズエンモンバチとメスアカマエダテバチの石垣島からの記録	75
高橋秀男：マメギングチバチを群馬県で採集	78
原田 豊：鹿児島市北部の地表性アリ類の記録	80
川島逸郎：神奈川県三浦半島産アシナガバチ属およびホソアシナガバチ属（スズメバチ科：アシナガバチ亜科）の採集記録	95
山根正気・幾留秀一：鹿児島県内で採集されたカリバチ類の記録	107
久末 遊・辻 尚道・井上正隆：小笠原諸島固有種オガサワラコハキリバチの生態観察と保全への示唆	118
加賀芳恵・久末 遊：オガサワラキホリハナバチを聳島列島で初確認	129
渡邊賢司：千葉県松戸市におけるタイワンタケクマバチの記録	131
上森教慈：足寄町の有剣ハチ類の分布記録	133
上森教慈・三田敏治：厚岸湖・別寒辺牛湿原周辺の有剣ハチ類の分布記録	144
上森教慈：道東地域で採集した有剣ハチ類の分布記録	158
訂正	
渡邊賢司：千葉県松戸市におけるキバラハキリバチの記録の訂正	170
渡辺恭平・山本栄治：山本・渡辺（2023）「ウスキキヌガサタケに飛来したツルガハキリバチ」の訂正	170

会員通信

渡辺恭平：次号（第 10 号）へ掲載するコメントを募集します	171
渡辺恭平：与那国島・西表島探蜂記（前編）	171
三田敏治：最近のハチ類コレクション動静 3	182
渡辺恭平・三田敏治：イベント企画、募集中です	183

表紙表題：藤江美穂 / 表紙スケッチ：川島逸郎

本誌および本号についてのご案内

- 本誌は会員に先行公開し、一定期間を経て膜翅目研究会のウェブサイト (<https://sites.google.com/view/makushimoku/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0/%E4%BC%9A%E8%AA%8C%E3%81%99%E3%81%8C%E3%82%8C%E3%81%8A%E3%81%84>) で一般公開します。今号については次号（第 10 号）が出版された際に一般向けの公開とします。ただし、別刷り等の配布を妨げるものではありません。
- 学術報告の著者連絡先の記載は、公的機関や研究機関は全てを記載し、それ以外は市区町村まで記載しています。著者に照会を希望する方はメールアドレスに連絡を行ってください。
- 本誌では各著者に別刷りは提供しません。別刷りが必要な著者は Adobe Acrobat などを使用して、本誌の PDF より当該箇所のページを抽出(あるいは他のページを削除)し、別刷りとして使用ください。
- 本誌の投稿規定にある通り、標本データの表記においては、以下の略字を用いています。メス (F)、オス (M)、ワーカー (W)、女王 (Q)、個体 (ex. 複数形のときは exs.)。ただし、カーストなど特別な表記を用いている報告では「材料と方法」中で記述の上、上記にない略字を用いることがあります。
- 本誌を冊子として印刷される方は、表紙の後ろと奥付の前にそれぞれ空白ページを 1 枚挿入して印刷すると、印刷を想定したレイアウトとなります。

石川県における台湾ヒラアシキバチ (ハチ目、キバチ科) の 初記録と北限の更新

渡部晃平・福富宏和

(〒920-2113 石川県白山市八幡町戌3 石川県ふれあい昆虫館)

Northernmost and new distributional record of *Eriotremex formosanus* (Matsumura, 1912)
(Hymenoptera, Siricidae) from Ishikawa Prefecture, Japan

Kohei Watanabe & Hirokazu Fukutomi

(Ishikawa Insect Museum, 3 Inu, Yawata-machi, Hakusan, Ishikawa 920-2113, Japan)

緒言

台湾ヒラアシキバチ *Eriotremex formosanus* (Matsumura, 1912) は、国内では本州 (茨城県、千葉県、東京都、神奈川県、静岡県、岐阜県、愛知県、福井県、京都府、奈良県、和歌山県、兵庫県、岡山県、山口県)、種子島および奄美大島、国外では中国、台湾、ラオス、タイ、ベトナム、北米に分布するキバチ科の種である (Togashi & Hirashima, 1982; Smith, 1996; 伊藤ら, 1999; 高橋, 2003; 高橋・原島, 2006; 藏満ら, 2019; 日暮・斉藤, 2022; Shinohara, 2022; 福富・篠原, 2023; 大貝, 2024)。筆者らはこれまで未記録であった石川県で本種を確認したため、初記録および北限記録として報告する。

結果と考察

台湾ヒラアシキバチ (図 1A, B)

3 F (福富同定), 石川県能美市松が岡, 23. VII. 2025, 渡部晃平・渡部晴登採集, 石川県ふれあい昆虫館収蔵.

内藤 (2020)、寺山 (2023) を参考にし、前翅 2R1 室と 3R1 室の長さの比が 1:2 であること、尾毛を有することからミナミヒラアシキバチ属に分類され、採集個体は雌成虫であること、腹部背板は黒色で数節の黄色帯を有し、黄白色の軟毛で覆われ、尾円盤が円形であることから、台湾ヒラアシキバチ (以下、本種) と同定した。石川県ではミナミヒラアシキバチ属 *Eriotremex* が未記録であったため、本報告が本属および本種の初記録となる。藏満ら (2019) によると茨城県が本属および本種の分布北限であり、その後記載された *E. quadricinctus* Shinohara, 2022、*E. ruficollis* Shinohara, 2022 はより南に分布する (Shinohara, 2022)。このため、本属および本種の分布北限が石川県能美市に更新される。

日本で本種の産卵行動が確認されている寄主植物はコナラ *Quercus serrata* Murray とカツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. である (高橋・原島, 2006; 日暮・斉藤, 2022; Shinohara, 2022; 寺山, 2023)。今回はクヌギ *Q. acutissima* Carruth. の立ち枯れ (図 1C) に飛来した 2 雌と、同じ木に生息しているクモの巣に絡まった 1 雌を採集したものであり、産

卵行動も観察されたことから(図1B)、新たな寄主植物として注目される。児玉(2025)はコナラに飛来した本種成虫の消長や飛来時刻を調査しており、枯死2年目以降の立ち枯れには本種の飛来が認められなかった事を報告した。今回本種が飛来したクヌギは、上部の葉が全て落葉していたものの、根本付近には緑色の葉が僅かに見られたことから、枯死1年目であるものと推測された。児玉(2025)の観察結果の通り、枯死1年目という点は調査時に重要な着眼点なのかもしれない。また、周囲には数本同様の木が見られたものの、本種の飛来は1本の木に限られた。この木は日当りの良い場所に位置していたことから、日光が当たる状況というのも着眼点の一つになりうる可能性がある。本種はナラ枯れの被害に伴い国内でも増加している可能性が指摘されていることから(日暮・斉藤, 2022)、今後はより北の地域でも確認される可能性があり、動向に留意する必要がある。



A



B



C

図1. 石川県産タイワンヒラアシキバチと採集環境. A: 雌; B: 産卵中の雌; C: 採集環境.

謝 辞

本種を最初に発見いただいた第一著者の息子である渡部晴登氏に感謝する。

引用文献

- 福富宏和・篠原明彦, 2023. 鹿児島県種子島における台湾ヒラアシキバチの初記録. *すがれおい*, (3): 6–7.
- 日暮卓志・斉藤洋一, 2022. 千葉県初記録の台湾ヒラアシキバチ. *すがれおい*, (2): 74–76.
- 伊藤芳教・吉岡政幸・佐藤宏和・岡田正哉, 1999. 台湾ヒラアシキバチを東海地方で採集. *月刊むし*, (337): 41–42.
- 児玉 洋, 2025. 「ナラ枯れ」における台湾ヒラアシキバチに関する生態的知見. *月刊むし*, (649): 26–30.
- 藏満司夢・山田秀雄・久松正樹, 2019. 茨城県初記録となる台湾ヒラアシキバチ (ハチ目: キバチ科) の採集とそのマイカンギアの観察. *茨城県自然博物館研究報告*, (22): 41–44.
- 内藤親彦, 2020. キバチ科. 内藤親彦・篠原明彦・原 秀穂編, *日本産ハバチ・キバチ類図鑑*, pp. 179–182, 462–468, 北海道大学出版会, 札幌.
- 大貝秀雄, 2024. 台湾ヒラアシキバチ (Hymenoptera: Siricidae) を上郡町のトンネル内で採集). *きべりはむし*, **47**(2): 69–70.
- Shinohara, A., 2022. The woodwasp genus *Eriotremex* (Hymenoptera: Siricidae) of Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **28**(2): 169–180.
- Smith, D. R., 1996. Discovery and spread of the Asian horntail, *Eriotremex formosanus* (Matsumura) (Hymenoptera: Siricidae), in the United States. *Journal of Entomological Science*, **31**: 166–171.
- 高橋秀男, 2003. 東京都のキバチ 2 種の記録. *月刊むし*, (385): 49.
- 高橋秀男・原島真二, 2006. キバチ 2 種の産卵木. *月刊むし*, (430): 35–36.
- 寺山 守, 2023. 日本産キバチ科解説. *Insecta Akitsushimana*, (4): 1–37.
- Togashi, I. & Y. Hirashima, 1982. Wood-wasps or horn-tails of the Amami-oshima Island, with description of a new species (Hymenoptera: Siricoidea). *Esakia*, (19): 185–189.

渡部晃平 : koutarouhigasi@yahoo.co.jp

日本産シリボソクロバチ科の目録と属までの検索表

阿部純大

(〒 819-0395 福岡県福岡市西区本岡 744 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室)

Check list of Japanese Proctotrupidae with key to genera

Junta Abe

(Entomological Laboratory, Graduate School of Bioresources and Bioenvironmental Sciences,
Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan)

緒言

シリボソクロバチ科 Proctotrupidae Latreille, 1802 は汎世界的に生息する寄生蜂である。本科は、所属先であるクロバチ上科 Proctotrupoidea の中で最も種多様性が高く、山林部を中心に様々な環境で得られる。いくつかの観察例から、甲虫やキノコバエの幼虫に内部寄生することが知られている (Kolyada & Chemyreva, 2019)。また一部では、後体節全体を産卵基質に突き刺す寄生行動が観察されている (Huggert, 1979; 阿部・橋爪, 2022)。

本科最大の特徴は、「シリボソ」という和名の通り、メスの産卵管鞘が硬く細長く発達する点である (図 7A)。その他にも、腹柄節のかわりに腹部第1腹板前方が伸長して見かけ上の腹柄節 (stalk) を形成する、腹部第1-3背板、腹板それぞれが融合するといった、ハチ目のなかでも風変わりな形態を特徴とする。

本科は世界で31属約700種 (Can & Aydemir, 2025) が知られる。日本においては、Pschorn-Walcher (1964) によって暫定的なファウナの整理が行われた。しかしその後は、海外の研究機関の収蔵標本を用いて散発的な記載、記録が行われるのみだった (e.g. Townes & Townes, 1981; Kolyada, 2016)。近年、国内の標本の検討によって国内のファウナの解明が進み始め (松本, 2020)、現在1亜科3族14属53種が知られる (Abe, 2024a)。しかし、日本を含めた東アジア地域全体において、より一層の調査が求められている (Abe, 2024b)。

本稿では、日本におけるシリボソクロバチ科の基礎資料として、現在日本から知られているシリボソクロバチ科の目録と属 (一部は種) までの検索表を提供する。

材料と方法

形態用語は、Townes & Townes (1981) および Lin (1988) で用いられているものを、渡辺・藤江 (2022) にもとづき日本語に訳した。日本語訳に際し、必要に応じて Hymenoptera Anatomy & Ontology (HAO, Yoder *et al.*, 2010) を参照し、現体系との整合性を確認した。種への検索表は分類学的解明度が高いと筆者が判断したもののみ掲載した。

結果と考察

日本産シリボソクロバチ科の属までの検索表 (Townes & Townes (1981) を改編)

1. 中胸背縦斜溝は明瞭で、中胸背板中央付近まで伸びる。前伸腹節表面は強い隆起線により網目状。オスの tyloid は爪状 (図 4F)。
 - *Disogmini (Disogmus)*
 - 中胸背縦斜溝は弱く、肩板と同程度の長さでしばしば消失する。前伸腹節表面の隆起は *Disogmini* と比べて弱い。
 - 2
2. 見かけ上の腹柄節 (= stalk) が腹部背板によって隠れる (図 2C)。
 - (*Nothoserphus* を除く *Cryptoserphini*) 3
 - 見かけ上の腹柄節が露出する (図 6D)。
 - (*Proctotruperini*; *Cryptoserphini* の *Nothoserphus*) 9
3. 縁紋に RS 脈が接続し、r-rs 脈が消失する (図 1B)。産卵管鞘は比較的ふと短い。
 - *Brachyserphus*
 - 縁紋と RS 脈は直接接続せず、r-rs 脈が存在する (図 2B)。
 - 4
4. 前胸背板側面中央に明瞭な横溝をもつ (図 1F)。
 - *Maaserphus*
 - 前胸背板側面中央に明瞭な横溝をもたない。
 - 5
5. 前胸背板側面のくぼみ (= scrobe) は前方で明瞭にしわ状 (図 3B)。後胸側板平滑面 (体毛や強い表面彫刻のない部分) は後方で強く点刻され、後縁が不明瞭 (図 3C)。
 - *Oxyserphus*
 - 前胸背板側面のくぼみはほとんど平滑。後胸側板平滑面後縁は明瞭。
 - 6
6. 後胸側板平滑面と前伸腹節前縁をつなぐ隆起 (図 4B) が存在する (ただし *Tretoserphus* の一部では隆起が弱く不完全であり、複数の標本の比較検討が必要である)。
 - 7
 - 後胸側板平滑面と前伸腹節前縁をつなぐ隆起は消失する (図 3E)。
 - 8
7. R1 脈は RS 脈末端を超えない (図 4C)。産卵管鞘のとがり方はにぶく、その長さは後脚脛節を超えない。
 - *Tretoserphus*
 - R1 脈は RS 脈末端を超える (図 2B)。産卵管鞘は鋭く、その長さは後脚脛節以上。
 - *Mischoserphus*
8. 後脚脛節棘は長く、第一跗節の基部から 7 割程度まで伸びる (図 1D)。
 - *Cryptoserphus*

- 後脚脛節棘は第一跗節長の半分以下 (図 3F)。

..... *Phoxoserphus*
9. 頭部は扁平で頬 (= upper part of gena) が狭く (図 2D-E)、正面から見たときに逆三角形 (図 2F)。

..... *Nothoserphus*
- 頭部は扁平にならず、正面から見たときに楕円形。

..... 10
10. 前脚および中脚の爪の基部に黒い一対の棘 (図 5E) をもつ (小型種では周囲の毛に隠れて見えにくいことがある)。

..... *Exallonyx*
- 前脚および中脚の爪の基部に棘はない。

..... 11
11. 頭部は正面からみたときに横長の楕円形で、複眼の内縁間の長さは前単眼—頭盾下縁間の長さとはほぼ同長 (図 6B)。大あごは内側にも 1 歯をもつ。

..... *Parthenocodrus*
- 頭部は正面からみたときに縦長の楕円形で、複眼の内縁間の長さは前単眼—頭盾下縁間の長さ以下 (図 7B)。大あごは内側に歯をもたない。

..... 12
12. 触角挿入孔の間に細く明瞭に発達した隆起をもつ (図 6F)。

..... *Phanoserphus*
- 触角挿入孔の間に発達した隆起はない。

..... 13
13. 頭部を上面からみたときに額がこぶ状に張り出す (図 5B)。オスの把握器 (= gonostyle) は鋭く顕著にとがる (図 5C)。

..... *Codrus*
- 頭部を上面からみたときに額は張り出さない。

..... 14
14. 後頭隆起線は発達せずに通常。産卵管鞘は明瞭に細長く、その長さは後脚脛節長を超える。

..... *Proctotrupes*
- 後頭隆起線は発達する。産卵管鞘の長さは後脚脛節以下。

..... *Phaenoserphus*

日本産シリボソクロバチ科の目録と解説
(山岸 (2020) を改編)

日本から得られているシリボソクロバチ科について、ホストと記録のある県を下記に示した。特筆すべき点がある場合は備考に付した。

シリボソクロバチ科 Family Proctotrupidae Latreille, 1802

Subfamily Proctotrupinae

Tribe Cryptoserphini

Genus *Brachyserphus* Hellén, 1941

(図 1A–B)

ホスト：ケシキスイ科、オオキノコムシ科、ヒメハナムシ科、ナガクチキムシ科

備考：本属はオスの同定が困難である (Choi *et al.*, 2012)。日本産種のメスについては、Kolyada (2016) による旧北区の検索表を用いて同定可能である。

日本産 *Brachyserphus* 属の種までの検索表

(Kolyada (2016) を改編、各種の写真は Choi *et al.* (2012) および Kolyada (2016) を参照)

1. 後胸側板平滑面は下縁の隆起 (epicoxial carina) を欠く (図は Choi *et al.* (2012) を参照)。
..... *Brachyserphus nudipleuralis*
-. 後胸側板平滑面下縁は明確に隆起する (まれに隆起の後方が消失)。
..... 2
2. 後体節第5背板の点刻群は背板前縁から背板長の5割に届かず、後方の剛毛は含まない (図は Choi *et al.* (2012) を参照)。
..... *Brachyserphus semipunctatus*
-. 後体節第5背板の点刻群は背板前縁から背板長の2/3まで届き、後方の剛毛周囲まで及ぶ。
..... 3
3. 産卵管鞘は末端付近で強く密に点刻される。小顎肢は暗茶褐色 (標本状態が悪いと色が変わることもあるため注意が必要)。
..... *Brachyserphus acticaudatus*
-. 産卵管鞘末端の点刻は弱く、密にはならない。
..... 4
4. 産卵管鞘は末端近くで強く湾曲し、側面からみてフック状になる (図は Kolyada (2016) を参照)。
..... *Brachyserphus leleji*
-. 産卵管鞘は全体的に湾曲し、側面からみてフック状にはならない。
..... 5
5. 前胸背板と中胸背板の境界付近にある一对の出っ張り (pronotal shoulder) は強く張り出す (図は Kolyada (2016) を参照)。上方から見て産卵管鞘長は太さの約3.9倍。
..... *Brachyserphus abruptus*
-. Pronotal shoulder の張り出しは比較的弱い。上方からみて産卵管鞘長は太さの5.0–5.6倍。
..... *Brachyserphus parvulus*

Brachyserphus abruptus (Say, 1836)

分布：愛知県 (Abe, 2024a)

ホスト：未知

Brachyserphus acticaudatus Kolyada, 2012

分布：北海道 (Kolyada, 2016)

ホスト：未知

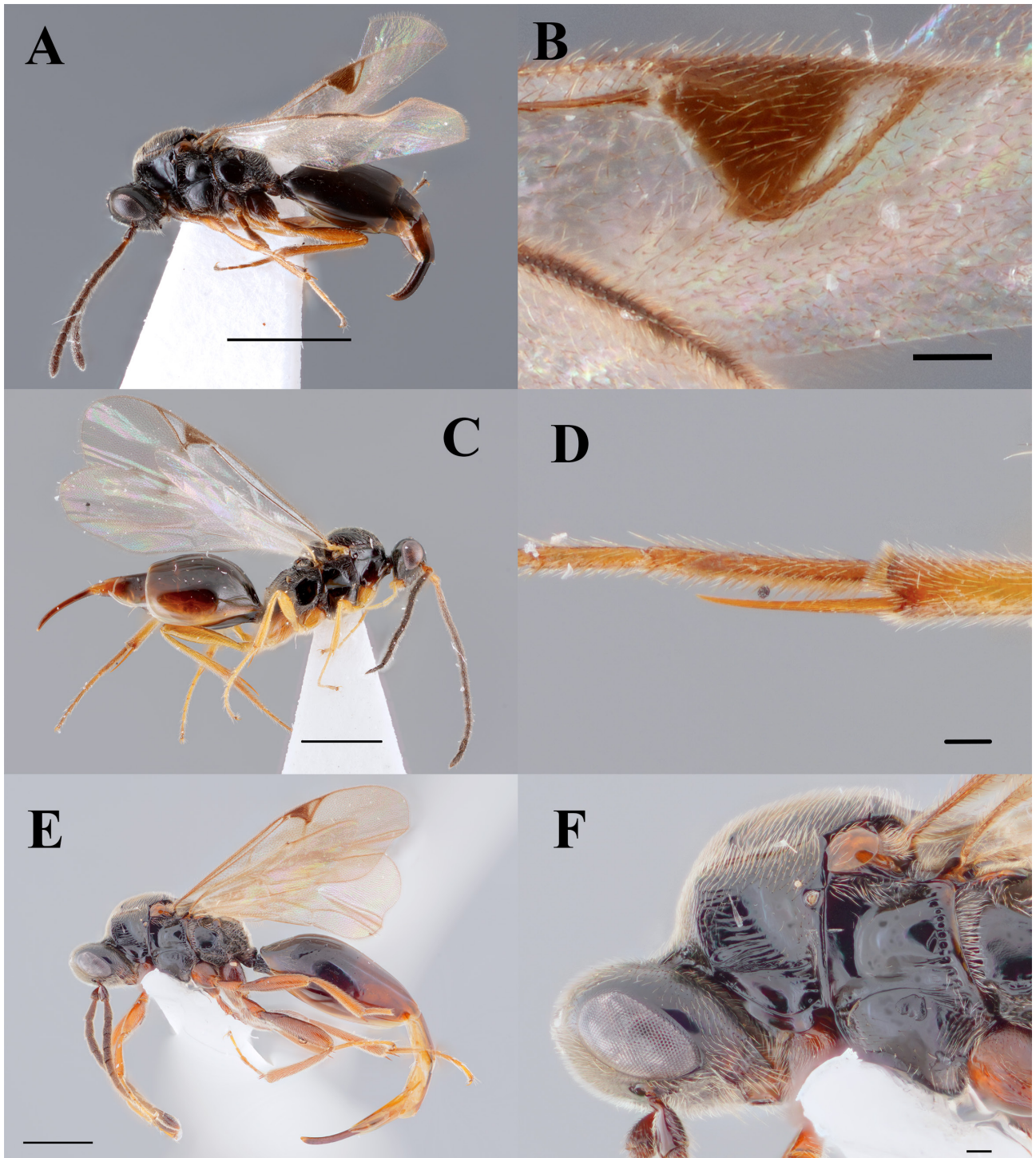


図 1. A–B, *Brachyserphus nudipleuralis*. A, 側面全形図 ; B, 前翅脈 . C–D, *Cryptoserphus aculeator*. C, 側面全形図 ; D, 後脚脛節棘 . E–F, *Maaserphus striatus*. E, 側面全形図 ; F, 頭部, 前胸背板, および中胸側板側面 .

Brachyserphus leleji Kolyada, 2016

分布：岩手県、新潟県 (Kolyada, 2016)

ホスト：未知

Brachyserphus nudipleuralis Kolyada, 1997

分布：北海道 (Kolyada, 2016)

ホスト：未知

Brachyserphus parvulus (Nees, 1834)

分布：北海道、岩手県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Meligethes* sp. (ケシキスイ科)、*Triplax* sp. (オオキノコムシ科)、*Phalacrus corruscus* (ヒメハナムシ科)、*Orchesia micans* (ナガクチキムシ科) (Choi *et al.*, 2012)

備考：本種は、チャミダレアミタケに後体節を突き刺す様子が野外で観察されており、寄生行動だと推定されている (阿部・橋爪 2022)。

Brachyserphus semipunctatus Kolyada, 2012

分布：茨城県 (Kolyada, 2016)

ホスト：未知

Genus *Cryptoserphus* Kieffer, 1907

(図 1C–D)

ホスト：キノコバエ科

Cryptoserphus aculeator (Haliday, 1839)

分布：北海道、栃木県、大阪府、愛媛県、福岡県 (Pschorn-Walcher, 1964; Drake, 1969)

ホスト：*Mycetophila fuficoris*、*Exechia contaminata* (キノコバエ科) (Townes & Townes, 1981)

Cryptoserphus dilatus Townes, 1981

分布：北海道、栃木県、長野県、熊本県 (Abe, 2024a)

ホスト：未知

Cryptoserphus flavipes (Provancher, 1881)

分布：北海道 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Mycetophila fungorum* (キノコバエ科) (Townes & Townes, 1981)

Cryptoserphus fortis Townes, 1981

分布：北海道、福岡県 (Abe, 2024a)

ホスト：未知

Cryptoserphus longitarsis (Thomson, 1857)

分布：北海道、栃木県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：未知

Cryptoserphus medius Townes, 1981

分布：長野県 (Townes & Townes, 1981)

ホスト：未知

Cryptoserphus occidentalis Brues, 1919

分布：北海道、愛知県、兵庫県、愛媛県 (Abe, 2024a)

ホスト：未知

Genus *Maaserphus* Lin, 1988

(図 1E-F)

ホスト：未知

Maaserphus flavitarsis He & Xu, 2015

分布：福岡県 (Abe, 2024b)

ホスト：未知

Maaserphus striatus Lin, 1988

分布：長野県、愛知県、福岡県 (Abe, 2024b)

ホスト：未知

Maaserphus yamagishii Abe, 2024

分布：群馬県、愛知県 (Abe, 2024b)

ホスト：未知

Genus *Mischoserphus* Townes, 1981

(図 2A-C)

ホスト：未知

備考：本属はキノコバエ科への寄生が示唆されている (Townes & Townes, 1981; Kolyada, 2012)。

Mischoserphus arcuator (Stelfox, 1950) サーベルシリボソクロバチ

分布：岩手県、福岡県 (Townes & Townes, 1981; 阿部, 2022)

ホスト：未知

備考：本種はキノコバエ科への寄生が示唆されている (Kolyada, 2012)。

Mischoserphus samurai (Pschorn-Walcher, 1964) サムライシリボソクロバチ

分布：北海道、栃木県、福岡県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：未知

Genus *Nothoserphus* Brues, 1940

(図 2D-F)

ホスト：テントウムシ科

備考：日本産本属は Abe (2023a) により検討され、2 種が知られる。

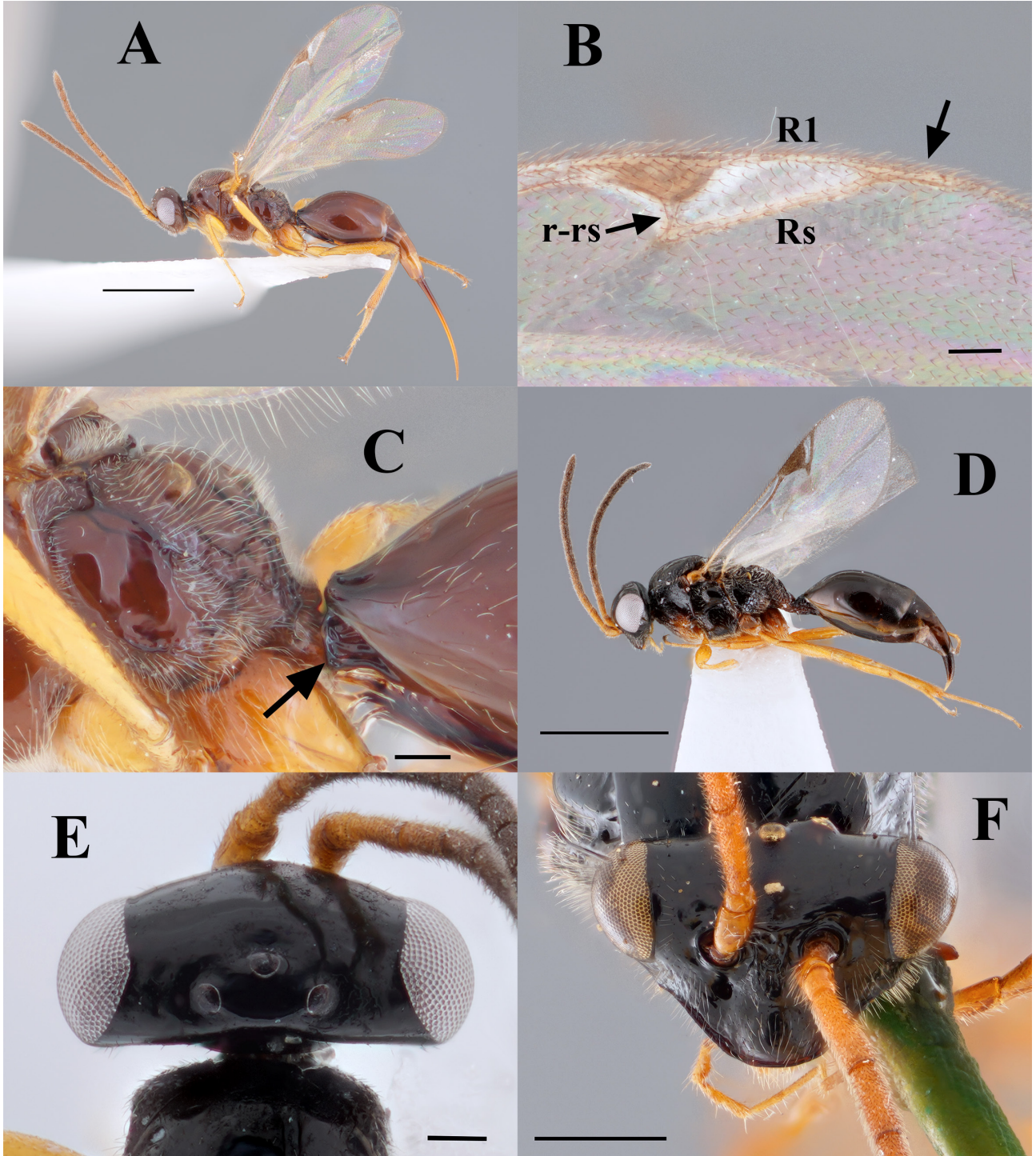


図 2. A-C, *Mischoserphus arcuator*. A, 側面全形図; B, 前翅脈, 矢印は RS 脈末端を超えた R1 脈を示す; C, 後胸側板および腹部前方側面, 矢印は stalk を示す. D-E, *Nothoserphus scymni*. D, 側面全形図; E, 頭部背面. F, *Nothoserphus afissae*, 頭部正面.

日本産 *Nothoserphus* 属の種までの検索表
(Abe (2023a) に基づき作成。両種の写真は Abe (2023a) を参照。)

1. 体長は 4.5–5.7 mm。前胸背板側面のくぼみ (scrobe) に複数のしわをもつ。中胸背縦斜溝は長く、肩板長の 2 倍以上。中胸盾板—小盾板分割溝内に 2–4 本の隆起をもつ。

..... *Nothoserphus afissae*
-. 体長は 2.4–2.9 mm。Scrobe はしわをもたず、平滑。中胸背縦斜溝は短く、肩板長と同長かそれ以下。中胸盾板—小盾板分割溝内には隆起をもたない。

..... *Nothoserphus scymni*

Nothoserphus afissae (Watanabe, 1954) ワタナベシリボソクロバチ

分布：北海道、東京都、静岡県、福岡県 (Watanabe, 1954; Pschorn-Walcher, 1964; 松本, 2020; 阿部, 2023a)

宿主：トホシテントウ、オオニジュウヤホシテントウ、インゲンテントウ (いずれもテントウムシ科) (Abe, 2023a)

Nothoserphus scymni (Ashmead, 1904) テントウシリボソクロバチ

分布：北海道、福島県、東京都、神奈川県、石川県、岐阜県、奈良県、山口県、愛媛県、福岡県 (Ashmead, 1904; Watanabe, 1954; Pschorn-Walcher, 1964; Townes & Townes, 1981; 松本, 2020; Abe & Seki, 2021)

宿主：コクロヒメテントウ、ツマアカヒメテントウ、トビイロヒメテントウ、クロヘリヒメテントウ、*Scymnus* sp. (いずれもテントウムシ科) (Abe & Seki, 2021)

Genus *Oxyserphus* Masner, 1961

(図 3A–C)

宿主：ケシキスイ科

Oxyserphus clypeatus (Ashmead, 1893)

分布：福島県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、愛媛県、福岡県、鹿児島県 (Abe, 2022)

宿主：ヨツモンヒラタケシキスイ (ケシキスイ科) (Abe, 2022)

Genus *Phoxoserphus* Lin, 1988

(図 3D–F)

宿主：未知

備考：本属は Abe (2023b) により、日本産種を含めた検索表が示されている。

日本産 *Phoxoserphus* 属の種までの検索表
(Abe (2023b) を改編。両種の写真は Abe (2023b) を参照。)

1. 前胸背板側面のくぼみ (scrobe) 前縁に弱いへこみを持つ。小盾板は幅広で、長さは横幅の0.9–1.1倍。産卵管鞘は全体的に湾曲し、側面から見た際の長さは縦幅の6.4倍。

..... *Phoxoserphus iyokpe*

-. Scrobe 前縁に明瞭な孔をもつ。小盾板は縦長で、長さは横幅の1.2–1.3倍。産卵管鞘の湾曲は弱く、側面から見た際の長さは縦幅の7.4–8.8倍。

..... *Phoxoserphus chikoi*

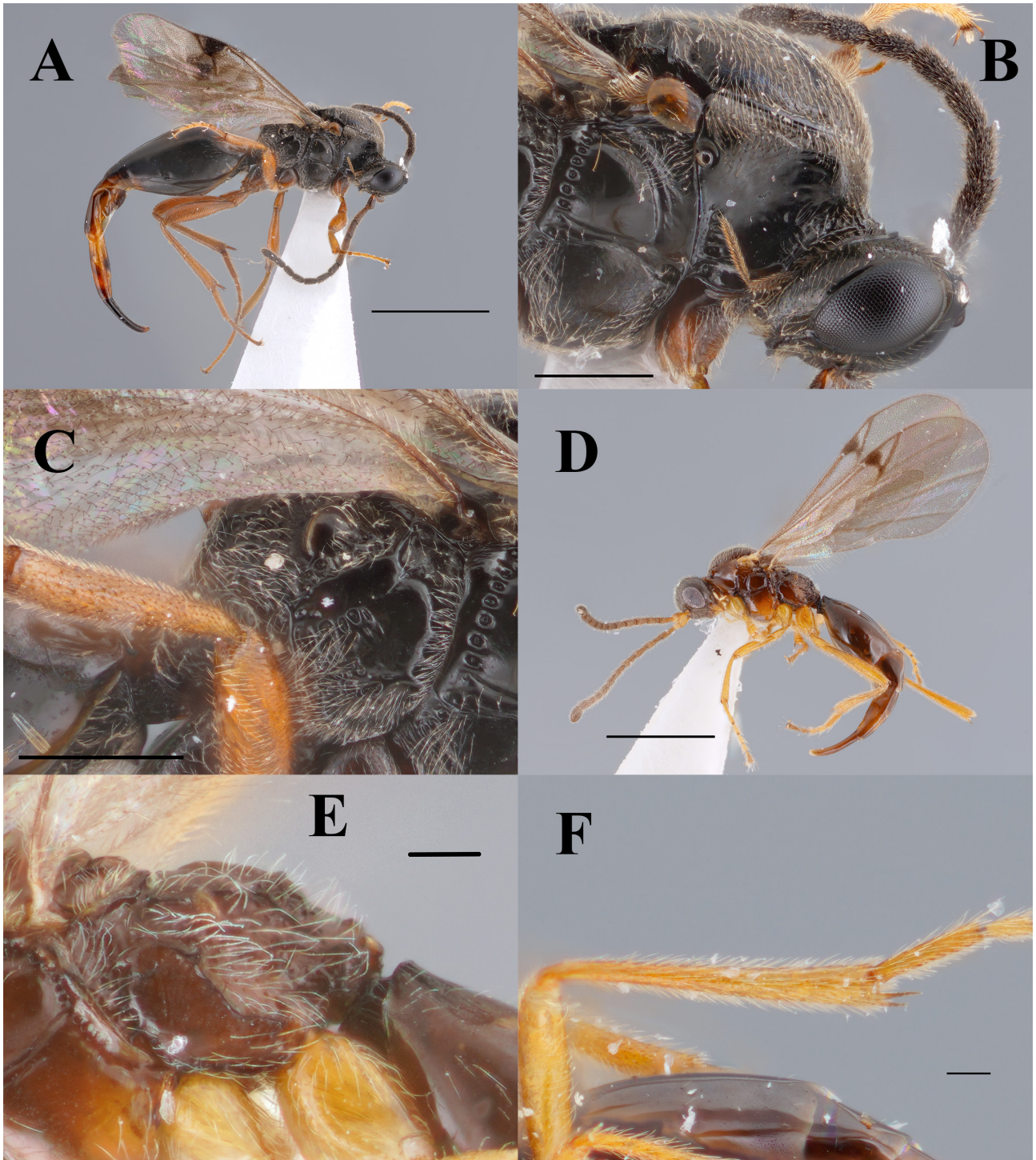


図3. A–C, *Oxyserphus clypeatus*. A, 側面全形図; B, 頭部, 前胸背板, および中胸側板側面; C, 後胸側板. D–F, *Phoxoserphus chikoi*. D, 側面全形図; E, 後胸側板および腹部前方側面; F, 後脚脛節および第一跗節.

Phoxoserphus chikoi Lin, 1988

分布：福岡県、長崎県、鹿児島県（屋久島）(Abe, 2023b)

ホスト：未知

Phoxoserphus iyokpe Abe, 2023

分布：北海道 (Abe, 2023b)

ホスト：未知

Genus *Tretoserphus* Townes, 1981

(図 4A–C)

ホスト：未知

Tretoserphus foveolatus (Möller, 1882)

分布：北日本 (Pschorn-Walcher, 1971)

ホスト：未知

備考：本種は菌類の孢子孔へ後体節を突き立てる様子が野外で観察されている (Huggert, 1979)。

Tretoserphus laricis (Haliday, 1839)

分布：北日本、北海道、長野県、福岡県 (Watanabe, 1949; Pschorn-Walcher, 1971; Townes & Townes, 1981; 阿部, 2022)

ホスト：未知

Tretoserphus perkinsi (Nixon, 1942)

分布：北海道 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：未知

Tribe Disogmini

Genus *Disogmus* Foerster, 1856

(図 4D–F)

ホスト：未知

備考：本属は北半球に広く分布し、オスの tyloid が触角鞭節の第何節にあるかによって同定される (Townes & Townes, 1981)。しかし、既存の判別形質では十分種を認識できておらず (V. Kolyada 博士 私信)、分布域内の網羅的な検討が必要である。

Disogmus areolator (Haliday, 1839)

分布：北海道、神奈川県 (Pschorn-Walcher, 1964; 松本, 2020)

ホスト：未知

備考：本種は色彩多型が確認されている。体色は黒色が基本だが、中体節や後体節の一部が茶褐色から黄褐色になる個体 (図 4F) が存在する (Townes & Townes, 1981)。

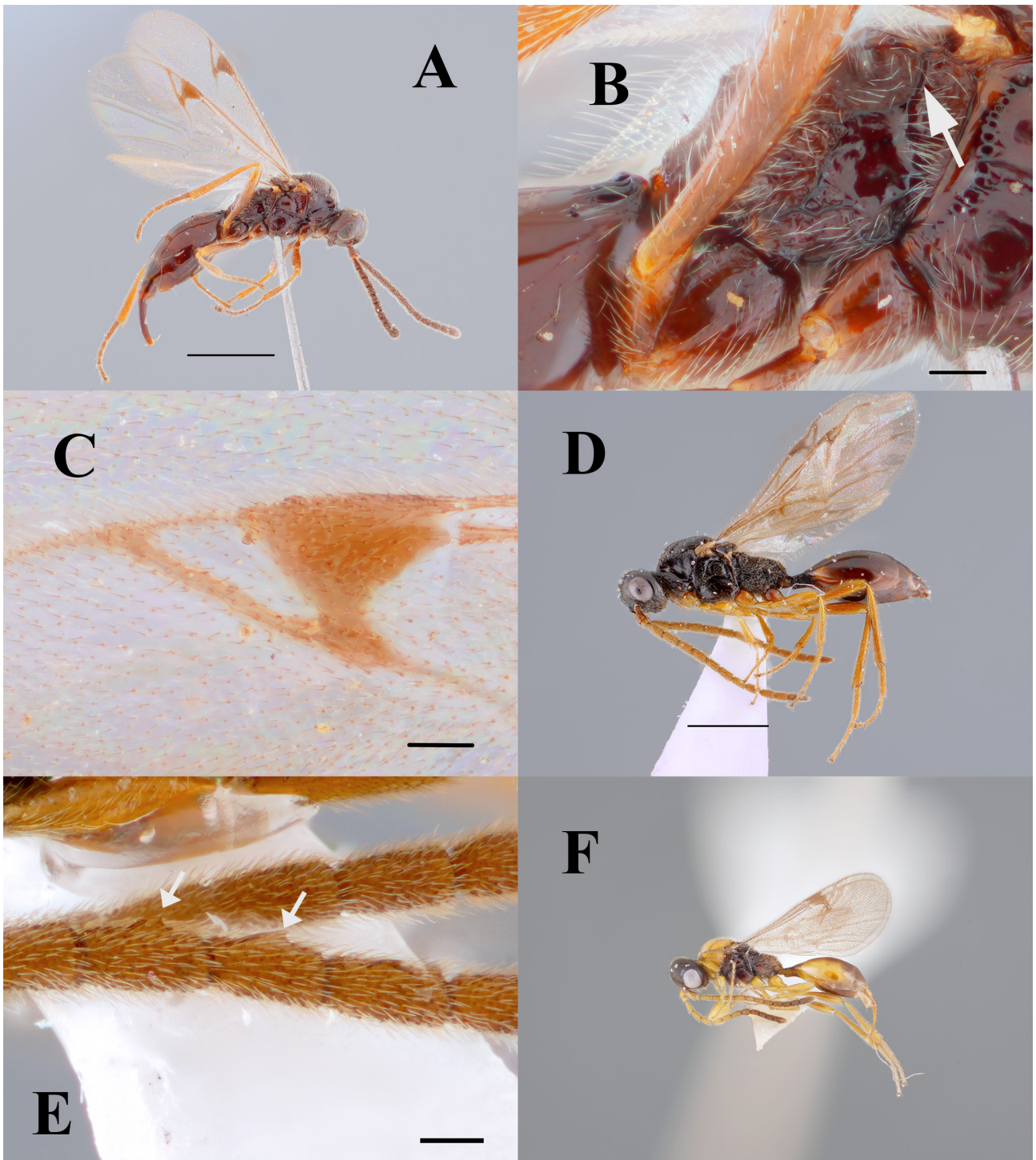


図 4. A–C, *Tretoserphus laricis*. A, 側面全形図; B, 後胸側板および腹部前方側面, 矢印は後胸側板平滑面と前伸腹節前縁をつなぐ隆起を示す; C, 前翅脈. D–F, *Disogmus areolator*. D, 側面全形図; E, オス触角鞭節, 矢印は tyloid を示す; F, 色彩変異個体側面全形図.

Tribe Proctotrupini

Genus *Codrus* Panzer, 1805

(図 5A–C)

ホスト：オサムシ科、ハネカクシ科

備考：日本産種の同定には Park *et al.* (2017) が有効だが、未記載種か否かの判断には注意が必要である。

Codrus ciliatus Townes, 1981

分布：北海道、岩手県、群馬県、新潟県、愛知県、愛媛県、福岡県 (Townes & Townes, 1981; Park *et al.*, 2017; 松本, 2020; 阿部, 2022)

ホスト：未知

Codrus nebriae (Watanabe, 1954)

分布：岩手県、栃木県、茨城県、新潟県、長野県、愛媛県 (Watanabe, 1954; Park *et al.*, 2017)

ホスト：カワチマルクビゴミムシ (オサムシ科) (Park *et al.*, 2017)

Codrus niger Panzer, 1873

分布：北海道、岩手県、栃木県、山梨県、静岡県、福岡県 (Park *et al.*, 2017; 松本, 2020)

ホスト：*Nebria brevicollis* (オサムシ科)、*Tasgius ater* (ハネカクシ科) (Park *et al.*, 2017)

Codrus picicornis (Forster, 1856)

分布：北海道、栃木県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：未知

Codrus tripotini Lee & Park, 2017

分布：新潟県 (松本, 2020)

ホスト：未知

Genus *Exallonyx* Kieffer, 1904

(図 5D-E)

ホスト：ハネカクシ科

備考：本属はシリボソクロバチ科内で最大の属で、汎世界的に分布する。広域分布種が多いこともあり、難分類群として知られる (Can & Aydemir 2025)。

Exallonyx ater (Gravenhorst, 1807)

分布：北海道 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Creophilus maxillosus* (ハネカクシ科)、*Ocypus olens* (ハネカクシ科) (Townes & Townes, 1981)

Exallonyx brevicornis (Haliday, 1836)

分布：北海道 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Quedius vexans* (ハネカクシ科) (Townes & Townes, 1981)

Exallonyx confusus Nixon, 1938

分布：北海道、東京都 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：未知

Exallonyx japonicus (Ashmead, 1904) 二ホンシリボソクロバチ (和名新称)

分布：北海道、埼玉県、東京都、山梨県、茨城県、神奈川県、新潟県、長野県、愛媛県、福岡県、鹿児島県 (Watanabe, 1949; Townes & Townes, 1981; 松本, 2020)

ホスト：未知

備考：本種は、大型でかつ様々な環境で得られる。国内でもっとも一般的なシリボソクロバチ科の一種である。

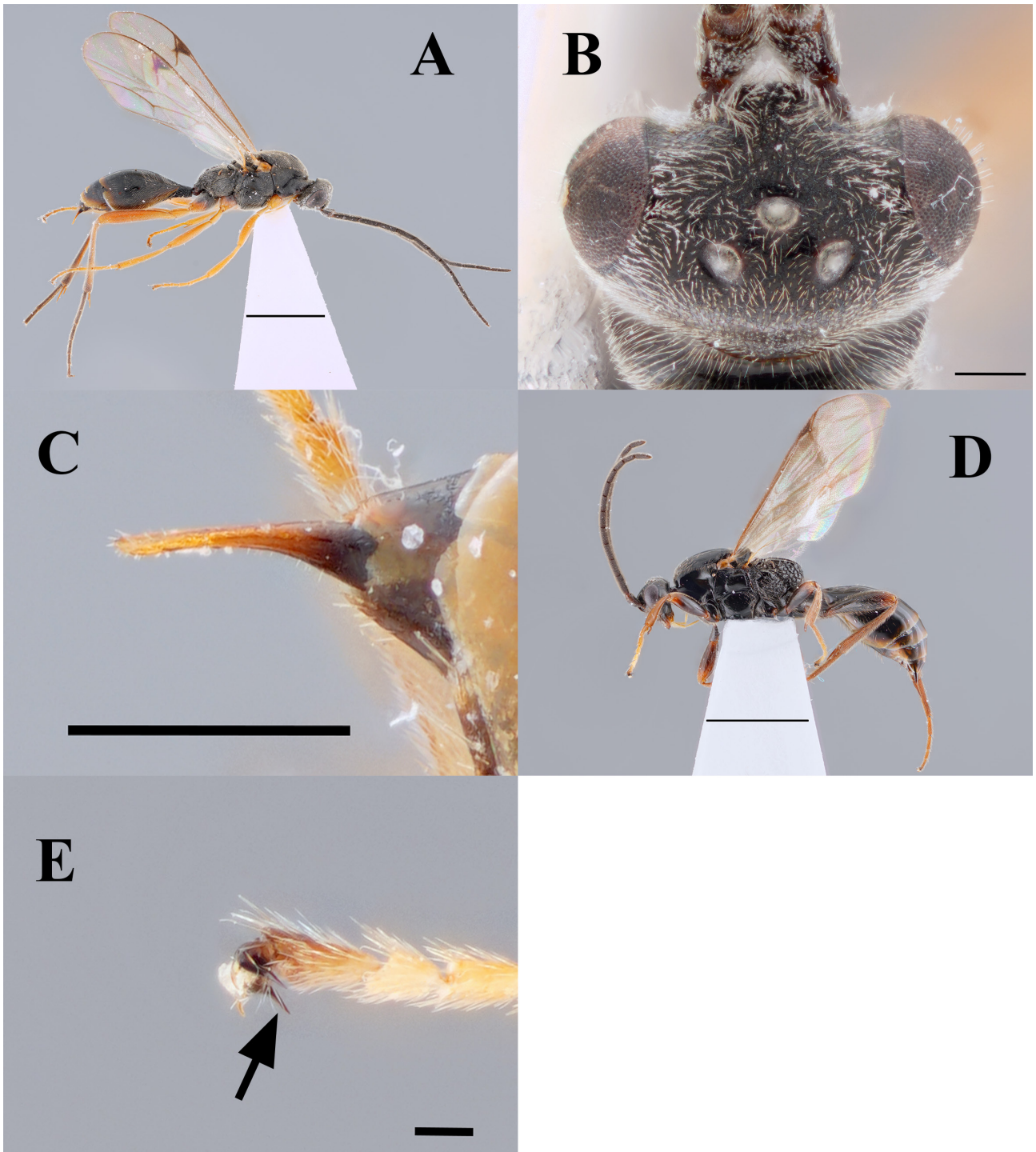


図5. A-C, *Codrus ciliatus*. A, 側面全形図; B, 頭部背面; C, オス把握器. D-E, *Exallonyx japonicus*. D, 側面全形図; E, 前脚爪, 矢印は爪基部の黒い棘を示す.

Exallonyx ligatus (Nees, 1834)

分布：北海道、富山県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：未知

Exallonyx microcerus Kieffer, 1907

分布：北海道 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Xantholinus* sp. (ハネカクシ科) (Townes & Townes, 1981)

Exallonyx nikkoensis (Pschorn-Walcher, 1964)

分布：北海道、栃木県 (Pschorn-Walcher, 1964; Townes & Townes, 1981)

ホスト：未知

備考：本種は Pschorn-Walcher (1964) によって記載された後、タイプ標本が北海道大学に収蔵されたが、1975年時点でホロタイプが消失している (Townes & Townes, 1981)。著者も北海道大学総合博物館を訪問した折にハチ目コレクションを搜索したが、発見できなかった。

Exallonyx pallidistigma (Morley, 1922)

分布：栃木県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Ocypus ater* (ハネカクシ科) (Townes & Townes, 1981)

Exallonyx polysulcus Townes, 1981

分布：北海道、埼玉県、東京都、長野県 (Townes & Townes, 1981)

ホスト：未知

Exallonyx styracura Townes, 1981

分布：北海道 (Townes & Townes, 1981)

ホスト：未知

Exallonyx wasmanni Kieffer, 1904

分布：北海道 (Pschorn-Walcher 1964)

ホスト：アリの巣から得られたと報告がある (Kieffer, 1914; Donisthorpe, 1927)。該当論文の証拠標本は Townes & Townes (1981) により検討されている。しかしながら、好蟻性昆虫か判断するにはより詳細な調査が求められる。

Genus *Parthenocodrus* Pschorn-Walcher, 1958

(図 6A–B)

ホスト：コメツキムシ科

備考：日本に産する本属の同定には Kolyada (1999) および Kim *et al.* (2016) が有効だが、未記載種か否かの判断には注意が必要である。

Parthenocodrus elongatus (Haliday, 1839)

分布：北海道 (Kim *et al.*, 2016)

ホスト：*Athous niger* (コメツキムシ科)、*At. haemorrhoidalis* (コメツキムシ科)、*Agriotes obscurus* (コメツキムシ科) (Townes & Townes, 1981)

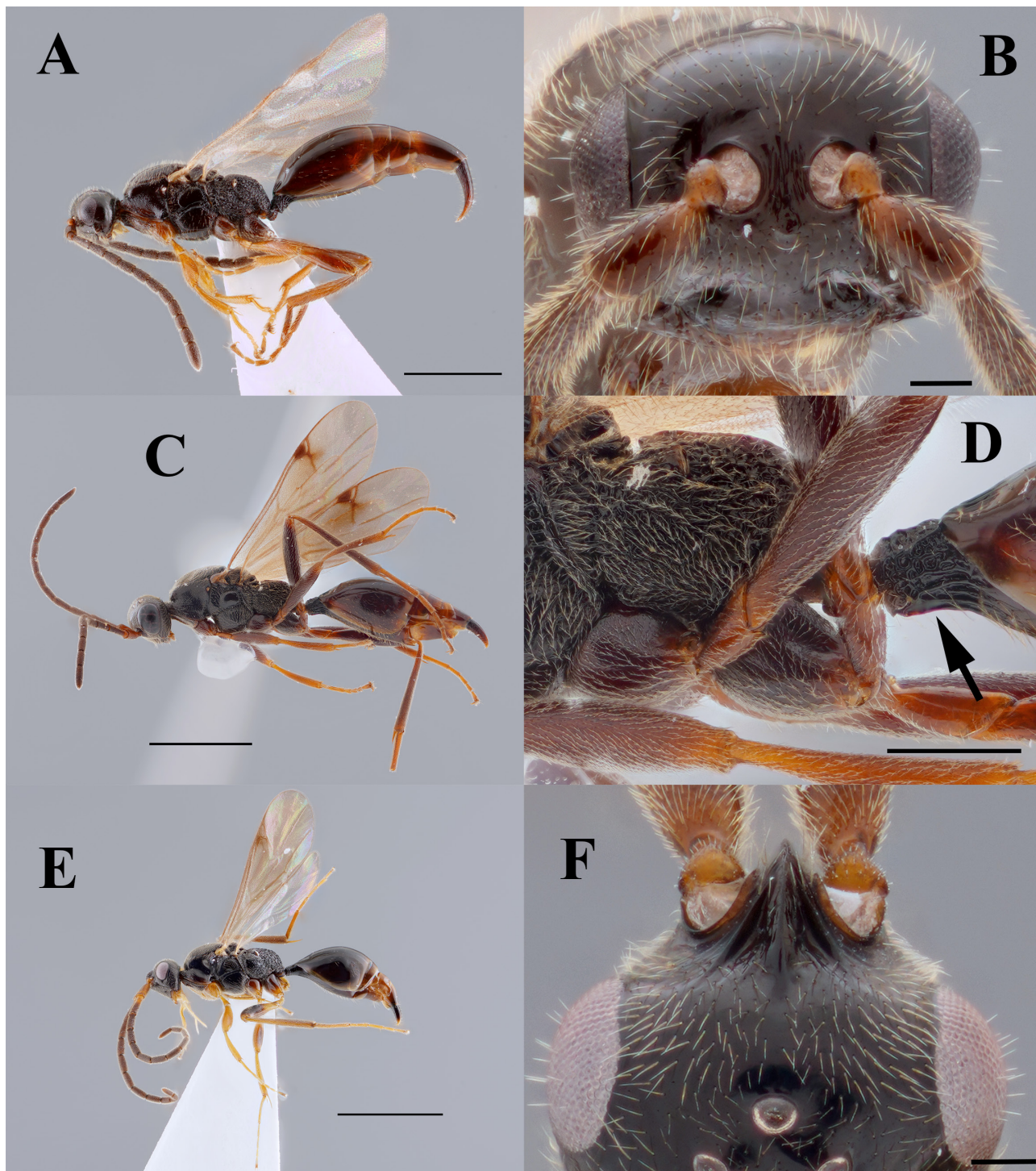


図 6. A-B, *Parthenocodrus elongatus*. A, 側面全形図; B, 頭部正面. C-D, *Phaenoserphus viator*. C, 側面全形図; D, 後胸側板および腹部前方側面, 矢印は stalk を示す. E-F, *Phaneroserphus cristatus*. E, 側面全形図; F, 頭部背面.

Parthenocodrus puncticauda Kolyada, 1999

分布：北海道 (Abe, 2024a)

ホスト：未知

Genus *Phaenoserphus* Kieffer, 1908

(図 6C–D)

ホスト：オサムシ科

備考：本属は同定が難しい分類群である (Townes & Townes, 1981)。

Phaenoserphus chittii (Morey, 1922)

分布：北海道、栃木県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Carabus* sp. (オサムシ科) (Townes & Townes, 1981)

Phaenoserphus viator (Haliday, 1839)

分布：北海道、栃木県、東京都、長野県 (Pschorn-Walcher, 1964)

ホスト：*Carabus* 属を中心にオサムシ科への寄生が複数報告されているが、証拠標本の精査が求められる。

Genus *Phaneroserphus* Pschorn-Walcher, 1958

(図 6E–F)

ホスト：ハネカクシ科、イシムカデ科

備考：日本に産する本属は Choi *et al.* (2016) により多くが同定できるが、未記載種か否かの判断には注意が必要である。

Phaneroserphus brevistigma Townes, 1981

分布：岩手県 (Choi *et al.*, 2016)

ホスト：未知

Phaneroserphus calcar (Haliday, 1839)

分布：日本 (詳細不明) (Pschorn-Walcher, 1971)

ホスト：*Bolitochara oblique* (ハネカクシ科)、*Quedius simplicifrons* (ハネカクシ科)、*Lithobius forficatus* (イシムカデ科) (Choi *et al.*, 2016)

Phaneroserphus coreanus Kolyada, 2016

分布：岩手県、茨城県 (Choi *et al.*, 2016)

ホスト：未知

Phaneroserphus cristatus Townes, 1981

分布：北海道、岩手県、新潟県、群馬県、栃木県、茨城県、神奈川県、静岡県、愛知県、愛媛県、福岡県 (Townes & Townes, 1981; Choi *et al.*, 2016; 松本, 2020)

ホスト：未知

Phaneroserpus longistigma Townes, 1981

分布：岩手県、奈良県 (Choi *et al.*, 2016)

ホスト：未知

Phaneroserpus punctibasis Townes, 1981

分布：北海道、岩手県、新潟県、栃木県、茨城県、愛知県、愛媛県 (Townes & Townes, 1981; Choi *et al.*, 2016; 松本, 2020)

ホスト：未知

Genus *Proctotrupes* Latreille, 1796

(図 7A–B)

ホスト：オサムシ科

Proctotrupes gravidator (Linnaeus, 1758) オオシリボソクロバチ

分布：北海道、東京都、神奈川県、四国(県名不明)、熊本県、福岡県 (Pschorn-Walcher, 1964; Watanabe, 1964; 松本, 2020)

ホスト：オサムシ科 (Townes & Townes, 1981)

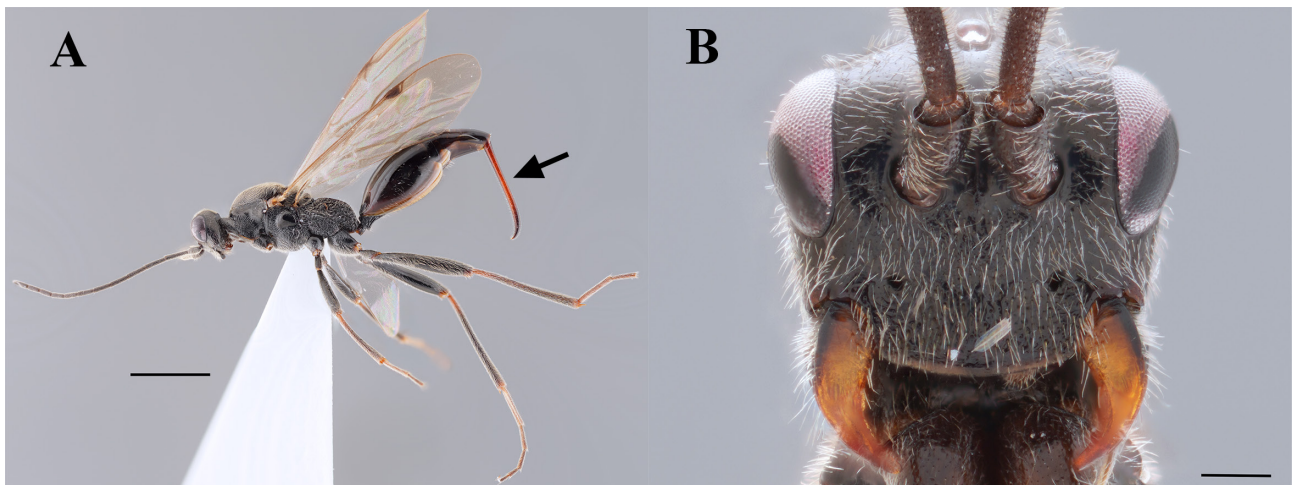


図 7. A–B, *Proctotrupes gravidator*. A, 側面全形図, 矢印は産卵管鞘を示す; B, 頭部正面.

採集法について

シリボソクロバチ科は、スイープに加えてトラップ類でも採集できる。マレーゼトラップやイエローパントラップが主力となるが、少数ながら、羽化トラップ、衝突版トラップ、ライトトラップ、ツルグレン装置でも採集されている。採集個体数の観点から、マレーゼトラップかイエローパントラップを設置し、並行してスイープによる採集を行うのが現実的な調査方法である。周辺環境によって多少変化するため、あくまで著者の経験による大まかな傾向ではあるが、これら3種の採集法間で適切な環境が少しずつ異なる。

スイープでは林内、あるいは林縁でも終日日陰になっているような環境で得られる。日向でもときおり得られるものの、採集効率は低い。タマゴクロバチほど根際ではないが、下草のかなり下部の方から掬い上げるように網を振ると採集されやすい。ごくまれではあるが、クリヤウド類などの花掬いでも得られる。一方で、マレーゼトラップは日向からやや日陰で風が抜ける場所が適していると考えられる。スイープに適した環境に設置しても、偶然発生源が近くにない限り採集できない。イエローパントラップについてはこれらの中間で、林内や林縁の日陰だが時間帯によって日が当たるような場所に設置すると採集しやすい。ただ、採集数が安定しないため、もう少し試行錯誤が必要である。いずれの採集法でも大まかな傾向として、日陰では *Cryptoserphini* 族が、日当たりがよくなるにつれ *Proctotrupini* 族が多く得られる。

また、国内においても野外からホスト幼虫を持ち帰り羽化させた例がいくつか報告されている(杉野・宗野, 2017; Abe & Seki, 2021; 阿部・駒澤, 2023)。さらに、個人の観察例にとどまっているため具体的な言及は控えるが、*Brachyserphus* 属のほかにも複数の属でキノコへの飛来が確認されている(川島育海氏, 米田洋斗氏, 辻尚道氏, 私信)。野外生態の解明に重要な知見となりえるが、ホスト幼虫やキノコを野外から持ち帰ってもシリボソクロバチ科が羽化してこないことも多く、効率的な採集法の調査が求められる。

標本作成について

シリボソクロバチ科の同定には、側面の特徴をよく用いる。一方で、背面には属や種の同定形質が少ない。効率的に比較検討を行うためにも、三角台紙に側面を上にしてマウントする(図 1A, C) のが望ましい。破損や落下のリスクは高まるが、大型の個体でも三角台紙にマウントしてしまっただけで差し支えない(図 5A, 図 7A)。また、本科は翅脈が退化傾向にあるグループで、縁紋近辺の翅脈を中心に観察する。そのため、翅は無理に整形する必要はない。脚についても同様で、標本作成時に無理に整形する必要はない。もし他の形質に重なってしまっていたら、顕鏡の際にピンセットの先端でやさしく押して位置を調整する。

謝 辞

本稿の内容を執筆する過程で、散在していた国内の標本を整理・検討していく必要があった。収蔵標本の調査に際して、大原昌宏氏(北海道大学総合博物館)、山迫淳介氏(農研機構)、井手竜也氏(国立科学博物館)、末吉昌宏氏(森林総合研究所)、渡辺恭平氏(神奈川県立生命の星・地球博物館)、山岸健三氏(名城大学農学部(当時))、松本吏樹郎氏(大阪市立自然史博物館)、藤江隼平氏(同上)、小西和彦氏(愛媛大学農学部(当時))、CF. Lee 氏(台湾行政院農業委員会農業試験場)にご助力いただいた。また、所属や対象としている分類群を問わず、大変多くの方々にサンプルをご提供いただいていた。同定作業にあたっては、V. Kolyada 博士(ロシア科学アカデミー)にご助言いただいた。本稿の推敲に際しては、渡辺恭平氏にご助力いただいた。厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 阿部純大, 2022. 福岡県英彦山のマレーゼトラップで得られたシリボソクロバチ科. *Pulex*, (101): 929–931.
- Abe, J., 2022. First record of the genus *Oxyserphus* Masner, 1961 (Hymenoptera: Proctotrupidae) from Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **28**(1): 23–25.
- Abe, J., 2023a. Redescription of *Nothoserphus afissae* (Watanabe, 1954) (Hymenoptera: Proctotrupidae), a parasitoid wasp of lady beetle. 昆虫 (ニューシリーズ), **26**(3): 179–183.
- Abe, J., 2023b. Revision of the genus *Phoxoserphus* Lin, 1988 (Hymenoptera: Proctotrupidae), with the description of a new species. *Zootaxa*, **5325**(1): 141–146. (<https://doi.org/10.11646/zootaxa.5325.1.10>)
- Abe, J., 2024a. Five new records of Proctotrupidae (Hymenoptera: Proctotrupoidea) from Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **30**(2): 196–200.
- Abe, J., 2024b. Two new species of the genus *Maaserphus* Lin, 1988 (Hymenoptera: Proctotrupidae) from Japan and Taiwan. *Zootaxa*, **5523**(4): 494–500. (<https://doi.org/10.11646/zootaxa.5523.4.8>)
- 阿部純大・橋爪拓斗, 2022. チャミダレアミタケ上で観察されたシリボソクロバチ科. *すがれおい*, (2): 86–88.
- 阿部純大・駒澤正樹, 2023. オオルリオサムシから得られたシリボソクロバチ科. *すがれおい*, (4): 3–4.
- Abe, J. & R. Seki, 2021. Additional host records of *Nothoserphus scymni* (Ashmead, 1904) (Hymenoptera: Proctotrupidae). *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **27**(2): 229–231.
- Ashmead, W. H., 1904. Descriptions of new Hymenoptera from Japan.-I (Family LII, Proctotrupidae). *Journal of the New York Entomological Society*, **12**: 67–84.
- Can, I. & H. B. Aydemir, 2025. New records with DNA barcodes of the family Proctotrupidae (Hymenoptera: Proctotrupoidea) from Türkiye. *Zootaxa*, **5621**(1): 131–143. (<https://doi.org/10.11646/zootaxa.5621.1.6>)
- Choi, M-B., V. A. Kolyada & J-W. Lee, 2012. Description of two new species from South Korea and Russian Far East with a key to the Palearctic species of the genus *Brachyserphus* Hellén (Hymenoptera, Proctotrupidae). *Animal Cells and Systems*, **16**(3): 237–244. (<https://doi.org/10.1080/19768354.2011.644402>)
- Choi, M-B., V. A. Kolyada & J-W. Lee, 2016. *Phanoserphus coreanus*, a new species of proctotrupid wasps (Hymenoptera: Proctotrupidae) from South Korea, Japan and Russian Far East with a key to the Palearctic species of *Phanoserphus*. *Journal of Asia-Pacific Entomology*, **19**(3): 799–810. (<https://doi.org/10.1016/j.aspen.2016.07.011>)
- Donisthorpe, H., 1927. British ants. 2nd ed. The Mayflower Press, London, 494 pp.
- Drake, E. F., 1969. A new species of *Cryptoserphus* from Japan (Hymenoptera: Proctotrupidae). *Proceedings, Hawaiian Entomological Society*, **20**(2): 325–327.
- Huggert, L., 1979. *Cryptoserphus* and Belytinae wasps (Hymenoptera, Proctotrupoidea) parasitizing fungus- and solid-inhabiting Diptera. *Natulae Entomologicae*, **59**: 139–144.
- Kieffer, J. J., 1914. Serphidae (= Proctotrupidae) et Calliceratidae (= Ceraphronidae). *Das Tierreich*,

- 42: 1–254. (<https://doi.org/10.5962/bhl.title.1219>)
- Kim, C-J., B. Park & J-W. Lee, 2016. First records of the genus *Parthenocodrus* (Hymenoptera: Proctotrupidae) from Japan and South Korea. *Animal Systematics, Evolution and Diversity*, **32**(1): 55–59. (<https://doi.org/10.5635/ASED.2016.32.1.055>)
- Kolyada, V. A., 1999. A review of the genus *Parthenocodrus* (Hymenoptera, Proctotrupidae) with description of a new species from the Russia Far East. *Entomological review*, **79**(8): 1068–1070.
- Kolyada, V. A., 2016. New records of species of the genus *Brachyserphus* Hellén, 1941 (Hymenoptera: Proctotrupidae) in the Palaearctic Region, with description of a new species. *Euroasian Entomological Journal*, **1**: 74–77.
- Kolyada, V. A. & V. Chemyreva, 2019. 22. Family Proctotrupidae. In: Belokobylskij, S. A. & Samartsev, K. G. (Eds), Annotated catalogue of the Hymenoptera of Russia. Volume II. Apocrita: Parasitica. Zoological Institute RAS, St Petersburg, pp. 30–34.
- Kolyada, V. A. , 2012. 19. fam. Proctotrupidae. In: Lelej, A.S. (Eds), Annotated catalogue of the insects of Russian Far East. Volume I. Hymenoptera. Dalnauka, Vladivostok, pp. 125–129.
- Lin, K. S., 1988. Two new genera of Serphidae from Taiwan (Hymenoptera, Serphoidea). *Journal of Taiwan Museum*, **40**(1): 15–33.
- 松本健児, 2020. シリボソクロバチ科寄生蜂の分布記録. 神奈川虫報, (203): 59–65.
- Park, B., C. Kim & J. Lee, 2017. First record of the genus *Codrus* Panzer (Hymenoptera: Proctotrupidae) from South Korea with description of a new species. *Entomological Research*, **47**(3): 167–174. (<https://doi.org/10.1111/1748-5967.12210>)
- Pschorn-Walcher, H., 1964. A list of Proctotrupidae of Japan with descriptions of two new species (Hymenoptera). *Insecta matsumurana*, **27**(1): 1–7.
- Pschorn-Walcher, H., 1971. Helolidae et proctotrupidae. *Insecta Helvetica Fauna*, **4**: 1–64.
- 杉本博之・宗野俊平, 2017. 原木シイタケから発生したキノコバエと寄生蜂. 山口のむし, (16): 157–158.
- Townes, H. & M. Townes, 1981. A revision of Serphidae (Hymenoptera). *Memoirs of the American Entomological Institute*, **32**: 1–541.
- Watanabe, C., 1949. Proctotrupidae of Japan (Hymenoptera). *Insecta matsumurana*, **17**(1): 23–27.
- Watanabe, C., 1954. New species and host records of Proctotrupidae (Hymenoptera). *Mushi*, **26**: 5–8.
- 渡辺恭平・藤江隼平, 2022. 日本産ヒメバチ上科(膜翅目)の属への検索表. 神奈川県立生命の星・地球博物館 特別出版物第2号, iii+524 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 山岸健三, 2020. Family Proctotrupidae シリボソクロバチ科. 日本昆虫学会 日本昆虫目録編集委員会編, 日本昆虫目録 第9巻 膜翅目(第2部 細腰亜目寄生蜂類), pp. 23–28. 日本昆虫学会, 京都.
- Yoder, M. J., I. Mikó, K. C. Seltsmann, M. A. Bertone & A. R. Deans, 2010. A Gross Anatomy Ontology for Hymenoptera Moreau, C. S. (Ed). *PLoS ONE*, **5**(12): e15991. (<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0015991>)

阿部純大 : ff.my.j.r@gmail.com

マルモンツノヤセバチ (ハチ目ツノヤセバチ科) の本州からの初記録

廣瀬勇輝

(〒 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室)

A new record of *Foenatopus ruficollis* (Enderlein, 1913) (Hymenoptera: Stephanidae)
from Honshu Island, Japan

Yuki Hirose

(Entomological Laboratory, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences,
Kyushu University, Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan)

緒 言

マルモンツノヤセバチ *Foenatopus ruficollis* (Enderlein, 1913) はツノヤセバチ科 Stephanidae Leach, 1815 に属する中型の寄生蜂であり、極東ロシア、中国、韓国から分布が知られ、日本国内からは長崎県対馬市からオス 1 個体が記録されているのみである (Hong *et al.*, 2011; Watanabe, 2024; 渡辺, 2025)。本種は前翅の翅脈 2-SR と 1-SR+M を欠くことやオスの顔面は部分的に黄色となることなどから同属のリュウキュウツノヤセバチ *F. cinctus* (Matsumura 1912) に似るが、翅脈 r は翅脈 SR1 を伴って角ばるように曲がり、縁紋はより短く幅広で先端方の丸みが強く、後脚腿節は腹面に 3 つの大きな歯状突起をもつなどの特徴から区別できる (Hong *et al.*, 2011; Watanabe, 2024; 渡辺, 2025)。

筆者は本種を神奈川県で採集しているため、ここに報告する。標本は九州大学農学部昆虫学教室に保管される。

結 果

1 M (図 1), 神奈川県厚木市小野 小町緑地, 5. VI. 2023, 廣瀬勇輝採集。

上記の個体は、雑木林の散策路脇に置かれたコナラ *Quercus serrata* Murray の粗朶の周辺をスウィーピングすることにより得られた。

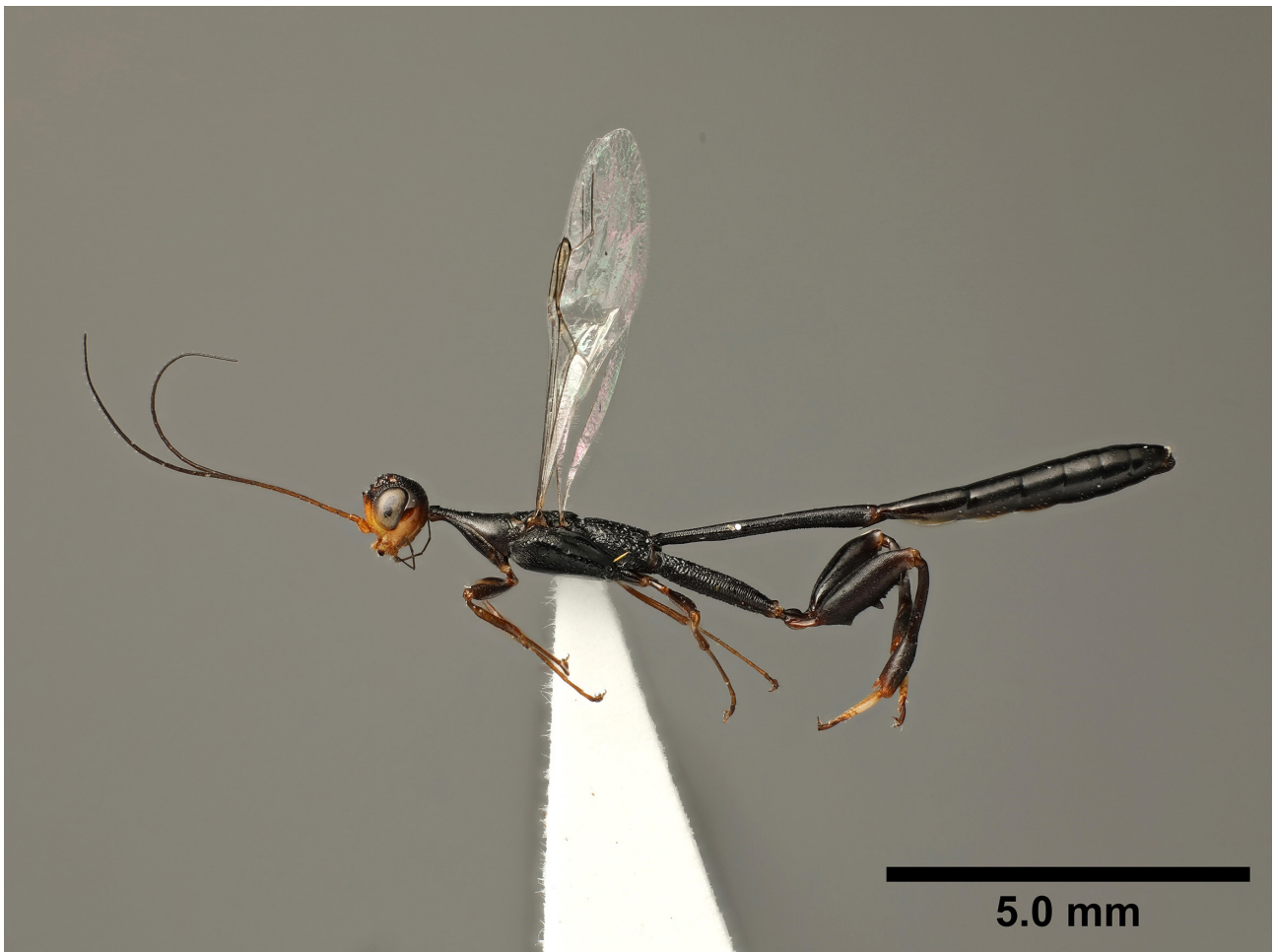


図 1. 神奈川県産マルモンツノヤセバチ *Foenatopus ruficollis* (Enderlein, 1913), オス .

引用文献

- Hong, C. D., C. van Achterberg & Z. F. Xu, 2011. A revision of the Chinese Stephanidae (Hymenoptera, Stephanoidea). *ZooKeys*, **110**: 1–108.
- Watanabe, K, 2024. Taxonomic revision of the extant species of the Japanese Stephanidae (Hymenoptera), with discussion on distribution pattern and conservation importance. *Entomological Science*, **27**(4): e12588, 1–20.
- 渡辺恭平, 2025. 日本産ツノヤセバチ科の覚書 . *すがれおい*, (8): 8–26.

廣瀬勇輝 : yhirose1148@gmail.com

キンケセダカヤセバチ (ハチ目セダカヤセバチ科) の追加記録

廣瀬勇輝¹・鞠子けやき²

(¹ 〒 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室；

² 〒 243-0034 神奈川県厚木市船子 1737 東京農業大学大学院農学研究科昆虫学研究室)

Additional records of *Pristaulacus rufipilosus* Uchida, 1932 (Hymenoptera: Aulacidae) from Japan

Yuki Hirose¹ & Keyaki Mariko²

(¹ Entomological Laboratory, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University, Motoooka 744, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan; ² Laboratory of Entomology,

Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture, 1737 Funako,

Atsugi, Kanagawa 243-0034, Japan)

緒言

キンケセダカヤセバチ *Pristaulacus rufipilosus* Uchida, 1932 はセダカヤセバチ科 Aulacidae Shuckard, 1841 に属する寄生蜂で、日本産セダカヤセバチ科で最も大型となる種である(渡辺・簡野, 2009)。本種は金色の体毛、4歯を伴う付節の爪をもち、産卵管が前翅長の1.6倍程度で体長と同程度かわずかに長く、前胸背板に三角形の突起を欠くことから日本産の同属他種と容易に区別できる(渡辺・簡野, 2009; 清水・渡辺, 2015)。本種は稀な種とされており、既知の記録では北海道、福島県、新潟県、神奈川県、静岡県、高知県から合計6個体のメスが知られるのみでオスは未知である(Uchida, 1932; Konishi, 1990; 渡辺・簡野, 2009; 清水・渡辺, 2015; 渡辺・堀田, 2025)。本種の寄主は未知だが、渡辺・簡野(2009)は複数個体のトラフホソバネカミキリ *Thranium variegatus variegatus* Bates, 1873 が集まるアカメガシワ *Mallotus japonicus* (L.f.) Müll.Arg. の倒木から本種が得られたことと、同属のホシセダカヤセバチ *P. intermedius* Uchida, 1932 と寄主のエグリトラカミキリ *Chlorophorus japonicus* (Chevrolat, 1863) の間の体長や個体密度との関係から、トラフホソバネカミキリを本種の寄主と推定している。

筆者らは、九州大学農学部昆虫学教室から青森県と福岡県産の個体を確認したほか、神奈川県で本種を採集したので若干の生態的知見とともに報告する。標本はすべて九州大学農学部昆虫学教室に保管される。

結果と考察

3 F, 青森県鮭ヶ沢町黒森, 40.677° N 140.192° E, マレーズトラップ, 1–8. VIII. 2023, マレーズトラップ, 中村剛之採集; 2 F, 同所, 8–15. VIII. 2023, 中村剛之採集; 1 F, 神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬. 22. VII. 2024, 鞠子けやき採集; 1 F (図1), 同所. 29. VII. 2024, 廣瀬勇輝採集; 1 F, 福岡県田川郡添田町英彦山彦山生物学実験施設, マレーズトラップ, 20. VI.–30. VII. 2022, 阿部純太採集.



図1. 神奈川県産キンケセダカヤセバチ *Pristaulacus rufipilosus* Uchida, 1932, メス.

神奈川県産の個体はシラカシ *Quercus myrsinifolia* Blume の衰弱部と枯死部（図2）にそれぞれ飛来し、産卵行動が観察された。発生木はカシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* (Murayama, 1925) の食害を受けたナラ枯れ被害木であり、樹幹には本種と同時にウスイロトラカミキリ *Xylotrechus cuneipennis* (Kraatz, 1879) とナガゴマフカミキリ *Mesosa (Aplocnemia) longipennis* Bates, 1873 が見られた。加えて、筆者のうち鞠子は同年の6月20日に同じ木の衰弱部で複数個体のトラフホソバネカミキリを観察しており、これは渡辺・簡野（2009）の考察を支持する記録である。なお、福岡県産の個体は九州からの、鯉ヶ沢町黒森産の個体は青森県からの初記録となる。

謝 辞

貴重な標本をご恵与いただいた九州大学大学院昆虫学教室の阿部純太氏、河合諒人氏、トラップの管理および貴重な標本をご恵与いただいた弘前大学白神自然環境研究センターの中村剛之教授、相馬純助教授、彦山生物学実験施設において施設利用およびトラップの管理にご協力いただいた武田 宏氏、福田恵子氏に感謝申し上げます。



図2. キンケセダカヤセバチが採集されたシラカシの衰弱木(2024年7月29日撮影).

引用文献

- Konishi, K., 1990. A revision of the Aulacidae of Japan (Hymenoptera, Evanioidea). *Japanese Journal of Entomology*, **58**: 637–655.
- 清水 壮・渡辺恭平, 2015. 新潟県・山形県のヤセバチ上科目録. 越佐昆虫同好会報, (113): 25–30.
- Uchida, T., 1932. Beitrag zur Kenntnis der Japonischen Aulaciden (Hym.). *Transactions of the Sapporo Natural History Society*, **12**: 189–193.
- 渡辺恭平・堀田佳之介, 2025. 神奈川県で採集された県初記録種を含む5種の寄生蜂. 神奈川虫報, (215): 81–8.
- 渡辺恭平・簡野嘉彦, 2009. キンケセダカヤセバチの静岡県からの初記録と、その寄主に関する考察. つねきばち, (15): 37–39.

廣瀬勇輝 : yhirose1148@gmail.com

オオスカシバから羽化したスマトラカモドキバチと その二次寄生蜂キスジセアカカギバラバチ

廣瀬勇輝¹・荒井 周²

(¹ 〒 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室；
² 〒 243-0034 神奈川県厚木市船子 1737 東京農業大学大学院農学研究科昆虫学研究室)

Macrostomion sumatranum (Enderlein, 1920) (Hymenoptera: Braconidae: Rogadinae) and
Taeniogonalos fasciata (Strand, 1913) (Hymenoptera: Trigonaliidae) reared from
Cephonodes hylas hylas (Linnaeus, 1771) (Lepidoptera: Sphingidae)

Yuki Hirose¹ & Shu Arai²

(¹ Entomological Laboratory, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences,
Kyushu University, Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan; ² Laboratory of Entomology,
Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture, 1737 Funako,
Atsugi, Kanagawa 243-0034, Japan)

緒 言

スマトラカモドキバチ *Macrostomion sumatranum* (Enderlein, 1920) はコマユバチ科カモドキバチ亜科に属する寄生蜂で、国内では本州、四国、九州、南西諸島から、国外では中国、台湾、ベトナム、インドネシアから記録されている(藤江・前藤, 2020)。本種は前翅の翅脈 3-SR が翅脈 2-SR の 2 倍となること、中胸盾板に黒色紋をもつこと、前翅の先端 4 分の 1 が暗色となることから、近隣地域の同属他種と区別できる(Chen & He, 1997)。なお、日本産本属は本種のみが知られ(藤江・前藤, 2020)、属までの同定は藤江(2022)で行える。本属はスズメガ科に多寄生して一つのマミーを形成する(Shaw, 2002)。本種もスズメガ科を寄主とすることが知られ(藤江・前藤, 2014)、イッポンセスジスズメ *Theretra silhetensis silhetensis* (Walker, 1856) の終齢幼虫に寄生した例では、1 個体の寄主より 26 から 160 個体が羽化したことが記録されている(Maeto & Arakaki, 2005)。

キスジセアカカギバラバチ *Taeniogonalos fasciata* (Strand, 1913) はカギバラバチ科に属する二次寄生蜂で、国内では北海道、本州、四国、九州、南西諸島から、国外ではロシア、中国、台湾、朝鮮半島、イラン、マレーシア、インドネシアから知られる(渡辺・山根, 2017; 2020)。本種は顕著な色彩と後体節第 2 腹板の先端中央に明瞭な突起を欠くことから、日本産の同属他種と区別できる(渡辺・山根, 2017)。本種は広域に分布し、日本産同科のなかでも比較的良好に得られるが寄主記録は乏しく、下記の数例(寄主 2 種、中間寄主 3 種)が知られるのみである。本種は、アサギマダラ *Parantica sita* (Kollar, 1844) から脱出したマダラヤドリバエ *Sturmia bella* (Meigen, 1824) の囲蛹(Hirai & Ishii, 1995; 平井, 1997) とオオムラサキ *Sasakia charonda* (Hewitson, 1863) の越冬幼虫から脱出したアゲハヤドリチビアメバチ *Dichelobosmina papilionis* (Ashmead, 1905) の繭(伊那, 1980; 高橋, 2005)からの羽化例があるが、後者は同定が難しく記録の扱いに不安が残るとされている(渡辺・山根, 2017)。また、ウコンノメイガ *Pleuroptya ruralis* (Scopoli, 1763) の蛹からの羽化例があり、このガの一次寄生蜂が寄主と考えられている(渡辺・山根, 2017)。

荒井と角平龍紀氏は千葉県君津市において一株のクチナシ *Gardenia jasminoides* Ellis からオオスカシバ *Cephonodes hylas hylas* (Linnaeus, 1771) の終齢幼虫を複数個体採集し、神奈川県厚木市で採取したクチナシの葉を用いて室内で飼育した。蛹化が近づき体色が褐変した幼虫から、柔らかく丸めたティッシュで満たした PET 容器に移した。幼虫がティッシュを綴った粗い繭を作ったところで4個体がマミー化し、その後それぞれ寄生蜂が羽化した。筆者のうち荒井が飼育を、廣瀬が寄生蜂の同定を行った。標本は全て九州大学農学部昆虫学教室に保管される。

結果と考察

スマトラカモドキバチ *Macrostomion sumatranum* (Enderlein, 1920) (図 1A, B)

77 F & 162 M, 千葉県君津市笹, 7. IX. 2024 (寄主採集), 20–23. IX. 2024 (寄生蜂羽化), 荒井・角平採集.

キスジセアカカギバラバチ *Taeniogonalos fasciata* (Strand, 1913) (図 1C)

1 F, 千葉県君津市笹, 7. IX. 2024 (寄主採集), 24–28. IX. 2024 (寄生蜂羽化), 荒井・角平採集.

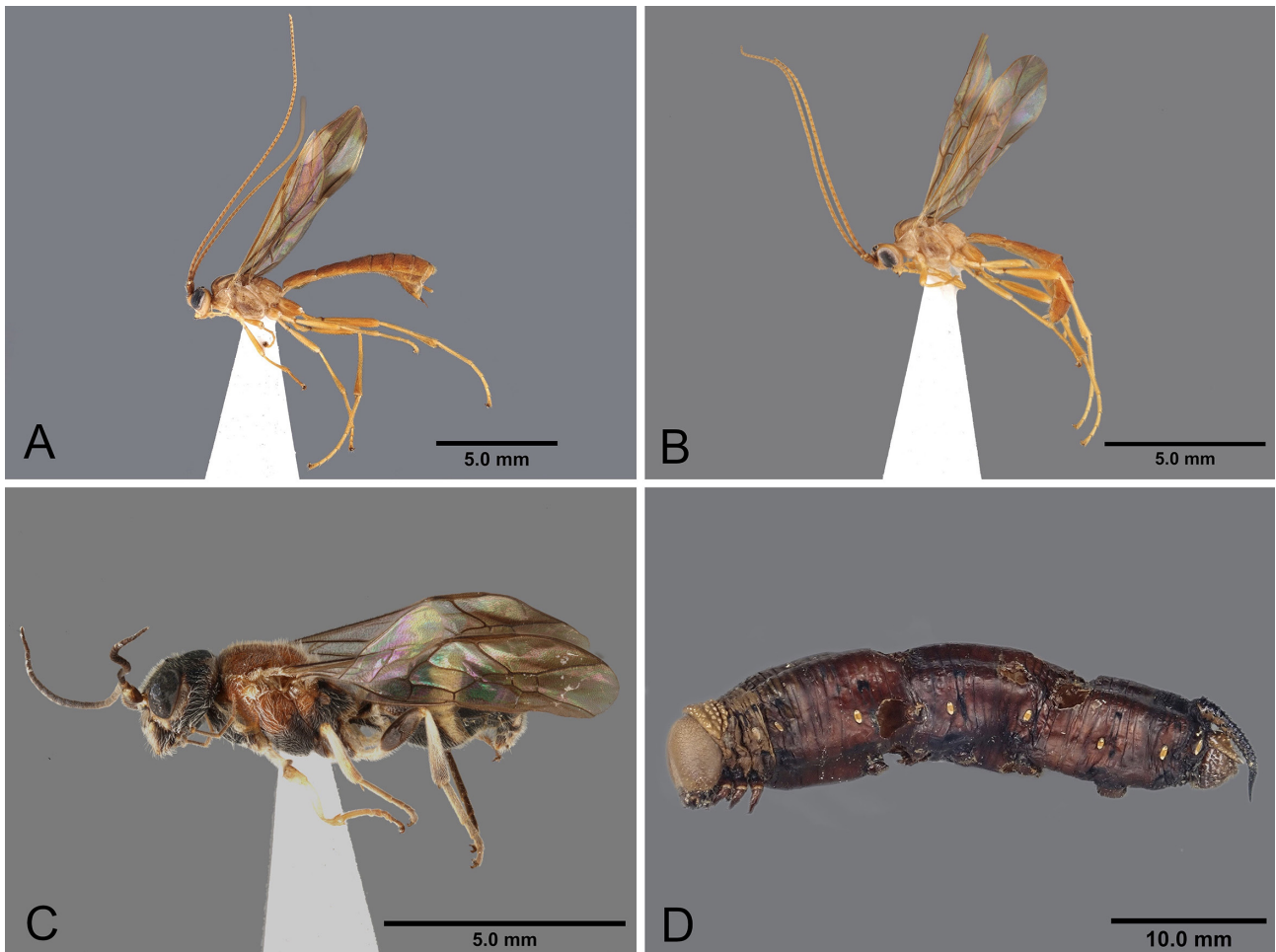


図 1. A, B: 千葉県産スマトラカモドキバチ *Macrostomion sumatranum* (Enderlein, 1920), メス (A) とオス (B); C: 千葉県産キスジセアカカギバラバチ *Taeniogonalos fasciata* (Strand, 1913), メス; D: キスジセアカカギバラバチが羽化したスマトラカモドキバチのマミー.

スマトラカモドキバチは、4個体の寄主幼虫のそれぞれからメス9個体とオス7個体、メス26個体とオス41個体、メス10個体とオス52個体、メス22個体とオス62個体が羽化した。Maeto & Arakaki (2005)と同様に個体数が少ない場合はメスの割合が高く、個体数が多い場合はオスの割合が増加する傾向が見られた。また、寄主1個体に対する寄生個体の多いほど体サイズが小さいことがコマユバチ科、タマゴコバチ科、ツヤコバチ科、ヒメコバチ科、コガネコバチ科、アリガタバチ科などの多寄生蜂で知られるが(例えば King, 1987; Hardy *et al.*, 1992; Milonas, 2005)、本種でも同様の傾向が見られた。

キスジセアカカギバラバチは、スマトラカモドキバチの体サイズの平均が他のマミーの羽化個体より大きく、羽化個体数が最も少ないマミー(図1D)から羽化した。カギバラバチ科は植物の葉に微小な卵を大量に産み、卵は中間寄主に葉ごと摂食されるが、その際に大腮によって傷つけられた場合にのみ孵化できると考えられている(Clausen, 1940; 戸澤, 1942; Weinstein & Austin, 1991)。こうした特殊な生活史から、寄生率は大変低いことが知られ(Smith *et al.*, 2012)、今回も寄主が239個体羽化したのに対して1個体のみと寄生率は非常に低かった。一方で、一般に寄生蜂は寄主の体サイズが十分でないと適応度が低下することがよく知られる(例えば Godfray, 1994)。二次寄生蜂である本種は少数で多寄生するマダラヤドリバエや単寄生蜂が寄主として知られており(伊那, 1980; Hirai & Ishii, 1995; 平井, 1997; 高橋, 2005; 渡辺・山根, 2017)、今回の記録のように寄生個体数が多い多寄生の種が寄主となる場合は、寄生成功にある程度の寄主の体サイズが必要となる可能性がある。

謝 辞

野外調査に協力いただいた角平龍紀氏と保坂恭吾氏(東京農業大学大学院生物資源開発学科昆虫学研究室)に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Chen, X. & J. He, 1997. Revision of the subfamily Rogadinae (Hymenoptera: Braconidae) from China. *Zoologische Verhandlungen*, **308**: 1–187.
- Clausen, C. P., 1940. Entomophagous insects. 688 pp., McGraw-Hill, New York.
- 藤江隼平, 2022. コマユバチ科. In: 渡辺恭平・藤江隼平, 日本産ヒメバチ上科(膜翅目)の属への検索表. 神奈川県立生命の星・地球博物館特別出版物 第2号, pp. 309–494. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 藤江隼平・前藤 薫, 2014. 皇居のコマユバチ科. 国立科博専報, (50): 499–502.
- 藤江隼平・前藤 薫, 2020. Family Braconidae コマユバチ科. 日本昆虫目録編集委員会編, 2020. 日本昆虫目録 第9巻 膜翅目(第2部 細腰亜目寄生蜂類). pp. 194–357. 日本昆虫学会, 京都.
- Godfray, H. C. J., 1994. Parasitoids: Behavioral and Evolutionary Ecology. 474 pp. Princeton University Press, Princeton, New Jersey.
- Hardy, I. C. W., N. T. Griffiths & H. C. J. Godfray, 1992. Clutch size in a parasitoid wasp: a manipulation experiment. *Journal of Animal Ecology*, **61**: 121–129.

- 平井規央, 1997. 卵から育てたアサギマダラから現れた2種の寄生者. *昆虫と自然*, **32**(5): 28–30.
- Hirai, N. & M. Ishii, 1995. Host relationships of the tachinid fly, *Sturmia bella* (Diptera: Tachinidae), and the trigonalid wasp, *Poecilogonalos fasciata* (Hymenoptera: Trigonalidae), parasitizing the chestnut tiger butterfly, *Parantica sita* (Lepidoptera: Danaidae). *Applied Entomology and Zoology*, **30**: 241–244.
- 伊那 紘, 1980. オオムラサキの越冬幼虫から羽化した寄生蜂. *昆虫と自然*, **15**(12): 29.
- King, B. H., 1987. Offspring sex ratios in parasitoid wasps. *The Quarterly Review of Biology*, **62**(4): 367–396.
- Maeto, K & N. Arakaki, 2005. Gregarious emergence of *Macrostomion sumatranum* (Hymenoptera: Braconidae; Rogadinae) from the mummified, full-grown larvae of *Theretra silhetensis* (Lepidoptera: Sphingidae). *Entomological Science*, **8**: 131–132.
- Milonas, P. G., 2005. Influence of initial egg density and host size on the development of the gregarious parasitoid *Bracon hebetor* on three different host species. *BioControl*, **50**(3): 415–428.
- Shaw, M. R., 2002. A new species of *Macrostomion* Szépligeti (Hymenoptera: Braconidae: Rogadinae) from Papua New Guinea, with notes on the biology of the genus. *Zoologische Mededelingen*, **76**: 133–140.
- Smith, D. R., D. H. Janzen, W. Hallwachs & M. A. Smith, 2012. Hyperparasitoid wasps (Hymenoptera, Trigonalidae) reared from dry forest and rain forest caterpillars of Area de Conservación Guanacaste, Costa Rica. *Journal of Hymenoptera Research*, **29**: 119–144.
- 高橋秀男, 2005. キスジセアカカギバラバチの寄主について. *つねきばち*, (4): 21–22.
- 戸澤信義, 1942. 鉤腹蜂に就いて. *寶塚昆虫館報*, (22): 1–10.
- 渡辺恭平・山根正気, 2017. 日本産カギバラバチについてのメモ. *つねきばち*, (30): 1–26.
- 渡辺恭平・山根正気, 2020. Family Trigonalidae カギバラバチ科. 日本昆虫目録編集委員会編, 2020. 日本昆虫目録 第9巻 膜翅目 (第2部 細腰亜目寄生蜂類). pp. 191–193. 日本昆虫学会, 京都.
- Weinstein, P. & A. D. Austin, 1991. The host relationships of trigonalid wasps (Hymenoptera : Trigonalidae), with a review of their biology and catalogue to world species. *Journal of Natural History*, **25**(2): 399–433.

廣瀬勇輝 : yhirose1148@gmail.com

日本産 Cryptini (ヒメバチ科トガリヒメバチ亜科) の同定資料: 6. *Cryptus* group (II)

渡辺恭平

(〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館)

Identification guide of Japanese Cryptini (Ichneumonidae, Cryptinae): 6. *Cryptus* group (II)

Kyohei Watanabe

(Kanagawa Prefectural Museum of Natural History, Iriuda, Odawara, Kanagawa 250-0031, Japan)

緒言

本稿では、日本産トガリヒメバチ亜科の Cryptini のうち、*Cryptus* group の5属、*Apsilops*、*Aritranis*、*Caenocryptoides*、*Nippocryptus*、*Thyribius* について解説する。これらのうち、*Apsilops* と *Thyribius* は主に水辺で見られ、残りの3属は山林で見られることが多い。

材料と方法

形態用語は渡辺・藤江(2022)に準ずるが、後体節背板の各節はTとローマ数字で表記した。図の引用については、渡辺・藤江(2022)の図を引用する場合は“渡辺・藤江, 2022の図59A”のように引用した。なお、Watanabe(2019, 2020, 2025)と渡辺・藤江(2022)はオープンアクセスのため、神奈川県立生命の星・地球博物館のウェブサイト (<https://nh.kanagawa-museum.jp/>) より誰でも閲覧やダウンロードができる。属までの検索表は渡辺・藤江(2022)に掲載されているので割愛する。データを報告した標本は全て神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵されている。

希少度は筆者が国内の研究機関で検討してきた標本数を基に判断したもので、多い>普通>やや少ない>少ない>稀としている。

多い：普通にカテゴライズされる種のうち、調査の度に採集されるようなごく普通の種。

普通：分布域において野外調査を行うと頻繁に得られる種。博物館や個人コレクション中にも頻繁に見られる種。

やや少ない：たまにしか得られない種で、何度か調査をすれば得られることがある種。

少ない：はっきりと珍しい種で、博物館や個人コレクションを探せばいくらかは見つかるが、概して多くはない種。

稀：きわめて珍しい種で、博物館や個人コレクションのすべてを合わせても数頭しか標本が確認できていない種。

なお、筆者は各地の地方同好会誌の全てをチェックできたわけではないため、細かな分布記録の見落としがある可能性がある。下記の分布はあくまで筆者の把握する範囲での分布となることを述べておく。

結果と考察

Cryptus group

Genus *Apsilops* Förster, 1869

日本には以下の2種が分布する。成虫は体表の広い範囲にビロード状の細かな体毛をもち、水辺に生息する寄主に適応している。そのため成虫は水辺で見られるが、一般には少ないグループである。ミズメイガトガリヒメバチ *Apsilops japonicus* Yoshida, Nagasaki & Hirayama, 2011 は筆者の手元に標本がないため、北海道大学総合博物館収蔵のホロタイプ(図1)の観察データと Yoshida *et al.* (2011) の情報を基に記述した。

日本産種の検索表(メスのみ)

1. 前脚基節、中脚基節、後脚腿節を含む脚の大部分が黒色(図1A-C)。小盾板は黒色。産卵管鞘は後脚脛節の1.0–1.1倍の長さ。

..... ミズメイガトガリヒメバチ *Apsilops japonicus* Yoshida, Nagasaki & Hirayama, 2011

- 前脚基節と中脚基節は赤褐色。後脚腿節は基部方の大部分が赤褐色。小盾板は白黄色。産卵管鞘は後脚脛節の0.75–0.8倍の長さ。(図は Watanabe, 2019 の Fig. 5 参照)

..... ケブカトガリヒメバチ *Apsilops scotinus* (Tosquinet, 1903)

ミズメイガトガリヒメバチ *Apsilops japonicus* Yoshida, Nagasaki & Hirayama, 2011

(図1A–C)

前翅長 5.0–7.5 mm。触角鞭節は 22–24 (メス) 24–25 (オス) 節からなる。マーラースペースの長さは大顎基部幅の 0.8–0.9 (メス) 0.5–0.7 (オス) 倍。前伸腹節の小室は六角形で、前方横隆起線を中央よりも前方で受け入れる(形は種内で若干変異する)。T I の長さは最大幅の 1.6–2.0 (メス) 2.1 (オス) 倍。体は脚も含め広く黒色で、T VII は白色紋をもつ。メスの顔面と前伸腹節の毛は褐色みを帯びる。オスの触角鞭節は第 8–16 節の外面に線状感覚器をもつ。オスの後脚脛節基部と後脚フ節各節の基部は狭い白色部をもつ。図は小西和彦氏のウェブサイト (<http://web.agr.ehime-u.ac.jp/~entomology/mokuroku/apsilops.html>) に掲載されている。成虫はヒメコウホネの葉柄に穿孔する鱗翅目ツトガ科のミドロミズメイガ *Neoschoenobia testacealis* に寄生するために、葉柄を伝いながら水中に潜り、水中で寄主の幼虫と蛹に産卵し、外部寄生するという (Yoshida *et al.*, 2011)。本種の詳細な生態は Hirayama *et al.* (2014) で報告されている。分布：本州。

ケブカトガリヒメバチ *Apsilops scotinus* (Tosquinet, 1903)

体長 7.0 mm、前翅長 5.0 mm。触角鞭節は 20 節からなる。マーラースペースの長さは大顎基部幅の 1.0 倍。前伸腹節の小室は六角形で、前方横隆起線を中央よりも前方で受け入れる。T I の長さは最大幅の 1.75–1.8 倍。顔面と前伸腹節の毛は他の部位の毛と同様に銀色。各脚の転節と第 2 転節は赤褐色。体は脚を除いて広く黒色で、小盾板は白黄色の紋を、

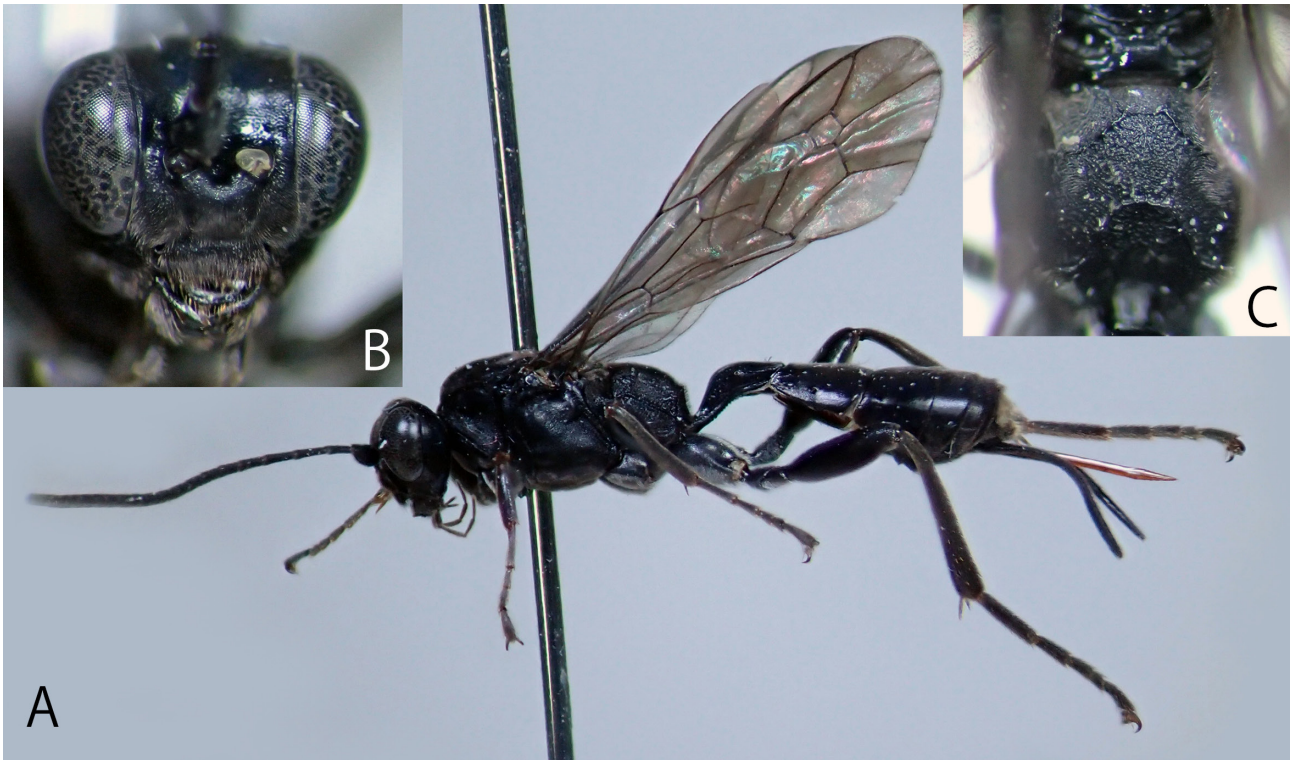


図1. ミズメイガトガリヒメバチ *Apsilops japonicus* Yoshida, Nagasaki & Hirayama, 2011, ホロタイプ, メス — A: 側方から見た全形; B: 前方から見た頭部; C: 背方から見た前伸腹節.

T VII は白色紋をもつ。各脚の基部方は広く赤褐色みを帯びる。後脚脛節は一様に暗褐色。小顎ひげの第2-4節は白色。オスは未知。小型の美しいトガリヒメバチで、日本では本州(神奈川県)と西表島で採集された2個体のみが知られる稀な種であるが、休耕田や湿地帯で丹念に調査すれば新産地が見つかる可能性は高い。西表島では水田脇の休耕田をスイープして採集された。寄主は未知。図: Watanabe (2019) の Fig. 5(メスの写真); 渡辺・藤江(2022) の図 62A (側方から見た中体節の写真)。国内の分布: 本州、西表島。

Genus *Aritranis* Förster, 1869

日本には以下の2種が分布するが、1種は分布疑問種である。

日本産種の検索表 (メスのみ)

1. 後体節を含め体はほぼ一様に黒色 (ただし頭盾は赤色部をもつ)。脚は後脚フ節の一部が白色であるほかは広く黒色。頭盾は中央に歯状突起を欠く。
 ヤマトクロトガリヒメバチ *Aritranis kuro* Watanabe, 2020
- . 後体節背板は少なくとも一部が赤色(図 2A, B)。腿節と脛節はしばしば赤色みを帯びる。小盾板は黄白色の斑紋を持つことがある。頭盾は中央に歯状突起をもつ。
 *Aritranis occisor* (Gravenhorst, 1829)

ヤマトクロトガリヒメバチ *Aritranis kuro* Watanabe, 2020

本種に似た全身が黒いトガリヒメバチは多数日本に産するが、頭盾に赤色部を持つ点と、T I に各種縦隆起線が無い点。産卵管が比較的長く、前翅長の半分を明らかに超える点（産卵管鞘の長さは T II 基部から後体節末端の長さに近い）、鏡胞の大きさと形から本種は比較的容易に区別できる。比較的冷涼な森林環境を好み、本州では主に山地で普通に採集される。図：Watanabe (2020) の Figs. 1A（前方から見た頭盾）、2A（背方から見た前伸腹節と T I）、2B（側方から見た T I）、3A（側方から見た産卵管の先端方）、4E-K（雌雄の写真）。体長 6.5–9.0 mm。分布：北海道、本州。

Aritranis occisor (Gravenhorst, 1829)

(図 2–C)

Schwarz (2005) により日本 (Minoo) から記録されたが、筆者は標本を見たことがない。Minoo が大阪の箕面である場合、本種はどこかで追加個体が採集されているはずで、本種のような顕著な色彩を持った種が他に採集されていない点は若干不可解である。標本の発見が必要であるが、誤記録の可能性もある。国内の分布：詳細不明 (Minoo)。オーストリアの Biodiversitätszentrum で撮影した Martin Schwarz 博士同定標本 (イタリア産) の写真を図示しておく (図 2A–C)。

Genus *Caenocryptoides* Uchida, 1936

日本には以下の 3 種が分布するが、1 種は分類学的に再検討が必要である。

日本産種の検索表

1. 後脚腿節はほぼ一様に黒色 (図 4A, B)。オスの顔面と額の黄色部は中央で分割される (図 4I)。前伸腹節は明瞭な黄色部を欠き、せいぜい一部のオスで赤褐色みを帯びる程度 (図 4B, E, G, H)。後脚基節は黄色紋を欠く (ただし一部のオスでは赤褐色紋をもつ)。メスの顔面は多少ともつや消し状 (図 4C)。後体節背板は T I の後縁に白色帯をもち、T II と以降の節の後縁はしばしば白色帯を持つことがある (図 4A, B)。T I の背側方隆起線は完全。体長 8.5–13.5 mm 程度。

..... シロオビトガリヒメバチ *Caenocryptoides tarsalis* (Matsumura, 1912)
 -. 後脚腿節は先端が黒色な他は広く赤褐色 (図 3A, D)。オスの顔面と額の黄色部は黒色部で分割されず、一つの領域となる (図：Watanabe (2020) の Fig. 6C)。前伸腹節はしばしば明瞭な黄色部をもつ (図 3C)。後脚基節はしばしば黄色紋をもつ。メスの顔面は多少とも光沢がある (図 3B)。後体節背板は全ての節で後縁に黄色帯をもつ (図 3A, C しばしば部分的に面積が減少する)。T I の背側方隆起線は中央付近で不完全。

..... 2



図 2. *Aritranis occisor* (Gravenhorst, 1829), メス — A: 側方から見た全形; B: 背方から見た頭部, 中体節および後体節 C: 前方から見た頭部.

2. 前伸腹節と後脚基節は黄色部をもつ(図 3C, D)。体は比較的大きく、体長は 15 mm 以上。
..... キスジトガリヒメバチ *Caenocryptoides convergens* Momoi, 1966
- 前伸腹節と後脚基節は黄色部を欠く。体は比較的小さく、体長は 12 mm。オス未知。
..... カオグロキスジトガリヒメバチ *Caenocryptoides nigrifacies* Jonathan, 1999

キスジトガリヒメバチ *Caenocryptoides convergens* Momoi, 1966
(図 3A-D)

大型の体に美しい斑紋を交えた格調高い種で、神奈川県、愛知県、兵庫県からわずかな個体を得られているだけの稀な種である。図: Watanabe (2020) の Figs. 6A-C (オスの写真)。分布: 本州。筆者の手元に標本がないため、兵庫県立人と自然収蔵のホロタイプの写真を図示しておく (図 3A-D)。



図3. キスジトガリヒメバチ *Caenocryptoides convergens* Momoi, 1966, ホロタイプ, メス — A: 側方から見た全形; B: 前方から見た頭部; C: 背方から見た前伸腹節; D: 背方から見た後体節.

カオグロキスジトガリヒメバチ *Caenocryptoides nigrifacies* Jonathan, 1999

本種は神奈川県横浜で得られた比較的古い標本に基づき記載されたが、おそらくは前種の小型個体で、両種の差異は種内変異であると思われる。しかしながら、本種はその後採集例が無く、タイプも国内に収蔵されていない。加えて、比較対象となる前種も採集例が乏しいため、今後標本を蓄積して種内変異の幅を調べる必要がある。分布：本州。

シロオビトガリヒメバチ *Caenocryptoides tarsalis* (Matsumura, 1912)

(図 4A-I)

各地に多い種で、特にオスは竹林の周囲を飛翔する個体がよく見られる。オスは *Pterocryptus* と似る上、両者が同じような環境で見られるため注意が必要で、大顎の歯や T I の気門の位置をよく確認する必要がある (渡辺・藤江, 2022 を参照)。オスの前伸腹節の色彩は完全に黒色の個体 (図 4H) から大部分が赤褐色 (図 4G) まで変異がある。卵は Iwata (1958) で、卵巣小管は Iwata (1960) で記載されている。国内の分布：北海道、国後島、本州、四国、九州。

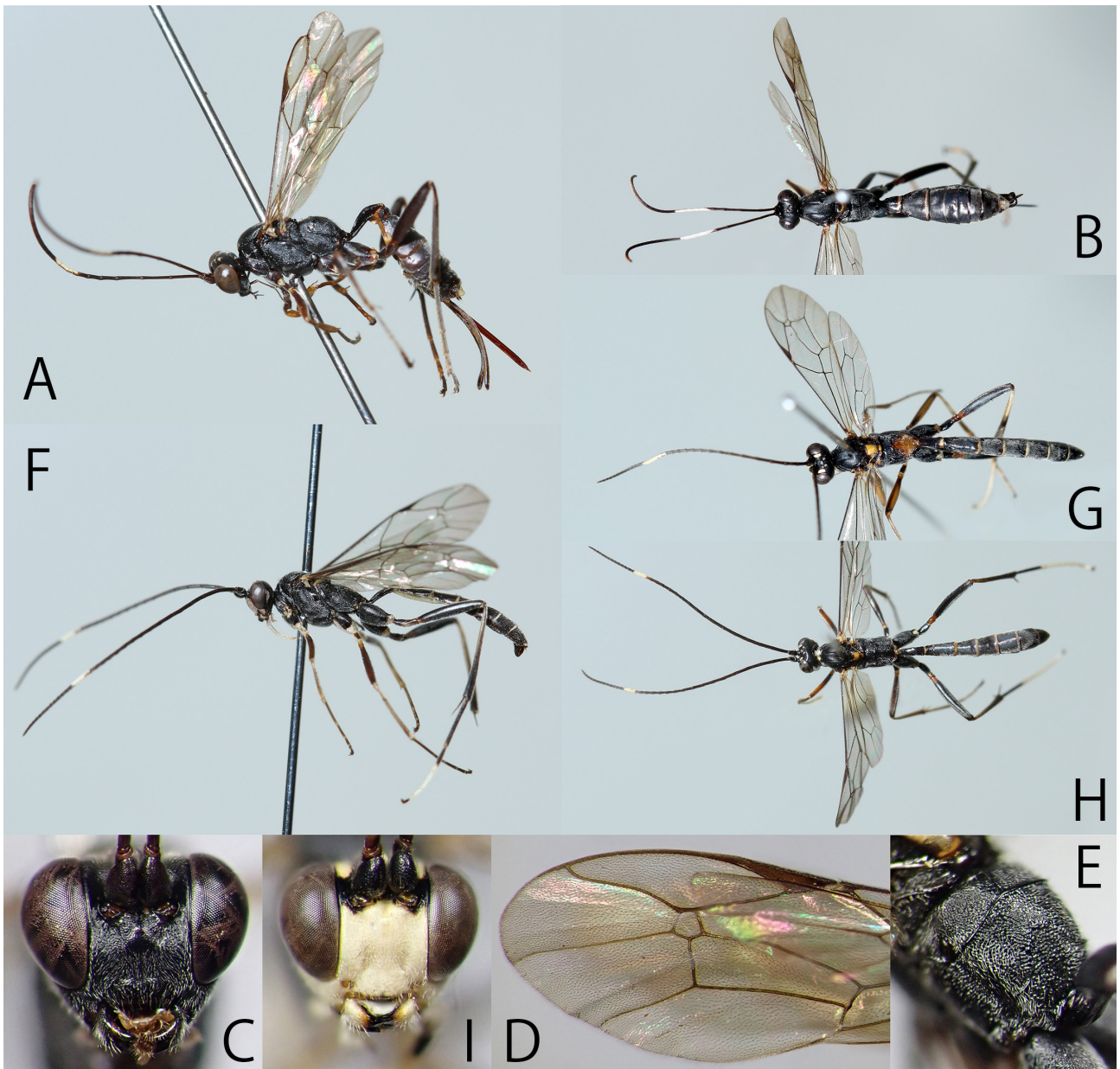


図4. シロオビトガリヒメバチ *Caenocryptoides tarsalis* (Matsumura, 1912), メス (A-E) およびオス (F-I) — A, F: 側方から見た全形; B, G, H: 背方から見た全形; C, I: 前方から見た頭部; D: 前翅; E: 斜め背方から見た前伸腹節.

Genus *Nippocryptus* Uchida, 1936

日本には2種が分布する。日本産の2種はいずれもオスの標本数がメスと比べて少ない。

日本産種の検索表

1. 大顎の上の歯は下の歯よりも長い (図 8A: 基部の関節2か所を同じ軸にそろえた上で計測する)。メスの前翅は先端方は基部方と比べるとわずかに曇る程度で、明瞭な曇る帯を欠く (図 5D)。オスの TI は基部方に白色域を欠く (Watanabe (2025) の Fig. 75 参照)。

..... モモイトガリヒメバチ *Nippocryptus alutaceus* (Tschek, 1871)

-. 大顎の上の歯は下の歯と同長か、わずかに短い(図8B)。メスの前翅は明瞭な黒帯(帯状の曇った領域)をもつ(図5A, B)。オスのTIは基部方が白色(図5F, G)。

..... ホシクロトガリヒメバチ *Nippocryptus vittatorius* (Jurine, 1807)

モモイトガリヒメバチ *Nippocryptus alutaceus* (Tschek, 1871)
(図5I, 8A)

山地の森林に見られ、林縁のスweepでしばしば採集されるやや少ない種である。ク

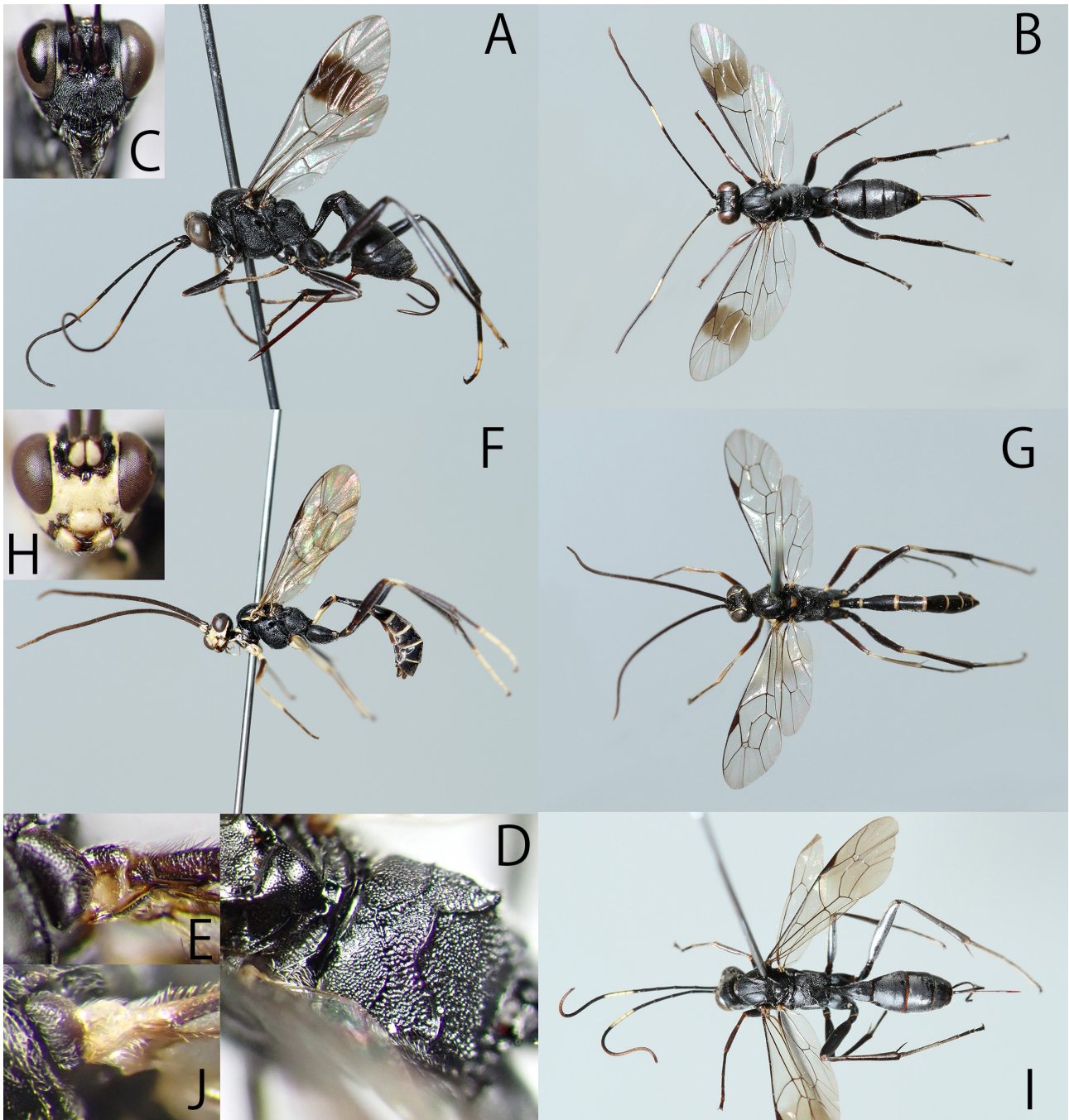


図5. ホシクロトガリヒメバチ *Nippocryptus vittatorius* (Jurine, 1807) (A-H), モモイトガリヒメバチ *N. alutaceus* (Tschek, 1871) (I) およびハネモントガリヒメバチ *Hoplocryptus maculatus* Watanabe, 2020 (J: パラタイプ), メス (A-E, I, J) およびオス (F-H) — A, F: 側方から見た全形; B, G, I: 背方から見た全形; C, H: 前方から見た頭部; D: 斜め背方から見た前伸腹節; E, J: 肩板と前翅基部.

ロシコクトガリヒメバチ *Caenocryptus canaliculatus* Momoi, 1968 は本種の異名とされた (Watanabe, 2025)。和名は分類学的処置に併せて改称され、故桃井節也博士にちなむ。図：Watanabe (2025) の Figs. 74 (メスの写真)、75 (オスの写真)。体長 6.0–11.5 mm。寄主はミカドトックリバチ *Eumenes micado* Cameron, 1904 が記録されている (Momoi, 1968; *E. samuray* として)。分布：北海道、本州。佐渡島と四国の分布は本稿がおそらく初記録のため、下記に標本データ記述する。

1 F, 新潟県佐渡島金井新保 白雲台～妙見山, 4. VIII. 2009, 渡辺恭平採集; 1 F, 愛媛県久万高原町石鎚山 土小屋, 20. X. 2009, 採集者不明.

ホシクロトガリヒメバチ *Nippocryptus vittatorius* (Jurine, 1807)

(図 5A–H, 8B, F)

良く得られる普通種であるが、オスはやや少ない。古い文献では学名が *N. suzukii* (Matsumura, 1912) とされているが、現在では異名となっている。本種のメスは黒い体と黒帯を伴う前翅から、ハネモントガリヒメバチ *Hoplocryptus maculatus* Watanabe, 2020 (写真：図 5J および Watanabe (2020) の Fig. 11E–I) と似る。両種は同じような環境に見られ、多くの特徴が変異を含めると似るため、しばしば混同されるが、表 1 に示したような特徴を比較すると容易に区別できる。翅の写真：渡辺・藤江 (2022) の図 62J。体長 8.0–11.5 mm。卵は Iwata (1958) で、卵巣小管は Iwata (1960) で、いずれも *N. suzukii* の種名で記載されている。チャミノガ *Eumeta minuscula* などのミノガ類に寄生する (Iwata, 1950; Momoi, 1977)。桃井 (2003) は氏が岩田久二雄博士から預かったミノガ類の寄生蜂 (本種も含む) の蛹と幼虫の図と寄生様式、寄生個体の一覧を紹介している。また、本種は「昆虫学五十年」(岩田, 1976) や「自然観察者の手記」(岩田, 1980) といった書籍にも登場しており、ミノガ類の寄生蜂として生態が記述されている。国内での分布：北海道、本州、四国、九州。

Genus *Thrybius* Förster, 1869

日本には以下の2種が分布する。属名の示す通りアシ原によく見られるグループである。両種とも体長には多少とも種内変異があるが、大抵 8–12 mm 程度。両種とも、雌雄の標本写真は小西和彦博士のウェブサイトに掲載されている (<http://web.agr.ehime-u.ac.jp/~entomology/mokuroku/thrybius.html>)。

日本産種の検索表

(Yoshida *et al.* (2008) の表に基づいて作成)

1. 翅の基部は暗褐色 (図 6A)。後頭隆起線は一様に曲がる。前伸腹節の背面は皺に覆われる (図 6D)。メスの触角鞭節は 21–23 節からなる。メスの触角先端は尖る (図 8C)。前脚脛節は膨らんだ部位を欠く。産卵管鞘は後脚脛節の 0.7–0.9 倍の長さ。産卵管鞘の先端は尖る (図 8H)。オスの TV は白紋を欠く。体色は種内で大きく変異しない。

..... フトアシハラトガリヒメバチ *Thrybius acuticornus* Yoshida, Matsumoto & Konishi, 2009

表 1. ホシクロトガリヒメバチ *Nippocryptus vittatorius* (Jurine, 1807) とハネモントガリヒメバチ *Hoplocryptus maculatus* Watanabe, 2020 の区別点

	ホシクロトガリヒメバチ	ハネモントガリヒメバチ
	<i>Nippocryptus vittatorius</i> (Jurine, 1807)	<i>Hoplocryptus maculatus</i> Watanabe, 2020
頭盾前縁	緩やかかつ一様に曲がる個体から、中央付近が側方と比べてやや強く突出する個体まで変異がある	中央が側方よりもはつきりと突出し、側方は多少とも裁断状で、圧される
額の背方中央部の表面彫刻	粗い皺に覆われることがある (特に大型個体)	顆粒状あるいは皮革状の表面に覆われ、皺は弱く目立たない
小盾板の点刻	側方で部分的に皺状に融合することが多い；点刻間には常に微細印刻をもつ	皺状に融合しない；点刻間は平滑か、時折弱い微細印刻をもつ
前伸腹節の気門の形	長円形	正円に近い円形
前伸腹節の後方横隆起線側方部	突起状に隆起する (図 5D)	突起状に隆起しない (せいぜいひだ状に弱く張り張り出す程度)
翅の基部の色彩 (注：肩板の色彩ではない)	少なくとも前方の広い範囲が黒褐色から褐色 (図 5E)	黄色から白黄色 (図 5J：ただし稀に前縁の狭い範囲が褐色みかかる個体がいる)
前翅の黒帯 (曇る領域)	Second discal cell の基部付近を除く大半を占める	Second discal cell の先端半分よりも少し広い程度占め、基部方の広い範囲が透明
TI 基部側方の三角形状突起	ある (図 8F: ただし突起先端の丸みが強い個体もいる)	ない (図 8G)
TI の幅と側縁	基部方の幅は狭いがその後方で急に広くなる；側縁は多少とも湾曲する	基部方から後方まで緩やかに幅が広がり、比較的狭い；側縁は比較的直線状

-. 翅の基部は黄色(図7A-D, G, H)。後頭隆起線は一様に曲がらず、背方中央で強く曲がる。前伸腹節の背面は点刻や網状の点刻に覆われる(図7F)。メスの触角鞭節は17-19節からなる。メスの触角先端は裁断状(図8D)。前脚脛節は膨らんだ部位をもつ(図8E)。産卵管鞘は後脚脛節の0.5-0.6倍の長さ。産卵管鞘の先端は前種ほど尖らない(図8I)。オスのTVは白紋をもつ(図7G, H)。体色は赤色から黒色まで、種内で大きく変異する(図7A-D, G, H)。
..... アシハラトガリヒメバチ *Thrybius togashii* Kusigemati, 1982

フトアシハラトガリヒメバチ *Thrybius acuticornus* Yoshida, Matsumoto & Konishi, 2009
(図6A-D, 8C, H)

アシ原で見られるが産地が局所的でやや少ない。次種と同所的に見られることがある。本種の外見は次種よりもむしろ *Gambrus* の各種、特に同じような環境に見られるワダトガリヒメバチ *G. wadai* (Uchida, 1936) に似た印象を受ける。本属の頭盾前縁は裁断状(中央の広い範囲が直線状)であるが、*Gambrus* は多少とも丸みをおびるので区別できる。国内での分布：本州。

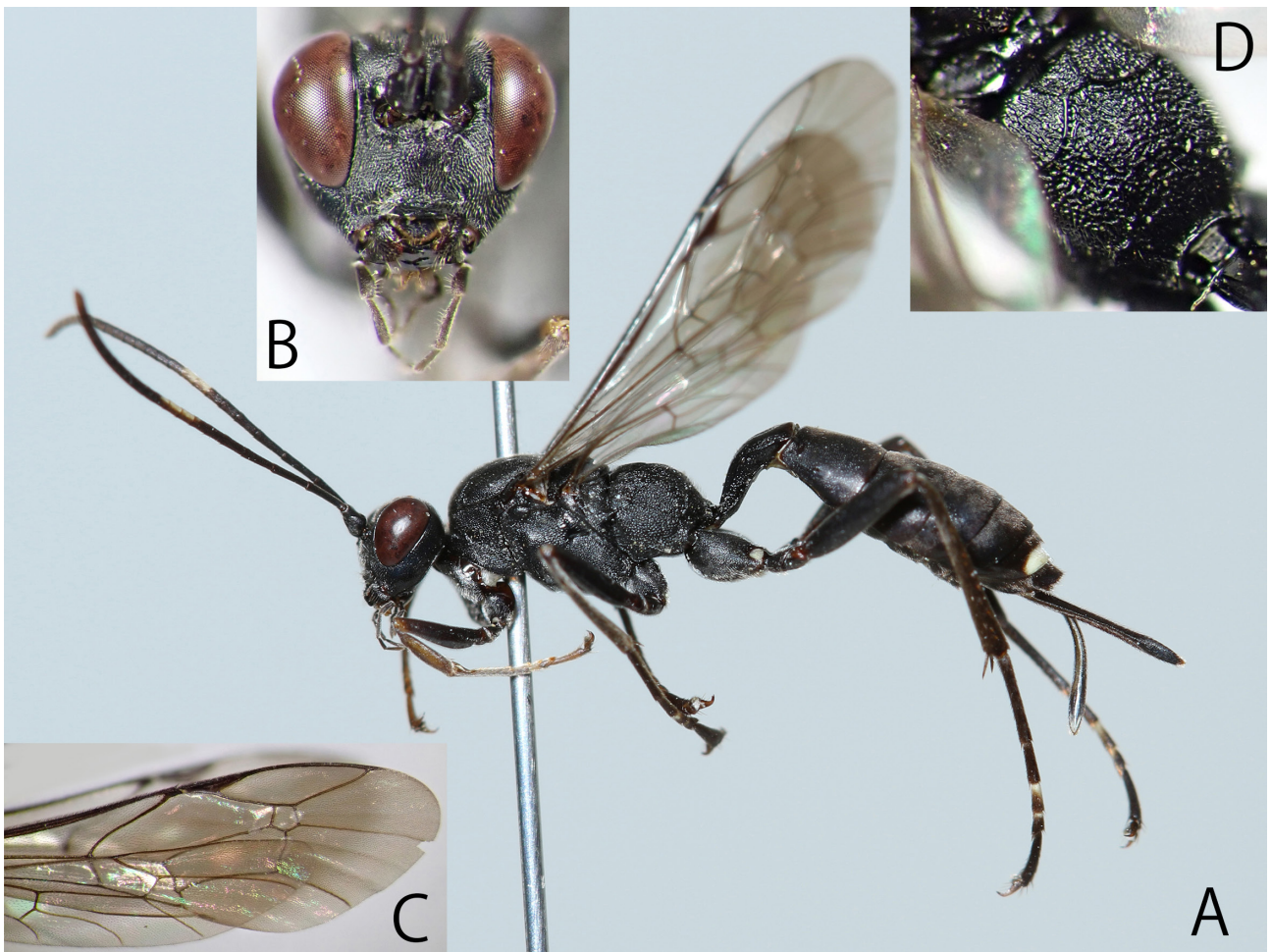


図6. フトアシハラトガリヒメバチ *Thrybius acuticornus* Yoshida, Matsumoto & Konishi, 2009, メス— A: 側方から見た全形; B: 前方から見た頭部; C: 前翅; D: 斜め背方から見た前伸腹節.

アシハラトガリヒメバチ *Thrybius togashii* Kusigemati, 1982

(図 7A-I, 8 D, E, I)

河川敷などの水辺で見られる代表的なヒメバチで、アシ原で特に多い。体色に変異が大きく、赤色の個体と黒色の個体は一見別種に見え、また赤色の個体もその程度に変異があり、図 7B のように T I だけが赤色の個体や、図 7D のように T I から T III まで広く赤色になる個体、体は黒いが脚だけ赤みを帯びる個体など様々である。種小名はホロタイプを採集した富樫一次氏にちなむ。本種の幼虫はヨシの内部間隙に群生するカタビロコバチ科の

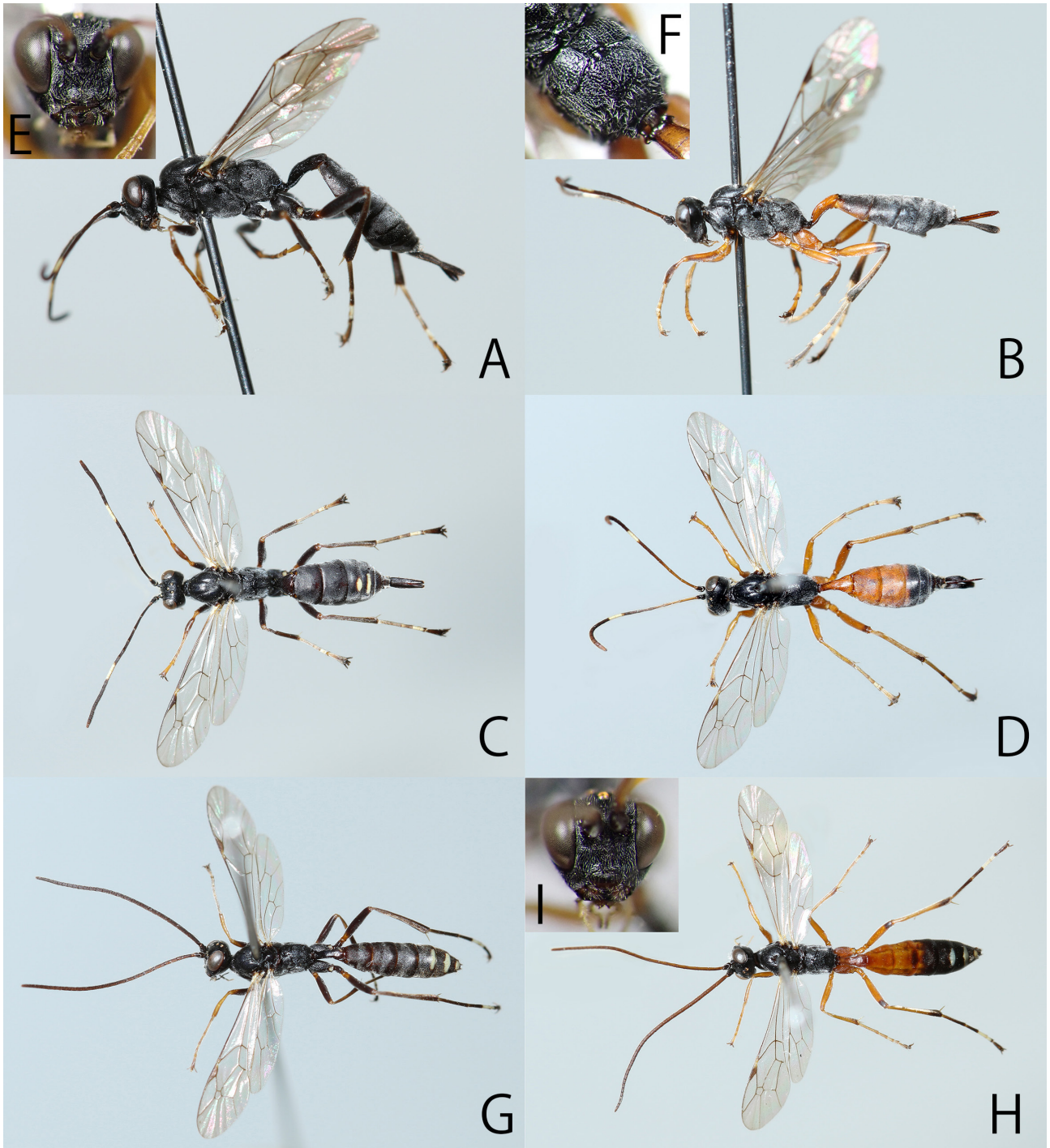


図 7. アシハラトガリヒメバチ *Thrybius togashii* Kusigemati, 1982, メス (A-F) およびオス (G-I) — A, B: 側方から見た全形; C, D, G, H: 背方から見た全形; E, I: 前方から見た頭部; F: 斜め背方から見た前伸腹節.

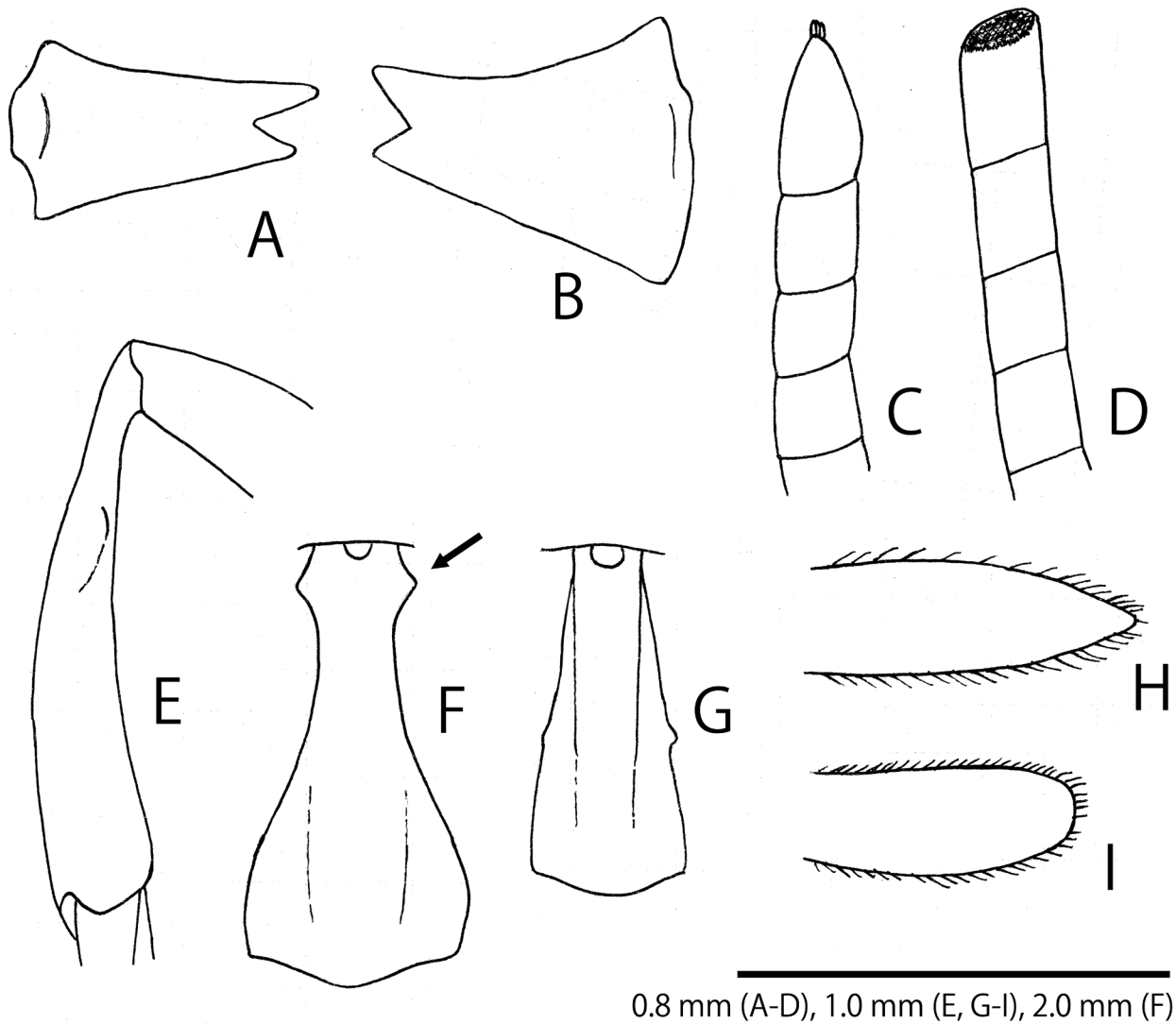


図8. モモイトガリヒメバチ *Nippocryptus alutaceus* (Tschek, 1871) (A), ホシクロトガリヒメバチ *N. vittatorius* (Jurine, 1807) (B, F), フトアシハラトガリヒメバチ *Thrybius acuticornus* Yoshida, Matsumoto & Konishi, 2009 (C, H), アシハラトガリヒメバチ *T. togashii* Kusigemati, 1982 (D, E, I) およびハネモントガリヒメバチ *Hoplocryptus maculatus* Watanabe, 2020 (G: パラタイプ), メス— A, B: 大顎; C, D: 側方から見た触角先端方; E: 斜め後方から見た前脚脛節; F, G: 背方から見たT1, 矢印は基部側方の三角形状突起を示す; H, I: 側方から見た産卵管鞘の先端.

一種 *Tetramesa* sp. を次々と捕食し成長するという (Matsumoto & Saigusa, 2001)。また、ヨシにヨシノメバエ類の一種 *Lipara* sp. が形成した虫えいから羽化した記録もあるが、寄主が虫えいの形成者かそれに関係した別の昆虫であるかは結論が出ていない (Yoshida *et al.*, 2008)。前方から見た頭盾: 渡辺・藤江 (2022) の図 55H。国内での分布: 北海道、本州、四国、九州。四国は本稿がおそらく初記録のため、下記に標本データ記述する。

3 F, 香川県高松市円座町香東川河川敷, 5. V. 2011, 前藤 薫・渡辺恭平採集.

謝 辞

標本をご提供いただいた皆様、標本調査においてお世話になった皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- Hirayama, T., T. Yoshida & O. Nagasaki, 2014. The life history and host-searching behaviour of the aquatic parasitoid wasp *Apsilops japonicus* (Hymenoptera: Ichneumonidae), a parasitoid of the aquatic moth *Neoshoenobia testacealis* (Lepidoptera: Crambidae). *Journal of Natural History*, **48**: 959–967.
- Iwata, K., 1950. Biology of Ichneumon parasites on bag-worms in Japan, I. *Transactions of the Kansai Entomological Society, Osaka*, **15**(1): 35–47.
- Iwata, K., 1958. Ovarian eggs of 233 species of the Japanese Ichneumonidae (Hymenoptera). *Acta Hymenopterologica*, **1**(1): 63–74.
- Iwata, K., 1960. The comparative anatomy of the ovary in Hymenoptera. Part V. Ichneumonidae. *Acta Hymenopterologica*, **1**(2): 115–169.
- 岩田久二雄, 1976. 昆虫学五十年: あるナチュラリストの回想. 189 pp. 中央公論社, 東京.
- 岩田久二雄, 1980. 自然観察者の手記 2. 263 pp.+xi. 朝日新聞社, 東京.
- Matsumoto, R. & T. Saigusa, 2001. The biology and immature stages of *Thybius togashii* Kusigemati (Hymenoptera: Ichneumonidae: Cryptinae), with a description of the male. *Journal of Natural History*, **35**: 1507–1516.
- Momoi, S., 1977. Hymenopterous parasites of common large bagworms occurring in Japan, with descriptions of new species of *Scambus* and *Sericopimpla*. *Akitsu (New Series)*, **14**: 1–12.
- 桃井節也, 2003. あるナチュラリストの覚書. 186 pp. 文芸社, 東京.
- Watanabe K., 2019. Taxonomic and zoogeographical notes of Japanese Cryptinae (Hymenoptera, Ichneumonidae), with description of five new species. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science)*, (48): 81–113.
- Watanabe, K., 2020. Taxonomic and zoogeographic notes on Japanese Cryptinae (Hymenoptera, Ichneumonidae), with descriptions of 12 new species. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science)*, (49): 29–66.
- Watanabe, K., 2025. Taxonomic study of Japanese Cryptinae (Hymenoptera, Ichneumonidae), with descriptions of 32 new species. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science)*, (54): 71–204.
- 渡辺恭平, 2024. 日本産 Cryptini (ヒメバチ科トガリヒメバチ亜科) の同定資料: 4. *Cryptus* group (I). *すがれおい*, (5): 22–33.
- 渡辺恭平・藤江隼平, 2022. 日本産ヒメバチ上科(膜翅目)の属への検索表. 神奈川県立生命の星・地球博物館 特別出版物第2号, iii+524 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

渡辺恭平 : watanabe-k@nh.kanagawa-museum.jp

本邦より見出されたベッコウカマバチ (和名新称) *Echthrodelphax rufus* Olmi, 1984 について

半田宏伸¹・三田敏治²

¹ 〒 369-1305 埼玉県秩父郡長瀬町長瀬 1417-1 埼玉県立自然の博物館；

² 〒 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室)

On *Echthrodelphax rufus* Olmi, 1984 in Japan

Hironobu Handa¹ & Toshiharu Mita²

(¹ Saitama Museum of Natural History, Nagatoro 1417-1, Nagatoro, Saitama 369-1305, Japan;

² Entomological Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan)

緒言

ベッコウカマバチ (和名新称) *Echthrodelphax rufus* Olmi, 1984 は、カマバチ科セグロカマバチ属に属するカマバチの一種である。

本種は中国、台湾、ラオス、タイで確認されていたが (Xu *et al.*, 2013; Olmi & Xu, 2015)、Handa & Mita (2024) により、埼玉県産の個体をもとに日本から初めて記録された。国内のセグロカマバチ属は、これまでセグロカマバチ *E. fairchildii* のみが知られており、本種で2種目となる。また、コブウンカ *Tropidocephala brunneipennis* の若虫から成虫雌雄の羽化を認め、本種の寄主が初めて明らかになった。なお、コブウンカに寄生するセグロカマバチ属幼虫は正体不明ながら島根県でも7月に確認されている。一方、セグロカマバチは国内だとイネウンカ類に寄生しており、コブウンカに対する寄生は知られていない。ベッコウカマバチの生息地は今のところ、埼玉県の1か所でのみ確認されているが、ありふれた寄主を利用することに加えて、海外の分布傾向からも、実際には国内に広く分布していると考えられる。そこで分布解明に資するために Handa & Mita (2024) に基づき、本種の特徴や採集した当時の状況、寄主の飼育について解説する。

なお、本稿で新称とする和名“ベッコウカマバチ”は、埼玉県で採集されたメス個体の特徴的な体色に因む。

結果と考察

1. 形態について

メス (図1) は2.4–2.7mm で頭部と中体節はほぼ一様に赤褐色、後体節は背面が暗色化し、前翅には2対の暗色部があることで、旧北区東部及び東洋区で記録されている同属他種と区別できる。対してオス (図2) は体長1.4–1.9mm でメスに比べると外部の形態は特徴が乏しく、正確に同定するには交尾器の検鏡が必要であるが、中胸背縦斜溝が後端で互いに接合せず離れるという特徴で、国内で記録される同属のセグロカマバチ *E. fairchildii* とは識別できる。

2. 埼玉県での採集時の状況

本種は埼玉県大里郡寄居町の山間地にある中間平緑地公園(標高約370m)で採集した。成虫は8月下旬から9月上旬にイネ科草本が優先する草地(図3)でスウィーピングによって得られている。海外でも採集例は極めて少ないが、当地での成虫の個体数は非常に少な

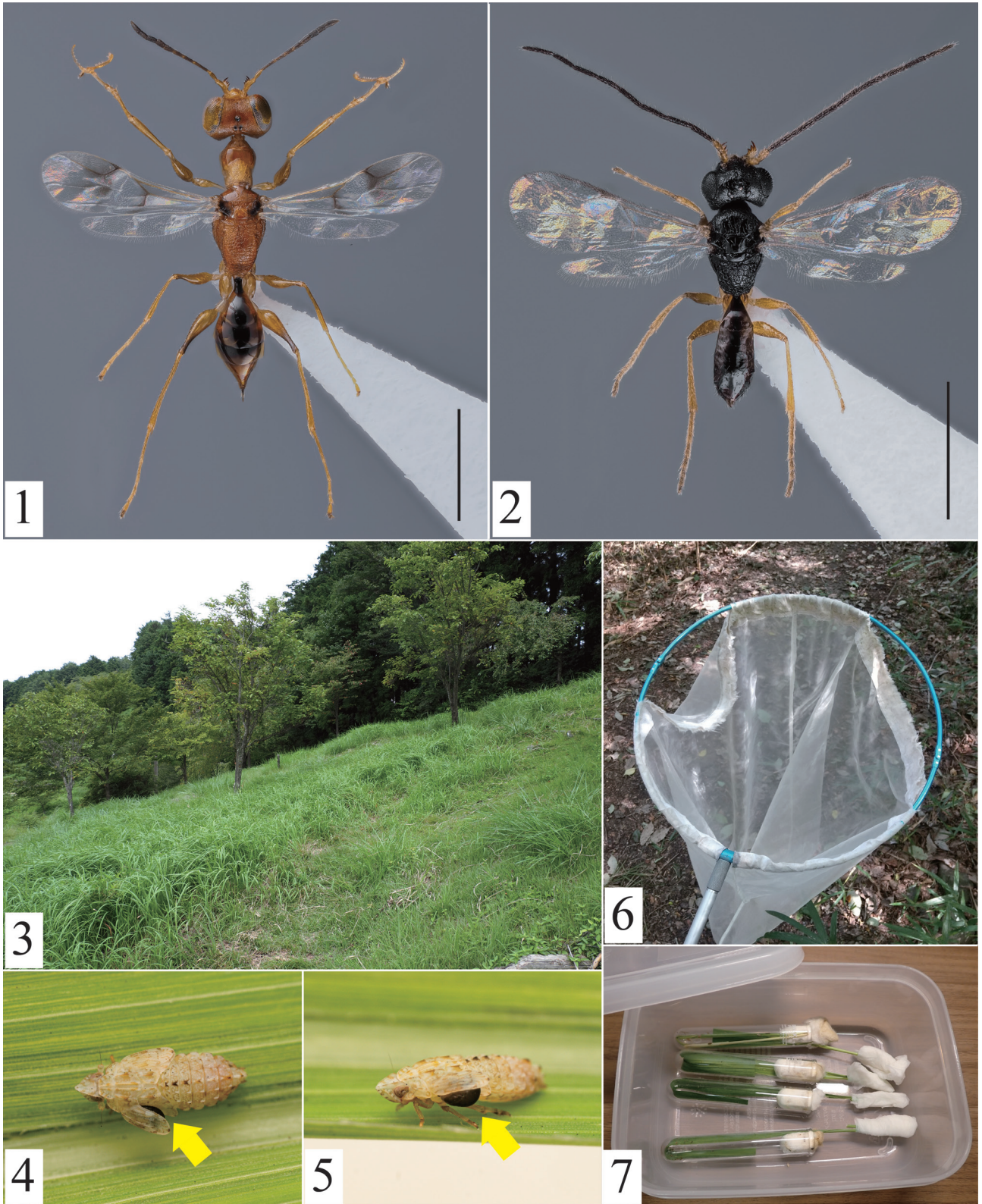


図1-2. ベッコウカマバチ (1: メス, 2: オス, スケールバーは1mm). 3. 採集環境. 4-5. 寄生を受けたコブウンカ幼虫 (4: 背面, 5: 左側面, 黒い部分がカマバチの幼虫囊). 6. スウィーピングし続けて消耗した捕虫網の例. 7. 寄主の飼育の様子.

く、捕虫網(50 cm 径)で草地を2~3時間ほどスウィーピングし続けても1,2個体得られる程度であった。

寄生を受けたコブウンカも草地のスウィーピングで得られたが、カマバチ成虫と同様に長時間のスウィーピングでも、わずかな個体得られる程度で寄生数は極めて少なかった。ただし、コブウンカの成虫、幼虫は共に個体数が非常に多く、数回のスウィーピングで数百個体というレベルで網に入るため、その中で寄生を受けた個体を見つけ出すのは骨が折れる。唯一の救いは、カマバチ類の寄生様式の特徴として幼虫嚢が寄主からはみ出するため、寄生の有無は目視で識別できる点である。しかしそれも本種を含むセグロカマバチ属の場合は、幼虫嚢が寄主の翅芽に隠れるように突出するため背面からは見えにくい(図4,5)。

いずれにせよ、当地では大量のコブウンカや植物片が紛れた捕虫網の中から見つけなければならぬので、採集するには根気がいる。また、丈夫なイネ科草本をひたすら搦り続けていると捕虫網が破れてくるため、ある程度の網の消耗を余儀なくされる(図6)。そのため予め縁を丈夫な布に張り替えておくなどの対策はしておいた方がよい。

3. 寄主の飼育

寄生を受けたコブウンカを飼育することで、カマバチを羽化させることが可能である。本調査では飼育に試験管(10×85 mm)を用いた。寄生を受けたコブウンカと寄主の餌となるイネ科植物を試験管に入れ、口部をカット綿で塞いで室温下で飼育した(図7)。植物は末端部を試験管からはみ出させて、湿らせたティッシュペーパーで包むことで植物の乾燥を防ぐことができる。さらにアルミ箔などでティッシュペーパーを包んでおくとより乾燥を防ぐことができる。植物はカマバチ幼虫が寄主から脱出するまでの期間、1-2日おきに交換するように心がけた。本調査では、カマバチ幼虫は採集して数日で寄主から脱出し、試験管内で繭を紡ぎ、約3週間の期間を経て羽化することを確認している。繭は植物上に作る事が多く、葉が乾燥で丸まると幼虫が潰れるため、繭を紡いだ後は葉を小さく裁断する等の工夫が必要である。なおカマバチ類の中には、時に寄主の飼育が難しい種や幼虫がうまく成長しないケースがあるが、本種の飼育は比較的容易にできた印象であった。

引用文献

- Handa, H. & T. Mita, 2024. First record and host identification of *Echthrodolphax rufus* Olmi, 1984 in Japan (Hymenoptera: Dryinidae). *Journal of Insect Biodiversity*, **54**(2): 58–60. <https://doi.org/10.12976/jib/2024.54.2.4>
- Olmi, M. & Z. F. Xu, 2015. Dryinidae of the Eastern Palaearctic region (Hymenoptera: Chrysidoidea). *Zootaxa*, **3996**(1): 1–253. <https://doi.org/10.11646/zootaxa.3996.1.1>
- Xu, Z. F., M. Olmi & J. H. He, 2013. Dryinidae of the Oriental region (Hymenoptera: Chrysidoidea). *Zootaxa*, **3614**(1): 1–460. <https://doi.org/10.11646/zootaxa.3614.1.1>

半田宏伸 : h.hnd.0118@gmail.com

埼玉県初記録のニセツヤセイボウ属 2種について

半田宏伸¹・田悟敏弘²

(¹ 〒369-1305 埼玉県秩父郡長瀬町長瀬 1417-1 埼玉県立自然の博物館；
² 埼玉県川口市)

First records of two *Pseudomalus* species in Saitama Prefecture, Japan

Hironobu Handa¹ & Toshihiro Tago²

(¹ Saitama Museum of Natural History, Nagatoro 1417-1, Nagatoro, Saitama 369-1305, Japan;
² Kawaguchi, Saitama, Japan)

緒言

日本産セイボウ科の内、ニセツヤセイボウ属 *Pseudomalus* は7種が知られる(三田, 2020)。本属を含むツヤセイボウ族の一部の種では、アブラムシなどに卵を産み付け、最終的にそれらを狩るアリマキバチ類に寄生する便乗寄生をされると考えられている(Winterhagen, 2015; 半田, 2017, 2024)。したがってツヤセイボウ類を採集する場合はそうしたアブラムシやアリマキバチ類が見られる場所を探すことになるが、それらがいれば必ずしもセイボウが見られるというわけではないようで、セイボウ類の中でも採集例の乏しい種が多い。

埼玉県のニセツヤセイボウ属は、ホシツヤセイボウ *P. punctatus* (Uchida, 1927) とオオツヤセイボウ *P. grandis* (Tsuneki, 1950) の2種が記録されている(南部, 1998; さいたま市, 2021; 半田, 2024)。筆者らは埼玉県内で採集したセイボウ類を同定したところ、県内から記録のないホンドツヤセイボウ(ジョウザンツヤセイボウ本土亜種) *P. djozanus hondonis* (Tsuneki, 1977) と、リシリツヤセイボウ *P. babai* (Tsuneki, 1979) の2種を確認したため報告する。

材料と方法

半田、田悟がそれぞれ採集したセイボウ類を半田が同定した。同定には Tsuneki (1970, 1977, 1979)、常木 (1970a, b)、寺山ほか (2016) を参照した。標本は半田が保管しているが、埼玉県立自然の博物館に収蔵する予定である。

結果と考察

ホンドツヤセイボウ(ジョウザンツヤセイボウ本土亜種)

Pseudomalus djozanus hondonis (Tsuneki, 1977)

1 F, 埼玉県秩父郡長瀬町長瀬岩畳, 10. VII. 2021, 田悟敏弘採集(図1, 4); 1 F, 埼玉県秩父市久那一小鹿野町長留(400–450m), 7. VII. 2024, 半田宏伸採集(図2, 5)。

本種は体色が青緑色から紫堇色を呈し、前脚腿節下面の扁平部が幅広く(図4, 5)、盾板には大点刻の他に微細な粒状あるいは皺状の彫刻を持つ(Tsuneki, 1970, 1977; 常木 1970a)。常木(1970a)では胸部の微細彫刻を「いぶし銀状の半光沢」と表現している。北海道の個体(原名亜種)は体色が青緑色であるのに対し、本州の個体は紫堇色で、胸部の微細皺刻が微線状になる点などで別亜種とされる(Tsuneki, 1977)。本報の個体はこれらの特徴が一致したため本亜種と同定した。また、秩父市で採集した個体は体長が4mm程度と従来知られてきた本種の体長6-8mmよりも小型で、頭部、中体節の色が紫堇色ではなく、青緑色がかかった色味を呈していたが(図2)、中体節の彫刻や前脚腿節の扁平部の形状(図5)から本亜種と同定した。

本種は常木(1970a)ではきわめて稀な種とされ、これまで記録されている地域も限られている(例えば Tsuneki, 1970, 1977; 室田, 1997; 羽田ほか, 2005; 2006)。しかし筆者のうち半田は、本報以外にも本種と思われる未記録地域から採集された標本を確認しており(半田, 未発表)、ブログやSNS上においても本種の可能性が考えられる画像が見られることから、実際にはこれまで知られていた分布域よりも広い範囲に生息している可能性が考えられる。

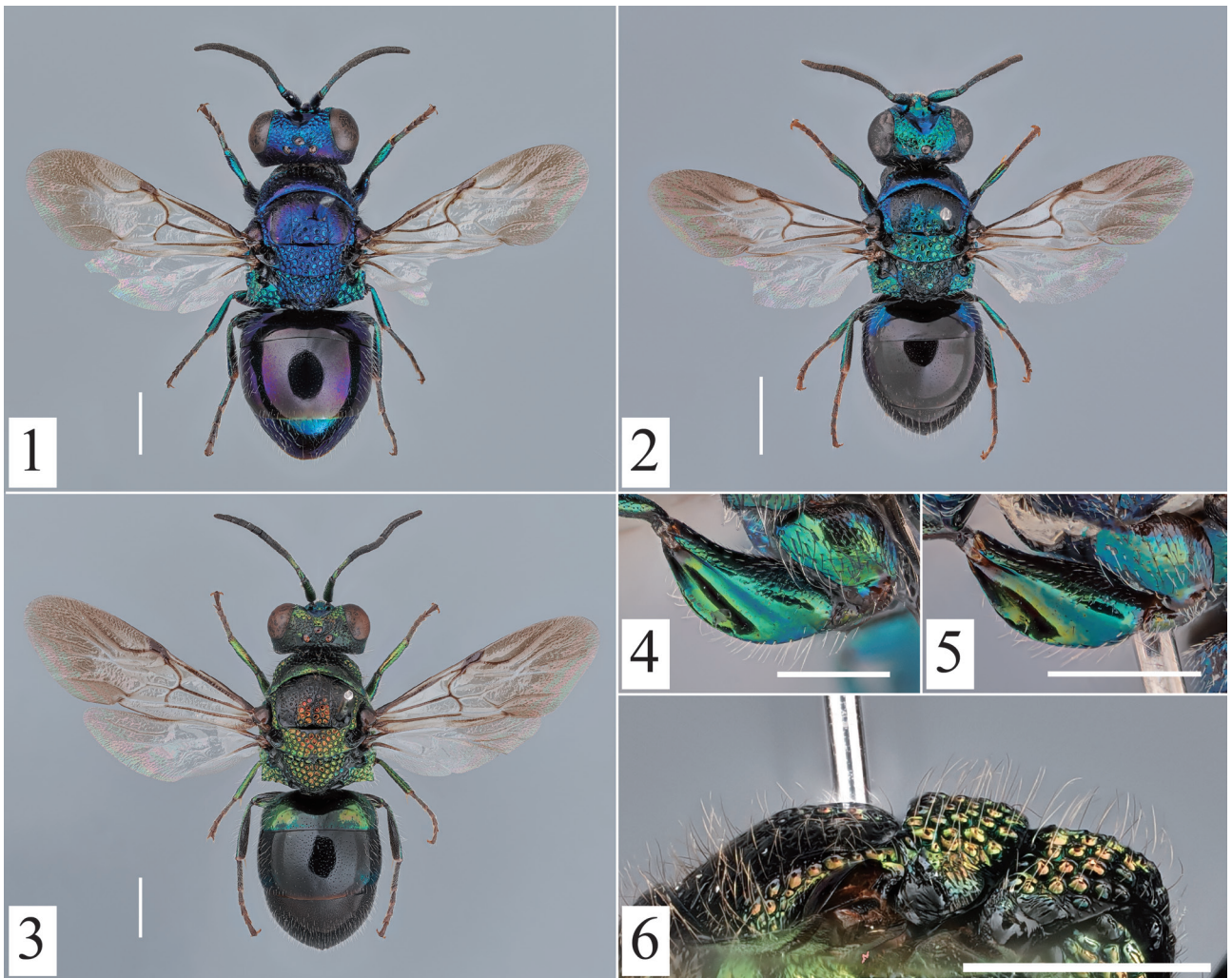


図1-6. 埼玉県初記録のツヤセイボウ: 1. ホンドツヤセイボウ(長瀬町産); 2. ホンドツヤセイボウ(秩父市産の小型個体); 3. リシリツヤセイボウ; 4. ホンドツヤセイボウ(長瀬町産)の右前脚腿節; 5. ホンドツヤセイボウ(秩父市産)の右前脚腿節; 6. リシリツヤセイボウの側面から見た小盾板; スケールバー, 1-3, 6: 1 mm, 4, 5: 0.5 mm.

リシリツヤセイボウ

Pseudomalus babai (Tsuneki, 1979)

1 M, 埼玉県秩父市入川(小赤沢)(1220m), 30. IX. 2014, 田悟敏弘採集(図3, 6).

本種は側方から見た際に盾板、小盾板、前伸腹節の各間が深く切り込まれ、小盾板が高くなること(図6)、前・中胸背部は点刻され、皺や線状の彫刻は見られないことで他種と区別される(Tsuneki, 1979; 寺山ほか, 2016)。本報の個体はこれらの特徴を含め Tsuneki (1979) で記載された特徴を有していたため本種と同定した。また、Tsuneki (1979) では本種の特徴として爪の歯が6-7歯の櫛状になることを示しているが、同属の他種の中には類似した形態をもつ種がいるため注意が必要である。

本種はこれまで北海道の利尻島から採集されたホロタイプのみが知られていたが、今回、関東の秩父山地で採集され、本州にも分布していることが明らかとなった。したがって他地域においても、例えば標高の高い山地帯においては本種が分布する可能性が考えられ、今後の分布情報の集積が期待される。なお、ホロタイプと本報の個体はオスのためメスは依然として未知である。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、三田敏治博士にはツヤセイボウ類のタイプ標本について有益な情報を共有いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

引用文献

- 半田宏伸, 2017. 埼玉県内におけるミヤマツヤセイボウ *Philoctetes monticola* (Tsuneki, 1975) の初記録と産卵に関する知見. 埼玉県立自然の博物館研究報告, (11): 55-56.
- 半田宏伸, 2024. ホシツヤセイボウの産卵行動の観察. すがれおい, (5): 80-82.
- 羽田義任・野坂千津子・田埜 正・井上重紀・黒川秀吉・室田忠男, 2005. 2004年に岐阜県で採集した蜂類. つねきばち, (5): 33-66.
- 羽田義任・野坂千津子・田埜 正・黒川秀吉・室田忠男, 2006. 2005年に富山県で採集した有剣蜂類. つねきばち, (8): 1-48.
- 南部敏明, 1998. 埼玉県の膜翅目(ハチ・アリ類). 埼玉県昆虫誌 III: 9-92. 埼玉昆虫談話会. 大宮.
- 三田敏治, 2020. Chrysididae セイボウ科. 日本昆虫目録編集委員会編, 日本昆虫目録第9巻 膜翅目(第3部細腰亜目有剣類), pp. 16-28. 権歌書房, 東京.
- 室田忠男, 1977. 福井県の蜂類. 蜂友通信, (23): 7-16.
- さいたま市, 2021. さいたま市史自然編~昆虫類~: 325 pp., さいたま市, さいたま.
- 寺山 守・須田博久・田埜 正・室田忠男, 2016. セイボウ科 Chrysididae. 寺山 守・須田博久編著, 日本産有剣ハチ類図鑑, pp. 388-414. 東海大学出版部, 平塚.
- Tsuneki K., 1970. Bemerkungen und Beschreibungen über den japanischen Heteronychinen (Hym., Chrysididae). *Life Study*, 14(2): 27-34.

- 常木勝次, 1970a. 蜂類研究手引 (25) セイボウ科 (Chrysididae) (I). 生物研究, **14**(2): 45–50.
- 常木勝次, 1970b. 蜂類研究手引 (26) セイボウ科 (Chrysididae) (II). 生物研究, **14**(3/4): 66–72.
- Tsuneki K., 1977. Description of new species and subspecies of Chrysididae from Japan. *Akitu* (n. s.), (9): 1–4.
- Tsuneki K., 1979. Sphecidae and Chrysididae collected by Dr. K. Baba in northern Japan proper and Hokkaido, with descriptions of two new species. 馬場金太郎編, 新潟県の昆虫 (越佐昆虫同好会々報 50号慶祝論文集) pp. 9–14. 馬場金太郎氏自費出版.
- Winterhagen, P., 2015. Strategy for sneaking into a host's home: The cuckoo wasp *Omalus biaccinctus* (Hymenoptera: Chrysididae) inserts its eggs into living aphids that are the prey of its host. *European Journal of Entomology*, **112**(3): 557–559.

半田宏伸 : h.hnd.0118@gmail.com

イタミツヤセイボウの新たな分布記録と若干の考察

半田宏伸

(〒369-1305 埼玉県秩父郡長瀬町長瀬 1417-1 埼玉県立自然の博物館)

New distribution records and notes on *Pseudomalus itamii* (Tsuneki, 1975)

Hironobu Handa

(Saitama Museum of Natural History, Nagatoro 1417-1, Nagatoro, Saitama 369-1305, Japan)

緒言

イタミツヤセイボウ *Pseudomalus itamii* (Tsuneki, 1975) (以下、本種) はセイボウ科セイボウ亜科ツヤセイボウ族に属するハチ類の一種で、Tsuneki (1975) によって新潟県から採集された個体をもとに記載された日本固有種である。新潟県内では他にも追加の記録があるものの(伊丹, 1974, 1981)、近年の採集例はみられない。また他の地域では、国土交通省河川水辺の国勢調査の河川環境データベースシステム関東地方(国土交通省, オンライン: https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/dl_83_index.html, 2025年9月1日閲覧)によると、2009年に実施された東京都の多摩川流域の調査で下流部の2地点から記録されている。

筆者は埼玉県内でハチ類の分布調査を行う過程で本種を複数個体採集した。また提供を受けた標本の中から埼玉県、茨城県、千葉県、青森県で採集された本種の標本を見出した。

これらはこれまで本種の記録がない地域で近年採集された標本で、しばらく詳細な情報のなかった本種の分布を知る重要な記録と言える。そこで本種の分布等の情報の集積に資するため、これらの記録を報告すると共に、従来の文献で指摘されていた本種の特徴と本報で観察した形態的特徴を記し、これまでの知見から本種の生息環境等の生態について考察する。

材料と方法

筆者が行った採集調査では50cm径の捕虫網でヨシ類の生育した草地をスウィーピングして採集した。収集した標本は雌雄を判別するために交尾器の解剖を行った後、全て乾燥標本とした。同定にはTsuneki (1975)、寺山ほか(2016b)を参照した。

結果と考察

1. 標本の記録と同定について

【埼玉県】

1 M, 川口市河原町 (alt. 2 m), 17. IX. 2018, 田悟敏弘採集.

本標本は田悟(2020)でホシツヤセイボウ *P. punctatus* (Uchida, 1927) とされたもので、筆者が再同定した結果、本種であることが明らかとなった。

2 F, 比企郡吉見町明秋 (alt. 16m), 5. IX. 2019; 1 F, 同所, 13. IX. 2019; 1 F, 同所, 15. IX. 2019 (図1); 1 F, 同所, 27. IX. 2019, 全て半田宏伸採集.

【茨城県】

1 M, 東茨城郡茨城町下石崎潤沼 (alt. 0 m), 24. VII. 2023, 永井 修採集 (図 2) .

【千葉県】

1 F, 流山市小屋 (alt. 4–10 m), 10. VII. 2005, 田悟敏弘採集 .

【青森県】

2 F, つがる市木造越水神山 (冷水沼) (alt. 13 m), 2–9. VIII. 2021; 1 F, 同所, 9–17. VIII. 2021 (図 5–7); 1 M & 2 F, 同所, 16–28. VIII. 2023; 1 F, 同所, 4–18. IX. 2023; 全てマレーズトラップ、福井経平採集 .

本種は体長 4.5 mm 程度で鮮やかな青緑色を呈す小型のセイボウで、中胸盾板、小盾板には大きく底が平らで浅い点刻がまばらにあり (図 3)、触角第 2 節目の長さが 3 節目と同程度 (図 4)、後体節第 1 背板の前側部に小突起があり (図 6)、後体節 3 節目末端は浅く切れ込み (図 7)、爪は 4 歯となる (Tsuneki, 1975)。本稿の標本はいずれも以上の特徴に加え、Tsuneki (1975) に記載されたその他の特徴が概ね一致したため本種と同定した。

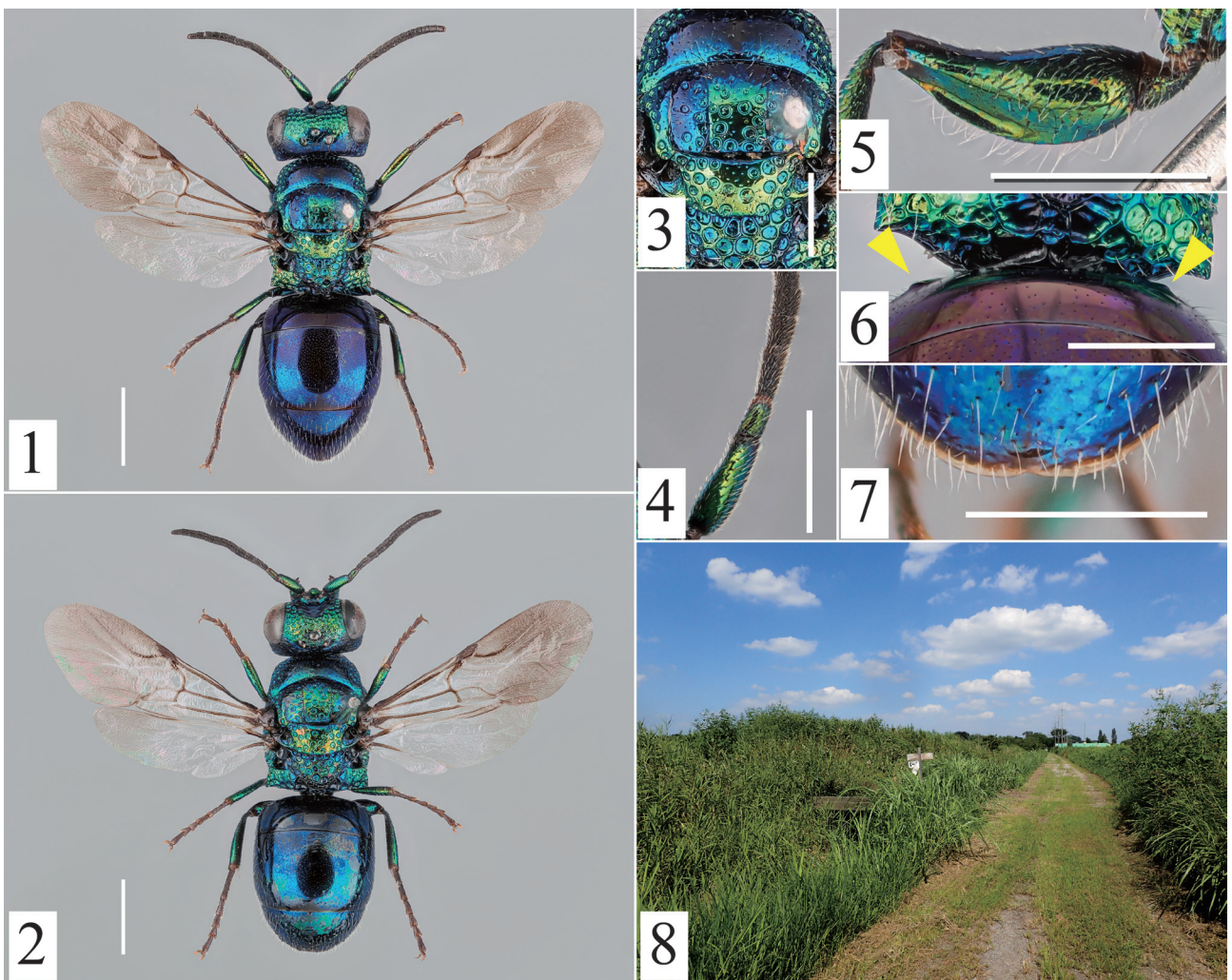


図 1–8. イタミツヤセイボウ *Pseudomalus itamii* (Tsuneki, 1975) の各部位と採集環境: 1. メス全形; 図 2. オス全形; 図 3. 盾板、小盾板; 4. 触角; 5. 前脚腿節; 6. 後体節第 1 背板前側部の小突起; 7. 後体節 3 節目末端の切れ込み; 8. 採集環境 (埼玉県比企郡吉見町); スケールバー, 図 1–2: 1 mm; 図 3–7: 0.5 mm.

2. 本稿の個体の形態について

本稿の標本は体長の個体差は3.0–4.6 mmであった。盾板、小盾板の大点刻は、中胸背板縦斜溝間の後方部と小盾板では比較的疎大で、点刻が互いに接せず、点刻間が平滑な箇所が見られた(図3)。触角第2、3節の長さは3節目の方がわずかに長く、1.1–1.2倍程度の差が見られた(図4)。前脚腿節下部の扁平部は幅が狭くわずかに張り出す程度であった(図5)。後体節第1背板前側部の小突起(図6)には個体差が見られ、突出部が弱く観察が難しい個体が見られた。またこの小突起は、本種と同属他種を識別する形質として従来の検索表や種の解説に用いられているが(寺山ほか, 2016b)、同属のオオツヤセイボウ *P. grandis* (Tsuneki, 1950) やホシツヤセイボウ *P. punctatus* (Uchida, 1927) でも同様に突出が見られる場合があり(半田, 未発表)、本形質のみを用いて同定するのは控えた方が良いと考えられる。

3. 生息環境と生態について

本稿では、各標本が採集された場所はいずれも平野部に属しており、埼玉県、茨城県、千葉県は関東平野、青森県は津軽平野に該当する。同様に伊丹(1974, 1981)は越後平野、河川水辺の国勢調査(国土交通省, オンライン)の記録は関東平野に当たる。また、本稿の個体は用水路や湖畔、河川敷などの水辺周辺でヨシ類が生育する草地から得られている。青森県で採集された個体はヨシ原のある湖沼に沿った林の林縁部に設置されたマレーズトラップから採集された。筆者が採集した埼玉県吉見町の個体は荒川の河川区域に含まれる草地で、用水路沿いに繁茂するヨシ類をスウィーピングして採集した(図8)。その他の個体もヨシ類の生育が見られる環境でスウィーピングによって採集されている。伊丹(1974, 1981)の新潟県の記録も採集は草地のスウィーピングであるという。河川水辺の国勢調査(国土交通省, オンライン)の記録では、河川環境データベースシステムによると、本種の記録2件のうち1件の環境はヨシの植生とされている。したがってこれらの知見から、本種は平野部のヨシ類が生育する湿地の草地環境に生息する種であることが伺える。

また、埼玉県川口市の採集地は荒川沿いの土手であり、周辺は都市化の進んだ地域で緑地は少なく、自然環境が豊かな場所とは言い難い。多摩川流域の記録も同様に都市化の進んだ地域といえる。これまで記録の乏しかった本種が、このように都市化が進んだ地域においても生息していることは特筆すべき点と言え、今後の記録の増加が期待できる。

ニセツヤセイボウ属を含むツヤセイボウ族のいくつかの種は、アブラムシ類などに産卵し、それら狩る狩蜂類に便乗寄生すると考えられている(Winterhagen, 2015; 半田, 2017, 2024)。筆者が調査した埼玉県吉見町では、同日にヨシ類のスウィーピングでヒメイスカバチ *Passaloecus clypealis yamato* Tsuneki, 1955 が多数採集されており、このハチ類はアブラムシ類を狩ることが知られる(寺山ほか, 2016a)。イタミツヤセイボウの生態的な知見はほとんどないため確証は得られていないが、従来の知見と採集された状況から類推すると、本種はヨシ類を寄主植物とするアブラムシ類に産卵し、それらを狩るイスカバチ類のような狩蜂に寄生する便乗寄生者である可能性がある。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、田悟敏弘氏、永井 修氏、福井経平氏には各氏が採集された貴重な標本をご提供いただいたとともに採集環境などをご教授いただいた。三田敏治博士には本種のタイプ標本について有益な情報を共有いただいた。渡辺恭平博士には、神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵された伊丹英雄氏のコレクションを閲覧する機会を頂いた。以上の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

引用文献

- 半田宏伸, 2017. 埼玉県内におけるミヤマツヤセイボウ *Philoctetes monticola* (Tsuneki, 1975) の初記録と産卵に関する知見. 埼玉県立自然の博物館研究報告, (11): 55–56.
- 半田宏伸, 2024. ホシツヤセイボウの産卵行動の観察. すがれおい, (5): 80–82.
- 伊丹英雄, 1974. 新発田市付近のアナバチ科とセイボウ科覚書. 蜂友通信, (1): 17–18.
- 伊丹英雄, 1981. セイボウ 3 題. 蜂友通信, (13): 1.
- 国土交通省, 河川水辺の国勢調査 河川環境データベースシステム 関東地方, オンライン.
https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyodl_83_index.html (2025年9月1日閲覧).
- 田悟敏弘, 2020. 川口市昆虫リスト -V- ハチ目 [2014–2018]. 寄せ蛾記, (176): 29–38.
- 寺山 守・須田博久・高橋秀男・田埜 正・南部敏明, 2016a. ギングチバチ科 Crabronidae. 寺山 守・須田博久編著, 日本産有剣ハチ類図鑑, pp. 13–160, 東海大学出版部, 平塚.
- 寺山 守・須田博久・田埜 正・室田忠男, 2016b. セイボウ科 Chrysididae. 寺山 守・須田博久編著, 日本産有剣ハチ類図鑑, pp. 388–414. 東海大学出版部, 平塚.
- Tsuneki, K., 1975. New cuckoo wasps (Hymenoptera, Chrysididae) found in Japan. *Kontyu*, Tokyo, **43**(1): 29–35.
- Winterhagen, P., 2015. Strategy for sneaking into a host's home: The cuckoo wasp *Omalus biaccinctus* (Hymenoptera: Chrysididae) inserts its eggs into living aphids that are the prey of its host. *European Journal of Entomology*, **112**(3): 557–559.

半田宏伸 : h.hnd.0118@gmail.com

徳島県の博物館の粘着板トラップで捕獲された ヤマトナナフシヤドリバチの記録

外村俊輔¹・久末 遊²

(¹ 埼玉県立自然の博物館〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館；² 〒100-2101 東京都小笠原村父島字奥村, 一般財団法人 自然環境研究センター小笠原事務所)

Record of *Cladobethylus japonicus* Kimsey, 1986 collected by sticky trap in Museum,
Tokushima Prefecture, Japan (Hymenoptera, Chrysididae)

Shunsuke Tomura¹ & Yu Hisasue²

(¹ Tokushima Prefectural Museum, Mukoterayama, Hachimancho, Tokushima-city, Tokushima, 770-8070 Japan; ² Ogasawara Division of Japan Wildlife Research Center, Okumura, Chichijima, Ogasawara, Tokyo, 100-2101, Japan)

緒 言

セイボウ科ナナフシヤドリバチ亜科のヤマトナナフシヤドリバチ *Cladobethylus japonicus* Kimsey, 1986 は、ナナフシ目の卵寄生蜂として知られ、雌雄ともに有翅である(寺山・須田, 2016)。本州、四国、九州、八丈島、奄美大島に分布し(南部, 2007; 寺山・須田, 2016; 久末・三田, 2019; 久末, 2022; 中村・久末, 2024)、四国ではこれまで愛媛県(久末, 2022)、高知県(上森ら, 2024)で記録されているが、全国的に採集事例は少ない。

徳島県徳島市にある鳥居龍蔵記念博物館にて、屋内の3か所に(株)イカリ消毒の粘着板トラップ(図1)を2023年から1年間設置し、害虫のモニタリングを行っていた。このうち、3階の屋外への出入口付近の床に設置していたものにヤマトナナフシヤドリバチのメス1個体が捕獲されていた。本種の徳島県における初記録に加え、粘着板トラップによる採集事例として報告する。筆者のうち外村が標本を作成し、久末が同定した。標本は徳島県立博物館に収蔵されている。

結果と考察

1 F (図2-3), 徳島県徳島市向寺山, 12. VI. 2023 – 12. VI. 2024.

本種はこれまでリター層の篩い採集や地表に設置したマレーゼトラップ、イエローパントラップ等で得られており、寄主のナナフシ卵がある地表付近での採集が有効とされている(春日, 2019; 井藤ら, 2021; 西谷・久末, 2021; 上森ら, 2024; 半田, 2024)。今回の粘着板トラップも床に設置されたものであり、それらの手法と同様に有効と考えられる。博物館の裏手には照葉樹を主体とする雑木林があり、寄主であるナナフシ目もよく見られることから、本種は周辺の林内に生息しており偶発的に屋内に侵入した際に捕獲されたものと思われる。トラップを設置していた1年間のうち、どの時期に捕獲されたかは不明である。



図 1-3. トラップで捕獲されたヤマトナナフシヤドリバチ, メス. 1: 館内に設置した(株)イカリ消毒の粘着板トラップ; 2: トラップで捕獲されたメス; 3: 側面から見た全形.

謝 辞

本個体を撮影いただいた鈴木佑弥博士(徳島県立博物館)、害虫のモニタリングを主導された植地岳彦氏、小林篤正氏(鳥居龍蔵記念博物館)に厚く御礼申し上げます。

引用文献

半田宏伸, 2024. マレーズトラップ及び捕虫網によって収集された昆虫類(コウチュウ目, ハエ目, カメムシ目, ハチ目). 埼玉県立自然の博物館自然遺産調査Ⅱ 入間川流域総合調査報告書: 60-95.

久末 遊, 2022. 愛媛大学ミュージアム所蔵の愛媛県産ナナフシヤドリバチ亜科. へりぐる, (43): 53-54.

久末 遊・三田敏治, 2019. 四国及び九州から見つかったナナフシヤドリバチ亜科 2 種の記録. つねきばち, (33): 36.

井藤竜大・松本吏樹郎・三田敏治・寺山 守・伊藤誠人, 2021. 奈良県矢田丘陵のセイボウ上科ハチ類. 大阪市立自然史博物館研究報告, (75): 41-52.

- 春日拓実, 2019. 上越市でナナフシバチ亜科2種を採集. 越佐昆虫同好会報, (120): 1.
- 中村 涼・久末 遊, 2024. 奄美大島におけるヤマトナナフシヤドリバチの記録. すがれおい, (6): 25–26.
- 南部敏明, 2007. ヤマトナナフシバチ八丈島に産す. 埼玉動物研通信, (56): 25.
- 西谷光平・久末 遊, 2021. ヤマトナナフシヤドリバチを篩い採集によって多数採集. *Pulex*, (100): 891–892.
- 寺山 守・須田博久 編著, 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. i–xxxvi+735 pp., 東海大学出版部, 平塚.
- 上森教慈・三田敏治・菱 拓雄, 2024. 高知県南西部の有剣ハチ類の分布記録. すがれおい, (6): 118–129.

外村俊輔 : oecophoroides@gmail.com

屋久島のアマミキバナクモバチ

上森教慈

(〒305-8687 茨城県つくば市松の里1 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所)

Records of *Hemipepsis amamiensis* Tsuneki, 1990 in Yakushima Island, Japan

Kazushige Uemori

(Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan)

緒言

アマミキバナクモバチ *Hemipepsis amamiensis* Tsuneki, 1990 は主に南西諸島に生息する日本産 *Hemipepsis* 属の中で最も北に分布する種である。清水(2020)によると分布は九州、大隅諸島(薩摩竹島、薩摩硫黄島、口永良部島)、奄美大島、沖縄島とあり、屋久島の分布記録はなかった。

近年、鹿児島県による屋久島空港滑走路延伸事業のための環境アセスメント調査の報告書内で本種が記録された(鹿児島県, 2024)。しかし、本報告書では「昆虫類の調査は屋久島町小瀬田の町営牧場の東側の地域で2020年9月15–18日、2021年4月11–14日、2021年7月11–14日に行われた」ことしかわからず、本種の詳細なラベルデータは記録されていなかった。

筆者は木材穿孔性害虫の調査で屋久島を訪れた際、本種を採集したため、ラベルデータのある記録として報告する。標本は筆者が保管している。

結果と考察

1 F, Kagoshima Pref., Yakushima-cho, Onoaida, 230 m alt., 1. VII. 2025, K. Uemori leg.

採集した個体(図1)は薄暗い照葉樹林の林床を飛行していた。採集地点はまとまった照葉樹林のある地域だったが、林内はやや乾燥気味で、林床をスウィープしてもほかのクモバチや、アリガタバチ、コツチバチなどの林床付近を飛行する有剣ハチは採れなかった。鹿児島県(2024)の調査地はスギ人工林と照葉樹林がパッチ状に分布する地域で、今回採集した地点に比べても攪乱された地域である。本種は自然度の高い森林でなくても生息できるのかもしれない。

謝辞

森林総合研究所の服部友香子氏には調査全体の調整および調査への同行していただいた。森林総合研究所の服部力氏、加賀谷悦子氏、升屋勇人氏、滝久智氏、同所関西支所の市原優氏、同所東北支所の鳥居正人氏には調査にご同行いただいた。厚く御礼申し



図1. 屋久島産アマミキバネクモバチ, メス.

上げる。本研究は、農林水産省委託プロジェクト研究「日本と木材輸出相手国の樹木を外来病害虫から護る複合リスク緩和手法の開発」JPJ012712 の補助を受けて行った。

引用文献

- 鹿児島県, 2024. 屋久島空港滑走路延伸事業に係る環境影響評価書. 鹿児島県. [https://assess.env.go.jp/2_jirei/2-5_toshokokai/publishdetail.html?id=157にてPDFが公開されており、環境影響評価書【2分冊中2】内の表5-6(10)に当該種の名前が掲載されている]. (2025/08/26 閲覧)
- 清水 晃, 2020. クモバチ科. 日本昆虫目録編集委員会編, 2020. 日本昆虫目録. 第9巻 膜翅目(第3部 細腰亜目有剣類), pp. 56-84. 日本昆虫学会, 京都.

上森教慈: uemori_kazushige510@ffpri.go.jp

ワタナベツチバチの寄主と化性

浦野航平・杉浦真治

(〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学大学院農学研究科)

Host use and voltinism of the scoliid wasp *Scolia watanabei*

Kohei Urano & Shinji Sugiura

(Graduate School of Agricultural Science, Kobe University, Rokkodai 1-1, Nada-ku, Kobe, 657-8501, Japan)

Abstract. *Scolia watanabei* (Hymenoptera: Scoliidae) is a non-native wasp species unintentionally introduced to Japan. To clarify its host range and voltinism, we individually provided larvae of three scarab beetle species (Coleoptera: Scarabaeidae) to female *S. watanabei* under laboratory conditions, in October and November, using soil-filled plastic containers. The wasps successfully paralyzed larvae of *Protaetia orientalis* and *P. brevitarsis* (Scarabaeidae: Cetoniinae), but not those of *Anomala albopilosa* (Scarabaeidae: Rutelinae). Each female laid an egg on the abdomen of a paralyzed beetle larva at the bottom of the container. The wasp larva hatched and consumed the host larva, eventually spinning a brown cocoon approximately six days after hatching. The larvae overwintered within these cocoons and emerged as adults in the following September to October. The developmental period from oviposition to adult emergence was approximately 348 days, indicating that *S. watanabei* is univoltine.

緒言

ツチバチ類(膜翅目:ツチバチ科 Scoliidae Latreille, 1802)は、世界各地に生息しており、500種以上が知られている(Nastasi *et al.*, 2023; Noort & Broad, 2024)。ツチバチ類は主にコガネムシ類幼虫に捕食寄生する。メス成虫は地中に潜り寄主を探索する(岩田, 1971; Inoue & Endo, 2008)。メス成虫は寄主を見つけると毒針で刺して永久麻酔を施し(Fabre, 1886, 1891; O'Neill 2001; Vereecken & Carriere, 2003)、地中で育室を形成してから寄主の腹面に1卵を産み付ける(Clausen *et al.*, 1932; Miyagi, 1960; 谷・上野, 2014)。孵化したツチバチ幼虫は寄主を食べて成長し、寄主を食べ尽くした幼虫はその場で繭を紡いで蛹化する(Miyagi, 1960; 谷・上野, 2014)。

ワタナベツチバチ *Scolia watanabei* (Matsumura, 1912)は、台湾、中国、インド、ミャンマーに分布しているが、近年、日本で新たに記録された外来種である(Matsumoto *et al.*, 2019)。本種は大阪湾の人工島である咲洲(大阪府大阪市住之江区南港中央公園)で初めて発生が確認された(Matsumoto *et al.*, 2019)。南港中央公園近辺では、コガネムシ科 Scarabaeidae Latreille, 1802のうち、シロテンハナムグリ *Protaetia orientalis* (Gory & Percheron, 1833) やシラホシハナムグリ *P. brevitarsis* (Lewis, 1879)、アオドウガネ *Anomala albopilosa* (Hope, 1839)が多く観察されているため、本種がこれらの幼虫に寄生している可能性が示唆されている

(Matsumoto *et al.*, 2019)。しかし、本種成虫が9月から11月にかけてセイタカアワダチソウ *Solidago altissima* L.、ヒナタイノコヅチ *Achyranthes bidentata* Blume var. *fauriei* (H. Lév. et Vaniot)、キツネノマゴ *Justicia procumbens* L. に訪花すること以外には、寄主やその他の生活史については未解明である (Matsumoto *et al.*, 2019)。

本研究では、実験室内でハナムグリ亜科 Cetoniinae Leach, 1815 のシロテンハナムグリ、シラホシハナムグリ、スジコガネ亜科 Rutelinae MacLeay, 1819 のアオドウガネの幼虫をそれぞれワタナベツチバチのメス成虫に与え、寄生（麻酔、産卵）の有無を調査した。さらに、本種の産卵から新成虫が出現するまでの発育過程を室内条件下で調べ、化性についても推定した。

材料と方法

2023年の9月から11月、2024年の10月から11月にかけて、大阪市住之江区の南港中央公園周辺において、セイタカアワダチソウに訪花しているワタナベツチバチのメス成虫を捕虫網で採集した。ツチバチの各成虫は、底にペーパータオルを敷いたプラスチック容器（直径 80 mm、高さ 80 mm）内に入れ、恒温条件下（室温 $20 \pm 1^\circ\text{C}$ 、明期 16 時間、暗期 8 時間）で管理した。餌として蜂蜜溶液（蜂蜜：水 = 1: 1）を染みこませた脱脂綿をプラスチックケース（直径 36 mm、高さ 11.8 mm）に入れて与えた。

ワタナベツチバチの寄主候補として、シロテンハナムグリ、シラホシハナムグリ、アオドウガネの3齢幼虫を実験に用いた。シロテンハナムグリについては、2022年の7月に大阪府和泉市で成虫を採集し、室内条件下で産卵させ、孵化幼虫を3齢まで育てた。シラホシハナムグリは、2022年の12月に兵庫県神戸市で幼虫を採集して室内条件下で羽化させ、同様に産卵させ、3齢まで育てた。アオドウガネは、2023年8月に大阪府和泉市、2024年7月に兵庫県神戸市で成虫を採集し、室内で産卵させ育てた。ハナムグリ類成虫から採卵するために、恒温条件下（室温 $25 \pm 1^\circ\text{C}$ 、明期 16 時間、暗期 8 時間）で、腐葉土を詰めたプラスチック容器（長さ 200 mm、幅 130 mm、高さ 130 mm）内に成虫を複数個体入れ産卵させた。ハナムグリ類成虫には高タンパクゼリー（KBファームプロゼリー、株式会社オレオス、埼玉、日本）を与えた。容器内に幼虫が確認できた後、成虫を容器から取り出し、幼虫を同じ容器内で飼育した。乾燥しすぎないように定期的に霧吹きで腐葉土を湿らせた。アオドウガネの成虫は、恒温条件下（室温 $28 \pm 1^\circ\text{C}$ 、明期 16 時間、暗期 8 時間）で、腐葉土を詰めたプラスチック容器（長さ 200 mm、幅 130 mm、高さ 130 mm）に入れ産卵させた。アオドウガネの成虫にはノブドウ *Ampelopsis glandulosa* var. *heterophylla* の新鮮な葉を与えた。その後の飼育方法はハナムグリ類と同様である。

ワタナベツチバチの寄主を調べるために2023年10月から11月、および2024年11月に以下の実験を行った。プラスチック容器（アリ観察ケース：長さ 150 mm、幅 15 mm、高さ 120 mm、ダイソー株式会社、広島、日本）に腐葉土を高さ 80 mm まで緩く詰めたものを実験に用いた。実験は 25°C の実験室内で行った。コガネムシ類各幼虫の重量と体長を測定した後、幼虫を容器内の土表面に設置した。コガネムシ類幼虫が完全に地中に潜ったことを確認した後、ピンセットを用いてワタナベツチバチのメス成虫1個体を容器内の土表面に置いた。その後、容器は恒温条件下（ $25 \pm 1^\circ\text{C}$ ）で暗所に静置した。容器に入れてから約 24 時間後、ツチバチのメス成虫を取り出し、体重と体長を測定した。次に、容

器内を確認し、コガネムシ幼虫が麻酔され産卵されていた場合、育室の長さおよび幅、卵の長径および産卵位置を記録した。産卵されていなかった場合、コガネムシ幼虫を容器から取り出して胸部腹面をピンセットで刺激した。幼虫が刺激に対して反応しなかった場合を麻酔状態にあると判断した。シロテンハナムグリ幼虫を14個体(体重: 1469.4–2764.1 mg、体長: 29.1–35.3 mm)、シラホシハナムグリ幼虫を15個体(体重: 1232.6–2850.9 mg、体長: 29.0–37.7 mm)、アオドウガネ幼虫を9個体(体重: 645.4–1468.4 mg、体長: 28.2–37.0 mm)用いた。実験においてコガネムシ類幼虫はすべて異なる個体を用いた。ワタナベツチバチは合計27個体(体重: 95.0–376.5 mg、体長: 17.5–26.3 mm)を実験に用い、同じ個体を複数回使用した。シロテンハナムグリとシラホシハナムグリについては2023年にもみ実験を行い、アオドウガネについては2023年と2024年に実験を行った。

産卵に成功した容器は25℃の暗所に静置した。産卵されてから卵が孵化するまでの日数を卵期間として、卵が孵化してから幼虫が繭を作り終えるまでの日数を幼虫期間として記録した。また、幼虫が繭を作り終えてから成虫が繭から脱出するまでの日数を繭期間として記録した。孵化直後の、寄主から露出している部分の幼虫の体長を初齢幼虫の体長として記録した。また、繭を作り始めた時の幼虫の体長を終齢幼虫の体長として記録した。繭が完成した後、繭の長さ・幅を測定した。幼虫が繭を作り終わった後、繭を容器から取り出してプラスチック容器(直径80 mm、高さ40 mm)に移し替えた。その後、繭の上に腐葉土を被せて室内の暗所で静置した。繭は12月から6月の間は20 ± 1℃で、それ以外の時期は25 ± 1℃の温度条件下に置いた。乾燥を防ぐために定期的に腐葉土を霧吹きで湿らせた。成虫が繭から脱出した場合、成虫の性別および体長を記録した。2023年の実験個体については、2024年11月になっても成虫が脱出してこなかった繭は、はさみで切った状態を確認した。卵、幼虫、繭のそれぞれの段階で死亡した個体の数を記録し、各期の生存率を算出した。

コガネムシ類幼虫の体長、ツチバチ類のメス成虫の体長、育室の長さ・幅、卵長径、幼虫の体長、繭の長さ・幅については、電子ノギス(CD-S15C; ミットヨ、神奈川、日本)を用いて0.01 mm単位で測定した。コガネムシ類幼虫およびワタナベツチバチのメス成虫の体重は電子天秤(PA64JP; オーハウス、東京、日本)を用いて0.1 mg単位で測定した。

結 果

ワタナベツチバチのメス成虫は、シロテンハナムグリおよびシラホシハナムグリの3齢幼虫を麻酔し、産卵していた。シロテンハナムグリ幼虫では14個体中8個体(57.1%)が麻酔され産卵されていた(図1)。また、5個体(35.7%)の幼虫は麻酔されていたが産卵はされていなかった(図1)。麻酔されなかった幼虫は1個体(7.1%)であった(図1)。シラホシハナムグリ幼虫では15個体中6個体(40.0%)が麻酔され産卵されていた(図1)。また、5個体の幼虫(33.3%)は麻酔されていたが産卵はされていなかった(図1)。麻酔されなかった幼虫は4個体(26.7%)であった(図1)。アオドウガネ幼虫は、実験に用いた9個体いずれについても麻酔も産卵もされなかった(図1)。

産卵に成功した個体は容器の底に育室を形成していた。寄主幼虫は体を伸ばした状態で育室内に置かれていた。育室の長さは平均30.8 mm、幅は14.8 mmであった(表1)。卵

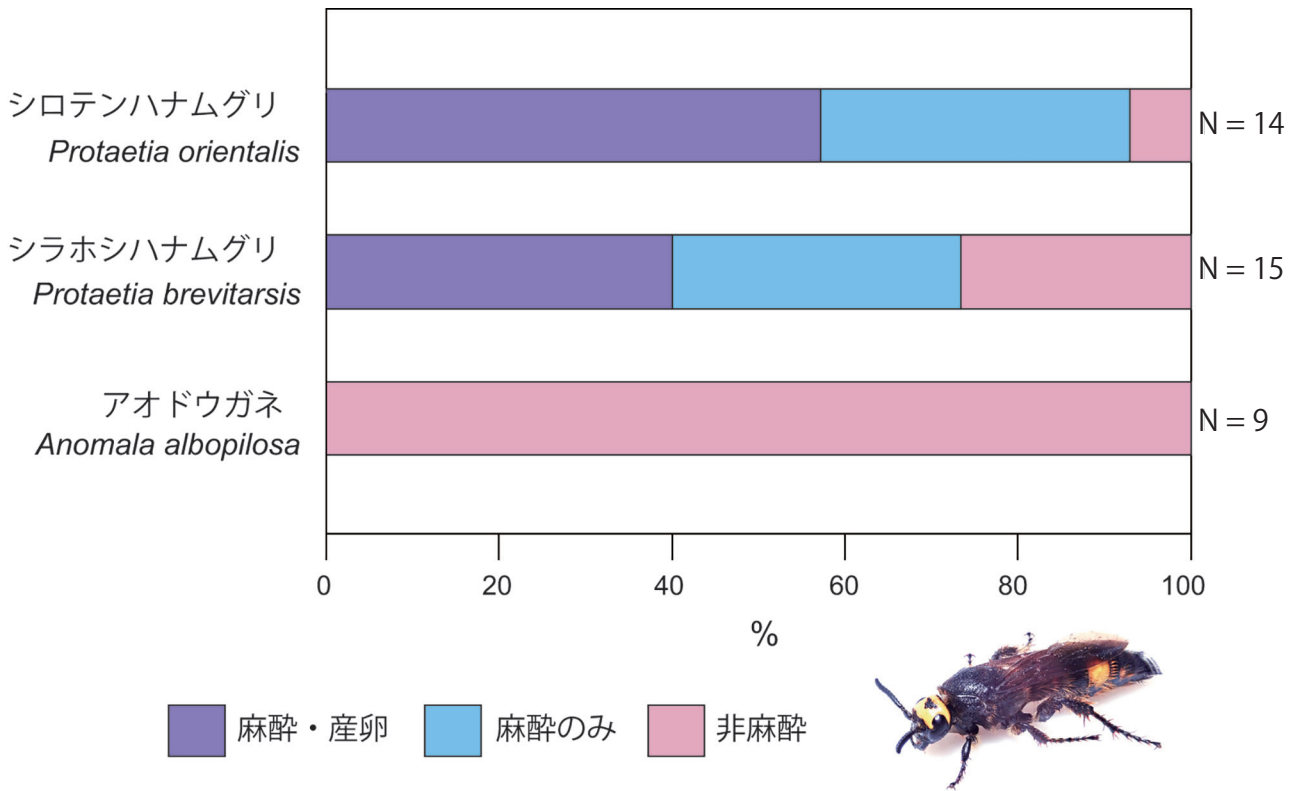


図 1. コガネムシ類 3 種の幼虫に対するワタナベツチバチの行動。

表 1. ハナムグリ類を寄主としたワタナベツチバチの各発育段階サイズ *

発育段階	サイズ	平均 ± 標本標準偏差 (最小-最大値)	N
卵	長径 (mm)	2.9 ± 0.3 (2.5-3.5)	14
育室	長さ (mm)	30.8 ± 2.8 (25.8-36.2)	14
	幅 (mm)	14.8 ± 2.2 (11.8-20.5)	14
初齢幼虫	体長 (mm)	3.5 ± 0.9 (2.9-5.4)	11
終齢幼虫	体長 (mm)	18.1 ± 2.0 (15.3-21.7)	11
繭	長さ (mm)	18.9 ± 1.5 (17.0-21.7)	11
	幅 (mm)	8.5 ± 1.1 (6.9-10.8)	11
新成虫オス	体長 (mm)	18.0 ± 1.4 (16.3-19.6)	6
新成虫メス	体長 (mm)	21.5 ± 1.2 (20.6-22.3)	2

* シロテンハナムグリおよびシラホシハナムグリの 3 齢幼虫を寄主として飼育した。

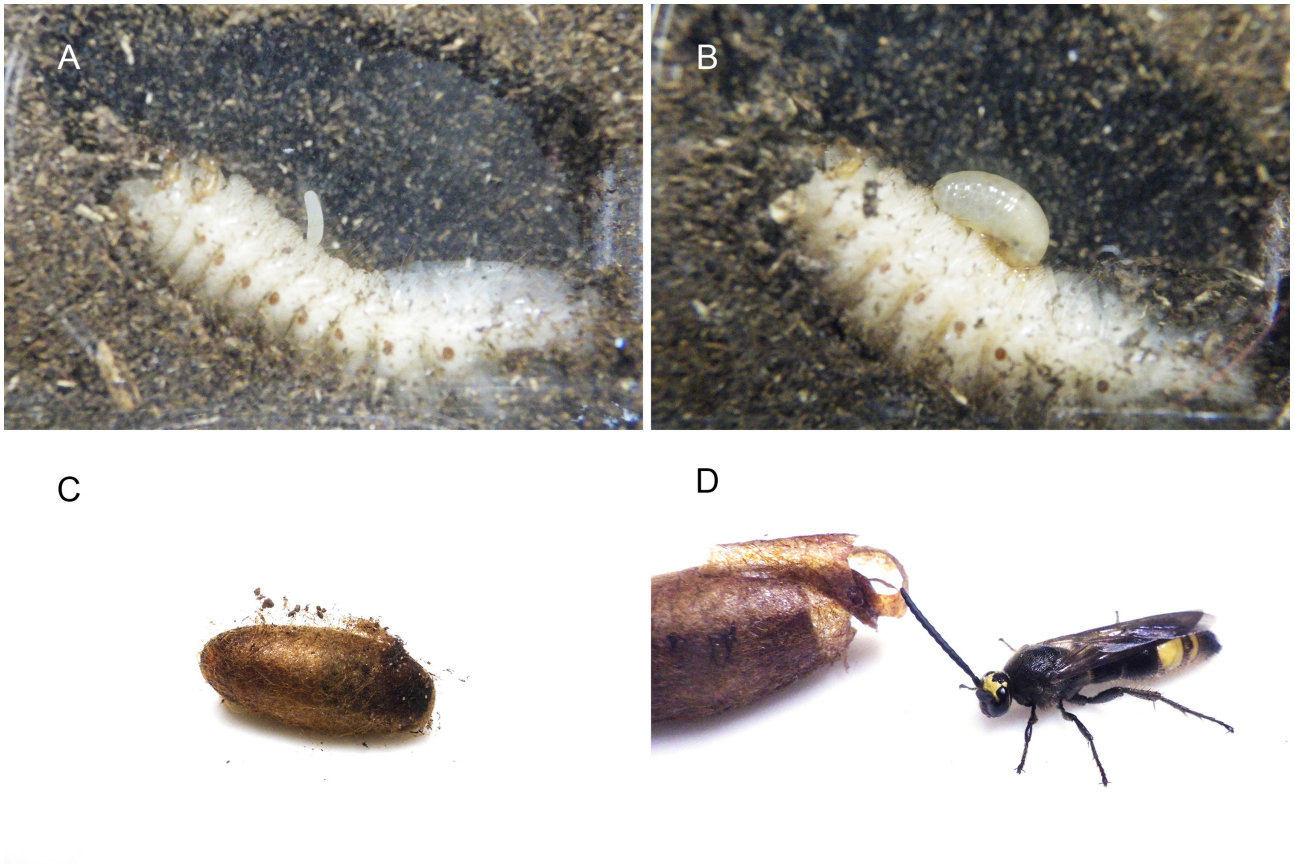


図2. ワタナベツチバチの発育段階. A: シロテンハナムグリの3 齢幼虫に産み付けられた卵; B: シロテンハナムグリの3 齢幼虫を摂食している幼虫; C: 繭; D: 繭から脱出した新成虫 (オス) .

は寄主幼虫の腹部第3 節または第4 節の腹面に1 卵が産み付けられていた。卵は白色のバナナ状で長径は平均 2.9 mm であった (図 2A; 表 1)。ワタナベツチバチの卵は産卵されてから約 3 日後に孵化した (表 2)。産卵された 14 個のうち、3 個の卵が孵化せず死亡した (表 3)。孵化直後の初齢幼虫の体長は平均 3.5 mm であった (表 1)。幼虫は乳白色の蛆虫状で (図 2B)、頭部をハナムグリ幼虫体内に入れて摂食し (図 2B)、最終的に寄主全体を食べ終わった後に繭を形成した。繭を紡ぎ始めた終齢幼虫の体長は平均 18.1 mm であった (表 1)。孵化から繭が完成するまでの幼虫期間は約 6 日で (表 2)、その間に死亡した個体はいなかった (表 3)。繭は茶褐色の葉巻型であり (図 2C)、長さは平均 18.9 mm、幅は 8.5 mm であった (表 1)。繭の状態を冬を越し、新成虫は 2024 年 9 月 27 日から 10 月 11 日にかけて繭から脱出した。オスはメスよりも早く繭から脱出する傾向があった。繭が完成してから新成虫が脱出するまでに要した時間は 324 日から 348 日であった (図 2D、表 2)。産卵から新成虫が繭から脱出するまで 333 日から 357 日を要した (表 2)。

繭から脱出した新成虫のうちオスは 6 個体、メスは 2 個体であった。オスの新成虫の体長は平均 18.0 mm、メスは 21.5 mm であった (表 1)。11 個体の繭のうち、3 個体が繭から脱出せず死亡した。死亡した個体のうち、1 個体は前蛹の状態、2 個体は成虫の状態であった。繭内で死亡していた成虫はいずれもオスであった。卵期、幼虫期、繭期における生存率はそれぞれ 78.6%、100.0%、72.7% であった (表 3)。

表 2. ハナムグリ類を寄主としたワタナベツチバチの発育期間 *

発育段階	日数		N
	平均 ± 標本標準偏差	中央値 (最小–最大値)	
卵期 (産卵–孵化)	3.1 ± 0.5	3 (2–4)	11
幼虫期 (孵化–繭完成)	5.9 ± 0.5	6 (5–7)	11
繭期 (繭完成–新成虫繭脱出)	337.0 ± 8.3	339 (324–348)	11
合計 (産卵–新成虫繭脱出)	346.0 ± 7.8	348 (333–357)	8

* シロテンハナムグリおよびシラホシハナムグリの3 齢幼虫を寄主として飼育した。

表 3. ハナムグリ類を寄主としたワタナベツチバチの発育段階ごとの生存率 *

発育段階	観察個体数	死亡個体数	生存率 (%)
卵期	14	3	78.6
幼虫期	11	0	100.0
繭期	11	3	72.7
新成虫	8		

* シロテンハナムグリおよびシラホシハナムグリの3 齢幼虫を寄主として飼育した。

考 察

本研究により、ワタナベツチバチはハナムグリ亜科の3 齢幼虫に捕食寄生することが明らかになった。ただし、麻酔されたハナムグリ幼虫の半数近くは産卵されなかった (図 1)。これは、実験に用いたワタナベツチバチのメス成虫の卵が成熟していなかったことが考えられるが、麻酔後に宿主摂食 (host feeding) のみを行った可能性もある (Noort & Broad, 2024)。また、ハナムグリ幼虫のサイズが産卵に適していなかったことも考えられる。一方、ワタナベツチバチはスジコガネ亜科のアオドウガネの3 齢幼虫には麻酔も産卵もしなかった。これは、スジコガネ亜科やアオドウガネの幼虫は寄主として不適なため攻撃していないと考えられるが、アオドウガネ幼虫の防衛行動により麻酔に失敗した可能性もある。ワタナベツチバチの寄主利用範囲を明らかにするためには、さらなる観察・実験が必要である。

本研究では、ワタナベツチバチの幼虫は寄主を食べ終えた後に繭を形成して越冬し、羽化時期は不明だが、翌年の9月から10月頃に新成虫が繭から脱出することが観察された。これは9月から11月のみに成虫が出現するという野外での報告と一致する (Matsumoto *et al.*, 2019)。また、産卵から新成虫の繭脱出までに約348日を要した (表 2)。つまり、本種は年1化性である可能性が極めて高い。

ワタナベツチバチは野外ではオスもメスもセイタカアワダチソウに訪花するが、メス成

虫が相対的に多く採集されている (Matsumoto *et al.*, 2019)。しかし、本実験では、羽化した成虫の性比はオスに偏っていた (オス : メス = 3 : 1)。実験に用いたメス成虫に未交尾の個体が多かったこと、あるいは卵や幼虫、蛹の死亡率がオスよりもメスで高かったことが考えられる。また、実験に使用した一部のハナムグリ類幼虫の体サイズが小型であったため、メス成虫がオス (となる卵) を産んだ可能性もある。実際に、ヒメハラナガツチバチを用いた実験では、小型の寄主ほどオスが羽化してくる傾向が示唆されている (井上, 2007)。

ワタナベツチバチが定着した地点周辺では、シロテンハナムグリやシラホシハナムグリ、コアオハナムグリ *Gametis jucunda* (Faldermann, 1835)、オキナワコアオハナムグリ *G. forticula* (Janson, 1881)、アオドウガネなどのコガネムシ類が観察されている (Matsumoto *et al.*, 2019)。ハナムグリ亜科であるコアオハナムグリやオキナワコアオハナムグリは、シロテンハナムグリやシラホシハナムグリよりも体サイズはかなり小さい。本研究ではコアオハナムグリやオキナワコアオハナムグリ幼虫を用いた実験は行っていないが、1個体の寄主で成長する必要のあるワタナベツチバチにとって、寄主のサイズとして適していない可能性が高い。したがって、定着地においては、ワタナベツチバチは主にシロテンハナムグリやシラホシハナムグリの幼虫を利用していると推定される。また、シロテンハナムグリやシラホシハナムグリは、ワタナベツチバチの原産地である中国や台湾にも分布していることから (酒井・藤岡, 2007)、原産地においてもワタナベツチバチがシロテンハナムグリ属 *Protaetia* Burmeister, 1842 の幼虫を寄主として利用していると考えられる。シロテンハナムグリは本州以南の都市部を含めた多様な環境に多数生息するため (飯嶋・竹内, 2007; 酒井・藤岡, 2007)、ワタナベツチバチが今後日本国内で分布を拡大することが予想される。日本在来のツチバチ類において、キオビツチバチ *Scolia oculata* (Matsumura, 1911) がハナムグリ類幼虫を寄主として利用することが知られており (藤丸, 2023)、ワタナベツチバチと在来ツチバチ類との競合関係についての解明も今後の研究課題として挙げられるだろう。

謝 辞

本研究について、松本吏樹郎博士に有益な助言をいただいた。また、中森大地氏、山下躍宇氏にはハナムグリ類の採集に、角うらん氏にはアオドウガネの採集に協力していただいた。心より感謝申し上げます。

引用文献

- Clausen, C., T. Gardner & K. Sato, 1932. Biology of some Japanese and Chosenese grub parasites (Scoliidae). *United States Department of Agriculture Technical Bulletin*, (308): 1–26.
- Fabre, J.-H., 1886. *Souvenirs entomologiques*. Troisième série. 433 pp. Delagrave, Paris.
- Fabre, J.-H., 1891. *Souvenirs entomologiques*. Quatrième série. 327 pp. Delagrave, Paris.
- 藤丸篤夫, 2023. ハチハンドブック増補改訂版. 120 pp., 文一総合出版, 東京.
- 飯嶋一浩・竹内将俊, 2007. シロテンハナムグリの関東地方における生活史ならびに日本における餌資源植物. *東京農業大学農学集報*, **52**: 89–96.
- 井上牧子, 2007. ヒメハラナガツチバチにおけるホストサイズと性の分配の関係. *ヒューマ*

ンサイエンス, (10): 113–117.

- Inoue, M. & T. Endo, 2008. Below-ground host location by *Campsomeriella annulata* (Hymenoptera: Scoliidae), a parasitoid of scarabaeid grubs. *Journal of Ethology*, **26**: 43–50.
- 岩田久二雄, 1971. 本能の進化: 蜂の比較習性学的研究. 503 pp., 眞野書店, 大和.
- Matsumoto, R., M. Hasegawa & A. Ichikawa, 2019. *Scolia watanabei*, an adventive wasp newly discovered in Japan (Hymenoptera, Scoliidae, Scoliinae). *Bulletin of the Osaka Museum of Natural History*, (73): 1–5.
- Miyagi, I., 1960. Ecological studies of some Japanese species of Scoliidae (Hymenoptera). *Transactions of the Shikoku Entomological Society*, **6**: 104–120.
- Nastasi, L. F., R. L. Kresslein, K. O. Fowler & S. R. Fernández Flores, 2023. Biodiversity & classification of wasps 1st edition. 500 pp. Online publication. <https://doi.org/10.26207/ax00-rk88>
- Noort, S. V. & G. Broad, 2024. Wasps of the world: A guide to every family. 240 pp. Princeton University Press, New Jersey.
- O'Neill, K. M., 2001. Solitary wasps: Behavior and natural history. 424 pp. Cornell University Press, Ithaca.
- 酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説第2巻食葉群 I. 173 pp., 昆虫文献六本脚, 東京.
- 谷 聡一郎・上野高敏, 2014. ヒメハラナガツチバチ *Campsomeris annulata* の簡易飼育法と基礎生態. 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌, **69**: 55–62.
- Vereecken, N. & J. Carriere, 2003. Contribution to the ethological study of the French scoliid wasp (scarab-hunter wasp) *Megascolia maculata flavifrons* (F., 1775) (Hymenoptera, Scoliidae) in the French Mediterranean area. *Notes fauniques de Gembloux*, (53): 71–80.

杉浦真治: sugiura.shinji@gmail.com

群馬県みなかみ町におけるフクイアナバチの記録

上森教慈

(〒305-8687 茨城県つくば市松の里1 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所)

New record of *Sphex inusitatus* Yasumatsu, 1935 (Hymenoptera: Sphecidae) in Minakami town, Gunma Prefecture, Japan

Kazushige Uemori

(Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan)

緒言

フクイアナバチ *Sphex inusitatus* Yasumatsu, 1935 は西日本を中心に記録があり、ほとんどの地域でレッドリストに掲載されているまれな種である。日本海側では西は長崎県から東は新潟県まで広く分布記録がある。分布東限の新潟県内では新潟市、下田村(現三条市)、湯沢町、能生町(現糸魚川市)、柏崎市で得られている(伊丹, 2004; 櫻井, 2006; 瀬谷, 2015; 春日・真嶋, 2017)。一方、太平洋側は三重県まで記録があるが(例えば、松浦・中西, 2003; 西田, 2012)、これより東での記録はないようである。関東地方でも記録がなかったようだが、今回発見に至ったため報告する。標本は筆者が保管している。

結果と考察

フクイアナバチ *Sphex inusitatus* Yasumatsu, 1935

1 F, みなかみ町須川, 9. VIII. 2025 (目撃, 図1); 1 F, 同所, 31. VIII. 2025 (図2)。

8月9日に目撃した個体は町中のヤブカラシを訪花していた。発見した際は観光中に現れたため網を持っておらず、とっさに携帯電話のカメラで撮影したため不鮮明な写真(図1)しかないが、前伸腹節の毛は黄色くなく、顔面の毛が黒色であることを確認しており、本種で間違いないと思われる。一度ヤブカラシの繁茂する塀の裏手に消えていき、再び裏手から現れたため、この付近で営巣しているのかもしれない。8月31日に再び訪れた際に採集できたが、前回目撃した個体と同一かは不明である。このヤブカラシは前述のアシナガバチ類、スズメバチ類も多く訪花しており、当地の狩りバチの蜜源として重要な機能を果たしていると考えられた。

採集地のみなかみ町は、既産地の新潟県湯沢町と谷川連峰を挟んで隣接している地域である。分布記録のある北陸地方に隣接する群馬県内の他地域や、長野県、岐阜県の北部地域でも本種が見つかる可能性がある。また、みなかみ町の採集地は標高500 m程度の地点であり、湯沢町の既産地は300 mから700 m程度の地点と思われ、両地域とも人里に近い環境で採集されている。近年こうした低標高地域において、ニトベギングチなどまれとされてきた種の新産地が発見されている(例えば、西谷ら, 2019; 河野・藤田, 2024)。既産地周辺の低標高地域の調査により、新たな分布地域が発見される可能性がある。



図1: ヤブカラシを訪花するフクイアナバチ. 図2: 群馬県みなかみ町産フクイアナバチ, メス.

引用文献

- 伊丹英雄, 2004. フクイアナバチ *Sphex inustatus fukuianus* Tsuneki の記録. 越佐昆虫同好会報, (91): 50–51.
- 春日拓実・真嶋 豪, 2017. 柏崎市でフクイアナバチを採集. 越佐昆虫同好会報, (116): 80.
- 河野太祐・藤田将平, 2023. 佐賀県初記録のニトベギングチ (ハチ目: ギングチバチ科). すがれおい, (4): 34–36.
- 松浦 誠・中西元男, 2003. フクイアナバチ三重県に産す. 昆虫と自然, **38**(2): 10.
- 西田悦造, 2012. 三重県におけるフクイアナバチの記録. ひらくら, **56**(3): 74–75.
- 西谷光平・米田洋斗・久末遊, 2019. 福岡県におけるニトベギングチ *Ectemnius nitobei* の記録. *Pulex*, (98): 797.
- 櫻井 精, 2006. 備忘データ No. 5 ハチ類の記録 (1). 越佐昆虫同好会報, (96): 59–63.
- 瀬谷幸次郎, 2015. フクイアナバチの採集記録. 越佐昆虫同好会報, (112): 42.

上森教慈: uemori_kazushige510@ffpri.go.jp

シロウズエンモンバチとメスアカマエダテバチの石垣島からの記録

上森教慈^{1,2}

(¹ 〒811-2415 福岡県糟屋郡篠栗町津波黒394 九州大学農学部流域環境制御学教室; ² 〒305-8687 茨城県つくば市松の里1 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所)

New records of *Stigmus shirouzui* Tsuneki, 1964 (Hymenoptera: Crabronidae) and *Psenulus okinawanus* Tsuneki, 1990 in Ishigaki island, Japan

Kazushige Uemori^{1,2}

(¹ Forest Ecosystem Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Tsubakuro 394, Sasaguri-machi, Kasuya-gun, Fukuoka, 811-2415, Japan; ² Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan)

緒言

シロウズエンモンバチ *Stigmus shirouzui* Tsuneki, 1964 は奄美大島をタイプ産地として記載された種で(Tsuneki, 1964)、台湾産の個体は *S. s. alishanus* Tsuneki, 1971 とされる(Tsuneki, 1971)。国内ではほかに、東京都(高橋, 2003; 南部, 2005, 2006; 南部・清水, 2000, ヤマトエンモンバチとして; 寺山, 2013) や兵庫県(米田, 2024) で記録されている。日本産の同属多種とは、オスでは頭盾に銀白毛を欠くこと、メスでは頭盾前縁が1対の三角形形状にとがり、突起間は浅いV字状にへこむこと、前縁部の突出は弱いことなどで区別される。

メスアカマエダテバチ *Psenulus okinawanus* Tsuneki, 1990 は沖縄島を模式産地として記載された種である(Tsuneki, 1990)。マエダテバチの仲間では大型で8 mm 以上あり、前胸背板背面に後方を向く長い銀色毛が密生し体表面は完全に隠れること、メスの腹部は第1節を除き赤褐色であること、オスは黒色で中脚は褐色であることが特徴である(寺山・須田, 2016)。本種は奄美大島、沖縄島、西表島から記録がある(寺山, 2020)。

筆者は沖縄県石垣市石垣島においてこれらの種を採集しているので報告する。標本は筆者が保管している。

結果と考察

シロウズエンモンバチ *Stigmus shirouzui* Tsuneki, 1964

1 F & 1 M (図 1AB), 26. III. 2020. 沖縄県石垣市崎枝.

メスアカマエダテバチ *Psenulus okinawanus* Tsuneki, 1990

1 M (図 2), 30. III. 2020. 沖縄県石垣市石垣.

シロウズエンモンバチについて、台湾産の個体は奄美大島産の個体に比べ、オスでは(1)脚(特に腿節)はより広く黒い、(2)腹柄はより細く長い、(3)頭盾中央より強く隆起する、

¹ 研究当時の所属 previous affiliation; ² 現在の所属 current affiliation

(4) 触角第3節は第4節に比べ短い(奄美大島産では両節の長さは同じ)という部分で区別される(Tsuneki, 1971)。確認できた個体数が少ないため、今回は亜種の判断は行わないが、今回得られた個体の触角第3節と第4節はほぼ同じ長さであったことから、奄美大島の個体群に近い特徴をもつといえる。

今回報告したシロウズエンモンバチは照葉樹林の林床をスウィープすることで得られた。東京都の個体は市街地に局所的に残された緑地で記録されており(高橋, 2003; 南部, 2005, 2006; 南部・清水, 2000)、兵庫県の個体は郊外の神楽殿の柱や梁の周囲で記録されている(米田, 2024)。米田(2024)でも本種が同属多種に比べて低標高に分布する種である可能性が指摘されており、今回採集された環境を踏まえると、温暖な照葉樹林帯に分布する種の可能性が考えられる。

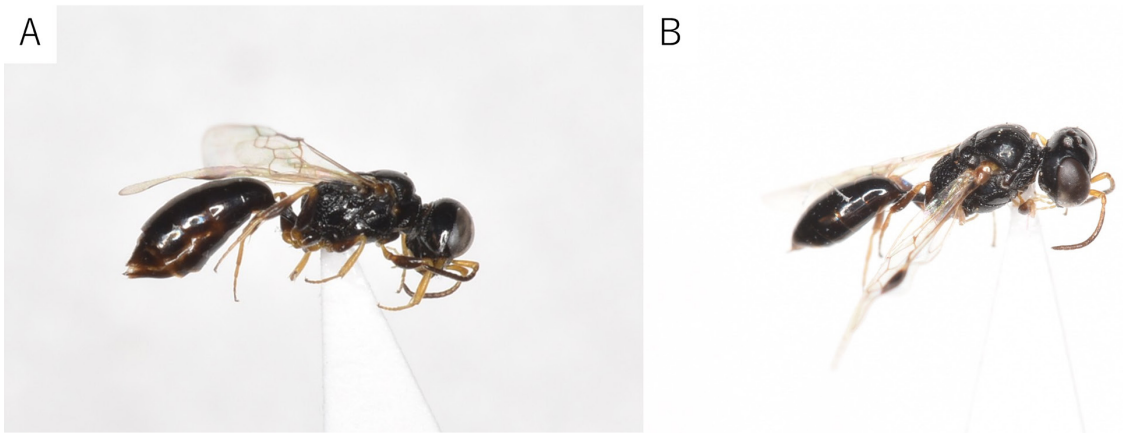


図1. 石垣島産シロウズエンモンバチ. A: メス; B: オス.



図2. 石垣島産メスアカマエダテバチ, オス.

謝 辞

採集に同行いただいた外村俊輔氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 米田洋斗, 2024. 関西地方で得られた記録の少ない有剣類4種. *すがれおい*, (6): 114–117.
- 南部敏明・清水 晃, 2000. 皇居の有剣類. *国立科学博物館専報*, (36): 335–354.
- 南部敏明, 2005. 赤坂御用地の有剣類. *国立科学博物館専報*, (39): 249–259.
- 南部敏明, 2006. 皇居の有剣類モニタリング調査. *国立科学博物館専報*, (43): 241–254.
- 高橋秀男, 2003. 東京都井の頭公園附近の蜂 II アナバチ類. *埼玉動物研通信*, (42): 26–29.
- Tsuneki, K. 1964. On some aculeate Hymenoptera of Japan. *Etizenia*, 6: 1–7.
- Tsuneki, K. 1971. Studies on the Formosan Sphecidae (XIII). A supplement to the subfamily Pemphredoninae (Hym.) with a key to the Formosan species. *Etizenia*, 57: 1–21
- Tsuneki, K. 1990. A new species of *Passaloecus* from Japan, with its biology (Hym. Pemphredonidae). *Special Publications of the Japan Hymenopterists Association*, (36): 102–105.
- 寺山 守, 2020. ギングチバチ科. *日本昆虫目録編集委員会編, 2020. 日本昆虫目録. 第9巻 膜翅目 (第3部 細腰亜目有剣類)*. pp. 206–276. 日本昆虫学会, 京都.
- 寺山 守・須田博久編著, 2016. *日本産有剣ハチ類図鑑*. i–xxxvi+735 pp., 東海大学出版部, 平塚.

上森教慈: uemori_kazushige510@ffpri.go.jp

マメギングチバチを群馬県で採集

高橋秀男
(東京都東久留米市)

Entomognathus brevis (Vander Linden, 1829) (Crabronidae) newly recorded in Gunma Prefecture, Japan

Hideo Takahashi
(Higashi-kurume, Tokyo, Japan)

緒 言

マメギングチバチ *Entomognathus brevis* (Vander Linden, 1829) は国内では北海道 (Tsuneki, 1947) と青森 (山田, 1999)、新潟 (常木・馬場, 1970)、長野 (羽田, 1968)、岐阜 (山田, 1974)、福井 (田埜, 1973) の各県から記録されている。本種を群馬県で採集したので報告する。

結 果

1 F (図 1A, B), 13. VIII. 2025, 群馬県吾妻郡長野原町, 高橋採集・保管.

ウドの花に来ていた。文献の記録によると本種は、北海道では7月5日～9月22日、本州では7月30日～8月21日に採集されている。本種は、砂地や砂利地に営巣しハムシ科のノミハムシ亜科 (福井県ではツブノミハムシ *Apthoma perminuta* Balym 1875) やツツハムシ亜科の小型種の成虫を獲物としている (Lomholdt, 1984)。



図 1. 群馬県産マメギングチバチ — A: 側方から見た全形; B: 前方から見た頭部.

引用文献

- 羽田義任, 1968. 長野県伊那地方のアナバチ科. 生物研究, **12**(3/4): 55–57.
- Lomholdt, O., 1984. The Sphecidae (Hymenoptera) of Fennoscandia and Denmark (2nd edition). *Fauna Entomologica Scandinavica*, **4**: 1–452.
- 田埜 正, 1973. マメギングチバチの習性. 生物研究, **17**(3/4): 50–54.
- Tsuneki, K., 1947. On the wasps of the genus *Crabro* s. l. from Hokkaido, with descriptions of new species and subspecies (Hymenoptera). *Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Ser. 6, Zoology*, **9**(4): 397–435.
- 常木勝次・馬場金太郎, 1970. 新潟県産アナバチ科の記録. 越佐昆虫同好会報, (40): 2–6.
- 山田晴昭, 1974. 木曾及び奥飛騨のアナバチ類. 蜂友通信, (1): 2–4.
- 山田雅輝, 1999. 青森県の有剣蜂相 7. アナバチ科の種類と分布 (2). *Celastrina*, (34): 27–44.

高橋秀男 : meitingmeiyue3@gmail.com

鹿児島市北部の地表性アリ類の記録

原田 豊
(鹿児島県日置市)

Records of ground-dwelling ants from the northern area of Kagoshima-shi,
Kagoshima-ken, southern Kyushu, Japan

Yutaka Harada
(Hioki-shi, Kagoshima, Japan)

Abstract. Forty-eight species of ground-dwelling ants are recorded from the northern area of Kagoshima-shi, Kagoshima-ken, southern Kyushu. Ants were manually sampled at ground level. Sampling was conducted at 13 survey sites located in parks (7), mountainous areas (3), open spaces in public facilities, temple and shrine (3). A total of 48 species belonging to 24 genera in 4 subfamilies were collected. The most frequently sampled species were *Formica hayashi* and *Nylanderia flavipes* (13 sites for each), followed by *Pristomyrmex punctatus* (11), *Crematogaster osakensis*, *Monomorium chinense* and *Pheidole nodus* (10 for each). Nine (18.8%) of the 48 species collected in this survey were alien ants, which were found at as many as 11 (84.6%) sampling sites. Among the alien species, *M. chinense* was most frequently sampled (10 sites), followed by *Technomyrmex brunneus* (4), *N. amia*-complex (3). Eight alien species, *Ochetellus glaber*, *Tapinoma melanocephalum*, *T. brunneus*, *N. amia*-complex, *Cardiocondyla itsukii*, *Pheidole fervens*, *Ph. indica*, *Tetramorium bicarinatum* are recorded for the first time from the northern area of Kagoshima-shi. Combining the results of the previous and present studies, the total number of ant species from this area has amounted to 67 species.

緒 言

鹿児島市北部は、標高約 550 m の牟礼岡を頂上として、東南方向に緩やかに傾斜した地形であり（鹿児島県高校地理部会，1998）、ほとんどの地域が吉野大地上に位置し、特に冬季の環境は南部の平地域とは異なっていると思われる。鹿児島湾側は始良カルデラの陥没による数十メートルの断崖を形成する。これまで鹿児島市中南部におけるアリ類の調査は、市街地の公園（Iwata *et al.*, 2005; 中野，2010; 原田ほか，2010; 松村・山根，2012 など）、港湾（原田ほか，2013）、城山（原田ほか，2021）、鹿児島大学構内（柚木，2001; 福元，2009）などで行われてきた。一方、鹿児島市北部では、重点的な調査として鹿児島大学寺山自然教育研究施設（東郷，1998; 川原ほか，1999）と八重山公園（原田，2025）の2か所で行われたに過ぎない。

今回、鹿児島市北部において、主に地表性アリ類のアリ相の一端を明らかにするとともに、外来アリの分布状況を確認するために調査を行った。

材料と方法

調査地：調査は、大まかに鹿児島市の北部に位置する吉野、西伊敷、伊敷台、上町、吉田、郡山を鹿児島市北部域（吉野圏域）として、公園、公共施設、寺院・神社など13か所で実施した（図1）。調査地は、植生、人為的影響などさまざまな環境の違いがみられた（図2）。標高350 m以上の調査地は、八重山（430–670 m）、南泉院（380 m）、花尾山山頂（540 m）、青少年研修センター（370 m）、三重嶽山頂（480 m）、牟礼岡中央公園（360 m）の6か所であった。

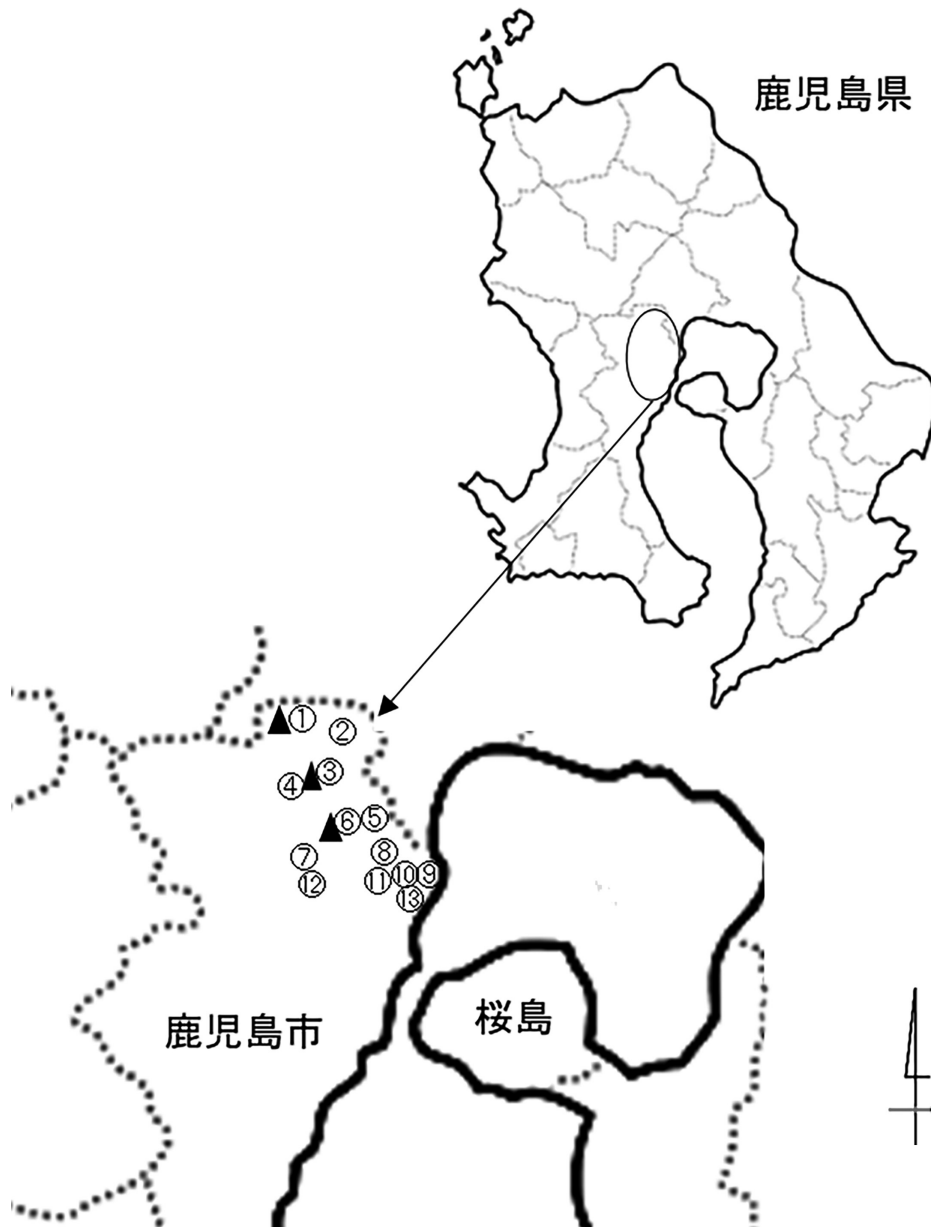


図1. 調査地.

- ① 八重山 ② 南泉院 ③ 花尾山山頂 ④ 花尾神社 ⑤ 青少年研修センター ⑥ 三重嶽山頂
 ⑦ 郡山総合運動公園 ⑧ 牟礼岡中央公園 ⑨ 寺山公園 ⑩ 寺山ふれあい公園 ⑪ 下田公園
 ⑫ かごしま健康の森公園 ⑬ 吉野公園

Fig. 1. Sampling site.

- ① Yae-yama ② Nansen-in temple ③ Summit of Hanao-san ④ Hanao shrine ⑤ Seishonen kenshu center ⑥ Summit of Mie-dake ⑦ Koriyama comprehensive sport park ⑧ Mureiokachuo park ⑨ Terayama park ⑩ Terayama fureai park ⑪ Shimoda park ⑫ Kagoshima kenkonomori park ⑬ Yoshino park

調査方法：すべての調査地において、地表、植物体上など見つけ採りによってアリの種類ごとに数個体ずつピンセットを使って採集した。調査地によっては、石下や倒木下、落葉内や落葉下の表層土内でも採集を行った。調査はすべて1人で実施し、調査地の状況によって1回の調査で約60分間から約180分間行った。また、採集したアリは80%エタノールに液浸して持ち帰った。持ち帰ったアリは三角台紙に貼付して乾燥標本を作製後、実体顕微鏡を使って種の同定を行った。アリの種の同定は、寺山ほか(2014)及び山根ほか(2010)に従い、種の配列は、亜科、属、亜属、種小名のそれぞれについてアルファベット順とした。

調査期間：調査は、2025年4月から5月に実施した。調査日及び調査地は次の通りである。4月21日 吉野公園(北側半分)、4月24日 吉野公園(南側半分)・寺山公園・寺山ふれあい公園、5月1日 牟礼岡中央公園・下田公園・青少年研修センター、5月13日 かがしま健康の森公園、5月14日 花尾神社・花尾山山頂、5月20日 郡山総合運動公園・三重嶽山頂、5月26日 南泉院・八重山。なお、青少年研修センター・かがしま健康の森公園・吉野公園では、施設内にある照葉樹二次林内の遊歩道でも採集を行った。また、八重山では、中腹から山頂へ続く自然遊歩道沿い及び山頂で採集を行った。



図2. 調査地の生息環境。

A 八重山 B 花尾神社 C かがしま健康の森公園 D 吉野公園。

Fig. 2. Habitats of sampling sites.

A Yae-yama B Hanao shrine C Kagoshima kenkonomori park D Yoshino park.

今回の調査において鹿児島市北部で採集されたアリ類の標本記録の略語・用語は下記の通りである。

性・カースト: dq: dealate queen (脱翅女王)、w: worker (働きアリ)、minor: minor worker (小型働きアリ)、major: major worker (大型働きアリ)。

調査地: YY: 八重山、NT: 南泉院、HSS: 花尾山山頂、HS: 花尾神社、SK: 青少年研修センター、MS: 三重嶽山頂、KP: 郡山総合運動公園、MP: 牟礼岡中央公園、TP: 寺山公園、TF: 寺山ふれあい公園、SP: 下田公園、KK: かごしま健康の森公園、YP: 吉野公園。

なお、採集者はすべて筆者(Yutaka Harada)で、すべての標本は筆者所蔵である。アリの同定は筆者が行ったが、同定困難なムネボソアリ属のアリなど数種については山根正気氏に同定確認をしていただいた。

結 果

今回の調査で、鹿児島市北部の13か所の調査地から4亜科24属48種のアリが採集された(表1)。八重山では26種と最も多くのアリが採集され、かごしま健康の森公園(25種)、吉野公園(22種)、南泉院(20種)が続いた。一方、調査地がごく限定的な花尾山山頂と三重嶽山頂はそれぞれ10種と8種、調査地全体の環境の多様性が乏しい寺山ふれあい公園では9種で、これら3か所の調査地のみが10種以下であった。すべての調査地の種数の平均は16.0であった。

13か所すべての調査地で採集されたアリは、ハヤシクロヤマアリとアメイロアリの2種で、トビイロケアリ(12か所)、アミメアリ(11か所)、キイロシリアゲアリ・クロヒメアリ・オオズアリ(それぞれ10か所)が続いた(表1)。ヒラズオオアリ、ホソウメマツオオアリなど14種(29.2%)は1か所のみでみられた。主に秋季に活動すると考えられているクロナガアリが、八重山山頂(5月26日)と下田公園(5月1日)の2か所(それぞれ働きアリ1個体)で採集された。

今回採集された48種のアリのうち、ルリアリ、ケブカアメイロアリ、トゲハダカアリなど9種(18.8%)が外来アリであった(表1)。調査を行った13か所のうち10か所(76.9%)で外来アリがみられた。かごしま健康の森公園では、採集された25種のうち6種(24.0%)が、吉野公園では22種のうち4種(18.2%)が外来アリであった。最も多くのアリが採集された八重山では26種のうち2種(7.7%)のみであった。最も多くの調査地で採集された外来アリはクロヒメアリ(10か所)で、アシジロヒラフシアリ(4)、ケブカアメイロアリ(3)が続いた。鹿児島市中南部の市街地でよく目にするアシジロヒラフシアリとケブカアメイロアリ、クロヒメアリの3種がともに確認された調査地は、南部のかごしま健康の森公園と吉野公園の2か所であった。なお、外来アリの定義は定まっておらず、さまざまな問題があるが、本研究では寺山ほか(2014)がリストアップしたものに従った。

標本記録

Ochetellus glaber (Mayr, 1862) ルリアリ

1w (1), HS, 14.v.2025; 2w (2), MP, 1.v.2025.

Tapinoma melanocephalum (Fabricius, 1793) アワテコヌカアリ

1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Technomyrmex brunneus Forel, 1895 アシジロヒラフシアリ

1w (1), HS, 14.v.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Camponotus japonicus Mayr, 1866 クロオオアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MS, 20.v.2025; 1w (1), KP, same date; 1w (1), TF, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YY, 26.v.2025.

Camponotus bishamon Terayama, 1999 ホソウメマツオオアリ

1w (1), YP, 21.iv.2025.

Camponotus nawai Ito, 1914 ナワヨツボシオオアリ

2w (2), YY, 26.v.2025; 2w (2), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 2w (2), SK, 1.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025.

Camponotus vitiosus Smith, 1874 ウメマツオオアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 2w (2), HS, 14.v.2025; 1w (1), KP, 20.v.2025; 1w (1), MP, 1.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 2w (2), TF, same date; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 7w (7), YP, 21.iv.2025.

Colobopsis nipponica (Wheeler, 1928) ヒラズオオアリ

1w (1), KP, 20.v.2025.

Formica hayashi Terayama & Hashimoto, 1996 ハヤシクロヤマアリ

2w (2), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), HS, same date; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MS, 20.v.2025; 1w (1), KP, same date; 1w (1), MP, 1.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), TF, same date; 2w (2), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Formica japonica Motschoulsky, 1866-complex ミナミクロヤマアリ※

1w (1), KP, 1.v.2025; 1w (1), MP, same date; 1w (1), TF, 24.iv.2025.

Lasius hayashi Yamauchi & Hayashida, 1970 ハヤシケアリ

2w (2), YY, 26.v.2025.

Lasius japonicus Santschi, 1941 トビイロケアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), HS, same date; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MS, 20.v.2025; 1w (1), KP, same date; 1w (1), MP, 1.v.2025; 2w (2), TF, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 2w (2), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

表1. 鹿児島市北部で採集されたアリ
Table 1. Ants collected from the northern area of Kagoshima-shi

種名\地名略記	YY	NT	HSS	HS	SK	MS	KP
カタアリ亜科							
ルリアリ※				○			
アワテコヌカアリ※							
アシジロヒラフシアリ※				○			
ヤマアリ亜科							
クロオオアリ	○				○	○	○
ホソウメマツオオアリ							
ナワヨツボシオオアリ	○	○	○		○		
ウメマツオオアリ	○	○		○			○
ヒラズオオアリ							○
ハヤシクロヤマアリ	○	○	○	○	○	○	○
ミナミクロヤマアリ							○
トビイロケアリ	○	○	○	○	○	○	○
ハヤシケアリ	○						
ヒラアシクサアリ	○						
ケブカアメイロアリ※							○
アメイロアリ	○	○	○	○	○	○	○
サクラアリ	○	○					○
クサオオアリ			○				
フタフシアリ亜科							
アシナガアリ	○			○			
トゲハダカアリ※	○						
ハリフトシリアゲアリ	○	○					○
ツヤシリアゲアリ	○	○					○
キイロシリアゲアリ	○	○		○	○	○	○
テラニシシリアゲアリ	○	○	○	○			
クボミシリアゲアリ							
クロナガアリ	○						
クロヒメアリ※	○	○	○	○	○		○
ヒメアリ	○	○			○		
カドフシアリ							
ミナミオオズアリ※							○
インドオオズアリ※							○
オオズアリ	○	○		○	○		○
ヒメオオズアリ	○	○	○				
アミメアリ	○	○	○	○	○	○	○
トフシアリ							
ヒラセムネボソアリ		○		○			
アレチムネボソアリ	○						
ハリナガムネボソアリ							
オオシワアリ※							
ケブカシワアリ						○	
キイロオオシワアリ	○	○			○		
トビイロシワアリ	○	○		○			
タテナシウメマツアリ			○				
ウメマツアリ						○	
ハリアリ亜科							
オオハリアリ	○	○					○
ナカスジハリアリ	○	○		○			
ニセハリアリ							
ミナミフトハリアリ							
テラニシハリアリ					○		
合計	26	20	10	15	12	8	17

表1. 続き
Table 1. Continued

種名\地名略記	MP	TP	TF	SP	KK	YP
カタアリ亜科						
ルリアリ※	○					
アワテコヌカアリ※				○		○
アシジロヒラフシアリ※				○	○	○
ヤマアリ亜科						
クロオオアリ			○	○	○	○
ホソウメマツオオアリ						○
ナワヨツボシオオアリ		○			○	
ウメマツオオアリ	○		○	○	○	○
ヒラズオオアリ						
ハヤシクロヤマアリ	○	○	○	○	○	○
ミナミクロヤマアリ	○		○			
トビイロケアリ	○		○	○	○	○
ハヤシケアリ						
ヒラアシクサアリ		○				○
ケブカアメイロアリ※					○	○
アメイロアリ	○	○	○	○	○	○
サクラアリ	○	○		○	○	
クサオオアリ				○	○	○
フタフシアリ亜科						
アシナガアリ		○				
トゲハダカアリ※					○	
ハリブトシリアゲアリ	○		○		○	○
ツヤシリアゲアリ						○
キイロシリアゲアリ		○		○	○	○
テラニシシリアゲアリ	○		○	○	○	
クボミシリアゲアリ						○
クロナガアリ				○		
クロヒメアリ※		○		○	○	○
ヒメアリ	○				○	○
カドフシアリ		○				
ミナミオオズアリ※					○	
インドオオズアリ※						
オオズアリ	○	○		○	○	○
ヒメオオズアリ						
アミメアリ		○		○	○	○
トフシアリ					○	
ヒラセムネボソアリ						
アレチムネボソアリ						○
ハリナガムネボソアリ		○				
オオシワアリ※					○	
ケブカシワアリ						
キイロオオシワアリ						
トビイロシワアリ	○		○	○	○	○
タテナシウメマツアリ					○	
ウメマツアリ						
ハリアリ亜科						
オオハリアリ		○		○		○
ナカスジハリアリ					○	
ニセハリアリ		○				
ミナミフトハリアリ					○	
テラニシハリアリ		○				
合計	12	15	9	17	25	22

※ 外来種とみなした種. Species considered to be alien.

Lasius spathepus Wheeler, 1910 ヒラアシクサアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Nylanderia amia (Forel, 1913) -complex ケブカアメイロアリ※

1w (1), KP, 20.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Nylanderia flavipes (Smith, 1874) アメイロアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), HS, same date; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MS, 20.v.2025; 1w (1), KP, same date; 1w (1), MP, 1.v.2025; 3w (3), TP, 24.iv.2025; 1w (1), TF, same date; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Paraparatrechina sakurae (Ito, 1914) サクラアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), KP, same date; 1w (1), MP, 1.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025.

Uwari keihittoi (Forel, 1913) クサオオアリ

1w (1), HSS, 14.v.2025; 3w (3), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Aphaenogaster famelica (Smith, 1874) アシナガアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), HS, 14.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025.

Cardiocondyla itsukii Seifert, Okita & Heinze, 2017 トゲハダカアリ

1dq (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025.

Crematogaster matsumurai Forel, 1901 ハリフトシリアゲアリ

2w (2), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), KP, 20.v.2025; 1w (1), MP, 1.v.2025; 1w (1), TF, 24.iv.2025; 2w (2), SP, 1.v.2025; 2w (2), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Crematogaster nawai Ito, 1914 ツヤシリアゲアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), KP, 20.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Crematogaster osakensis Forel, 1900 キイロシリアゲアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HS, 14.v.2025; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MS, 20.v.2025; 1w (1), KP, same date; 2w (2), TP, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Crematogaster teranishii Santschi, 1930 テラニシシリアゲアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), HS, same date; 1w (1), MP, 1.v.2025; 1w (1), TF, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025.

Crematogaster vagula Wheeler 1928 クボミシリアゲアリ

1w (1), SP, 1.v.2025; 2w (2), YP, 21.iv.2025.

Messor aciculatus (Smith, 1874) クロナガアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025.

Monomorium chinense Santschi, 1925 クロヒメアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), HS, same date; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), KP, 20.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Monomorium intrudens Smith, 1874 ヒメアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MP, same date; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Myrmecina nipponica Wheeler, 1906 カドフシアリ

1w (1), TP, 24.iv.2025.

Pheidole fervens Smith, 1858 ミナミオオズアリ

1minor (1) & 1major (1), KK, 13.v.2025.

Pheidole indica Mayr, 1879 インドオオズアリ

1minor (1), KP, 20.v.2025.

Pheidole nodus Smith, 1874 オオズアリ

1 minor (1), YY, 26.v.2025; 2 minor (2), NT, same date; 1 minor (1), HS, 14.v.2025; 1 minor (1), SK, 1.v.2025; 1 minor (1), KP, 20.v.2025; 1 minor (1), MP, 1.v.2025; 1 minor (1), TF, 24.iv.2025; 1 minor (1), SP, 1.v.2025; 1 minor (1), KK, 13.v.2025; 2 minor (2), YP, 21.iv.2025.

Pheidole pieli Santschi, 1925 ヒメオオズアリ

1minor & 1major (1), YY, 26.v.2025; 1minor (1), NT, same date; 1 minor & 1major (1), HSS, 14.v.2025.

Pristomyrmex punctatus (Smith, 1860) アミメアリ

1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), MS, 20.v.2025; 1w (1), KP, same date; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Solenopsis japonica Wheeler, 1928 トフシアリ

1w (1), KK, 13.v.2025.

Temnothorax anira (Terayama & Onoyama, 1999) ヒラセムネボソアリ
3w (3), NT, 26.v.2025; 1w (1), HS, 14.v.2025.

Temnothorax mitsukoae Terayama & Yamane, 2013 アレチムネボソアリ
1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Temnothorax spinosior (Forel, 1901) ハリナガムネボソアリ
1w (1), TP, 24.iv.2025.

Tetramorium bicarinatum (Nylander, 1846) オオシワアリ
1w (1), KK, 13.v.2025.

Tetramorium kraepelini Forel, 1905 ケブカシワアリ
1w (1), MS, 20.v.2025.

Tetramorium nipponense Wheeler, 1928 キイロオオシワアリ
1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), SK, 1.v.2025.

Tetramorium tsushimae Emery, 1925 トビイロシワアリ
1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), HS, 14.v.2025; 1w (1), MP, 1.v.2025; 1w (1), TF, 24.iv.2025; 1w (1), SP, 1.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Vollenhovia benzai Terayama & Kinomura, 1998 タテナシウメマツアリ
1w (1), HSS, 14.v.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025.

Vollenhovia emeryi Wheeler, 1906 ウメマツアリ
1w (1), MS, 20.v.2025.

Brachyponera chinensis (Emery, 1895) オオハリアリ
1w (1), KP, 20.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 2w (2), SP, 1.v.2025; 1w (1), YP, 21.iv.2025.

Brachyponera nakasujii (Yashiro, Matsuura, Guénard, Terayama et Dunn, 2010) ナカスジハリアリ
1w (1), YY, 26.v.2025; 1w (1), NT, same date; 1w (1), HS, 14.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), KK, 13.v.2025.

Hypoponera sauteri Onoyama, 1989 ニセハリアリ
1w (1), TP, 24.iv.2025.

Ectomomyrmex horni (Forel, 1913) ミナミフトハリアリ
1w (1), KK, 13.v.2025.

Ponera scabra Wheeler, 1928 テラニシハリアリ

1w (1), SK, 1.v.2025; 1w (1), TP, 24.iv.2025; 1w (1), TF, same date.

※ミナミクロヤマアリとケブカアメイロアリについては、複数種が含まれている可能性があり、和名は総称として用いている。

考 察

今回の調査で、鹿児島市北部から48種のアリが採集されたが、この種数はこれまでに鹿児島県本土で記録されている131種(原田, 未発表)の36.6%に相当する。今回の調査では、主に公園、寺院や神社などにおいて見つけ採りのみによる調査を行ったが、これらの調査地の環境は実にさまざまであったため、主に地表性である48種ものアリが採集されたものと考えられる。今後の再調査によって、他の採集方法を組み合わせることで、特に山岳地の八重山、花尾山、八重嶽では多数の追加種が見込まれる。鹿児島大学寺山自然教育研究施設では東郷(1998)と川原ほか(1999)によって、いずれも1997年に4つの採集方法(蜂蜜トラップ・土壌ふるい・リターふるい・見つけ採り)を組み合わせ、前者は照葉樹二次林、タケ林、スギ林で、後者は照葉樹二次林・タケ林、スギ林、林縁で調査が行われて両調査合計で4亜科26属42種のアリが記録された(表2)。また、筆者による八重山公園キャンプ場での調査(原田, 2025)で13種が記録された。これらの過去の調査と今回の調査を比較すると、調査環境や調査方法に違いがあるが、共通種が28種、今回の調査で新たに記録された種は20種であった。また、これまでに鹿児島市北部において日中に交尾のための群飛などで採集された有翅アリ、あるいは夜間にライトトラップ、灯火などに誘引され採集された有翅アリ5種を加え(山根ほか, 2025)、これまでに鹿児島市北部で記録された種は合計7亜科35属67種となった(表2)。

今回の調査において、ハヤシクロヤマアリ、アメイロアリ、キイロシリアゲアリ、アミメアリの4種は、すべての調査地13か所のうち11か所以上(84.6–100%)で採集され、鹿児島市北部における地表性の種を代表するアリであると考えられる。

クロナガアリが2か所で採集されたが、本種は夏季に巣外での活動を行わず、主にイネ科植物の種子などの収穫時期にあたる秋季(10–11月)に活動する(寺山ほか, 2014)と考えられている。鹿児島県北部の調査では、5月初旬と中旬に、枯死した草本類の種子を収穫し、さかんに巣へ運搬する多数の個体が観察されており(原田, 2025)、餌の条件によって晩春でも活動することが確認された。また、筆者は、甕島列島上甕島里村(鹿児島県薩摩川内市)で8月16日に本種の採餌個体を採集したことがある(原田, 1992)。九州南部において、クロナガアリは餌などの条件によっては季節に関係なく活動している可能性が示唆される。

先述した鹿児島大学寺山自然教育研究施設の東郷(1998)と川原ほか(1999)の調査及び八重山公園キャンプ場の調査(原田, 2025)で採集された外来アリは、いずれの調査でもクロヒメアリ1種のみであった。よって、今回の調査で記録された9種の外来アリのうちクロヒメアリを除く8種(ルリアリ・アワテコヌカアリ・アシジロヒラフシアリ・ケブカアメイロアリ・トゲハダカアリ・ミナミオオズアリ・インドオオズアリ・オオシワアリ)は鹿児島市北部からの新記録種となった。

表2. これまでに鹿児島市北部から記録されたアリ
Table 2. Ants recorded so far from the northern area of Kagoshima-shi

種名	寺山自然教育研究施設	八重山公園	本研究
ノコギリハリアリ亜科			
ノコギリハリアリ	○		
クビレハリアリ亜科			
ツチクビレハリアリ	○		
カタアリ亜科			
ルリアリ※			○
アワテコヌカアリ※			○
アシジロヒラフシアリ※			○
ヒラフシアリ※※			
ヤマアリ亜科			
イツツバアリ※※			
クロオオアリ		○	○
ホソウメマツオオアリ			○
ナワヨツボシオオアリ	○		○
ウメマツオオアリ		○	○
ミカドオオアリ	○		
アメイロオオアリ※※			
ヒラズオオアリ	○		○
ハヤシクロヤマアリ	○	○	○
ミナミクロヤマアリ	○		○
トビイロケアリ	○	○	○
ハヤシケアリ			○
ヒラアシクサアリ	○		○
ケブカアメイロアリ※			○
アメイロアリ	○		○
サクラアリ	○	○	○
クサオオアリ			○
フタフシアリ亜科			
アシナガアリ	○	○	○
トゲハダカアリ※			○
ハリフトシリアゲアリ	○	○	○
ツヤシリアゲアリ			○
キイロシリアゲアリ	○	○	○
テラニシシリアゲアリ	○		○
クボミシリアゲアリ			○
クロナガアリ	○		○
クロヒメアリ※	○	○	○
ヒメアリ	○		○
キイロカドフシアリ	○		
カドフシアリ	○		○
コツノアリ	○		

表2. 続き
Table 2. Continued

種名	寺山自然教育研究施設	八重山公園	本研究
フタフシアリ亜科			
ミナミオオズアリ※			○
アズマオオズアリ	○		
インドオオズアリ※			○
オオズアリ	○	○	○
ヒメオオズアリ	○		○
アミメアリ	○	○	○
トフシアリ	○		○
イガウロコアリ	○		
ヒラタウロコアリ	○		
セダカウロコアリ	○		
ウロコアリ	○		
ヒラセムネボソアリ		○	○
アレチムネボソアリ			○
ハリナガムネボソアリ			○
オオシワアリ※			○
ケブカシワアリ			○
キイロオオシワアリ	○		○
トビイロシワアリ	○	○	○
タテナシウムメマツアリ	○		○
ウメマツアリ	○		○
ハリアリ亜科			
オオハリアリ	○△		○
ナカスジハリアリ			○
トゲズネハリアリ	○		
ミナミフトハリアリ			○
ケブカハリアリ※※			
ベッピンニセハリアリ	○		
ニセハリアリ	○		○
マナコハリアリ	○		
テラニシハリアリ	○		○
アギトアリ※※			
カギバラアリ亜科			
ダルマアリ	○		
合計	41	13	48

※ 外来種とみなした種. Species considered to be alien.

※※ 鹿児島市吉野町で記録された有翅アリ.
Winged ants recorded from Yoshino-cho in Kagoshima-shi.

△ ナカスジハリアリが含まれる可能性がある.
Brachyponera naksujii may be included.

現在、外来アリのアシジロヒラフシアリは在来種に悪影響を及ぼしながら、海岸部だけでなく内陸部にも分布を拡大している(原田, 2020; 原田ほか, 2021; 寺山ほか, 2022)。今回の調査で本種が確認された調査地は4か所で、そのうち3か所は鹿児島市北部の中でより南部に位置している下田公園、かごしま健康の森公園、吉野公園であった。鹿児島市北部のより北部に位置する花尾神社でも本種が確認されてはいるが、本種の分布の中心はより南部の地域に限定されていると考えられる。おそらく調査を行った鹿児島市北部のより北部の地域は、内陸部で標高の高い山岳地に位置しているために本種の生息には適さないのかもしれない。内陸部に位置しているが、標高の低い山岳地にある花尾神社とかごしま健康の森公園(それぞれ鹿児島湾沿岸から直線距離で約11 km、標高約160 mと約9 km、標高約140 m)で本種が確認されていることを考えると、地球温暖化によって冬季における内陸部の環境は穏やかになっており、ある一定の標高以下ならアシジロヒラフシアリの生息が可能になっているものと考えられる。よって、今後本種は、地球温暖化の進行に伴って、南部からより北部へ、海岸部からより内陸部へ、さらに内陸部の平地からより標高の高い地域へ生息域を拡大していくものと考えられる。

今後、内陸部の山岳地域で調査を行うことによって、現時点におけるアシジロヒラフシアリの垂直分布が明らかになるものと考えられる。

謝 辞

山根正気氏(鹿児島大学名誉教授)には、同定確認、原稿の校閲及び有益なご指導をいただいた。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 福元しげ子, 2009. 鹿児島大学郡元キャンパスのアリ. *Nature of Kagoshima*, **35**: 67.
- 鹿児島県地理高校部会編, 1998. 鹿児島地図紀行—地形図で探る郷土の自然と人々の生活—. 142 pp. 徳田屋書店, 鹿児島.
- 川原慶博・細山田三郎・山根正気, 1999. 鹿児島大学寺山自然教育研究施設のアリ相. 鹿児島大学教育学部研究紀要, **50**: 147–156.
- 原田 豊, 2000. 鹿児島県甕島列島の林床性アリ相. 蟻 ARI, (24): 4–11.
- 原田 豊, 2010. 公園内に植栽されたソメイヨシノの樹上で活動するアリ. 日本生物地理学会会報, **65**: 169–179.
- 原田 豊, 2020. 日置市城山公園におけるアシジロヒラフシアリ侵入後のアリ相. *Nature of Kagoshima*, **47**: 173–178.
- 原田 豊, 2025. 鹿児島県北薩地域から地表性アリ類の記録. *すがれおい*, (8): 73–94.
- 原田 豊・福倉大輔・栗巢 連・山根正気, 2013. 港のアリ: 外来アリのモニタリング. 日本生物地理学会会報, **68**: 29–40.
- 原田 豊・山崎真凜・齋藤七彩・日笠山麗来, 2021. 鹿児島市城山公園に定着したアシジロヒラフシアリ. *Nature of Kagoshima*, **47**: 275–279.

- Iwata, K., K. Eguchi & Sk. Yamane, 2005. A case study on urban ant fauna of southern Kyushu, Japan, with notes on a new monitoring protocol. *Journal of Asia-Pacific Entomology*, **83**: 263–272.
- 松村周平・山根正気, 2012. 鹿児島市慈眼寺公園におけるアリの種構成と優占度. *Nature of Kagoshima*, **38**: 99–107.
- 中野正太, 2010. 鹿児島県において土中ベイトトラップによって採集されたアリ類. 鹿児島大学理学部地球環境科学科 2009 年度卒業論文. 27 pp.
- 寺山 守・久保田 敏・江口克之, 2014. 日本産アリ類図鑑. 278 pp +48 pls. 朝倉書店, 東京.
- 寺山 守・砂村栄力・藤巻良太・小野高志・江口克之, 2022. 八丈島における侵略的外来種アシジロヒラフシアリ *Technomyrmex brunneus* (膜翅目: アリ科) の分布の拡大. 昆虫 (ニューシリーズ), **25**(2): 55–59.
- 東郷幸恵, 1998. 鹿児島県本土の4タイプの林におけるアリ相の比較. 鹿児島大学理学部生物学科 1997 年度卒業論文. 39 pp.
- 山根正気・福田輝彦・木野田 毅・塚田 拓, 2025. 南九州における有翅アリの記録. すかれおい, (8): 95–111.
- 山根正気・原田 豊・江口克之, 2010. アリの生態と分類—南九州のアリの自然史—. 200 pp. 南方新社, 鹿児島.
- 柚木美保, 2001. 鹿児島大学林園における樹上のアリ相. 鹿児島大学理学部地球環境科学科 2000 年度卒業論文. 45 pp.

原田 豊: harahyo@yahoo.co.jp

神奈川県三浦半島産アシナガバチ属およびホソアシナガバチ属 (スズメバチ科：アシナガバチ亜科) の採集記録

川島逸郎
(神奈川県横須賀市)

Collecting records of the genera *Polistes* and *Parapolybia* (Vespidae: Polistinae)
from Miura Peninsula, Kanagawa, Japan

Itsuro Kawashima
(Yokosuka, Kanagawa, Japan)

緒言

筆者が所蔵する三浦半島産ハチ目標本の、記録公表の第4報としての本報ではスズメバチ科 Vespidae のうちアシナガバチ亜科（アシナガバチ属 *Polistes* およびホソアシナガバチ属 *Parapolybia*）を取り上げる。本属の種は一般にもよく知られているように、植物繊維を素材とした多房室の巣を作り社会生活を行う。人の生活圏ではもっとも身近な昆虫の一つであった背景からも、古くから数多くの絵本や年少向け一般書などのテーマにも取り上げられる分類群であった（甲斐, 1975; 小川, 1983, 2005 ほか）。しかし、筆者が居住する三浦半島にあっては、この30年余を俯瞰した場合には、大半の種で衰退がいつそう顕在化しつつあると見受けられ、少なくとも人の生活圏あるいは身近からは、日常的あるいは恒常的に目に触れる昆虫ではなくなりつつある。同半島におけるこうした減少傾向は、とりわけ小型種での動態から、早くも1990年代には指摘されていた（鈴木・川島, 2001; 川島・鈴木, 2002）。そうした状況下にも関わらず、それらの衰退傾向に言及した報告は見当たらない。こうした背景には、ハチ目自体が地域の昆虫愛好家間でも関心が持たれない分類群であったことに加え、本属の種のもつ「普通種」とのイメージが大きかったためか、ほとんど注目されては来なかった点が最大の理由と考えられる。そこで本報では、直近36年間の採集記録や知見をもとに、本属各種の生息状況あるいは動向を通じての三浦半島における自然環境の現況について考察する。

材料と方法

採集方法はすべて見つけ採り（ルッキング）に拠っている。和名および学名、種の配列は寺山・須田（2016）に従い、同定は Kojima（1997）や寺山・須田（2016）をもとに筆者自身が行った。スズメバチ類と異なり、女王およびワーカーの区別が時に困難なことから、本稿では両者を便宜的に F (= Female) と一括して表記した。採集地の表記は基本的にオリジナルラベルでのそれに準拠しているが、そこで欠落していた町名などは、適宜補足した上で転記を行っている。なお、町名の直後に丁目あるいは小字を付与したものが混在しているが、産地としては同一であるため、年号および日付の昇順で一律に列挙した。

なお、同一産地が続く場合、初出以降は「同地」と略した。また、社寺名や海岸名など、地名には含まれない採集場所の名称は、地名直後に丸括弧内に併記した。すべての標本は筆者採集であるため、採集者名は省略した。標本データ一覧中や備考において、鈴木・川島(2001)および川島・鈴木(2002)で報告した記録の再掲に当たる標本の場合、丸括弧内にそれらの出典を引用した。本報で記録した全ての標本は、2025年時点では筆者が保管している。

結果と考察

三浦半島からアシナガバチ属 *Polistes* の6種およびホソアシナガバチ属 *Parapolybia* の2種を認めた。これまでの採集記録を、以下のとおり目録として示す。

スズメバチ科 Family Vespidae

アシナガバチ亜科 Subfamily Polistinae

アシナガバチ属 Genus *Polistes* Latreille, 1802

フタモンアシナガバチ *Polistes chinensis antennalis* Pérez, 1905

1 F, 三浦郡葉山町長柄, 13. V. 1993 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市浦郷町, 26. VII. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 27. VII. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市芦名, 10. IX. 1995 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市野比, 14. VII. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 19. VIII. 1996; 1 F, 同地, 3. IX. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市長沢, 5. IX. 2001 (川島・鈴木, 2002); 1 M, 横須賀市富士山~砲台山 (= 大塚山), 17. X. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市津久井大畑, 31. VIII. 2004.

三浦半島における本属は、緒言でも触れたように小型種から衰退の様相を呈していたが、本種はその一つである。上記の採集記録は、そのほとんどが鈴木・川島(2001)の再掲で、以降は横須賀市津久井で2004年に得られた1個体のみにとどまっている。しかし、大場(1981)では横須賀市からの1954年から1978年にかけての複数のデータを挙げた上で「各地に普通で(後略)」との付記がある。鈴木・川島(2001)では「1980年代後半から90年代前半にはほとんど見かけなくなった時期がある」とも述べており、筆頭著者である鈴木裕氏による採集個体を含めれば同半島の広範から得られていることから、それ以前には普通種であったであろうことが窺える。その一方で、個体数の変動を伴いつつ(鈴木・川島, 2001)も半島各地に残存していた1990年代においては、すでに個体数は少ない種となっており、同年代後半には、むしろ稀少と見なしても差し支えない状況にあった。とりわけ2000年代に至っては、確認さえ至難な生息状況に陥っていたことは明らかで、筆者は、上記の2004年に得られた1個体を最後にまったく確認していない。現在は、少なくとも半島中南部においては地域絶滅が危惧される現状にあることは確実である。

ヤマトアシナガバチ *Polistes japonica* de Saussure, 1858

1 F, 逗子市久木八丁目(久木大池公園), 24. VIII. 2025; 1 F, 三浦郡葉山町上山口, 1. VI.

2019; 1 F, 同地, 11. V. 2024; 1 F, 横須賀市長坂山, 10. IX. 1995 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市長坂三丁目, 21. VIII. 2025; 1 M, 横須賀市長坂五丁目, 25. VIII. 2019; 1 M, 同地, 24. VIII. 2025; 1 M, 横須賀市野比, 3. IX. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 M, 同地, 6. IX. 1996; 1 M, 横須賀市野比五丁目, 28. IX. 2025; 1 F, 横須賀市長沢, 12. VIII. 1995 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市長沢村岡, 15. VIII. 2004; 1 F, 同地, 13. IX. 2006; 1 F, 同地, 7. VII. 2020; 3 M, 横須賀市長沢一丁目村岡, 24. VIII. 2019; 1 F, 同地, 25. VIII. 2019; 1 M & 1 F, 同地, 10. IX. 2019; 1 M, 同地, 13. IX. 2019; 1 F (斑紋異常), 横須賀市長沢村岡, 21. VIII. 2024; 1 F, 横須賀市津久井, 5. IX. 1995 (鈴木・川島, 2001); 1 M & 2 F, 横須賀市津久井谷戸ノ作, 21. IX. 2015; 1 F, 横須賀市津久井水間戸, 19. IX. 2018; 1 F, 横須賀市武(三島神社), 8. IX. 2001; 1 M, 同地, 19. IX. 2001 (川島・鈴木, 2002); 1 F, 同地, 3. X. 2001 (川島・鈴木, 2002); 1 F, 横須賀市長井六丁目(荒崎公園), 16. VI. 2007; 2 M & 3 F, 三浦市南下浦町上宮田, 22. IX. 1995 (鈴木・川島, 2001); 1 M & 1 F, 同地, 24. VIII. 2025; 2 F, 三浦市初声町三戸溝山(三戸浜), 28. VIII. 2025; 1 F, 同地, 6. IX. 2025; 1 F, 三浦市三崎町小網代, 3. VI. 1993 (鈴木・川島, 2001); 2 M, 同地, 12. IX. 2013; 1 F, 同地, 4. VI. 2011; 1 F, 三浦市三崎町諸磯(浜諸磯), 11. VIII. 2013; 1 M, 同地, 12. VIII. 2013; 3 F, 三浦市三崎町城ヶ島, 23. VIII. 2009; 1 F, 同地, 20. X. 2020.

日常的に目に触れる個体数は多いとまでは言えないものの、現在の三浦半島産の本属の種としては、もっとも普通もしくは目に付きやすい種といえる。神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006では県カテゴリーの「絶滅危惧II類」に指定されている(長瀬, 2006)。また、鈴木・川島(2001)では「三浦半島でも個体密度は低いが(中略)局所的に多く見られることもある」とも述べているが、当時よりも目に触れる機会は増加したような印象を受ける。同半島における生息域も広範で、内陸部の市街地あるいは住宅地の近辺といった立地では、むしろセグロアシナガバチ *P. jokahamae* よりも目に付く場合が多い。耕作地周辺でもしばしば見出されるなど、より開放的な空間を好むように見受けられるが、海浜の後背地では同種のような生息密度では見られない。こうした種間で窺われる生息適地の好み、どのような性質の相違から来るものかは不明ながら、巣は社寺や公園に植栽されたツツジなどのやや混み入った樹枝内部での発見例がある。同半島産個体には多少の斑紋の変異が認められ、時に前伸腹節背面の一对の黄斑が顕著に発達するとともに、後体節(膨腹部)の黒斑が縮小し全体的に橙黄色みが強くなる個体が見られる。また、前者の一对の黄斑がまったく消失し黒化した個体も得られている(上記データのうち横須賀市長沢村岡産, 21. VIII. 2024)が、この事例は単なる斑紋異常と考えられる。

セグロアシナガバチ *Polistes jokahamae* Rodoszkowski, 1887

1 F, 横須賀市浦郷町, 22. VII. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 27. VII. 1996 (鈴木・川島, 2001); 2 F, 横須賀市長坂五丁目, 2. VI. 2020; 1 F, 横須賀市野比, 8. IX. 1996 (鈴木・川島, 2001, ただし「3. IX. 1995」として); 1 F, 同地, 14. VI. 1996 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 24. VI. 1996; 1 F, 同地, VII. 1996; 1 F, 同地, 4. VIII. 1996; 1 F, 同地, 25. V. 1997; 1 F, 同地, IX. 1997; 1 F, 横須賀市野比谷戸ノ田, 15. V. 2025; 1 F, 同地, 17. VIII. 2025; 1 F, 横須賀市長沢, 2. IV. 1986 (鈴木・川島, 2001); 1 M, 同地, 17. VIII. 1995; 1 F, 同地, 4. IX. 1995; 1 M & 1 F, 同地, 11. XI. 1996; 1 F, 横須賀市長沢村岡, 14. VI. 2004; 1 F, 同地, VIII. 2013; 1 F, 同地, 9. VIII.

2018; 1 M, 横須賀市長沢, 5. XI. 2018; 1 M, 横須賀市長沢村岡, 28. VII. 2019; 横須賀市長沢一丁目村岡, 20. IX. 2019; 1 F, 同地, 22. V. 2021; 2 F, 同地, 29. V. 2021; 1 F, 同地, 30. V. 2021; 1 M, 同地, 24. VIII. 2024; 1 F, 同地, 23. IX. 2025; 1 F, 横須賀市長沢一丁目(長沢公園), 26. VIII. 2025; 1 M, 横須賀市津久井, X. 1996(鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, IV. 2001(川島・鈴木, 2002); 2 M, 同地, 27. X. 2004; 1 F, 横須賀市武(三島神社), 28. V. 2005; 1 F, 三浦市初声町三戸神田, 21. V. 1992(鈴木・川島, 2001); 1 F, 三浦市初声町三戸(三戸浜), 3. V. 2025; 2 F, 三浦市初声町三戸溝山(三戸浜), 28. VIII. 2025; 1 F, 三浦市初声町入江, 26. VII. 2023; 1 M, 三浦市三崎町城ヶ島(馬の背), X. 2013; 1 M, 三浦市三崎町城ヶ島, 5. XI. 2017; 1 M, 同地, 26. X. 2023; 1 F, 同地, 12. VII. 2025.

本種は、人の暮らしに身近な普通種として一般社会にも認識される代表的な存在であったと考えられる。しかし、現在の三浦半島においては、旧来のそうした概念は妥当とは言えないほど、個体数およびその密度ともに希薄になっている。しばしば人家の軒下などに垂下した巣は馴染み深い光景であったが、とりわけ内陸での減少が顕在化する中で、人家付近あるいは市街地での営巣は日常的ではなくなった。人家付近で見られる場合は、景観的にも旧来から大きな変化の少ない地区での残存が多いような印象がある。筆者宅では1980年代半ば以来、軒下への営巣が続いていたが、近隣が露地や庭木などが無い宅地で占められた2020年代に入ってから途絶えた。ただし、営巣が続いていた長期間にあっても、必ずヒメスズメバチ *Vespa ducalis* Smith, 1852 の来襲を受け続けており、巣が大きく発展した例は皆無であった。内陸での減少に伴った結果的に、営巣密度が高い場所は砂浜を主とした海岸域となっており、ハマゴウ (*Vitex rotundifolia*) 群落といった後背植生中での営巣(図1)は、現在でも稀ではない。ただし、創設女王による初期巣の段階では、時に数m間隔での営巣も観察されるものの、風水害あるいはヒメスズメバチを主とした天敵の影響が大きく、こうした立地でも巣が大型化するまでには至らず消滅する事例がほとんどであり、次世代の生産までコロニーが発達する割合は必ずしも高くないと考えている。市街化が進んだ地区では立看板や木杭から巣材を採取する場面がしばしば見られた(図2, 3)が、人工物の少ない海浜部では、枯死した植物の茎から採取する例が多いようであった。

キボシアシナガバチ *Polistes nipponensis* Pérez, 1905

1 F, 横須賀市浦郷町, 21. VII. 1997; 3 M, 横須賀市長沢, 15. VIII. 2001(川島・鈴木, 2002); 1 M, 横須賀市長沢村岡, 28. VIII. 2004; 1 M & 1 F, 横須賀市長沢一丁目村岡, 24. VIII. 2019; 1 F, 横須賀市武, 22. IV. 2001(川島・鈴木, 2002); 1 M, 横須賀市武(三島神社), 19. IX. 2001(川島・鈴木, 2002); 1 F, 三浦市初声町溝山(三戸浜), 25. X. 2011.

本種は三浦半島においては、人家付近よりも樹林に接した社寺の境内あるいは林縁部や樹林(自然林)中で営巣を見る例がほとんどで、成虫もそうした環境で遭遇する例が多く、樹木の生葉の下面に取り付けられた巣も見い出された(図5)。しかし、近年は大幅に減少したためか、目にする機会は格段に少なくなった印象を受ける。しかし、三浦半島における近年の動態は必ずしも明らかではないため、引き続きの調査が必要である。



図1. セグロアシナガバチ *Polistes jokahamae* の巣. 三浦市三崎町城ヶ島(馬の背), 2009年8月19日撮影. 大型化した巣を見る機会はいくつかある。



図2. セグロアシナガバチ *Polistes jokahamae* の巣材採取痕. 三浦市初声町和田, 2011年6月24日撮影. 同一個体と推定されるワーカーが、バス通りを経た対岸から、この立看板に通っていた。木質繊維が齧り取られた多数の痕跡が見える。



図3. セグロアシナガバチ *Polistes jokahamae* の巣材採取．三浦市初声町入江，2009年7月17日撮影．この個体は、木杭から木質繊維を齧りに通っていた。

キアシナガバチ *Polistes rothneyi* Cameron, 1900

1 F, 三浦郡葉山町長柄二子山, 5. V. 1993 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市浦郷町, 26. VII. 1996; 2 M, 横須賀市馬堀, 7. IX. 1997 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 横須賀市長坂五丁目, 25. VIII. 2019; 1 M, 横須賀市野比, 7. IX. 1992 (鈴木・川島, 2001); 2 F, 横須賀市野比かがみ田, 18. XII. 2024; 2 F, 同地, 18. V. 2025; 1 F, 同地, 3. VIII. 2025; 1 F, 横須賀市野比谷戸ノ田, 15. V. 2025; 1 F, 横須賀市長沢, 19. VI. 1989 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 6. IX. 1995; 1 F, 同地, 12. XII. 1997 (鈴木・川島, 2001); 1 M, 同地, 10. IX. 2019; 1 F, 横須賀市長沢村岡, 7. V. 2020; 3 M & 1 F, 横須賀市津久井, 6. IX. 1995; 1 M, 同地, 6. X. 1995; 1 F, 同地, 25. V. 1997; 1 F, 同地, IV. 2001; 1 F, 横須賀市津久井水間戸, 19. IX. 2018; 1 F, 横須賀市津久井, IV. 2001; 3 F, 横須賀市武, (上旬). VII. 1995; 1 F, 三浦市南下浦町上宮田, 22. IX. 1995 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 三浦市三崎町小網代, 28. V. 2004; 1 F, 三浦市三崎町城ヶ島, 16. VI. 1992 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 26. X. 2023.

三浦半島においてはセグロアシナガバチと同所的にも見られるが、人家周辺や市街地よりも谷戸や山間の耕作地といった樹林寄りの微環境を好むらしく、そうした立地ではむしろ本種が優占する。また、同種とは異なり海浜部ではまず見掛けない。巣を取り付ける位置にせよ、その選択肢はより広いようである。いずれも三浦半島での事例ではないが、林道脇の大木の樹幹といった部分に取り付ける例のほか(図4)、その位置(地上高)もより広範なようで、ヒマラヤスギ *Cedus deodara* の大木の横枝(地上高は約5–6 m)での営巣を確認した例もある。1980–1990年代と比較すれば目につく機会はかなり減った印象はあるが、小型種での衰退ぶ



図4. キアシナガバチ *Polistes rothneyi* の巣. 秦野市弘法山, 2011年5月18日撮影. 三浦半島ではないが、山道の路傍に生えた大木の樹幹に営巣していた例。

りとは様相が異なっている印象がある。減少の度合いは緩やかに見受けられ、現時点では三浦半島での生息状況が危ぶまれるほどの感触にはない。ただし、上に述べた漸減の印象から、今後の動向は同属他種とともに今後も注視し続ける必要がある。

コアシナガバチ *Polistes snelleni* de Saussure, 1862

1 F, 横須賀市浦郷町, 20. VII. 1997 (鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 21. VII. 1997 (鈴木・川島, 2001).

本種はフタモンアシナガバチとともに、より早い年代には衰退しており、採集個体は上記の1997年の例が最後となった。この地点は沿岸の工場地帯の一角にある横須賀市追浜浄化センター(同市上下水道局)の敷地内で、植栽されたツツジの植え込みでの営巣も確認された。同じ年代には、同市岩戸四丁目を占める広域住宅地の一角(戸建住宅の庭先)での営巣を目撃している(川島, 未発表データ)。このように、近年の三浦半島においては市街化が進行した環境下でかろうじて残存する可能性は残るものの、その後現在に至るまで新たな知見は得られていない。鈴木・川島(2001)では、横須賀市長沢で鈴木氏が1993年に採集された個体が記録に挙げられているが、この地に居住する筆者は今まで目撃もしていない。少なくとも現時点での三浦半島中南部においては、地域絶滅が危惧される状況に陥っていることは確実である。1990年代初頭以前の記録にせよ、1954年に横須賀市中心街に近い汐入で得られた1個体(大場, 1981)以外は見当たらない。同時期には、鈴木(1955)により本種もリストアップされているが、残念ながら標本データを伴っていない。

三浦半島に近接する神奈川県東部の他地域では、三浦半島域に先行して都市化が進行した川崎市においても本種の現存産地はごく一部にすぎない(川島ほか, 2018, 2020, 2024)が、現在の宮前区を含む1970年代の旧高津区では、当時の新興住宅地でも普通に見られた(川島ほか, 2020)。こうした周辺事情からも、当時は三浦半島でも普通種だったのではないかと想像される。しかし、1990年代以前の同半島での生息状況については、上述したように残された記録および標本はごくわずかに過ぎず、再検証は不可能であろう。

ホソアシナガバチ属 Genus *Parapolybia* Saussure, 1854

ムモンホソアシナガバチ *Parapolybia crocea* Saito-Morooka, Ngyer & Kojima, 2015

1 F, 逗子市沼間二丁目(神武寺), 4. VII. 2025; 2 F, 三浦郡葉山町長柄(桜山大山林道), 10. VI. 2000(鈴木・川島, 2001, ただし「二子山」として); 1 M, 横須賀市芦名大楠山, 10. IX. 1995; 1 M, 横須賀市長沢, 7. VIII. 2001(川島・鈴木, 2002); 2 M, 同地, 6. IX. 2001(川島・鈴木, 2002); 1 F, 横須賀市長沢村岡, 7. V. 2004; 1 M, 横須賀市長沢, 28. VIII. 2004; 1 F, 横須賀市津久井, 4. X. 1995; 1 F, 同地, IV. 2001(川島・鈴木, 2002); 5 F, 横須賀市砲台山(=大塚山), 27. X. 2004; 1 F, 横須賀市武(三島神社), 2. VII. 2001(川島・鈴木, 2002); 1 F, 三浦市南下浦町上宮田, 22. IX. 1995(鈴木・川島, 2001); 2 M, 三浦市南下浦町上宮田(小松ヶ池 池畔), IX. 1994(鈴木・川島, 2001); 1 F, 三浦市三崎町小網代, 8. V. 1993(鈴木・川島, 2001); 1 F, 同地, 1. VI. 1993.

三浦半島における本種の環境選択性は別属のキボシアシナガバチと類似しており、樹林内でのみ見られ、人家付近や住宅地では見られない。営巣に当たっては、樹林内で広葉樹

の葉裏への営巣が観察されるほか、晩秋から初冬にかけては、越冬準備のためか樹洞や樹皮の裂け目などに集合する様子が見られる。近年は、しばしば同所的に見られるキボシアシナガバチとともに、1980–1990年代ほどには多く見られなくなった印象はあることから、同種と同じく、今後も継続して注視する必要があるものと考えられる。

ヒメホソアシナガバチ *Parapolybia varia* (Fabricius, 1787)

1 巣 (図5), 横須賀市長沢村岡 (富士山東南麓), 16. V. 2006.

従来、神奈川県内での記録は県央西部 (愛川町・厚木市) および津久井 (相模原市緑区)、丹沢 (山北町・清川村) に限定されていた (長瀬・渡辺, 2018)。標高も低い三浦半島における本属も前種のみで占められているのが実情である中、上記の確認例は予想し得なかった唯一の記録で、以降もまったく確認できていない。横須賀市南部の武山丘陵東南麓に当たる、富士山 (通称「三浦富士」) の樹林内に通じた、踏み分け径の脇に生じた法面から突き出た枯れ枝への営巣を認めた。巣の発展を期待しつつ観察を継続していたが、ワーカーが誕生する前に女王が未帰還となり営巣が途絶したため、成虫個体の標本としては残すことができなかった。ここでは、標本とした初期巣を図として示しておく。



図5. ヒメホソアシナガバチ *Parapolybia varia* の巣 (上) およびキボシアシナガバチ *Polistes nipponensis* の巣 (下). 横須賀市長沢産, 2006年5月 (2013年描画).

三浦半島における生息状況とその経過に関する総合的考察

神奈川県からは6種のアシナガバチ属 *Polistes* および2種のホソアシナガバチ属 *Parapolybia* が記録されている(長瀬, 2004; 長瀬・渡辺, 2018)が、三浦半島からはそれら全種の生息が再確認されるとともに、上の目録で示したとおり、本亜科2属の種構成は解明されたと言える。その内、ヒメホソアシナガバチは同半島域から本報での記録が初めてとなったが、わずか1例の記録のみで、その後もまったく再確認できていない。三浦半島における生息の実態や出現の背景は明らかではないが、当地で40年近くにわたって昆虫相調査を継続してきた著者の経験上、2006年以前にも本種の確認例は皆無であったことから、恒常的に生息、存続してきたものとは考え難い。あるいは、越冬中の新女王個体が木材など何らかの物資への随伴移入によって、人為的に当地に運搬されたことに由来した事例ではなかったかとも想像はされるものの、それを裏付ける根拠はない。

緒言でも述べた通り、三浦半島における本亜科各種の生息状況や現在に至るまでの動態に言及した記録は見当たらない。そうした背景には、身近な普通種といった従来のイメージに加えて、地域自然誌上の関心が払われる分類群ではなかったことがあったと想定される。そうした中、第4報として筆者がアシナガバチ亜科を取り上げた理由は、とりわけ小型の2種(コアシナガバチ・フタモンアシナガバチ)の衰退傾向が1990年代には明らかになっていたことに加え、それ以外の各種においても、1980年代以降の盛衰が多かれ少なかれ浮き彫りになりつつあった点がある。面積も狭小かつ三方を海に囲まれた半島地形も負の影響に拍車を掛けた可能性も想定されるが、そうした動態の背景にいかなる要因があったかは不明である。そうした経過において、小型種の衰退ぶりは同半島産の本亜科においては注目される現象と考えられ、今後、他地域でも起こり得るとの警鐘を含めた事例報告となるのではないかと考えたためである。

コアシナガバチについては目録でも示したとおり、1997年以降の記録は得られておらず、現在はその消息はまったく途絶えている。大場(1981)では、標本データは現在の中心街に近い横須賀市汐入で1954年に得られた1例のみで、生息状況については言及されていない。一方、1997年当時の状況からして、自然環境が残っている場所ではなく沿岸埋立地の工場地帯や大規模住宅地でのみ残存していたことから、現在もそのような地区で生存している可能性はある。川崎市では最近、都市化が行き届いた幸区での本種の現存も報告された(川島ほか, 2024)。フタモンアシナガバチもまた、コアシナガバチに続いて2004年の採集個体が最後となったが、ともにその衰退要因は明確ではない。この種は、川崎市でも内陸ではまず見られない種になっているが、現在は、東部の幸区および川崎区域でも多摩川河川敷にのみ存続している(川島ほか, 2018)。各種の概説で記したように、かつては普通種であったとされる(大場, 1981)ものの、これら2種の生息状況を伝える記録や資料自体がごくわずかにすぎない。なお、大場(1981)で挙げられたデータの元となった標本は、横須賀市自然・人文博物館に保存されているものと考えられる。鈴木(1955)は、横須賀市内(横須賀および田浦付近)の蜂相として一通りのアシナガバチ属の種を挙げた中に、フタモンアシナガバチおよびコアシナガバチもリストしているが、川島(2025)でも言及されたように、再検証可能な標本が残されている可能性は低い。

大型種では、特にセグロアシナガバチの動態も、年代を減るにつれ変化が明らかになってきている。やはり上述したように、内陸では現在も時折見かけはするものの、身近に普

遍的な種とまでは言えなくなった。従来、人家の軒下には本種の営巣がしばしば見られたが、そうした光景を目にすることは現在ほとんどない。昨今の気象変動も含め、今なお進行する都市化に象徴される人為的な環境変化が本種にどのような影響を与えたかは不明ながら、三浦半島ではその微分布が海浜部に偏在するようになった点は、何らかの背景があったことを窺わせる。同半島域には大きな一級河川はないが、川崎市においても内陸からは激減し、多摩川河川敷などに偏在する点は、三浦半島における生息状況との共通点を感じさせる。例えば、多摩区にある生田緑地は、市街化の進行した地域に孤立した立地にあるが、その中で一定の面積を占める里地環境を創出している川崎市立日本民家園内にせよ、景観上は本種の生息に適した微環境に富むように見えるにも関わらず発見されていない(渡辺ほか, 2020)。一方、キアシナガバチの生息域はより樹林寄りに偏っているように見受けられ、実際に、谷あい(谷戸地形)や山麓では場所によっては比較的多くの個体を見かけるが、人工開発によって山塊の孤立あるいは狭小化が現在も続く中で、今後、本種の生息状況も注視の継続が必要である。

キボシアシナガバチおよびムモンホソアシナガバチは山麓や林縁、樹林中で見出される種であったが、ともに従来よりも目にする機会は大幅に減少してきた印象がある。とりわけ、近年の異常気象は樹林の乾燥化に加え、最近のナラ枯れに端を発した林床環境の著しい植生変化ももたらしており、それらの影響もあったかは判らないが、これらの種も今後の継続調査を要するようである。

大半の種で何らかの衰退傾向が明らかになってきた中、上記の採集記録が示すように、2000年代以降の増加を感じさせる種はヤマトアシナガバチのみである。本種については、長瀬(2004)の時点ではそれ以前の減少ぶりを述べた上で「南方系のアシナガバチだが、温暖化とは無関係のようである」と記しているが、ここ最近の気温上昇を含む気候変動が増加の背景にあるのかもしれないが、その要因にせよ明らかではない。

以上、筆者の採集記録および体感あるいは経験則の範疇ではあるが、現時点での三浦半島における本亜科の生息状況を述べた。引き続き、とりわけ各種の動向を注視しながらのモニタリングおよび資料収集を継続する予定である。

謝 辞

本稿の作成に当たっては、日頃から様々なご教示やご助言を賜っていることに加え、本稿のご校閲も下さった渡辺恭平博士(神奈川県立生命の星・地球博物館)に、改めて篤くお礼を申し上げます。また、以前から私宅や勤務先(小学校校舎)でのアシナガバチ属の営巣についての情報を寄せて下さっていた辻 功氏(横須賀市)にも改めて感謝する。

引用文献

- 甲斐信枝, 1975. あしながばち(かがくのとも 75号). 27 pp., 福音館書店, 東京.
 川島逸郎, 2025. 神奈川県三浦半島産ドロバチ亜科の採集記録. すがれおい, (7): 52-66.
 川島逸郎・鈴木 裕, 2002. 三浦半島産膜翅目(有剣類)第2報. 神奈川虫報, (140): 1-31.
 川島逸郎・高梨沙織・堀内慈恵, 2020. 川崎市青少年科学館所蔵 反町正紀氏収集昆虫標本

- リスト – 特に 1960 年代に得られた川崎市産の重要標本について – . 川崎市青少年科学館紀要, (30): 57–66.
- 川島逸郎・渡辺恭平・堀内慈恵・高梨沙織, 2018. 川崎市青少年科学館所蔵細腰亜目 (昆虫綱: 膜翅 (ハチ) 目) 標本目録. 川崎市青少年科学館紀要, (28): 82–118.
- 川島逸郎・矢ヶ崎朋樹・堀内慈恵, 2024. 川崎市幸区でコアシナガバチの現存を確認. 神奈川虫報, (212): 19–20.
- Kojima, J., 1997. Taxonomic notes on the social wasps in the Kanto Plain, central Japan (Insecta: Hymenoptera: Vespidae). *Natural History Bulletin of Ibaraki University*, (1): 17–44.
- 長瀬博彦, 2004. ハチ目 (アリ科を除く) Hymenoptera (excl. Formicidae). 神奈川県昆虫誌 [III]. pp. 1241–1326. 神奈川昆虫談話会, 小田原.
- 長瀬博彦, 2006. ハチ類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp. 431–435. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 長瀬博彦・渡辺恭平, 2018. ハチ目 Hymenoptera. 神奈川県昆虫誌 2018 [III]. pp. 934–1038. 神奈川昆虫談話会, 小田原.
- 小川 宏, 1983. 科学のアルバム. アシナガバチ. 54 pp., あかね書房, 東京.
- 小川 宏, 2005. アシナガバチ観察事典 (自然の観察事典 32). 39 pp., 偕成社, 東京.
- 大場信義, 1981. 神奈川県の蜂類. 神奈川県の動物相 神奈川県昆虫調査報告書. pp. 219–225. 神奈川県教育委員会, 横浜.
- 鈴木雅博, 1955. 横須賀及び田浦附近の蜂類について. 生物科学 県立横須賀高等学校生物部誌, (5): 43–45.
- 鈴木 裕・川島逸郎, 2001. 三浦半島産膜翅目 (有剣類). 神奈川虫報, (134): 1–28.
- 寺山 守・須田博久 編著, 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. i–xxxvi + 735 pp., 東海大学出版部, 平塚.
- 渡辺恭平・川島逸郎・関 悦子, 2020. 川崎市立日本民家園における調査で得られたハチ目昆虫. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (49): 119–143.

川島逸郎 : itsurok29@jcom.home.ne.jp

鹿児島県内で採集されたカリバチ類の記録

山根正気・幾留秀一
(鹿児島市)

Records of aculeate wasps (Hymenoptera, Aculeata) collected in Kagoshima Prefecture, Japan

Seiki Yamane & Shuichi Ikudome
(Kagoshima, Japan)

Abstract. Fifty-seven wasp species in 28 genera belonging to 8 families are recorded from Kagoshima Prefecture, southern Kyushu and northern Ryukyus, Japan, based on 621 specimens collected during the period from 1978 to 2024. New distribution records are presented for the following six species: *Auplopus williamsi* (Pompilidae) new to Kagoshima Pref., *Chrysis angolensis* (Chrysididae) to the Northern Ryukyus, *Neotrogaspidia pustulata* (Mitillidae) to the Kuchino-mishima group, *Cyphononyx fulvognathus* and *Batozonellus annulatus* (Pompilidae) to Take-shima of the Kuchino-mishima group, and *Tachypompilus analis* (Pompilidae) to Okinoerabu-jima. Flower-visiting records are presented for many wasp specimens collected.

緒言

近年、県レベルで昆虫相を明らかにするための目録作りが行われており、九州では既に宮崎県の目録を見ることができる(岩崎, 2020)。筆者らは2021年に鹿児島昆虫相調査会を立ち上げて、2026年中の鹿児島県昆虫目録刊行を目途に情報収集と編集作業を遂行中である。

当然のことではあるが、情報の量と質にはいろいろな面で偏りがある。なかでも、日常ごく普通に見られるムシの情報量が意外と乏しいことに気付かされる。採集して来なかった訳ではない。そこに存在することを特段取り上げる必要性に迫られることもなく、単に記録することを怠ってきた感は否めない。ここへ来て、改めて記録しておくことの重要性を痛感させられる。しかも、それが普通種であれば尚更のことである。

一方質的には、生物地理学的な観点から本土よりも島嶼地域への興味関心が高くなる傾向があり、相対的に本土へ目を向けることが少なくなっていることも否めない。愛好家の多い一部の昆虫群を除けばどの昆虫群にも言えることで、ここで扱うカリバチ類もその例外ではないことが判った。

そこで、情報としては少々古いが、いや、だからこそ意義あるものと思慮し、この機会に記録に留めておきたい。

材料と方法

ここに記録するカリバチ類は、筆者の一人幾留秀一が県内各地においてハナバチ類の野外調査を実施した際に、副次的に開花植物の花上で採集したものである。その野外調査は、以下の通りである。()はその成果物：調査の概要等参照されたい。

1. 1978–2024年：本土および甌島における不定期採集。
2. 1978–1998年：南西諸島における生物地理学的調査(山根ら, 1999)。
3. 1980年：鹿児島市城山公園における生態学的定期調査(幾留, 1992)。
4. 1982, 1983年：屋久島人里地域における生態学的定期調査(幾留, 2005)。
5. 1994, 1995年：種子島における生態学的定期調査(幾留, 未発表)。
6. 2005年：口之三島硫黄島における生物地理学的調査(Ikudome & Yamane, 2007)。
7. 2006, 2007年：口之三島黒島における生物地理学的調査(Yamane & Ikudome, 2008)。
8. 2007年：口之三島竹島における生物地理学的調査(Ikudome & Yamane, 2009)。

これらのうち2については、「南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説」(山根ら, 1999)として出版したが、そこでは紙幅の都合により各種の詳細な採集データを割愛したので、後れ馳せながら今回ここに記録するものである。なお、口之三島については、基本的には既報で発表済みであり、ここに掲載した一部は重複していることをお断りしておきたい。

標本数は621個体で、著者の一人山根正気が全標本を同定した。以下のリストにおける学名および和名は、日本昆虫目録(日本昆虫目録編集委員会編, 2020)に準じ、データの配列は、本土および島別に雌雄(略記号W: 働きバチ)別個体数・標高(判明したもののみ)・採集地名・採集年月日・植物名とし、採集者(すべて幾留秀一)名は省略した。当該地域(島など)からの新記録には*印を付した。通常カリバチ類の採集データに訪花植物名を挙げることはほとんどないが、両者の関係において、ハナバチ類ほどではないもののカリバチ類も送粉の機能を有していることが知られている。ただし、ここに記した植物の送粉に当該カリバチが関与していたかどうかは確認していない。なお、標本は、現在個人的(幾留)に保管されている。

結果と考察

目録

CHRYSIDOIDEA セイボウ上科

CHRYSIDIDAE セイボウ科

Chrisidinae セイボウ亜科

Chrisidini セイボウ族

Chrysis angolensis Radoszkowski, 1881 クロバネセイボウ

屋久島* : 2M, 0–60 m, Miyanoura, 26.IX.1982, カワラケツメイ .

[付記] これまで県本土と中琉球・南琉球から知られていた。北琉球初記録。

Chrysis ignita (Linnaeus, 1758) リンネセイボウ

屋久島 : 2M, 0–60 m, Miyanoura, 26.IX.1982, カワラケツメイ .

Stilbum cyanurum (Förster, 1771) オオセイボウ

本土 : 1M, 20–207 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 16.X.1980, セイタカアワダチソウ ; 1M, same loc. & date, オトコエシ ; 1M, same loc., 8.XI.1980, タデ .

POMPILOIDEA クモバチ上科
MUTILLIDAE アリバチ科
Mutillinae ナミアリバチ亜科
Trogaspidiini フタホシアリバチ族

Neotrogaspidia pustulata (Smith, 1873) フタホシアリバチ

竹島* : 1F, 27.VII.2007; 1M, same date, ポーチュラカ .

[付記] これまで口之三島からは記録がなかった。

POMPILIDAE クモバチ科
Pepsinae ムカシクモバチ亜科

Auplopus williamsi (Rohwer, 1919) ナンヨウヒメクモバチ

沖永良部島* : 1F, Wadomari, 19.X.1989.

[付記] 国内ではこれまで沖縄県のみから知られていた。鹿児島県初記録。

Cyphononyx fulvognathus (Rohwer, 1911) ベッコウクモバチ

竹島* : 1F & 1M, 26.VII.2007; 沖永良部島 : 1F, Ôjira, 28.VI.1989, クロタラリア .

[付記] 従来、キバネオオベッコウ *Cyphononyx dorsalis* (Lepeletier, 1845) とされてきた。

Pompilinae ナミクモバチ亜科

Batozonellus annulatus (Fabricius, 1793) キオビクモバチ

竹島* : 1F, 28.VII.2007, ボタンボウフウ .

Tachypompilus analis (Fabricius, 1781) ツマアカクモバチ

徳之島 : 1F, Hetono, 26.VI.1989. 沖永良部島* : 1F, Ôjira, 28.VI.1989, クロタラリア . 与論島 : 1F, Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ .

SCOLIOIDEA ツチバチ上科
SCOLIIDAE ツチバチ科
Scoliinae ツチバチ亜科
Campsomerini ハラナガツチバチ族

Campsomeriella annulata annulata (Fabricius, 1793) ヒメハラナガツチバチ

本土 : 1F, 20–107 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 17.VI.1980, ヒメジョオン ; 8M, 60–70 m, Kanoya-shi, 30.VIII.1981, イヌザンショウ ; 1M, same loc., 8.IX.1981, イヌザンショウ ; 1M, 20–107 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 15.IX.1980, クズ ; 1F, same loc., 24.IX.1980, キツネノマゴ ; 2M, Makizono, 19.X.1978; 1M, 20–107 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 28.X.1980, ホワイトクローバー . 種子島 : 1F, Nishino'omote, 20.IV.1995, キンポウゲ ; 4F, same loc.,

13.V.1995, ミヤコグサ ; 2F, same loc. & date, トベラ ; 1M, same loc., 14.VII.1995, ギョリュウ ; 1F, same loc. & date, クンシヨウギク ; 1M, same loc. & date, ボタンボウフウ ; 1M, same loc. & date, ハマアザミ ; 2M, Nakatane-chô, 14.VII.1995, ミソハギ ; 1F & 4M, Minamitane-chô, same date, オミナエシ ; 3F & 6M, same loc., 16.VIII.1994, イヌザンシヨウ ; 1F & 3M, Nishino'omote, 17.VIII.1994, ミソハギ ; 3M, Nakatane-chô, 17.VIII.1994, イヌザンシヨウ ; 1F & 3M, same loc., 16.IX.1994, ポーチュラカ ; 1F, same loc. & date, ヒマワリ ; 1M, Minamitane-chô, same date, サンカクヅル ; 1M, same loc. & date, センニチソウ ; 1F, same loc. & date, フジウツギ ; 2F, Nakatane-chô, 17.IX.1994, アキノノゲシ ; 2M, Nishino'omote, 16.X.1994, ヤマジノギク ; 9F & 8M, same loc. & date, ツルソバ ; 1F & 8M, Nakatane-chô, same date, セイタカアワダチソウ ; 1F, same loc. & date, センダングサ ; 2M, same loc. & date, アキノノゲシ ; 4F & 1M, same loc. & date, ゲンノシヨウコ ; 1F & 5M, same loc., 17.X.1994, キツネノマゴ ; 6F & 4M, same loc. & date, セイタカアワダチソウ ; 1F, same loc. & date, セイヨウヒルガオ ; 1M, same loc. & date, ヒキオコシ ; 3F, same loc. & date; 2M, Minamitane-chô, same date, アキノノゲシ . 竹島 : 1F & 1M, 26.VII.2007; 2F, 27.VII.2007, ムクゲ ; 4F, same date, ゲットウ ; 5F, same date, ウラジロフジウツギ ; 2F, 28.VII.2007, ボタンボウフウ ; 5M, 22.X.2007, ヤマヒヨドリ ; 8M, same date, ツルソバ ; 3M, same date, ポーチュラカ ; 7F & 3M, 23.X.2007, ホソバワダン ; 2F & 4M, same date, ポーチュラカ ; 3F & 1M, same date, ホソバワダン . 硫黄島 : 2F, 4.V.2007, シャリンバイ .

Campsomeriella annulata sakaguchii (Uchida, 1934) サカグチハラナガツチバチ

奄美大島 : 4M, Ayamaru-misaki, 5.VII.1988; 2F & 2M, 10 m, Uttabaru, Kasari-chô, 18.X.1987, ホソバワダン . 徳之島 : 11M, Hetono, 26.VI.1989; 8F & 1M, Hetono, 24.X.1990, ミゾソバ . 沖永良部島 : 1F, Ôjiro, 28.VI.1989, クロタラリア ; 1M, Wadomari, 18.X.1989, ポーチュラカ ; 1M, same loc., 19.X.1989. 与論島 : 2F, Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ ; 1F & 2M, same loc., 28.VI.1989, シナガワハギ .

Megacampsomeris grossa (Fabricius, 1804) オオハラナガツチバチ

奄美大島 : 1F, 10 m, Uttabaru, Kasari-chô, 18.X.1987, ホソバワダン .
 [付記] これまで島嶼部からの記録は確実でなかった。奄美大島に産する事が確実となった。

Megacampsomeris mojiensis mojiensis (Uchida, 1934) キイロハラナガツチバチ

本土 : 1F, 900 m, Meinoo, Kanoya, 7.IX.1980, ヤマハギ . 種子島 : 3F & 2M, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンシヨウ ; 2F & 4M, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンシヨウ ; 1F & 1M, Nakatane-chô, same date, カラスザンシヨウ ; 1F & 1M, same loc., 16.X.1994, セイタカアワダチソウ ; 1F, Minamitane-chô, 17.X.1994, アキノノゲシ . 竹島 : 2F & 1M, 26.VII.2007, ボタンボウフウ ; 1M, same date, オオムラサキシキブ ; 1M, 26.VII.2007, ウラジロフジウツギ ; 1M, 27.VII.2007, ゲットウ ; 3M, 28.VII.2007, ボタンボウフウ ; 1M, 22.X.2007; 2M, same date, ツルソバ ; 2M, same date, ホソバワダン ; 1F & 5M, same date, ヤマヒヨドリ ; 1F & 1M, same date, ポーチュラカ . 硫黄島 : 1F & 1M, 4.V.2007, シャリンバイ .

Megacampsomeris mojiensis ryukyuana (Tsuneki, 1972) アカアシハラナガツチバチ

諏訪之瀬島 : 8M, 50–120 m, 30.VII.1985, ノブドウ ; 7M, same loc. & date, オオアレチノギク . 悪石島 : 4M, 150–230 m, 2.VIII.1985, シラタマカズラ ; 2M, same loc. & date, ソクス . 徳之島 : 4M, Hetono, 26.VI.1989.

Megacampsomeris schulthessi (Betrem, 1928) シロオビハラナガツチバチ

本土 : 1F, 20–107 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 19.III.1980, ニガイチゴ ; 1F, same loc., 15.IV.1980, マルバウツギ ; 5F, same loc., 29.IV.1980, ホワイトクローバー ; 1F, same loc., 5.IV.1980, クサイチゴ ; 1F, same loc. & date, ホワイトクローバー ; 1M, same loc. & date, オドリコソウ ; 1F, Kanoya-shi, 30.VIII.1981, イヌザンショウ ; 1F & 1M, Sarugajô, Tarumizu, 8.X.2001, ヤマハギ . 種子島 : 1M, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, ハマゴウ ; 1M, same loc. & date, イヌザンショウ ; 1F, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンショウ ; 1F & 3M, Nakatane-chô, same date, イヌザンショウ ; 1F, same loc., 16.X.1994, セイタカアワダチソウ . 奄美大島 : 2M, 10 m, Uttabaru, Kasari-chô, 17.X.1987, ホソバワダン ; 4M, same loc., 18.X.1987, ホソバワダン . 喜界島 : 2M, 5 m, Nakazato, 18.X.1987, ソクス ; 2F, same loc. & date, ヒヨドリバナ ; 4F, 20 m, Nakama, 19.X.1987, ソクス .

Scoliini ナミツチバチ族

Scolia (Carinoscolia) fascinata fascinata Smith, 1873 アカスジツチバチ

本土 : 1M, 20–107 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 25.VI.1980, ヒメジョオン . 種子島 : 1F, Minamitane-chô, 16.VII.1994, イヌザンショウ .

Scolia (Carinoscolia) fascinata hoozanensis Betrem, 1928 ホウザンツチバチ

諏訪之瀬島 : 1M, 50–120 m, 30.VII.1985, ノブドウ . 奄美大島 : 4M, Ayamaru-misaki, 5.VII.1988.

Scolia (Discolia) binotata formosensis Betrem, 1928 ヨツボシツチバチ

奄美大島 : 4M, Ayamaru-misaki, 5.VII.1988; 与論島 : 4F & 4M, Chabana, 28.VI.1989, シナガワハギ . [付記] 本種はかつて *Scolia quadripustulata* Fabricius, 1782 とされてきた。

Scolia (Discolia) decorata Burmeister, 1854 コモンツチバチ

本土 : 1M, 60–70 m, Kanoya-shi, 30.VIII.1981, イヌザンショウ . 種子島 : 1M, Minamitane-chô, 14.VII.1994, オミナエシ ; 5M, same loc., 16.VIII.1994, イヌザンショウ ; 1M, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンショウ ; 1F, same loc., 17.IX.1994, ミソハギ ; 3F, Nakatane-chô, 16.X.1994, セイタカアワダチソウ ; 1M, Nishino'omote, same date, ヤマジノギク ; 1F, Nakatane-chô, 17.X.1994.

Scolia (Discolia) kuroiwaie Matsumura et Uchida, 1926 クロイワツチバチ

奄美大島 : 1M, 10 m, Koniya, Setouchi-chô, 23.VI.1987, ムクゲ . 徳之島 : 1M, Kametoku, 21.VI.1990, サルスベリ ; 1F & 10M, Hetono, 26.VI.1989.

Scolia (Discolia) oculata (Matsumura, 1911) キオビツチバチ

種子島 : 3M, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンショウ ; 1F & 4M, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンショウ ; 6M, Nakatane-chô, same date, イヌザンショウ ; 1F, same loc. & date, ムクゲ .

Scolia (Scolia) histrionica japonica Smith, 1873 オオモンツチバチ

本土 : 1M, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 25.VII.1980, カラスザンショウ . 種子島 : 1M, Nishino'omote, 14.VII.1994, クンショウギク ; 1F, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンショウ ; 1M, Nakatane-chô, 16.IX.1994, ポーチュラカ .

VESPOIDEA スズメバチ上科

VESPIDAE スズメバチ科

Eumeninae ドロバチ亜科

Anterhynchium (Dirhynchium) flavomarginatum micado (Kirsch, 1878) オオフタオビドロバチ

本土 : 1F, 20–107 m, Shiroyama Park, Kagoshima-shi, 16.X.1980, サザンカ . 種子島 : 1F, Nishino'omote, 14.VII.1995, ボタンボウフウ ; 2F, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンショウ ; 2F, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンショウ ; 1F, same loc. & date, ボタンボウフウ ; 1F, Nakatane-chô, same date, イヌザンショウ ; 1F, Minamitane-chô, 16.IX.1994, センニチコウ ; 1F, Nakatane-chô, same date, ノブドウ ; 1F, Nishino'omote, 17.IX.1994, ミソハギ . 与論島 : 3M, Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ .

[付記] 与論島の個体群は、斑紋では本土産と区別できない。人為導入の可能性もある。

Anterhynchium (Dirhynchium) flavomarginatum procera Yamane, 1983 オオフタオビドロバチ

竹島 : 1F & 2M, 26.VII.2007, ボタンボウフウ ; 2F, 27.VII.2007, ムクゲ .

Delta esuriens okinawae Giordani Soika, 1986 クロスジスズバチ

徳之島 : 2M, Kametoku, 23.X.1990, キダチハマグルマ . 与論島 : 1M, Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ ; 5M, same loc., 28.VI.1989, シナガワハギ ; 7M, same loc., 18.X.1989, センダングサの1種 .

Eumenes micado Cameron, 1904 ミカドトックリバチ

本土 : 1F, 10 m, Ônejime-chô, 6.VI.1987, アカメガシワ . 種子島 : 1F, Minamitane-chô, 16.IX.1994, メドハギ ; 1F, Nishino'omote, 17.IX.1994, ミソハギ .

Eumenes rubronotatus Pérez, 1905 ムモントックリバチ

本土 : 2F, 70 m, Tajiri, Sata-chô, 7.VI.1987, アカメガシワ . 種子島 : 5F, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンショウ ; 1F, Nakatane-chô, 17.VIII.1994, イヌザンショウ ; 1F, same loc., 16.X.1994, アキノノゲシ .

Euodynerus (Euodynerus) dantici nigrrescens Gusenleitner, 1979 ミナミカバオビドロバチ
 徳之島 : 2M, Hetono, 26.VI.1989. 与論島 : 1F & 5M, Chabana, 27-28.VI.1989; 1F & 1M, same loc., 28.VI.1989, シナガワハギ.

Euodynerus (Pareuodynerus) nipanicus nipanicus (Schulthess, 1908) ミカドドロバチ
 種子島 : 1F, Nishino'omote, 14.VII.1995, ボタンボウフウ.

Euodynerus (Pareuodynerus) nipanicus flavicornis Yamane, 1987 ミカドドロバチ
 与論島 : 1M, Chabana, 27-28.VI.1989; 2F & 3M, same loc., 28.VI.1989, シナガワハギ.

Euodynerus trilobus (Fabricius, 1787) ジュウジドロバチ
 与論島 : 7M, Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ ; 2M, same loc., 27-28.VI.1989, 2M, same loc., 28.VI.1989, シナガワハギ.

Rynchium quinquecinctum murotai Tano, 1983 ムロタオオドロバチ
 徳之島 : 1M, Hetono, 26.VI.1989; 1M, Hetono, 16.X.1989, コバノセンナ.

Stenodynerus chinensis kalinowskii (Radoszkowski, 1890) カタグロチビドロバチ
 竹島 : 1F, 27.VII.2007, メナモミ . 硫黄島 : 1M, 4.V.2007, シャリンバイ.

Stenodynerus frauenferdi (de Saussure, 1867) キオビチビドロバチ
 種子島 : 1F, Minamitane-chô, 14.VII.1995, オミナエシ.

Stenodynerus kusigematii kusigematii Yamane et Gussenleitner, 1982 ミナミチビドロバチ
 与論島 : 1F, Chabana, 28.VI.1989, シナガワハギ.

Polistinae アシナガバチ亜科

Polistini アシナガバチ族

Polistes (Gyrostoma) jokahamae jokahamae Radoszkowskij, 1887 セグロアシナガバチ
 本土 : 1F, 70 m, Tajiri, Sata-chô, 7.VI.1987, アカメガシワ . 竹島 : 1F, 26.VII.2007; 2F, 27.VII.2007, メナモミ ; 1F, 22.X.2007. 硫黄島 : 1F, 4.V.2007, シャリンバイ.

Polistes (Gyrostoma) rothneyi iwatai van der Vecht, 1968 キアシナガバチ
 種子島 : 1F, Nishino'omote, 14.VII.1995, タマリユウ . 悪石島 : 7F, 150-230 m, 2.VIII.1985, カラスザンショウ . 奄美大島 : 2F, 10 m, Koniya, Setouchi-chô, 23.VI.1987, ムクゲ.

Polistes (Polistella) formosanus Sonan, 1938 タイワンアシナガバチ
 喜界島 : 1M, 20 m, Nakama, 19.X.1987, ソクズ . 徳之島 : 1F, Hetono, 26.VI.1989. 与論島 : 1F,

Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ; 1F & 2M, same loc., 27–28.VI.1989; 1M, same loc., 17–18.X.1989, ヘチマ.

Polistes (Polistella) nipponensis Pérez, キボシアシナガバチ

本土: 1F, Izashiki, Minami-ôsumi, 7.V.2022, ウツギ.

Polistes (Polistes) chinensis chinensis (Fabricius, 1793) フタモンアシナガバチ

与論島: 1F, Chabana, 21.VI.1990, シナガワハギ; 1F & 1M, same loc., 27–28.VI.1989; 1F, same loc., 18.X.1989, センダングサの1種.

[付記] 与論島からの古い記録はなく、1980年代に沖縄島から飛来、あるいは人為導入された可能性がある。

Ropalidiini チビアシナガバチ族

Ropalidia fasciata (Fabricius, 1804) オキナワチビアシナガバチ

喜界島: 12F & 5M, 5 m, Nakazato, 18.X.1987, ハマヒルガオ; 1M, same loc. & date, ソクス.
徳之島: 1M, Kametoku, 23.X.1990, キダチハマグルマ; 1F, Hetono, 24.X.1990, ミゾソバ. 与論島: 2F, Chabana, 27–28.VI.1989, シナガワハギ.

Vespinae スズメバチ亜科

Vespa analis insularis Dalla Torre, 1894 コガタスズメバチ

種子島: 1F, Nakatane-chô, 20.IV.1995, ナツグミ; 1F, Nishino'omote, 14.VII.1995, ハマアザミ; 1F, Nakatane-chô, 17.IX.1994, アキノノゲシ; 1F, same loc., 16.X.1994, アキノノゲシ; 1F, Nishino'omote, same date, コスモス; 2F, Nakatane-chô, 17.X.1994, ハギ.

Vespula (Paravespula) shidai amamiana Yamane, 1987 アマミクロスズメバチ

奄美大島: 1W, 10 m, Koniya, Setouchi-chô, 23.VI.1987, ムクゲ; 2W, 150 m, Shinmura, Sumiyô-son, 21.X.1987, ウコギ; 2w, same loc. & date, アキノノゲシ.

APOIDEA ミツバチ上科

CRABRONIDAE ギングチバチ科

Crabroninae ギングチバチ亜科

Larrini ケラトリバチ族

Liris aurulentus (Fabricius, 1787) キンイロコオロギバチ

喜界島: 1F, 5 m, Nakazato, 18.X.1987; 1F, 20 m, Nakama, 19.X.1987, ソクス. 沖永良部島: 1M, Wadomari, 19.X.1989. 与論島: 1F & 1M, Chabana, 18.X.1989, センダングサの1種.

Liris festinans (Smith, 1858) ヒメコオロギバチ

与論島: 1F, Chabana, 18.X.1989, センダングサの1種.

Tachysphex nigricolor nigricolor (Dalla Torre, 1897) ヤマトヌカダカバチ
与論島: 2F & 1M, Chabana, 28.VI.1989, シナガワハギ.

Trypoxylini ジガバチモドキ族

Trypoxylon petiolatum Smith, 1858 ナミジガバチモドキ
竹島: 1F, 22.X.2007. 奄美大島: 1F, 5 m, Uttabaru, Kasari-chô, 18.X.1987, ホソバワダン.

Trypoxylon thaianum dubiosum Tsuneki, 1964 トキンジガバチモドキ
徳之島: 1F, Hetono, 26.VI.1989.

SPHECIDAE アナバチ科

Sceliphrinae ドロジガバチ亜科

Sceliphринi ドロジガバチ族

Carlybion japonicum (Gribodo, 1882) ヤマトルリジガバチ
屋久島: 1F, 0–60 m, Miyanoura, 26.V.1982, アカメガシワ; 1F, 40–200 m, Onoaida, 29.VI.1982; 1F, same loc., 17.VII.1982, 与論島: 1M, Chabana, 28.VI.1989, シナガワハギ.

Sceliphron (Sceliphron) madraspatanum madraspatanum (Fabricius, 1871) キゴシジガバチ
屋久島: 1M, 0–60 m, Miyanoura, 26.VII.1982; 2F & 1M, same loc., 26.IX.1982, カワラケツメイ.

Sceliphron (Sceliphron) madraspatanum kohli Sickmann, 1894 キゴシジガバチ
奄美大島: 1F & 1M, 10 m, Koniya, Setouchi-chô, 23.VI.1987, ムクゲ; 1F, 10 m, Uttabaru, Kasari-chô, 17.X.1987, ホソバワダン. 徳之島: 4F, Hetono, 26.VI.1989; 1F, Itokina, 27.VI.1989, チシャノキ. 沖永良部島: 1F, Wadomari, 26.X.1990, ランタナ. 与論島: 1F, Chabana, 28.VI.1989, シナガワハギ; 2F & 1M, same loc., 18.X.1989, センダングサの1種.

Sphecinae アナバチ亜科

Prionychini オキナワアナバチ族

Prionyx viduatus (Christ, 1791) オキナワアナバチ
与論島: 1F, Chabana, 28.VI.1989, シナガワハギ.

Sphecini アナバチ族

Isodontia nigella (Smith, 1856) コクロアナバチ
本土: 3M, 60–70 m, Kanoya-shi, 30.VIII.1981, イヌザンショウ; 1F, same loc., 8.IX.1981, イヌザンショウ. 種子島: 2M, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンショウ; 1M, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンショウ. 屋久島: 1M, 0–60 m, Miyanoura, 26.VII.1982; 1M, same loc., 23.VIII.1982, コフジウツギ; 1F, same loc., 26.IX.1982, カワラケツメイ. 竹島:

1M, 26.VII.2007; 1F, same date, ボタンボウフウ ; 1F & 2M, 28.VII.2007, ボタンボウフウ . 諏訪之瀬島 : 1M, 50–120 m, 30.VII.1985, ノブドウ . 悪石島 : 2M, 150–230 m, 2.VIII.1985, シラタマカズラ ; 6M, same loc. & date, ソクズ . 奄美大島 : 1M, 150 m, Shinmura, Sumiyô-son, 21.X.1987, イタドリ ; 1M, same loc. & date, アキノノゲシ . 喜界島 : 2M, 5 m, Nakazato, 18.X.1987; 3M, 20 m, Nakama, 19.X.1987, ソクズ . 徳之島 : 1F, Kametoku, 23.X.1990, キダチハマグルマ .

Sphex argentatus argentatus Fabricius, 1787 クロアナバチ

諏訪之瀬島 : 1F & 4M, 50–120 m, 30.VII.1985, ノブドウ ; 6F & 1M, 50–120 m, 31.VII.1985. 悪石島 : 1F & 2M, 150–230 m, 2.VIII.1985, ソクズ ; 1M, same loc. & date, カラスザンショウ . 喜界島 : 1M, 5 m, Nakazato, 18.X.1987, ソクズ . 与論島 : 1F, Chabana, 17–18.VI.1989; 3F & 3M, same loc., 27–28.VI.1989.

[付記] 名義タイプ亜種に対しタイワンクロアナバチという和名が用いられているが、広域に分布する亜種ということもあり、今回はクロアナバチとした。

Sphex argentatus fumosus Kohl, 1890 クロアナバチ

本土 : 3M, 60–70 m, Kanoya-shi, 30.VIII.1981, イヌザンショウ ; 1F, same loc., 8.IX.1981, イヌザンショウ . 種子島 : 1M, Minamitane-chô, 16.VIII.1994, イヌザンショウ ; 1F & 1M, Nishino'omote, 17.VIII.1994, カラスザンショウ . 屋久島 : 1F, 0–10 m, Miyanoura, 24.VIII.1982. 2F, 20–30 m, Kosedo, 22.X.1994.

Sphex diabolicus Smith, 1858, キンモウアナバチ

屋久島 : 1M, 0–60 m, Miyanoura, 26.VII.1982.

まとめ

ここに記録したカリバチ類は、8科28属57種である。これらのうち1種は鹿児島県初記録(ナンヨウヒメクモバチ)、1種は北琉球初記録(クロバネセイボウ)、4種は個別の島あるいは島グループ初記録であった(口之三島からフタホシアリバチ、沖永良部島からツマアカクモバチ、竹島からベッコウクモバチとキオビクモバチ)。また、オオハラナガツチバチは、古くから島嶼部(屋久島や奄美大島)の記録があったが、標本が発見されず、疑問が残されていた。今回、奄美大島から確実に記録された。今回は厳密な文献調査をしていないので、上記記録の中にはすでに報告済みのものがあるかもしれない。

従来、カリバチの記録には訪花する植物の記録を伴った例は稀であった。今回、32科67種にわたる多数の植物が記録されたが、中でもイヌザンショウ、カラスザンショウ、ソクズ、アカメガシワ、ノブドウ、マメ科やキク科の植物が、カリバチ類の重要な蜜源になっていることがわかった。また、カリバチ本来の習性から、一部は訪花中のハエ・アブ類やそれを狩るクモ類などを狩猟する場として飛来していた可能性もある。今回、花を巡る詳細な生態観察は行われていないが、今後の調査研究に期待したい。

引用文献

- 幾留秀一, 1992. 都市型自然公園の環境とハナバチ相. —鹿児島市城山公園における調査結果—附. 鹿児島県本土のハナバチ類改訂目録. 鹿児島女子短期大学紀要, (27): 99–135.
- 幾留秀一, 2005. 屋久島人里地域における野生ハナバチ相の生態的研究. 鹿児島女子短期大学紀要, (40): 1–20.
- Ikudome, S. & Sk. Yamane, 2007. Ants, wasps and bees of Iwo-jima, northern Ryukyus, Japan (Hymenoptera, Aculeata). *Bulletin of the Institute of Minami-Kyushu Regional Science, Kagoshima Women's Junior College*, (23): 1–7.
- Ikudome, S. & Sk. Yamane, 2009. Ants, wasps and bees of Take-shima, northern Ryukyus, Japan (Hymenoptera, Aculeata). *Bulletin of the Institute of Minami-Kyushu Regional Science, Kagoshima Women's Junior College*, (25): 1–8.
- 岩崎郁雄編, 2020. 宮崎県昆虫目録. 377 pp. 今坂正一監修, 宮崎昆虫調査研究会, クラインヴィッセン, 宮崎.
- 日本昆虫目録編集委員会編, 2020. 日本昆虫目録第9巻膜翅目(第3部細腰亜目有剣類). 434 pp. 日本昆虫学会, 京都.
- Yamane, Sk. & S. Ikudome, 2008. Ants, wasps and bees of Kuro-shima, northern Ryukyus, Japan (Hymenoptera, Aculeata). *Bulletin of the Institute of Minami-Kyushu Regional Science, Kagoshima Women's Junior College*, (24): 1–9.
- 山根正気・幾留秀一・寺山 守, 1999. 南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説. 24 pls, xii+831 pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.

山根正気 : mayiopa0@gmail.com

小笠原諸島固有種オガサワラコハキリバチの生態観察と保全への示唆

久末 遊^{1,2}・辻 尚道¹・井上正隆³

(¹一般財団法人 自然環境研究センター小笠原事務所；²東京都立大学大学院理学研究科；
³NPO 法人 小笠原海洋島研究会)

Some field observations of *Heriades fulvohispida* Yasumatsu & Hirashima, 1952
(Hymenoptera, Megachilidae) with implications for conservation

Yu Hisasue^{1,2}, Naomichi Tsuji¹ & Masataka Inoue³

(¹Ogasawara Division of Japan Wildlife Research Center, Okumura, Chichijima, Ogasawara, Tokyo, 100-2101, Japan; ²Department of Biological Sciences, Tokyo Metropolitan University, 1-1 Minami-Osawa, Hachioji-shi, Tokyo, 192-0397, Japan; ³Bonin Oceanic Island Studies Society, Okumura, Chichijima, Ogasawara, Tokyo, 100-2101, Japan)

緒 言

オガサワラコハキリバチ *Heriades fulvohispida* Yasumatsu & Hirashima, 1952 は小笠原諸島固有のハキリバチで、父島列島と母島列島に分布している(多田内・村尾, 2014)。本種は環境省および東京都の絶滅のおそれのある生物として、環境省で準絶滅危惧、東京都で絶滅危惧Ⅱ類に選定されており(環境省, 2025年7月15日閲覧; 高橋, 2014)、父島では1990年代、母島では2000年代以降はまったく見られていない(郷原, 2002)。本種の減少要因としてはセイヨウミツバチ *Apis mellifera* Linnaeus, 1758 との競合説、気候変動説、グリーンアノール *Anolis carolinensis* Voigt, 1832 による捕食圧説が挙げられているが(Kato *et al.*, 1999; 郷原, 2002)、今日ではグリーンアノールによる捕食圧が最も大きな影響を与えていると考えられている(高橋, 2014)。実際、本種が依然として多数分布している兄島では、グリーンアノールの胃内容物から本種が多数確認されている(高橋ら, 2014)。

本種の生態的知見は前田ら(2022)の総覧によると明らかになっていないとされるが、実際にはテリハハマボウ *Hibiscus glaber* (Matsum. ex Hatt.) Matsum. ex Nakai、ヒメツバキ *Schima wallichii* subsp. *mertensiana* (Siebold & Zucc.) Bloemb.、ヒメフトモモ *Syzygium cleyerifolium* (Yatabe) Makino、ヘラナレン *Crepidiastrum linguifolium* (A. Gray) Nakai、ムニンハナガサノキ *Morinda umbellata* L. subsp. *boninensis* (Ohwi) T.Yamaz. var. *hahazimensis* T.Yamaz.、モモタマナ *Terminalia catappa* L. への訪花記録が知られる(加藤, 1992; Kato *et al.*, 1999; 高橋・清水, 2007; 安部, 2009; 辻村ら, 2016)ほか、本種のオスが固有植物の送粉に関わっていること(Sugiura *et al.*, 2007)や、郷原(2002)により本種が借孔性の営巣生態であることが報告されている。また、同氏は緻密な生態調査によってハナバチ類の生息環境を区分した中で、本種を山地性に分類している。一方で、本種の発消長やどのような樹種、昆虫の孔を営巣基として利用しているかといった情報は不足している。加えて、本種は2000年代以降グリーンアノールが蔓延する父島および母島では確認されていない。兄島でグリーンアノールが発見されて10年以上が経過し、かつ分布を広げている現状(戸田, 2022)を鑑みると、本種の保全に向けて基礎的な生態的知見を蓄積しておくことには意味がある。ここに筆者らが観

察した本種および本種と関わる生物の生態的知見を報告する。なお、本種の学名は *Heriades fulvohispida* と書かれることが多いが、長瀬(2022)の見解に従い *Heriades fulvohispida* と記す。

材料と方法

観察および採集は2023年6月から2025年8月にかけて、筆者らが訪れた兄島および弟島にて実施した。観察は目視によって行い、必要に応じて撮影し状況を記録した。カメラは久末が Tough TG-7 (Olympus)、井上が $\alpha 7$ III (Sony)、辻が Tough TG-3 (Olympus) を用いた。さらに、筆者らに提供された標本も追加した。採集者および観察者は以下の通りである：KA- 芦澤航、YH- 久末遊、MI- 井上正隆、TK- 岸本年郎、NT- 辻尚道。また、本種の父島列島属島における分布を把握するために以下の島で分布の有無を調査した：弟島、兄島、西島、中通島、東島、巽島、南島。

結果

オガサワラコハキリバチ *Heriades fulvohispida* Yasumatsu & Hirashima, 1952 (図1)

[弟島] 1 F, 1 M, 鹿ノ浜, 6. VII. 2025, YH 採集; 1 F, 広根山北西部, 6. VII. 2025, NT 採集;



図1: メス(兄島); 2: ウスベニニガナを訪れたオス(兄島); 3: ヒメツバキの花周辺を飛翔する多数の個体(兄島)。

2 F, 広根沢, 5. VII. 2025, NT 採集 (ヒメツバキ); 1 F, 一ノ谷, 28. VI. 2025, YH 採集; 2 F, 6 M, 天海岳, 9. VI. 2025, YH 採集 (ヒメツバキ); 1 F, 藍ノ沢, 11. VII. 2023, YH 採集; 1 F, 藍ノ沢, 12. VII. 2023, YH 採集; 1 F, 藍ノ沢, 3-4. VII. 2024, NT 採集; 1 F, 藍ノ沢, 4. VII. 2024, NT 観察 (落枝) (図 8-13); 1 F, 藍ノ沢, 4. VII. 2024, YH 観察 (図 14-16); 1 F, 藍ノ沢, 26. V. 2025, YH 採集 (モクマオウ立ち枯れ); 1 F, 天海岳, 9. VI. 2025, YH 観察 (アカテツ); 1 F, 藍ノ沢, 30. VI. 2025, YH 採集; 1 F, 黒浜-藍ノ沢, 23. VIII. 2025, YH 採集; 9 F, 黒浜-藍ノ沢, 23. VIII. 2025, YH 観察 (モクマオウ立ち枯れ); 1 M, 小浜, 2. VI. 2025, YH 採集; 1 F, 小浜, 1. VII. 2025, NT 採集; 2 F, 1 M, 小浜, 1. VII. 2025, YH 採集.

[兄島] 1 M, 乾沢, 7. VII. 2024, YH 採集; 1 F, 尖山, 15. VII. 2023, YH 採集 (アカテツ立ち枯れ); 1 M, 尖山, 21. VI. 2025, KA 採集; 2 M, 尖山, 25. VII. 2025, YH 採集; 1 F, 7 M, 立神山-菅笠山, 9. VI. 2023, MI 撮影 (ヒメツバキ); 1 F, 菅笠山-大丸山, 17. VI. 2024, MI 撮影 (シマイスノキ立ち枯れ); 1 M, 尖山-菅笠山, 10. VI. 2023, YH 採集; 1 M, 菅笠山-尖山, 21. VIII. 2025, YH 観察 (ウスベニニガナ) (図 2); 5 M, 菅笠山, 24. V. 2025, YH 採集; 1 F, 大丸山, 25. VI. 2023, YH 採集; 2 F, 大丸山, 27. VI. 2023, YH 採集; 1 F, 大丸山, 24. VI. 2025, YH 採集; 2 F, 大丸山保全地域, 11-13. VII. 2024, NT 採集; 1 F, 大丸山保全地域, 24. VI. 2025, YH 観察 (ムニンヌツゲ立ち枯れ); 1 M, 北二子山, 30. V. 2025, YH 採集; 1 M, 南部, 22. V. 2013, TK 採集.

分布調査の結果、本種は弟島と兄島でのみ確認された。兄島では北部で多く見られた。ヒメツバキを訪れる個体がよく観察され、一株に 100 頭近くが訪花することもあった。

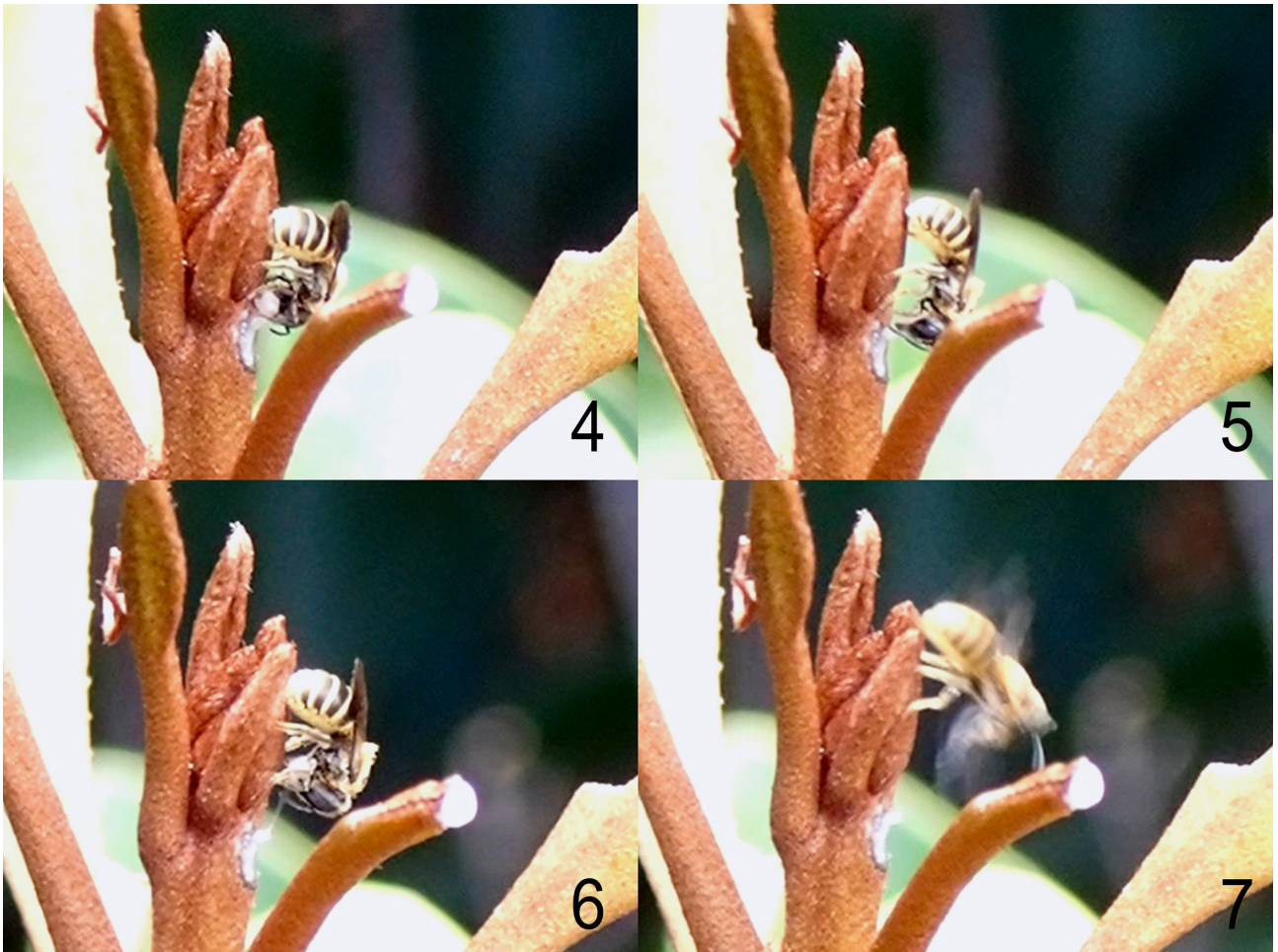


図 4-7. アカテツから樹脂を採取する本種 (弟島) .

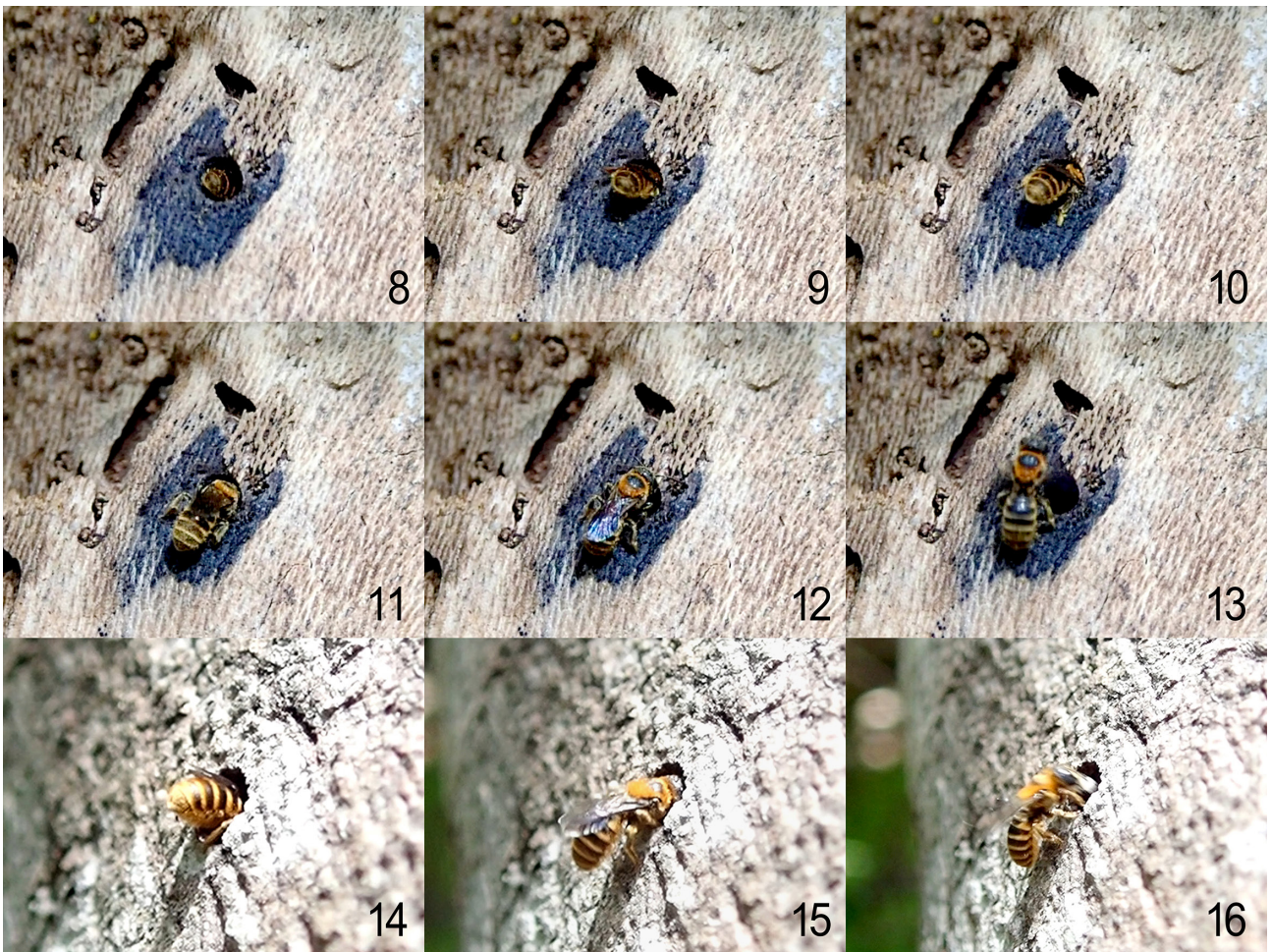


図8-16. 巣穴から脱出するメス（弟島）；8-13: 辻撮影；14-16: 久末撮影．

た（図3）。弟島天海岳の観察では、アカテツの枝から流れる樹脂を採取して飛び立った（図4-7）。兄島ではアカテツ、シマイスノキ *Distylium lepidotum* Nakai、シャリンバイ *Rhaphiolepis indica* (L.) Lindl. var. *umbellata* (Thunb.) H.Ohashi、ムニンイヌツゲ *Ilex matanoana* Makino の立ち枯れに空いた孔に多数の個体が入り出していた。弟島では、枯れたトクサバモクマオウ（モクマオウ）*Casuarina equisetifolia* L. に空いた孔に多数営巣していた。辻による弟島藍ノ沢の観察では、落枝に開いた孔に入った後、しばらくして脱出し飛び立つメスを観察した（図8-13）。この材の穴には *Parempleurus* 属のゾウムシとみられる死骸も観察された。同じく弟島藍ノ沢の久末による観察でも、立ち枯れに飛来したメスが3分10秒間巣穴に潜み、辻の観察と同様に後ずさりして巣穴から脱出し、すぐさま飛び立った（図14-16）。同じ木には、セイボウの一種（オガサワラセイボウ *Chrysis boninensis* Tsuneki, 1984 とと思われるが同定は保留した）が飛来しては、幹にとまって巣穴の周辺を歩き、また飛翔することを繰り返した。兄島の北西部の菅笠山と大丸山の間では、薬剤注入駆除されたモクマオウに空いた孔に営巣している本種の周辺で、オガサワラセイボウが孔を触角で触れる行動（図17）や、巣穴に出入りする本種を少し離れたところからうかがう様子（図18）が観察された。また、活動は9時から観察され、15時まで確認された。なお、撮影した映像は動物行動の映像データベースで閲覧できる（久末, 2025b, 2025c, 2025d）。



図 17, 18. オガサワラセイボウ . 17: オガサワラコハキリバチの巣穴に興味を示す様子 . 18: 巣穴に入ろうとする個体のそばで様子をうかがう . 写真は東京都提供 (井上撮影).

考 察

発生時期と活動時間

本種の採集時期が明記された文献と本報で得られた時期を合わせると、5月から9月まで発生していることが確認された。しかしながら、筆者らは10月から4月まではハナバチ類を観察する機会があまり得られなかった。年間を通じた調査や加賀(2022)が南島でハナバチの調査のために使用したトレイルカメラの設置によって、より詳細な消長が明らかにできると思われる。コハキリバチ属には *Heriades carinata* Cresson, 1864 のように年1化のものも知られる(Matthews, 1965)が、発生状況から本種はサキシマコハキリバチ *Heriades sakishimana sakishimana* Yasumatsu & Hirashima, 1956 (郷右近ら, 1999) などと同様に年多化と推測される。また、本種の活動時間は2014–2015年の研究(辻村ら, 2016)とよく合致していた。少なくともこの10年間に大きな変化はないようである。

営巣環境

本種は明るい稜線上の立ち枯れから、低木林内の立ち枯れを利用する様子が観察された。本種の属するコハキリバチ属は中空の枝や髄質をもつ植物のほか、他のハチが営巣した枯茎や虫瘻なども利用することが報告されている(Matthews, 1965; Michener, 1968; Maciel de Almeida Correia, 1980; Astapenková *et al.*, 2017)。本研究で大きく成長する木本にのみ本種の営巣が確認されたことは、本種の生活史に樹径の大きな樹種が必要であることを示唆している。本調査の結果と文献情報を含めると、大木の少ない中通島や東島、巽島といった小島、ノヤギの侵入によって大木が減少した聳島列島や南島では本種は確認されていない(加賀, 2022; 久末ら, 2025)。郷原(2002)の区分通り、本種が海岸環境よりも大きな森林を好むのは間違いないだろう。

本種の営巣環境は、高木林の高い位置では観察が困難であることも一因だろうが、グリーンアノールの生活圏とも合致する(安西ら, 2017)。巣穴への侵入前に付近をホバリングする行動もグリーンアノールからの捕食影響を受けの一因ではないかと考えられるが、これらは詳しい検証が必要である。

筆者らが観察できた巣穴の多くは、硬さのある材の辺材部まで続く穴で、脱出口は丸い形状をしたものが多かった。このような孔は、材内部まで幼虫が食入するカミキリムシ科やゾウムシ上科などの甲虫により創出されるものとみられ、実際に弟島の観察ではモモビロヤサクチカクシゾウムシ属 *Parempleurus* とみられるゾウムシの脱出口に出入りしている様子が観察された。さらに、トラカミキリ類の集まる材に開いた孔付近で採集された個体もいた。モモビロヤサクチカクシゾウムシ属の小笠原諸島産既知2種については近年では全く記録されておらず現在の生息状況が不明なものの、トラカミキリ類は有人島において現在は見られなくなった分類群である(楨原ら, 2004)。本種のような材穿孔性昆虫を利用する種にとっては、グリーンアノールからの直接の捕食だけでなく、生活史に関わる他の生物が捕食されることによる影響も大きいと考えられる(Mita *et al.*, 2015; Watanabe, 2024; 久末, 2025; 久末・秀島, 2025)。本種においても、減少要因を明らかにするには、巣構造や生息環境となる枯死木の孔を創出する昆虫類の種同定とその生態、分布現況をさらに調べる必要がある。

小笠原の植物との関係

訪花植物については特にヒメツバキで多く観察された(図3)が、新たに1種を追加し、7種への訪花が知られることとなった。また、弟島ではアカテツの樹脂の採取が確認されたが、これらは同様の生態をもつ同属他種の生態(Matthews, 1965; 郷右近ら, 1999)から推測して、巣の仕切壁として利用されていると考えられる。本種が採蜜以外でも固有植物を利用していることが明らかになったことは、本種の生活史の理解を促進させるだろう。反対に、モクマオウへの営巣やウスベニニガナ *Emilia sonchifolia* (L.) DC. への訪花など、外来種の利用も観察された。このような生態は小笠原のハナバチにとっては外来種が跋扈する環境下では種の存続を助けることが示唆される(加賀, 2022)が、一方で本種が担っていた在来生態系での役割を阻害することにもなりかねない(Abe *et al.*, 2011)。今後も諸島内の植物との関係には注視すべきだろう。

寄生者との関係

さらに、本種の天敵としてオガサワラセイボウの存在が示唆された。直接的な寄生の瞬間や巣穴から脱出する様子は観察されていないが、オガサワラセイボウと同じナミセイボウ属の *Chrysis laetabilis* du Buysson, 1887 はコハキリバチ属に寄生することが報告されている(Taylor, 1962)。加えて、ハナバチや狩りバチに寄生する他のセイボウ類にも見られる寄主やその巣穴をうかがう行動(岩田, 1971; Kimsey & Bohart, 1991; 田仲, 2012)が複数回観察された(図17-18)ことから、寄主である可能性は高いと考えられる。

オガサワラセイボウは本種(オガサワラコハキリバチ)よりランクの高い絶滅危惧IA類に選定されている(環境省, 2025年7月15日閲覧; 高橋, 2014)。現在、オガサワラセイボウは兄島では確認されているものの、模式標本が採集された父島では1970年代を最後に発見されていない(Mita *et al.*, 2015; 今井, 2020)。本種が2000年代以降父島で確認できていない(郷原, 2002; 安部, 2009)ことを鑑みると、オガサワラセイボウが本種のみを寄主としていた場合、父島では地域絶滅している可能性も考えられる。引き続き、寄生関係や両種の現在の分布状況を調査する必要がある。

本種の保全に向けて

本研究による近年の確認記録から、2013年にグリーンアノールの侵入が確認された兄島では侵入確認直後は南部でも採集されているものの、近年の筆者らの調査では全く得られていない。これは同じく固有のヨコバイバチ類の分布状況と同様である(久末, 2025a)。本研究で兄島の最も南部から得られているのは北二子山だが、これはグリーンアノールの2つ目の侵入防止柵(Bライン)の内側であり、この地域へのグリーンアノールの侵入はある程度抑制されていると考えてよい(山本, 2024)。兄島南部で本種が確認できなくなった要因は十分検証できていないが、グリーンアノールの侵入状況に加え、胃内容物に本種が見出された(高橋ら, 2014)ことも踏まえると、本種に対する脅威には違いないだろう。加えて、本種は他の在来ハナバチが確認されている母島属島において近年の訪花性昆虫の報告(川北ら, 2024)に登場せず、現在の分布状況は不明である。母島列島属島は調査不足が指摘されているため(久末・秀島, 2024, 2025)、再発見の可能性は十分考えられるが、本種が減少している場合は父島列島属島における既知産地の重要性が一層高まることとな

る。父島列島においても、荻部ら(2004)により2003年に本種が確認されていた西島では本研究による5回の調査で確認されておらず、現在の分布状況の再確認が必要である。

小笠原諸島で確認されている在来ハナバチのうち、山地性とされているのは本種とオガサワラメンハナバチ *Hylaeus boninensis* Yasumatsu, 1955、キムネメンハナバチ *Hy. incomitatus* Snelling, 1970、ヤスマツメンハナバチ *Hy. yasumatsui* Snelling, 1970の4種である(郷原, 2002)。また、郷原(2002)の区分で局地性とされているオガサワラキホリハナバチ *Lithurgus ogasawarensis* Yasumatsu, 1955もテリハハマボウに依存することから山地性の一部と捉えても支障ない。これらの種はオガサワラクマバチ *Xylocopa ogasawarensis* (Matsumura, 1912)を除く在来ハナバチと同じく絶滅危惧II類に選定されている(環境省, 2025年7月15日閲覧; 東京都, 2014)。生息環境および生息が可能な島が限られる可能性のあるこれらの種については、各島への外来生物の侵入リスクを考えると今後カテゴリーの見直しが必要かもしれない。

小笠原諸島のハチ類の保全は一部の事業者による献身的な活動(例えば加賀, 2022; 小笠原海洋島研究会, 2025年10月10日閲覧)以外には見当たらないが、久末(2025a)が指摘するように、人工的な営巣環境の創出も視野に入れた具体的かつ早急な対策を望む。ここまで本種の基礎的な知見を報告したが、細かな採餌のタイムスケジュールや巣の構造、発消長等は依然不明である。引き続き本種が生息すると考えられる周辺属島での本種の分布状況のモニタリングや関連する動植物との関係を調べることにより、本種の生息に必要な植生と保全すべき環境が浮き彫りになるだろう。

謝 辞

本稿で記録した標本の一部は環境省による「令和5年度父島列島及び母島列島自然再生施設グリーンアノール対策調査業務」、「令和6年度父島列島及び母島列島自然再生施設グリーンアノール対策調査業務」、「令和7年度父島列島及び母島列島自然再生施設グリーンアノール対策調査業務」で得られた。調査と公表の機会を与えていただいた、環境省関東地方環境事務所小笠原自然保護官事務所、関東森林管理局小笠原諸島森林生態系保全センターに深く感謝申し上げます。加えて、現地調査にて便宜を図っていただいた環境省小笠原自然保護官事務所、小笠原総合事務所国有林課の担当者の皆様、永野 裕氏(自然環境研究センター)、写真の提供をいただいた東京都小笠原支庁、貴重なサンプルをご提供いただいた芦澤 航氏(自然環境研究センター小笠原事務所)、オガサワラセイボウの同定を確認していただいた三田敏治博士(九州大学)に厚くお礼申し上げます。なお、本研究の一部は環境省・(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費(JPMEERF20244RB3)の助成を受けた。

引用文献

- 安部哲人, 2009. 小笠原諸島における送粉系攪乱の現状とその管理戦略(小笠原における外来種対策とその生態系影響). 地球環境, **14**: 47–55.
- Abe, T., K. Wada, Y. Kato, S.-I. Makino & I. Okochi, 2011. Alien pollinator promotes invasive mutualism in an insular pollination system. *Biological Invasions*, **13**: 957–967.

- 安西 航・高橋洋生・戸田光彦・遠藤秀紀, 2017. 父島と母島におけるグリーンアノールが利用する微小環境の島間差と雌雄差. 小笠原研究年報, (40): 45–52.
- Astapenková, A., P. Heneberg & P. Bogusch, 2017. Larvae and nests of Aculeate Hymenoptera (Hymenoptera: Aculeata) nesting in reed galls induced by *Lipara* spp. (Diptera: Chloropidae) with a review of species recorded. Part II. *PLoS ONE*, **12**(1): e0169592.
- 郷原匡史, 2002. 小笠原諸島のハナバチ相とその保全. ハチとアリの自然史—本能の進化学—, pp. 229–245. 北海道大学図書刊行会, 北海道.
- 郷右近勝夫・宮永龍一・前田泰生, 1999. 西表島産サキシマコハキリバチ *Heriades sakishimanus* Yasumatsu et Hirashima の営巣生態. 中国昆虫, (13): 15–22.
- 久末 遊, 2025a. 小笠原諸島におけるヨコバイバチ族(ハチ目: ギングチバチ科)の近年の分布. すがれおい, (8): 45–49.
- 久末 遊, 2025b. アカテツの樹脂を採取するオガサワラコハキリバチ. 動物行動の映像データベース. No.: momo251110hf01b (<http://www.momo-p.com/index.php?movieid=momo251110hf01b&embed=on>) (accessed on November 11, 2025)
- 久末 遊, 2025c. 樹脂を啜って巣穴から脱出するオガサワラコハキリバチ. 動物行動の映像データベース. No.: momo251111hf01b (<http://www.momo-p.com/index.php?movieid=momo251111hf01b&embed=on>) (accessed on November 11, 2025)
- 久末 遊, 2025d. 巣穴から脱出して飛び立つオガサワラコハキリバチ. 動物行動の映像データベース. No.: momo251114hf01b (<http://www.momo-p.com/index.php?movieid=momo251114hf01b&embed=on>) (accessed on November 11, 2025)
- 久末 遊・秀島祥吾, 2024. 小笠原諸島平島における固有ハチ類の観察記録. すがれおい, (6): 107–110.
- 久末 遊・秀島祥吾, 2025. 小笠原諸島固有種ツヤカバフドロバチの新分布と若干の生態観察. すがれおい, (8): 68–72.
- 久末 遊・朴 鎮亨・屋宜禎央, 2025. 聳島列島産アリ・ハチ目録. すがれおい, (8): 131–142.
- 今井 邑, 2020. 父島産のオガサワラセイボウ. 月刊むし, (598): 38–39.
- 岩田久二雄, 1971. 本能の進化—蜂の比較習性学的研究—. 503 pp. 真野書店, 神奈川.
- 加賀芳恵, 2022. 南島の昆虫類と固有ハナバチ類の保全. 昆虫と自然, **57**(1): 26–30.
- 環境省, online. 報道発表資料 環境省レッドリスト 2020 の公表について. 2020年3月27日. URL: <https://www.env.go.jp/press/107905.html> (accessed on July 15, 2025)
- 荻部治紀・高桑正敏・須田真一・松本浩一・岸本太郎・中原直子・長瀬博彦・鈴木 互, 2004. 神奈川県立生命の星・地球博物館が行った1997–2003年の調査で得られた小笠原の昆虫目録. 神奈川県立博物館調査研究報告(自然科学), (12): 65–86.
- 加藤 真, 1992. 小笠原における植物と送粉昆虫のパートナーシップ. *WWFJ Science Report*, **1**(1): 51–61.
- Kato, M., A. Shibata, T. Yasui & H. Nagamasu, 1999. Impact of introduced honeybees, *Apis mellifera*, upon native bee communities in the Bonin (Ogasawara) Islands. *Research on Population Ecology*, **41**: 217–228.
- 川北 篤・武田和也・望月 昂・田村ゆり・砂川勇太・宮本 通, 2024. 小笠原諸島固有植物の送粉者(予報). 小笠原研究年報, (47): 25–36.

- Kimsey, L. S. & R. S. Bohart, 1991 [1990]. The chrysidid wasps of the world. 652 pp. Oxford Science Publications, New York.
- Maciel de Almeida Correia, M.D.L., 1980. Contribution à l' étude de la biologie d' *Heriades truncorum* L. (Hymenoptera; Apoidea; Megachilidae). I. Aspect biologique et morphologique. *Apidologie*, **11**: 309–339.
- 前田泰生・郷右近勝夫・宮永龍一, 2022. 日本産野生ハナバチ類の生態知見の総覧とそれらの文献目録. ホシザキグリーン財団研究報告, (25): 309–336.
- 楨原 寛・北島 博・後藤秀章・加藤 徹・牧野俊一, 2004. グリーンアノールが小笠原諸島の昆虫相, 特にカミキリムシ相に与えた影響 – 昆虫の採集記録と捕食実験からの評価 – . 森林総合研究所研究報告, **3**(2): 165–183.
- Matthews, R. W., 1965. The biology of *Heriades carinata* Cresson. *Contributions of the American Entomological Institute*, **1**: 1–33.
- Michener, C. D., 1968. *Heriades spiniscutis*, a bee that facultatively omits partitions between rearing cells. *Journal of the Kansas Entomological Society*, **41**: 484–493.
- Mita, T., K. Watanabe & T. Kishimoto, 2015. Occurrence of *Chrysis boninensis* Tsuneki (Hymenoptera: Chrysididae) in Anijima Island, the Ogasawara Islands, with description of the male. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **21**(2): 191–194.
- 長瀬博彦, 2022. 「日本昆虫目録」第9巻第3部に載っているハチの追加情報. すがれおい, (2): 13–16.
- 小笠原海洋島研究会, online. 身近な固有ハナバチ類の保全 (2022 –) . URL: https://ogasawara-boiss.jp/?page_id=417 (accessed on October 10, 2025)
- Sugiura, S., T. Abe, Y. Yamaura & S. Makino, 2007. Flower-visiting behavior of male bees is triggered by nectar-feeding insects. *Naturwissenschaften*, **94**: 703–707.
- 多田内 修・村尾竜起編, 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 480 pp. 文一総合出版, 東京.
- 高橋秀男, 2014. オガサワラコハキリバチ. 492. レッドデータブック東京 2014 東京の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説版. 634 pp. 東京都環境局自然環境部, 東京.
- 高橋秀男・清水 晃, 2007. 首都大学東京 動物系統分類学研究室昆虫標本室所蔵小笠原諸島産膜翅目 (ハチ) 目標本. 小笠原研究, (32): 9–20.
- 高橋洋生・秋田耕佑・戸田光彦, 2014. 小笠原諸島に侵入したグリーンアノール: 父島と母島, 兄島. 昆虫と自然, **49**(9): 17–21.
- 田仲義弘, 2012. 狩蜂生態図鑑 ハンティング行動を写真で解く. 192 pp. 全国農村教育協会, 東京.
- Taylor, J. S., 1962. Notes on *Heriades freygessneri* Schletterer (Hymenoptera: Megachilidae). *Journal of the Entomological Society of South Africa*, **25**(1): 133–139.
- 戸田光彦, 2022. 小笠原諸島におけるグリーンアノール対策. 昆虫と自然, **57**(5): 15–19.
- 東京都, 2014. レッドデータブック東京 2014 東京の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説版. 東京都環境局自然環境部 634 pp.
- 辻村美鶴・清水 晃・苅部治紀・大林隆司・村上勇樹・村上哲明・加藤英寿, 2016. 外来種による小笠原在来植物の送粉系攪乱. 小笠原研究, (42): 23–64.
- Watanabe, K., 2024. Taxonomic revision of the extant species of the Japanese Stephanidae

(Hymenoptera), with discussion on distribution pattern and conservation importance.

Entomological Science, **27**(4): e12588, 1–20.

山本捺由他, 2024. 小笠原諸島の固有昆虫保全の現場から. 日本環境動物昆虫学会誌, **35**(2): 31–35.

久末 遊 : hybrizonist@gmail.com

オガサワラキホリハナバチを聳島列島で初確認

加賀芳恵¹・久末 遊^{2,3}

(¹ 〒100-2101 東京都小笠原村父島宮之浜道 NPO 法人小笠原自然文化研究所；
² 一般財団法人 自然環境研究センター小笠原事務所；³ 東京都立大学大学院理学研究科)

The first record of *Lithurgus ogasawarensis* (Hymenoptera, Megachilidae)
from Nakoudojima Island, Mukojima Island group, the Ogasawara Islands, Japan

Yoshie Kaga¹ & Yu Hisasue^{2,3}

(¹Institute of Boninology, Miyano Hamamichi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo, 100-2101, Japan;
²Ogasawara Division of Japan Wildlife Research Center, Okumura, Chichijima, Ogasawara, Tokyo, 100-2101, Japan; ³Department of Biological Sciences, Tokyo Metropolitan University, 1-1 Minami-Osawa, Hachioji-shi, Tokyo, 192-0397, Japan)

緒言

オガサワラキホリハナバチ *Lithurgus ogasawarensis* Yasumatsu, 1955 は小笠原諸島固有のハナバチの一種で、環境省および東京都の絶滅危惧 II 類に選定されている(環境省, 2025年8月15日閲覧; 東京都, 2014)。本種はこれまで父島、兄島、母島、姉島、姪島(郷原, 2002; 高橋, 2010; 川北ら, 2024)で確認されているが、これまで聳島列島での記録はなかった(久末ら, 2025)。

筆者の一人、加賀は媒島で本種を確認・採集したため報告する。

結果と考察

採集記録: 1M (図 1), 東京都小笠原村媒島, 28. VII. 2025, 加賀採集・神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵。

本個体は神奈川県生命の星・地球博物館の苅部主任学芸員による小笠原の昆虫類の「遺伝的保全単位」の策定とリクヒモムシ類による昆虫類への捕食影響調査(許可番号: 環関小自許第 2506231 号)により捕獲した。媒島で海岸部のオオハマボウ *Hibiscus tiliaceus* L. へ訪花したところを採集した。本種の訪花植物としてはテリハハマボウ *H. glaber* (Matsum. ex Hatt.) Matsum. ex Nakai のみが知られていたため(郷原, 2002; 川北ら, 2024; Kawakita et al., 2024)、オオハマボウは新記録となる。

現在、父島と母島ではアメリカ原産の爬虫類であるグリーンアノール *Anolis carolinensis* Voigt, 1832 の捕食圧により昼行性昆虫が壊滅的な影響を受けており、2013年に侵入した兄島でも高密度に生息する南部では固有昆虫類の激減が確認されている(戸田, 2022; 山本, 2024)。媒島はグリーンアノール、ツヤオオズアリ *Pheidole megacephala*、ムシクイリクヒモムシ *Geonemertes* sp. といった在来昆虫へ脅威となる外来生物が確認されていない。今回本種がこれらの外来生物が未侵入かつ侵入地域から海を隔てて大きく離れた聳島列島で確



図1. 媒島で捕獲されたオガサワラキホリハナバチ。

認められたことは本種の保全上重要である。本種を含めた絶滅の恐れのある在来昆虫の生息状況の把握と、外来生物が未侵入の環境維持のための対策、及び早期発見のためのモニタリングが必要である。

引用文献

- 郷原匡史, 2002. 小笠原諸島のハナバチ相とその保全. 杉浦直人・伊藤文紀・前田泰生編著, ハチとアリの自然史. pp. 229–245. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 久末 遊・朴 鎮亨・屋宜禎央, 2025. 聳島列島産アリ・ハチ目録. *すがれおい*, (8): 131–142. 環境省, online. 報道発表資料 環境省レッドリスト 2020 の公表について. 2020年3月27日. URL: <https://www.env.go.jp/press/107905.html> (accessed on August 15, 2025)
- Kawakiata, A., Y. Komaki, T. Tanaka & T. Ideno, 2024. The University of Tokyo's Conservation Work in the Ogasawara Islands. *Curtis's Botanical Magazine*, 41(3): 283–291.
- 川北 篤・武田和也・望月 昂・田村ゆり・砂川勇太・宮本 通, 2024. 小笠原諸島固有植物の送粉者(予報). *小笠原研究年報*, 47: 25–36.
- 高橋秀男, 2010. 小笠原諸島の膜翅類(アリ科を除く)の仮目録. *つねきばち*, (18): 15–26.
- 戸田光彦, 2022. 小笠原諸島におけるグリーンアノール対策. *昆虫と自然*, 57(5): 15–19.
- 東京都, 2014. レッドデータブック東京 2014 東京の保護上重要な野生生物種(島しょ部)解説版. 東京都環境局自然環境部, 634 pp.
- 山本捺由他, 2024. 小笠原諸島の固有昆虫保全の現場から. *日本環境動物昆虫学会誌*, 35(2): 31–35.

加賀芳恵 : kaga@ogasawara.or.jp

千葉県松戸市におけるタイワンタケクマバチの記録

渡邊賢司
(千葉県松戸市)

A record of *Xylocopa (Biluna) tranquebarorum tranquebarorum* (Swederus, 1787)
in Matsudo City, Chiba Prefecture, Japan

Kenji Watanabe
(Matsudo, Chiba, Japan)

緒言

タイワンタケクマバチ *Xylocopa (Biluna) tranquebarorum tranquebarorum* (Swederus, 1787) は、台湾、中国大陸南部からインドなどが本来の分布域だが、日本国内では2006年に愛知県豊田市で発見された(矢田, 2007)。竹材や竹製品の輸入による非意図的な人為的経路によって国内に侵入したと考えられており、「侵入生物データベース」(国立環境研究所, online)によると埼玉県、神奈川県、石川県、福井県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県、岐阜県、奈良県、三重県、富山県、京都府、大阪府、兵庫県、岡山県、滋賀県、鳥取県にて確認されていたが、近年になりさらに島根県(首藤ほか, 2022)、和歌山県(後藤, 2024)、香川県(伊藤, 2024)、茨城県(ミュージアムパーク茨城県自然博物館, 2024)、愛媛県(吉富ほか, 2024)にて確認され、徐々に分布域が拡大している。

今回、筆者は新たに千葉県松戸市にて本種を採集したため記録を報告する。同定は多田内・村尾編(2014)によった。証拠標本は筆者が保管している。

結果と考察

採集記録：1 F, 千葉県松戸市主水新田, 20. VII. 2025, 渡邊賢司採集(図1)。

採集された個体は、土手に生えていたムクゲの花に多数飛来していた、キムネクマバチ *Xylocopa (Alloxylocopa) appendiculata circumvolans* (Smith, 1873) に交じり飛来したものである。その後、同地点にて何度か調査を行うも追加個体は得られなかった。

本種は現時点では当地にまだ定着しておらず、偶産の可能性が考えられるが、採集地点の近くには藤棚があるので来年以降、本種が藤棚に飛来してくるのか注意して確認したい。

引用文献

- 後藤森香, 2024. 和歌山県田辺市における外来種タイワンタケクマバチの記録. 南紀生物, 66(2): 124.
伊藤文紀, 2024. 香川県三木町白山でタイワンタケクマバチを採集. みんつく香川 FIELD NOTE, (3): 8-9.



図 1. 千葉県松戸市産タイワンタケクマバチ, メス.

- 神尾宏司, 2007. 愛知県豊田市におけるタイワンタケクマバチの確認記録について. つねき
ばち, (12): 21–25.
- 国立環境研究所, 侵入生物データベース. タイワンタケクマバチ, <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60530.html> (2025 年 7 月 25 日閲覧)
- ミュージアムパーク茨城県自然博物館, 2025. 茨城県産昆虫目録—採集データを含む詳細
版 (VII) Catalogue of Insects of Ibaraki Prefecture - Including Collection Data (VII) ハチ目
(膜翅目) Order Hymenoptera. ミュージアムパーク茨城県自然博物館, <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/wp-content/uploads/2025/05/1748333655.pdf> (2025 年 7 月 25 日閲覧).
- 首藤祐貴・清水加那・宮永龍一, 2022. タイワンタケクマバチを島根県から記録. ホシザキ
グリーン財団研究報告, (25): 305–306.
- 多田内 修・村尾竜起編, 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 480 pp. 文一総合出版, 東京.
- 矢田直樹, 2007. 愛知県豊田市におけるタイワンクマバチの採集記録. 月刊むし, (439): 39–40.
- 吉富博之・武智礼央・濱口正幹, 2024. 愛媛県で得られたタイワンタケクマバチ. 南予生物
フィールドノート, (24008): 1.

渡邊 賢司 : hachi8likeimomushi@gmail.com

足寄町の有剣ハチ類の分布記録

上森教慈^{1,2}

(¹ 〒 811-2415 福岡県糟屋郡篠栗町津波黒 394 九州大学農学部流域環境制御学教室; ² 〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所)

Records of Aculeata bees and wasps (Hymenoptera) collected in Ashoro town, Hokkaido, Japan

Kazushige Uemori^{1,2}

(¹ Forest Ecosystem Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Tsubakuro 394, Sasaguri-machi, Kasuya-gun, Fukuoka, 811-2415, Japan; ² Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan)

Summary. Aculeata bees and wasps (Hymenoptera) collected in Ashoro town (Hokkaido, Japan) are listed. A total of 80 species were collected and identified during the survey.

緒言

道東地域では足寄町、厚岸町、霧多布湿原、釧路湿原、根室半島、摩周湖、釧路市春採湖などの昆虫相が調査されている(釧路昆虫同好会, 1993, 1995, 1999, 2010, 2011; 霧多布ナショナルトラスト, 2018; 上森ら, 2022; Uemori & Hishi, 2025)。また、標茶町を中心とした北海道東部で精力的に昆虫類の調査を行われていた飯島一雄氏の標本が釧路市立博物館に寄贈され、有剣ハチ類の目録も出版されている(土屋・渡辺, 2025)。このように、近年有剣ハチ類の分布記録が蓄積されつつある道東地域であるが、まとまった記録はいまだ少ない状況にある。

筆者は足寄町の森林においてイエローパントラップを使った調査を行い、62種(うち学名未決定種4種)の有剣ハチを記録した(上森ら, 2022)。一方、林縁や開放地などを好む種を記録できておらず、足寄町全体の有剣ハチ類相は十分に明らかにされたとはいえなかった。本報告では、筆者が2019年6、7、8月に北海道足寄町において有剣ハチ類群集の調査を行った際、林縁部や開放地で見つけ採りにて採集した種の分布記録を報告する。

材料と方法

足寄町は十勝平野の最北部に位置し、東側は火山活動の活発な雌阿寒岳を含む阿寒地域、西側は古い山地である東大雪地域を含む大きな町である。中心部の丘陵地は牧場、畑地、採草地などの土地利用のほかに、ミズナラ、オオバボダイジュ、エゾイタヤ、ウダイカンバなどからなる冷温帯落葉広葉樹林が分布している(上森ら, 2022; Uemori *et al.*, 2022)。東大雪地域は植生の標高変化がなめらかであり、ケヤマハンノキ、ダケカンバ、エゾマツ、アカエゾマツ、トドマツなどからなる針広混交林、ダケカンバ、ナナカマド、オガラバナなどからなる矮性化したダケカンバ林を経て、ハイマツ林に至る(上森ら, 2022; Uemori *et al.*, 2022)。

¹ 研究当時の所属 previous affiliation; ² 現在の所属 current affiliation

今回の調査では、鷲府、北五条、芽登の三地域で採集を行った。鷲府は九州大学農学部附属北海道演習林内およびその周辺で、夏季は林道脇にセリ科やオオイタドリの花などが咲いていた。林床はミヤコザサで覆われていた。北五条は演習林事務所脇の草地で、ムラサキツメクサなどの雑草の生えた開放地であった。芽登は美里別川沿いの道道および林道沿いで、夏季はオオハナウドなどのセリ科の花や、ウド、オオハンゴンソウなどの花が咲いていた。林床はクマイザサで覆われていた。

有剣ハチ類の採集は捕虫網による見つけ採りにより行った。採集は基本的に林道脇などの花で行い、一部林床のササのスウィープを行った。採集はすべて2019年に足寄町内で行ったため、リスト中では年と足寄町の記述を省略した。

有剣ハチ類の同定は主に多田内・村尾(2014)および寺山・須田(2016)を参考に行った。科階級群は Aguiar *et al.* (2013) に従った。同定は上森が行ったが、キタアリガタバチは三田敏治博士(九州大学)による同定である。標本の一部は現在筆者が保管しているが、すべて九州大学農学部昆虫学教室(ELKU)と九州大学農学部附属演習林に収蔵予定である。

結果と考察

セイボウ上科 Chrysidoidea

アリガタバチ科 Bethylidae

1. キタアリガタバチ *Bethylus fuscicornis* (Jurine, 1807)

3 F, 18. VI. 鷲府(三田敏治博士による同定).

ササをスウィープすることで採集した。

セイボウ科 Chrysididae

2. ミツバセイボウ *Trichrysis cyanea* (Linnaeus, 1758)

1 F, 18. VIII. 芽登.

スズメバチ上科 Vespoidea

アリバチ科 Mutillidae

3. ヤマトアリバチモドキ *Taimyrmosa nigrofasciata* (Yasumatsu, 1931)

2 M, 14. VIII. 鷲府; 1 F, 17. VIII. 鷲府.

ササをスウィープすることで採集した。

クモバチ科 Pompilidae

4. ナミヒメクモバチ *Auplopus carbonarius* (Scopoli, 1763)

2 M, 18. VI. 北五条.

5. シラキトゲアシクモバチ *Caliadurgus ussuriensis* (Gussakovskij, 1933)
1 M, 18. VI. 北五条.
6. コシボソトゲアシクモバチ *Clistoderes futabae* (Ishikawa, 1962)
1 M, 14. VIII. 鷲府.
7. サメハダヒゲクモバチ *Dipogon granulifrons* Shimizu & Ishikawa, 2002
1 F, 16. VIII. 芽登.
8. フタスジクモバチ *Eopompilus internalis* (Matsumura, 1911)
1 F, 31. VII. 北五条; 1 M, 14. VIII. 鷲府.
9. コフタスジクモバチ *Eopompilus minor* Gussakovskij, 1933
1 F, 16. VIII. 芽登.
10. アカゴシトゲアシクモバチ *Priocnemis kunashirensis* Lelej, 1988
2 M, 18. VI. 北五条.
11. オオモンクロクモバチ *Anoplius samariensis* (Pallas, 1771)
1 F, 7. VIII. 鷲府.

コツチバチ科 Tiphidae

12. オオコツチバチ *Tiphia latistriata* Allen & Jaynes, 1930
4 F & 6 M, 14. VIII. 鷲府.
ササをスウィープすることで採集した。

スズメバチ科 Vespidae

13. ケブカスジドロバチ *Ancistrocerus densepilosellus* (Cameron, 1911)
1 M, 5. VIII. 鷲府; 2 M, 16. VIII. 芽登.
14. ニセミカドドロバチ *Euodynerus quadrifasciatus* (Fabricius, 1793)
1 M, 18. VI. 北五条.
15. モンスズメバチ *Vespa crabro* Linnaeus, 1758
2 F, 5. VIII. 鷲府.
16. ケブカスズメバチ *Vespa simillima* Smith, 1868
1 F, 5. VIII. 鷲府(目撃).

17. シダクロスズメバチ *Vespula shidai* Ishikawa, Yamane & Wagner, 1980
1 F, 18. VI. 北五条 .

18. キオビクロスズメバチ *Vespula vulgaris* (Linnaeus, 1758)
1 F, 26. VIII. 芽登 .

ミツバチ上科 Apoidea
アナバチ科 Sphecidae

19. ヤマジガバチ *Ammophila infesta* Smith, 1873
1 M, 18. VI. 北五条 .

ギングチバチ科 Crabronidae

20. ニッポンツヤアナバチ *Alysson cameroni* Yasumatsu & Masuda, 1932
1 F & 1 M, 14. VIII. 鷲府 .

21. ニッコウツヤアナバチ *Alysson monticola* Tsuneki, 1977
2 F, 14. VIII. 鷲府 .

22. アイヌアワフキバチ *Gorytes aino* Tsuneki, 1963
1 F & 1 M, 18. VI. 北五条 .

23. フタモンアワフキバチ *Lestiphorus bilunulatus* Costa, 1867
1 F, 18. VI. 鷲府 .

24. シブヤギングチ *Crossocerus shibuyai* (Iwata, 1934)
1 F, 5. VIII. 鷲府 .

セリ科の花で採集した。

25. ヒゲアシギングチ *Crossocerus barbipes* (Dahlbom, 1845)
1 M, 7. VIII. 芽登 .

26. トゲアシギングチ *Crossocerus denticrus* Herrich-Schaeffer, 1841
1 F, 18. VI. 北五条 .

27. エグレギングチ *Crossocerus emarginatus* (Kohl, 1899)
1 M, 18. VI. 北五条 .

28. タイセツギングチ *Crossocerus varus* (Lepeletier & Brullé, 1834)
2 F, 3. VIII. 芽登 .

29. スズキギングチ *Crossocerus subulatus* (Dahlbom, 1845)
1 F, 5. VIII. 鷲府 ; 1 F, 18. VIII. 芽登 .
30. ヒラズギングチ *Ectemnius ruficornis* (Zetterstedt, 1838)
1 M, 18. VI. 鷲府 .
31. クララギングチ *Ectemnius rubicola* (Dufour & Perris, 1840)
2 M, 18. VI. 鷲府 .
32. オオギングチ *Ectemnius fossorius* (Linnaeus, 1758)
1 F, 7. VIII. 鷲府 .
33. ホッカイギングチ *Lestica alata* (Panzer, 1797)
3 M, 5. VIII. 鷲府 .
34. クロホソギングチ *Rhopalum latronum* (Kohl, 1915)
2 M, 18. VI. 鷲府 ; 3F, 5. VIII. 鷲府 .
35. ワタナベギングチ *Rhopalum watanabei* Tsuneki, 1952
1 F, 5. VIII. 鷲府 .
36. ヒメジガバチモドキ *Trypoxylon fronticorne* Gussakovskij, 1936
1 F, 18. VI. 北五条 .
37. サッポロジガバチモドキ *Trypoxylon sapporoense* Tsuneki, 1960
1 M, 18. VI. 鷲府 .
38. ハエトリバチ *Mellinus obscurus* Handlirsch, 1888
1 F, 14. VIII. 鷲府 .
39. オオエンモンバチ *Carinostigmus filippovi* (Gussakovskij, 1934)
4 F, 18. VI. 鷲府 .
40. ヤマヨコバイバチ *Psen affinis* Gussakovskij, 1937
1 F, 14. VIII. 鷲府 .
41. キヌヒゲヨコバイバチ *Psen ater* (Olivier, 1792)
3 F, 14. VIII. 鷲府 .

42. タカミネヨコバイバチ *Psen seminitidus* van Lith, 1965
2 F, 18. VIII. 芽登.

43. ヒメツチスガリ *Cerceris carinalis* Pérez, 1905
1 F, 31. VII. 北五条.

44. ニッポンツチスガリ *Cerceris nipponensis* Tsuneki, 1961
2 M, 5. VIII. 鷲府.

ムカシハナバチ科 Colletidae

45. ツノフトメンハナバチ *Hylaeus pfankuchi* (Alfken, 1919)
1 M, 5. VIII. 鷲府.

46. アルマンメンハナバチ *Hylaeus globula* (Vachal, 1903)
2 F, 5. VIII. 鷲府; 1M, 7. VIII. 芽登.

47. ヒョットコメンハナバチ *Hylaeus paradiformis* Ikudome, 1989
1 M, 7. VIII. 芽登.

ヒメハナバチ科 Andrenidae

48. ヤマテヒメハナバチ *Andrena maukensis* Matsumura, 1911
6 F, 7. VIII. 芽登.

49. ワタセヒメハナバチ *Andrena watasei* Cockerell, 1913
1 F, 18. VI. 北五条.

50. カグヤマメヒメハナバチ *Andrena kaguya* Hirashima, 1965
2 F, 18. VI. 北五条.

51. アブラナマメヒメハナバチ *Andrena semirugosa* Cockerell, 1924
1 F, 7. VIII. 芽登.

52. ミヤマヒメハナバチ *Andrena nitidiuscula* Schenk, 1853
1 F, 16. VIII. 鷲府.

53. アキノヤマテヒメハナバチ *Andrena mitakensis* Hirashima, 1963
1 F, 17. VIII. 鷲府.

54. エゾヒメハナバチ *Andrena ezoensis* Hirashima, 1965
2 M, 18. VI. 北五条.

コハナバチ科 Halictidae

55. ズマルコハナバチ *Lasioglossum affine* (Smith, 1853)
1 M, 19. VIII. 芽登.

56. ニジイロコハナバチ *Lasioglossum apristum* (Vachal, 1903)
1 F, 18. VI. 鷲府; 1 F, 7. VIII. 芽登.

57. ヨイヤミコハナバチ *Lasioglossum caliginosum* Murao, Ebmer & Tadauchi, 2006
2 M, 5. VIII. 鷲府; 1 F, 7. VIII. 芽登; 1 M, 14. VIII. 鷲府; 1 F, 16. VIII. 芽登.

58. ホクダイコハナバチ *Lasioglossum duplex* (Dalla Torre, 1896)
1 F, 18. VI. 北五条.

59. ニセキオビコハナバチ *Lasioglossum hoffmanni* (Strand, 1915)
2 F & 3 M, 5. VIII. 鷲府.

60. ヒゲナガコハナバチ *Lasioglossum vulusm* (Vachal, 1903)
1 M, 16. VIII. 芽登; 1 F, 17. VIII. 鷲府.

61. ケナガチビコハナバチ *Lasioglossum villosulum* (Kirby, 1802)
1 F, 18. VIII. 鷲府.

62. ミヤベアオコハナバチ *Lasioglossum miyabei* Murao, Ebmer & Tadauchi, 2006
2 M, 5. VIII. 鷲府; 1 F & 1 M, 14. VIII. 鷲府; 3 F, 16. VIII. 芽登; 1 M, 17. VIII. 鷲府.

63. ヒラシマアオコハナバチ *Lasioglossum problematicum* (Blüthgen, 1923)
2 M, 16. VIII. 芽登.

64. ハラナガツヤコハナバチ *Lasioglossum laeviventre* (Pérez, 1905)
1 M, 14. VIII. 鷲府.

65. ズマルツヤコハナバチ *Lasioglossum proximatum* (Smith, 1879)
3 F, 18. VI. 北五条.

66. ニッポンカタコハナバチ *Lasioglossum nipponicola* Sakagami & Tadauchi, 1995
1 F, 18. VI. 北五条.

67. エサキヤドリコハナバチ *Sphcodes simillimus* Smith, 1873
6 F, 18. VI. 北五条.

ケアシハナバチ科 Melittidae

68. ツヤクサレダマバチ *Macropis dimidiata* Yasumatsu & Hirashima, 1956
2 F (図1), 7. VIII. 鷲府.
クサレダマを訪花していた。

ハキリバチ科 Megachilidae

69. ホソバトガリハナバチ *Coelioxys hosoba* Nagase, 2003
1 M, 18. VI. 北五条.

70. タイリクハキリバチ *Megachile ligniseca* (Kirby, 1802)
1 F, 18, VI, 北五条.

ミツバチ科 Apidae

71. キオビツヤハナバチ *Ceratina flavipes* Smith, 1879
2 F, 18. VI. 鷲府.



図1. 足寄町産ツヤクサレダマバチ, メス.

72. ヒゲナガキマダラハナバチ *Nomada hakonensis* Cockerell, 1911
1 F, 18. VI. 鷲府.
73. オカモトキマダラハナバチ *Nomada okamotonis* Matsumura, 1912
1 F, 5. VIII. 鷲府.
74. ハイイロヒゲナガハナバチ *Eucera sociabilis* Smith, 1873
1 M, 18. VI. 北五条.
75. エゾオオマルハナバチ *Bombus hypocrita sapporoensis* Cockerell, 1911
1 F, 14. VI. 芽登; 1 F, 18. VI. 北五条.
76. エゾコマルハナバチ *Bombus ardens sakagami* (Tkalcù, 1962)
2 F, 18. VI. 北五条.
77. アイヌヒメマルハナバチ *Bombus beaticola moshkarareppus* Sakagami & Ishikawa, 1969
2 F, 7. VIII. 芽登.
78. アカマルハナバチ *Bombus hypnorum koroppokkrus* Sakagami & Ishikawa, 1969
2 F, 14. VI. 芽登.
79. セイヨウオオマルハナバチ *Bombus terrestris* (Linnaeus, 1758)
1 F, 18. VI. 北五条.(目撃)

足寄町の市街地では見かけたが、鷲府や芽登などの山地では見かけなかった。

調査期間を通して79種の有剣ハチ類を記録した。上森ら(2022)と共通して得られた種は20種であり、上森ら(2022)で学名未決定であった種を除くと合計117種が足寄町内から記録されたことになる。上森ら(2022)と比較してカマバチ、クモバチ、ジガバチモドキの仲間などが得られにくかった一方、ギングチバチ(特に *Crossocerus* 属と *Ectemnius* 属)がよく得られた結果となった。

特筆すべき種として、ツヤクサレダマバチが得られた。本種は幼虫の餌資源をクサレダマに依存している狭食性の種である。本種は中国や極東ロシアに分布する種で(多田内・村尾, 2014)、国内では北海道足寄町(Yasumatsu & Hirashima, 1956)、釧路町(渡辺・土屋, 2024)、帯広市(Usui *et al.*, 1976)、群馬県長野原町(高橋, 2020)の4例しか記録がない。北海道では7月下旬から8月中旬に得られている。模式産地はNishiashoro(西足寄)となっているが(Yasumatsu & Hirashima, 1956)、平嶋(2007)によるとこれは北海道演習林周辺のことのようである。すなわち、今回の記録は模式産地からの再発見となる。平嶋(2007)には最初の個体を夕方採集したことが書かれている。今回採集した時間も夕方16時頃で、雨雲が近づいて薄暗くなってきたようなタイミングであった。その後午前中や昼過ぎ頃など異なる時間帯に同所を訪れたが、クサレダマは開花しているものの本種の訪花は見られ

なかったため、活動条件がシビアなのかと考えていた。しかし、渡辺・土屋(2024)では晴天から曇天の天候で、10時頃から16時頃まで活動を確認しており、特定の天候や時間帯に訪花するわけではないようである。本調査地のクサレダマは十数株ほどがまとまって生育していたが、周辺ではこの場所で見られなかった。餌資源が限られていたことで、ツヤクサレダマバチの個体数も少なかったのかもしれない。

謝 辞

九州大学の三田敏治博士にはキタアリガタバチの同定をしていただいた。神奈川県立生命の星・地球博物館の渡辺恭平博士にはツヤクサレダマバチおよび道東の有剣ハチの分布記録の文献をご教示いただいた。本調査の実施にあたり、九州大学農学部附属北海道演習林には演習林での調査許可を、十勝東部森林管理署には美里別国有林での調査許可をいただいた。厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Aguiar, A. P., A. R., Deans, M. S., Engel, M., Forshage, J. T., Huber, J. T., Jennings, N. F., Johnson, A. S., Lelej, J. T., Longino, V., Lohrmann, I., Miko, M., Ohl, C., Rasmusen, A., Taeger & D. S. K., Yu, 2013. Order Hymenoptera. *Zootaxa*, **3703**(1): 51–62.
- 霧多布湿原ナショナルトラスト, 2018. 霧多布湿原生きものリスト 2018. 115 pp., 特定非営利活動法人 霧多布湿原ナショナルトラスト, 浜中町.
- 釧路昆虫同好会, 1993. 霧多布湿原の昆虫. 150 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路.
- 釧路昆虫同好会, 1995. 釧路湿原の昆虫. 177 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路.
- 釧路昆虫同好会, 1999. 根室半島の昆虫. 322 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路.
- 釧路昆虫同好会, 2010. 摩周湖の昆虫. 152 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路.
- 釧路昆虫同好会, 2011. 釧路市春採湖の昆虫. 174 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路.
- 平嶋義宏, 2007. 新しい花蜂の発見物語. 月刊むし, (436): 30–33.
- 多田内 修・村尾竜起 編, 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 479 pp., 文一総合出版, 東京.
- 高橋秀男, 2020. チビクロツヤケアシハナバチを群馬県で採集. 月刊むし, (598): 42.
- 寺山 守・須田博久 編著, 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. i-xxxvi+735 pp., 東海大学出版部, 平塚.
- 土屋慶丞・渡辺恭平, 2025. 飯島一雄氏寄贈 北海道東部産ハチ類標本目録 - 膜翅目有剣類 -. 釧路市立博物館紀要, **43**: 1–8.
- 上森教慈・三田敏治・清水 晃・菱 拓雄, 2022. 北海道足寄町の森林においてイエローパントラップを用いて採集された有剣ハチ類. 九州大学農学部演習林報告, (103): 45–51.
- Uemori, K., T., Mita & T., Hishi, 2022. Differences in functional trait responses to elevation among feeding guilds of Aculeata community. *Ecology and Evolution*, **12**(8): e9171.
- Uemori, K. & T., Hishi, 2025. Independent Aculeata communities assemble in low-moor wetlands and deciduous forests around Akkeshi-Bekanbeushi Wetland, northeastern Japan. *Wetlands Ecology and Management*, **33**(3): 36.

Usui, M., Y., Nishijima, H., Fukuda & S. F., Sakagami, 1977. A wild bee survey in Obihiro Eastern Hokkaido. *Research bulletin of Obihiro University*. **10**(1): 225–251.

渡辺恭平・土屋慶丞, 2024. 稀種ツヤクサレダマバチの北海道釧路湿原における初記録. 昆虫 (ニューシリーズ), **27**(4): 162–163.

Yasumatsu, K. & Y. Hirashima, 1956. Descriptions of the genera *Macropis* Klug and *Melitta* Kirby in Japan (Hymenoptera, Melittidae). *Kontyu*, **24**: 247–255.

上森教慈: uemori_kazushige510@ffpri.go.jp

厚岸湖・別寒辺牛湿原周辺の有剣ハチ類の分布記録

上森教慈^{1,2}・三田敏治³

(¹ 〒811-2415 福岡県糟屋郡篠栗町津波黒394 九州大学農学部流域環境制御学教室; ² 〒305-8687 茨城県つくば市松の里1 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所; ³ 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744 九州大学農学部昆虫学教室)

Records of Aculeata bees and wasps (Hymenoptera) collected around
Akkeshi–Bekanbeushi Wetland, Hokkaido, Japan

Kazushige Uemori^{1,2} & Toshiharu Mita³

(¹ Forest Ecosystem Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Tsubakuro 394, Sasaguri-machi, Kasuya-gun, Fukuoka, 811-2415, Japan; ² Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan; ³ Entomological Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka, 819-0395 Japan)

Summary. Aculeata bees and wasps (Hymenoptera) collected around Akkeshi–Bekanbeushi Wetland (Hokkaido, Japan) are listed. A total of 89 species were collected and identified during the survey.

緒言

北海道道東地域は昆虫の調査が盛んで、足寄町、霧多布湿原、釧路湿原、根室半島、摩周湖、釧路市春採湖などの昆虫相が調査されている(釧路昆虫同好会, 1993, 1995, 1999, 2010, 2011; 霧多布ナショナルトラスト, 2018; 上森ら, 2022)。しかし、有剣ハチ類の記録は少なく、釧路昆虫同好会による昆虫相調査での記録はほとんどがマルハナバチやスズメバチに留まる。近年、標茶町を中心に精力的に昆虫の調査を行われていた飯島一雄氏の標本が釧路市立博物館に寄贈され、有剣ハチ類の目録も出版された(土屋・渡辺, 2025)。とはいえ、有剣ハチ類の分布記録はいまだに少なく、調査の積み重ねが必要である。

筆者のうち上森は、厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金制度による研究助成を受けた調査の一環で、2021年7月に北海道厚岸町の厚岸湖・別寒辺牛湿原を中心とした地域において有剣ハチ類群集の調査を行った。その際採集した種の分布記録を報告する。本調査は厚岸湖・別寒辺牛湿原周辺の湿原、天然林、人工林の有剣ハチ群集の比較を目的とし、イエローパントラップによる定量的な採集と、捕虫網を用いた見つけ採りを行った。先だってイエローパントラップで採集した有剣ハチ類の一部は Uemori & Hishi (2025) の付録として公開されており、学名未決定種6種を除くと55種を記録している。今回は Uemori & Hishi (2025) で記載していないパントラップ採集個体、および見つけ採りにより採集した個体について記載する。

¹ 研究当時の所属 previous affiliation; ² 現在の所属 current affiliation

材料と方法

厚岸町は北海道東部の湿原地域の一角に位置し、釧路湿原や霧多布湿原に並んで広大で、内陸に向かって入り組んだ構造をした別寒辺牛湿原をたたえている。別寒辺牛湿原は主にヨシ、スゲ、ヤナギ、ハンノキなどで構成される低層湿原であり、その周囲にミズナラ、ヤチダモ、ハルニレなどからなる森林が分布する。厚岸湖南部は森林が主であり、海霧の影響により夏でも涼しい気候が保たれているため、標高 100 m 程度にもかかわらずダケカンバやトドマツなどといった高山性の樹木からなる森林が分布する。内陸部にはカラマツ人工林が、沿岸部にはトドマツ、エゾマツ人工林がある。

厚岸町内では主に別寒辺牛、奔渡、登喜岱、サンヌシで調査を行った。字別寒辺牛は広い範囲で北部、南部、糸魚沢と区別した。別寒辺牛北部はカラマツ人工林のパイロットフォレストがあり、その間にヨシ、スゲを主とする湿原とミズナラを主とする落葉広葉樹林がある地域であった。別寒辺牛南部は道道 813 号線沿いから伸びる林道沿いで、ヨシやヤナギを主とする湿原、ミズナラ、ヤチダモ、ハルニレなどを主とする落葉広葉樹林、カラマツ人工林が混在する地域であった。糸魚沢は糸魚沢駅から南部に伸びる林道沿いで、チライカリベツ川まではヨシ、スゲ、ヤナギを主とした湿原であり、川を越えたあたりからミズナラ、トドマツ、ダケカンバ、ミヤマハンノキなどで構成される森林が成立していた。奔渡は厚岸湖南部に位置し、道道沿いにエゾノヨロイグサやオオハナウドなどのセリ科の花が咲いていた。登喜岱は前述の糸魚沢駅から伸びる林道を奥まで進んだ厚岸湖北岸付近で、小規模な伐開地（裸地）であった。サンヌシは厚岸水鳥観察館敷地内の芝生で、大別川と落葉広葉樹林の丘陵に囲まれた場所であった。

有剣ハチ類の採集は捕虫網による見つけ採りおよびイエローパントラップ (DecorRack、直径 15 cm) により行った。イエローパントラップは別寒辺牛南部のカラマツ人工林、登喜岱の伐採跡地、サンヌシの芝生に設置した。採集はすべて上森が行った。リスト中ではイエローパントラップで採集した場合のみ YPT と略記を加えた。採集は基本的に厚岸町内で行ったが、一部近隣市町村でも行った。そのため、リスト中では厚岸町内の採集記録は字のみ記載し、厚岸町外での採集記録の場合は市町村から記載した。また、調査はすべて 2021 年 7 月のため、リスト中では日のみ記載した。

有剣ハチ類の同定は主に多田内・村尾 (2014) および寺山・須田 (2016) を参考に行った。ヤドリコハナバチの同定および学名は Astafurova & Proshchalykin (2014) を参考にした。科階級群は Aguiar *et al.* (2013) に従った。セイボウ上科は三田が、その他は上森が同定を行った。標本は一部を上森が保管しているが、すべて九州大学農学部昆虫学教室 (ELKU) に収蔵予定である。

結果と考察

セイボウ上科 Chrysoidea

アリガタバチ科 Bethyloidea

1. シガアリガタバチ *Bethylus shiganus* Terayama, 2006
1 M, 20, 別寒辺牛南部; 1 M, 20–22, 別寒辺牛南部 (YPT).
ミヤコザサのスウィープで採集した。

セイボウ科 Chrysididae

2. ムネツヤセイボウ *Omalus aeneus* (Fabricius, 1787)

1 F, 24–26, 登喜岱 . (YPT); 1 F, 20–22, サンヌシ (YPT).

3. ヤマトセイボウモドキ *Cleptes japonicus* Tosawa, 1940 (図1)

10 F & 22 M, 20–22, 別寒辺牛南部 (YPT); 7 F & 5 M, 22–24, 別寒辺牛南部 (YPT); 1 F, 20–22, サンヌシ (YPT).

北海道初記録。カラマツ人工林にて採集した。

アリモドキバチ科 Embolemidae

4. フタスジハネアリモドキバチ(和名新称) *Ampulicomorpha thauma* Rasnitsyn & Matveev, 1989(図2)

1 F, 20–22, サンヌシ (YPT).

北海道初記録。

スズメバチ上科 Vespoidea

クモバチ科 Pompilidae

5. ナミヒメクモバチ *Auplopus carbonarius* (Scopoli, 1763)

1 F, 20–22, 別寒辺牛南部 (YPT); 2 F, 24–26, 登喜岱 (YPT); 4 F, 20–22, サンヌシ (YPT); 1 F, 22–24, サンヌシ (YPT).

6. フタスジクモバチ *Auplopus carbonarius* (Scopoli, 1763)

1 F, 22, 糸魚沢 .

7. アカゴシトゲアシクモバチ *Priocnemis kunashirensis* Lelej, 1988

2 F & 2 M, 20–22, サンヌシ (YPT).

8. ペレエクロクモバチ *Anoplius fratellus* (Pérez, 1905)

1 F, 24, 登喜岱 .

9. オオシロフクモバチ *Episyron arrogans* (Smith, 1873)

1 M, 24, 糸魚沢 .

ホザキシモツケの花で採集した。

コツチバチ科 Tiphidae

10. オオコツチバチ *Tiphia latistriata* Allen & Jaynes, 1930

1 M, 24, 登喜岱 ; 2 F & 5 M, 24–26, 登喜岱 (YPT); 9 F & 58 M, 20–22, サンヌシ (YPT); 20 F & 41 M, 22–24, サンヌシ (YPT); 37 F & 39 M, 24–26, サンヌシ (YPT).



図1. 北海道産ヤマトセイボウモドキ *Cleptes japonicus* Tosawa, 1940, メス. スケールバーは1 mm.



図2. 北海道産フタスジハネアリモドキバチ *Ampulicormopha thauma* Rasnitsyn & Matveev, 1989, メス. スケールバーは1 mm.

スズメバチ科 Vespidae

11. シブヤスジドロバチ *Ancistrocerus shibuyai* (Yasumatsu, 1938)

1 M, 21, 釧路町仙鳳趾村.

セリ科の花で採集した。本種は *A. trifasciatus* の亜種とされてきたが、Fateryga & Proshchalykin (2024) により独立種とされた。

12. ムナグロチビドロバチ *Stenodynerus tokyanus* (Kostylev, 1940)

1 F, 22, 糸魚沢.

13. シロオビホオナガスズメバチ *Dolichovespula pacifica* (Birula, 1930)

1 F, 21, 別寒辺牛南部; 1 F, 24, 糸魚沢.

ホザキシモツケの花で採集した。

14. ニッポンホオナガスズメバチ *Dolichovespula saxonica* (Fabricius, 1793)

1 F, 23, 別寒辺牛北部.

ホザキシモツケの花で採集した。

ミツバチ上科 Apoidea

アナバチ科 Sphecidae

15. ヤマジガバチ *Ammophila infesta* Smith, 1873

1 M, 24–26, 登喜岱 (YPT).

ギングチバチ科 Crabronidae

16. ニッポンツヤアナバチ *Alysson cameroni* Yasumatsu & Masuda, 1932

9 F & 2 M, 24–26, 登喜岱 (YPT).

17. オオトゲアワフキバチ *Argogorytes mystaceus* (Linnaeus, 1761)

1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).

18. ヤマトドロバチモドキ *Nippononysson rufopictus* Yasumatsu & Maidl, 1936

1 F, 20, 別寒辺牛; 1 M, 24–26, 登喜岱 (YPT).

18. ヒゲアシギングチ *Crossocerus barbipes* (Dahlbom, 1845)

1 F, 20, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

19. シブヤギングチ *Crossocerus shibuyai* (Iwata, 1934)

2 F, 20, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

20. ナミギングチ *Ectemnius continuus* (Fabricius, 1804)

1 F, 20, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

21. メスキングチ *Ectemnius lapidarius* (Panzer, 1803)

1 M, 20, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

22. ミズホギングチ *Ectemnius radiatus* (Pérez, 1905)

4 M, 20, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

23. ジョウザングチ *Ectemnius spinipes* (Morawitz, 1866)

6 F, 20, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

24. クラマギングチ *Lestica reiteri* (Kohl, 1915)

2 F & 5 M, 20, 奔渡; 1 F, 24, 浜中町道有林.

セリ科の花で採集した。

25. チャタテギングチ *Rhopalum gracile* Wesmael, 1852

1 M, 20–22, 別寒辺牛南部 (YPT); 2 M, 24, 糸魚沢; 1 F, 20–22, サンヌシ (YPT).

ホザキシモツケの花で採集した。

26. クワヤマギングチ *Rhopalum kuwayamai* Tsuneki, 1952

4 M, 20, 別寒辺牛南部; 1 M, 21, 別寒辺牛南部.

ミヤコザサのスウィープで採集した。

27. クロホソギングチ *Rhopalum latronum* (Kohl, 1915)

5 M, 20, 奔渡; 1 M, 21, 釧路町仙鳳趾村; 3 M, 24, 糸魚沢.

セリ科の花やホザキシモツケの花で採集した。

28. ワタナベギングチ *Rhopalum watanabei* Tsuneki, 1952

1 F & 1 M, 20, 別寒辺牛南部; 1 F, 21, 別寒辺牛南部; 1 F, 24, 登喜岱.

29. ヒロスハヤバチ *Tachytes latifrons* Tsuneki, 1964

1 M, 20, 別寒辺牛南部.

ムラサキツメクサのスウィープで採集した。

30. ヤマトトゲアナバチ *Oxybelus strandi* Yasumatsu, 1935
1 F, 24, 登喜岱.
31. ヒメジガバチモドキ *Trypoxylon fronticorne* Gussakovskij, 1936
1 F, 22–24, 別寒辺牛南部 (YPT).
32. サッポロジガバチモドキ *Trypoxylon sapporoense* Tsuneki, 1960
9 F, 20–22, サンヌシ (YPT); 1 F & 1 M, 24–26, サンヌシ (YPT).
33. ヒメイスカバチ *Passaloecus clypealis* Faester, 1947
1 F, 24, 浜中町道有林; 44 F, 20–22, サンヌシ (YPT); 8 F, 22–24, サンヌシ (YPT); 9 F, 24–26, サンヌシ (YPT).
34. カラトイスカバチ *Passaloecus koreanus* Tsuneki, 1974
1 F, 24, 浜中町道有林.
35. ジュズダマイスカバチ *Passaloecus monilicornis* Dahlbom, 1842
1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
36. アイヌアリマキバチ *Pemphredon inornata* Say, 1824
1 F, 20–22, サンヌシ (YPT).
37. オオグシアリマキバチ *Pemphredon lethifer* (Shuckard, 1837)
1 F, 24–26, サンヌシ (YPT).
38. サッポロアリマキバチ *Pemphredon rugifer* Dahlbom, 1844
1 F, 24, 糸魚沢
ホザキシモツケの花で採集した。
39. コブヨコバイバチ *Mimesa lutaria* (Fabricius, 1804)
3 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
40. リツヨコバイバチ *Mimumesa vanlithi* (Tsuneki, 1959)
2 F, 20, 別寒辺牛南部.
ミヤコザサのスウィープで採集した。
41. ヤマヨコバイバチ *Psen affinis* Gussakovskij, 1937
2 F & 4 M, 22, 浜中町道有林; 1 F, 24, 糸魚沢.
42. クロアシマエダテバチ *Psenulus laevigatus* (Schenck, 1857)
1 F, 23, 別寒辺牛北部.

43. ナミツチスガリ *Cerceris hortivaga* Kohl, 1880
1 M, 20, 奔渡; 1 M, 21, 別寒辺牛南部; 1 F & 4 M, 24, 登喜岱; 1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
フランスギクで採集した。

ムカシハナバチ科 Colletidae

44. ホソメンハナバチ *Hylaeus macilentus* Ikudome, 1989
5 F & 1 M, 23, 別寒辺牛北部.
ホザキシモツケの花で採集した。
45. ツノフトメンハナバチ *Hylaeus pfankuchi* (Alfken, 1919)
6 F, 23, 別寒辺牛北部.
ホザキシモツケの花で採集した。
46. ズグロメンハナバチ *Hylaeus niger* Bridwell, 1919
4 F, 20–22, サンヌシ (YPT).
47. スミスメンハナバチ *Hylaeus floralis* (Smith, 1873)
1 M, 24, 糸魚沢.
ホザキシモツケの花で採集した。
48. アルマンメンハナバチ *Hylaeus globula* (Vachal, 1903)
4 F & 5 M, 20, 奔渡; 1 F, 21, 尾幌.
セリ科の花で採集した。
49. ニッポンメンハナバチ *Hylaeus transversalis* Cockerell, 1924
1 F, 24, 糸魚沢.
ホザキシモツケの花で採集した。
50. ヤマノメンハナバチ *Hylaeus confusus* Nylander, 1852
1 F, 20, 別寒辺牛南部.
51. オモゴメンハナバチ *Hylaeus submonticola* Ikudome, 1989
1 F, 24, 糸魚沢.
ホザキシモツケの花で採集した。

ヒメハナバチ科 Andrenidae

52. エゾハラアカヒメハナバチ *Andrena rosae* Panzer, 1801
1 M, 20, 別寒辺牛南部.
ムラサキツメクサのスウィープで採集した。

53. カグヤマメヒメハナバチ *Andrena kaguya* Hirashima, 1965

4 F, 21, 鉤路町仙鳳趾村.

セリ科の花で採集した。

54. アブラナメヒメハナバチ *Andrena semirugosa* Cockerell, 1924

1 F, 21, 尾幌.

55. タカネメヒメハナバチ *Andrena subopaka* Nylander, 1848

4 F & 4 M, 20, 奔渡; 1 F, 20, 別寒辺牛南部; 2 M, 21, 鉤路町仙鳳趾村; 2 F, 24, 糸魚沢; 1 F, 24-26, 登喜岱 (YPT).

セリ科やホザキシモツケの花で採集した。

56. ミヤマヒメハナバチ *Andrena nitidiuscula* Schenk, 1853

1 M, 24-26, 登喜岱 (YPT).

コハナバチ科 Halictidae

57. ミドリコハナバチ *Halictus tumulorum* (Linnaeus, 1758)

1 F, 21, 奔渡.

セリ科の花で採集した。

58. ニジイロコハナバチ *Lasioglossum apristum* (Vachal, 1903)

5 F, 20, 奔渡; 9 F, 21, 鉤路町仙鳳趾村; 1 F, 24, 浜中町道有林; 1 F, 24, 糸魚沢.

セリ科やホザキシモツケの花で採集した。

59. シオカワコハナバチ *Lasioglossum baleicum* (Cockerell, 1937)

1 M, 20, 別寒辺牛南部.

ムラサキツメクサのスウィープで採集した。

60. ヨイヤミコハナバチ *Lasioglossum caliginosum* Murao, Ebmer & Tadauchi, 2006

7 F, 20, 別寒辺牛南部; 1 F, 21, 別寒辺牛南部; 1 F, 21, 鉤路町仙鳳趾村; 2 F, 24, 浜中町道有林; 2 M, 24, 登喜岱; 13 F, 24, 登喜岱 (YPT); 3 F, 20-22, サンヌシ (YPT).

セリ科やホザキシモツケの花で採集した。

61. ホクダイコハナバチ *Lasioglossum duplex* (Dalla Torre, 1896)

5 F, 20, 別寒辺牛南部.

林道中央のタイヤ痕のない砂地部分に営巣していた。

62. ニッポンコハナバチ *Lasioglossum nipponense* (Hirashima, 1953)

3 F, 20, 別寒辺牛南部.

ムラサキツメクサのスウィープで採集した。

63. ヒゲナガコハナバチ *Lasioglossum vulusm* (Vachal, 1903)
2 F, 24, 糸魚沢.
ホザキシモツケの花で採集した。
64. クラカケチビコハナバチ *Lasioglossum allodalum* Ebmer & Sakagami, 1985
1 F, 20–22, 別寒辺牛南部 (YPT); 1 F, 22–24, 別寒辺牛南部 (YPT); 1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
65. オバケチビコハナバチ *Lasioglossum spectrum* Murao, 2021
1 F, 22–24, 別寒辺牛南部 (YPT); 1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
66. イブシチビコハナバチ *Lasioglossum speculinum* (Cockerell, 1925)
1 F, 20, 奔渡; 1 F, 20, 別寒辺牛南部; 1 F, 21, 尾幌; 1 F, 24, 糸魚沢.
セリ科やホザキシモツケの花で採集した。
67. ズナガチビコハナバチ *Lasioglossum zunaga* Sakagami & Tadauchi, 1995
8 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
68. ヒラシマアオコハナバチ *Lasioglossum problematicum* (Blüthgen, 1923)
1 F, 20, 別寒辺牛南部.
69. ミヤマツヤコハナバチ *Lasioglossum exiliceps* (Vachal, 1903)
1 F, 21, 釧路町仙鳳趾村.
セリ科の花で採集した。
70. アルマンカタコハナバチ *Lasioglossum harmandi* (Vachal, 1903)
1 F, 21, 別寒辺牛南部; 1 F, 23, 別寒辺牛北部.
ホザキシモツケの花で採集した。
71. サビイロカタコハナバチ *Lasioglossum mutilum* (Vachal, 1903)
1 F, 20–22, 別寒辺牛南部 (YPT); 1 F, 22–24, 別寒辺牛南部 (YPT).
72. ニッポンカタコハナバチ *Lasioglossum nipponicola* Sakagami & Tadauchi, 1995
1 F, 20, 別寒辺牛南部; 1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
73. シロスジカタコハナバチ *Lasioglossum occidens* (Smith, 1873)
2 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).
74. フタモンカタコハナバチ *Lasioglossum scitulum* (Smith, 1873)
1 F, 21, 尾幌.

75. ジョウザンヤドリコハナバチ *Sphcodes crassus* Thomson, 1870
8 F & 3 M, 24–26, 登喜岱 (YPT).

76. ハネダヤドリコハナバチ *Sphcodes ferruginatus* Hagens, 1882
1 F, 20, 奔渡.
セリ科の花で採集した。

77. オクエツヤドリコハナバチ *Sphcodes okuyetsu* Tsuneki, 1983
7 F, 20–22, サンヌシ (YPT); 4 F, 24–26, サンヌシ (YPT).

78. エサキヤドリコハナバチ *Sphcodes simillimus* Smith, 1873
1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT); 3 F, 20–22, サンヌシ (YPT); 1 F, 24–26, サンヌシ (YPT).

ケアシハナバチ科 Melittidae

79. シロアシクサレダマバチ *Macropis tibialis* Yasumatsu & Hirashima, 1956
1 M, 22, 糸魚沢; 2 M, 24, 糸魚沢.
クサレダマの花で採集した。

ハキリバチ科 Megachilidae

80. ヒロバトガリハナバチ *Coelioxys hiroba* Nagase, 2003
1 M, 20, 別寒辺牛南部.
ムラサキツメクサのスウィープで採集した。

81. アルファルファハキリバチ *Megachile ainu* Hirashima & Maeta, 1974
1 F, 22, 別寒辺牛南部.

82. タイリクハキリバチ *Megachile ligniseca* (Kirby, 1802)
1 F, 24–26, 登喜岱 (YPT).

ミツバチ科 Apidae

83. クロツヤハナバチ *Ceratina megastigmata* Yasumatsu & Hirashima, 1969
1 F, 20, 奔渡.
セリ科の花で採集した。

84. コキマダラハナバチ *Nomada okubira* Tsuneki, 1973
1 F, 21, 釧路町仙鳳趾村.
セリ科の花で採集した。

85. ミヤマキマダラハナバチ *Nomada montverna* Tsuneki, 1973
2 F, 20, 奔渡.
86. エゾオオマルハナバチ *Bombus hypocrita sapporoensis* Cockerell, 1911
1 F, 22, 糸魚沢.
87. エゾトラマルハナバチ *Bombus diversus tersatus* Smith, 1869
2 F, 22, 糸魚沢.
88. エゾコマルハナバチ *Bombus ardens sakagamii* (Tkalčů, 1962)
2 M, 22, 糸魚沢.
89. シュレンクマルハナバチ *Bombus schrencki albidopleuralis* Skorikov, 1915
1 F, 22, 糸魚沢.

有剣ハチ類相について

Uemori & Hishi (2025) では学名未決定種 6 種を除いて 55 種を記録したが、今回報告した 89 種のうち 60 種が Uemori & Hishi (2025) に含まれていない種であった。よって、一連の調査により 115 種が本地域から記録されたことになる。また、浜中町では 48 種（学名未決定 5 種を除く）の有剣ハチが記録されており（霧多布ナショナルトラスト, 2018）、このうち 26 種は Uemori & Hishi (2025) および今回の調査で得られなかった種であった。よって、本地域からは近年 131 種の有剣ハチが記録されたことになる。なお、土屋・渡辺 (2025) では厚岸町産の標本としてオオギングチとタカネマメヒメハナバチが記録されており、このうちオオギングチは Uemori & Hishi (2025) および今回の調査で得られていない。

今回、ヤマトセイボウモドキとフタスジハネアリモドキバチを北海道から記録した。ヤマトセイボウモドキは長野県を模式産地として記載され (Tosawa, 1940)、岩手県 (佐藤, 1981)、東京都 (皇居) (寺山・三田, 2014)、茨城県 (Makino *et al.*, 2021)、韓国 (Móczár, 2000; Ha *et al.*, 2011) などで記録がある。記録の少ない種であったが、今回多数の個体をカラマツ人工林に設置したパントラップで採集した。カラマツ人工林は下層植生としてミヤコザサが繁茂しており、調査時はミヤコザサのスウィープも行ったが、その際は得られていない。また、サンヌシの 1 個体を除いてほかの湿原や落葉広葉樹林などの環境では得られておらず、本種はかなり局所的に分布するものと思われる。セイボウモドキ亜科の主はハバチ類に寄生する (寺山・三田, 2014) が、各種の生態的知見は非常に少ない。本種の寄主については佐藤 (1981) に記述があり、岩手県林試でマツノミドリハバチ *Nesodiprion japonica* の生態に関して研究されていた佐藤平典氏が、野外から採集してきたマツノミドリハバチの繭より本種を羽化させている (佐藤, 1981)。この繭の採集地はストロブマツの人工林で、周囲にカラマツ並木とアカマツ林もある場所であった (佐藤, 1981)。ただし、マツノミドリハバチは北海道東部には分布しないため、厚岸での寄主は別のハバチだと考えられる (原, 2020)。今回、本種がカラマツ人工林で特異的に得られていることから、カラマツに関係したハバチに寄生している可能性が考えられる。な

お、日本ではほかに、フジセイボウモドキ *C. fudzi* がマツノミドリハバチに寄生することと (Okamoto & Naito, 1963)、アタマセイボウモドキ *C. crassiceps* がブナハバチ *Fagineura crenativora* に寄生すること (谷脇・渡辺, 2012) が知られている。

フタスジハネアリモドキバチ (和名新称) はロシアと韓国で記録があり、日本からも新潟県上越市の里山に設置したパントラップより得られている (Mita & Olmi, 2018)。現生のアリモドキバチ科3属 (ハネアリモドキバチ属 *Ampulicomorpha*、アリモドキバチ属 *Embolemus*、ムチヒゲアリモドキバチ属 *Trogloembolemus*) のうち、本種の属するハネアリモドキバチ属のみメスにも発達した翅がみられる。日本産のハネアリモドキバチ属は本種のほかに小笠原諸島 (兄島) からオガサワラハネアリモドキバチ (和名新称) *A. viator* が記載されている (Mita *et al.*, 2017)。本種とオガサワラハネアリモドキバチは後胸後背板の隆起線の数が異なり、後者は3本であるのに対し本種では2本である (Mita & Olmi, 2018)。

謝 辞

本調査の実施にあたり、澁谷辰夫氏をはじめとする厚岸水鳥観察館のスタッフの方々には施設利用の便宜を図っていただくなど多くの面でご協力いただいた。九州大学 (当時) の稲益峻氏には調査補助および一部植物の同定をしていただいた。根釧西部森林管理署には真竜国有林での調査許可を、北海道釧路総合振興局には道有林での調査許可をいただいた。厚く御礼申し上げる。本研究の一部は令和3年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金制度およびJST次世代研究者挑戦的研究プログラム (JPMJSP2136) の支援を受けて行われた。

引用文献

- Aguiar, A. P., A. R., Deans, M. S., Engel, M., Forshage, J. T., Huber, J. T., Jennings, N. F., Johnson, A. S., Lelej, J. T., Longino, V., Lohrmann, I., Miko, M., Ohl, C., Rasmusen, A., Taeger & D. S. K., Yu, 2013. Order Hymenoptera. *Zootaxa*, **3703**(1): 51–62.
- Astafurova, Y. V. & M. Y., Proshchalykin, 2014. The bees of the genus *Sphcodes* Latreille 1804 of the Russian Far East, with key to species (Hymenoptera: Apoidea: Halictidae). *Zootaxa*, **3887**(5), 501–528.
- Fateryga, A. V. & M. Y., Proshchalykin, 2024. *Ancistrocerus shibuyai* (Yasumatsu, 1938), stat. restit. (Hymenoptera: Vespidae: Eumeninae), an overlooked trans-Palaeartic species. *Zootaxa*, **5537**(4): 527–540.
- Ha, H. H., J. W. Lee & J. K. Kim, 2011. Taxonomic review of Korean *Cleptes* Latreille (Hymenoptera: Chrysididae: Cleptinae), with description of one new species. *Journal of Asia-pacific entomology*, **14**(4), 489–495.
- 原 秀穂, 2020. マツノミドリハバチ. 内藤親彦・篠原明彦・原 秀穂, 2020. 日本産ハバチ・キバチ類図鑑. pp. 290, 北海道大学出版会, 札幌.
- 霧多布湿原ナショナルトラスト, 2018. 霧多布湿原生きものリスト 2018. 115 pp., 特定非営利活動法人 霧多布湿原ナショナルトラスト, 浜中町.
- 釧路昆虫同好会, 1993. 霧多布湿原の昆虫. 150 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路.

- 鉏路昆虫同好会, 1995. 鉏路湿原の昆虫. 177 pp., 鉏路昆虫同好会, 鉏路.
 鉏路昆虫同好会, 1999. 根室半島の昆虫. 322 pp., 鉏路昆虫同好会, 鉏路.
 鉏路昆虫同好会, 2010. 摩周湖の昆虫. 152 pp., 鉏路昆虫同好会, 鉏路.
 鉏路昆虫同好会, 2011. 鉏路市春採湖の昆虫. 174 pp., 鉏路昆虫同好会, 鉏路.
- 三田敏治, 2020. Superfamily Chrysoidea セイボウ上科. 日本昆虫学会 日本昆虫目録編集委員会編, 日本昆虫目録 第9巻 膜翅目 (第2部 細腰亜目寄生蜂類). pp. 1–41. 權歌書房, 福岡.
- Makino, S., H. Goto, K. Okabe, T. Inoue & I. Okochi, 2021. Aculeate wasp assemblages in naturally regenerating broad-leaved forests and conifer plantations in temperate Japan (Insecta, Hymenoptera). *Bulletin of the Forestry and Forest Products Research Institute*, **20**(2), 121–128.
- Mita, T. & M., Olmi, 2018. Taxonomic additions of Embolemidae and Sclerogibbidae (Hymenoptera: Chrysoidea) from Japan, with description of a new species of Troglomelemus. *Zootaxa*, **4497**(4): 586–592.
- Mita, T., H., Nagano & M., Olmi, 2017. Dryinidae and Embolemidae (Hymenoptera, Chrysoidea) from Anijima, Ogasawara Islands, Japan. *Zootaxa*, **4323**(2): 239–249.
- Móczár, L., 2000. World revision of the *Cleptes satoi* group. *Annales historico-naturales Musei nationalis hungarici*, **92**: 297–324.
- Okamoto, K. & T. Naito, 1963. On the habits of *Cleptes fudzi* Tsuneki (Hymenoptera: Cleptidae). *Kontyu*, **31**: 294–296.
- 佐藤平典, 1981. マツノミドリハバチの生態に関する研究. 岩手県林業試験場研究報告, (4): 1–43.
- 多田内 修・村尾竜起 編, 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 479 pp., 文一総合出版, 東京.
- 谷脇 徹・渡辺恭平, 2012. ブナハバチ捕食寄生蜂の種構成と形態的特徴 – 丹沢山天王寺尾根における3年間の調査事例 –. 神奈川県自然環境保全センター報告, (9): 111–118.
- 寺山 守・須田博久 編著, 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. i-xxxvi+735 pp., 東海大学出版部, 平塚.
- 寺山 守・三田敏治, 2014. 皇居のセイボウ上科ハチ類. 国立科学博物館専報, **50**: 503–507.
- Tosawa, N., 1940. Two new species of *Cleptes* (Cleptidae, Hym.) – the first record of the family from Japan proper. *The Transactions of the Kansai Entomological Society*, **10**(Pt. 2): 1–5 (In Japanese.)
- Uemori, K. & T., Hishi, 2025. Independent Aculeata communities assemble in low-moor wetlands and deciduous forests around Akkeshi–Bekanbeushi Wetland, northeastern Japan. *Wetlands Ecology and Management*, **33**(3): 36.
- 上森教慈・三田敏治・清水 晃・菱 拓雄, 2022. 北海道足寄町の森林においてイエローパントラップを用いて採集された有剣ハチ類. 九州大学農学部演習林報告, (103): 45–51.

上森教慈: uemori_kazushige510@ffpri.go.jp

道東地域で採集した有剣ハチ類の分布記録

上森教慈^{1,2}

(¹ 〒 811-2415 福岡県糟屋郡篠栗町津波黒 394 九州大学農学部流域環境制御学教室; ² 〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所)

Records of Aculeata bees and wasps (Hymenoptera) collected
in East Hokkaido region, Hokkaido, Japan

Kazushige Uemori^{1,2}

(¹ Forest Ecosystem Laboratory, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Tsubakuro 394, Sasaguri-machi, Kasuya-gun, Fukuoka, 811-2415, Japan; ² Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Tsukuba, Ibaraki 305-8687, Japan)

Summary. Aculeata bees and wasps (Hymenoptera) collected in East Hokkaido region (Hokkaido, Japan) are listed. A total of 100 species were collected and identified during the survey.

緒言

道東地域では足寄町、厚岸町、霧多布湿原、釧路湿原、根室半島、摩周湖、釧路市春採湖などで昆虫相が調査されている(釧路昆虫同好会, 1993, 1995, 1999, 2010, 2011; 霧多布ナショナルトラスト, 2018; 上森ら, 2022; Uemori & Hishi, 2025)。また、標茶町を中心とした北海道東部で精力的に昆虫類の調査を行われていた飯島一雄氏の標本が釧路市立博物館に寄贈され、有剣ハチ類の目録も出版されている(土屋・渡辺, 2025)。このように、近年有剣ハチ類の分布記録が蓄積されつつある道東地域であるが、まとまった記録はいまだ少ない状況にある。

本報告では、筆者が2019年6、7、8月および2021年7月に主に道東地域において採集した有剣ハチ類の分布記録を報告する。

材料と方法

調査は帯広市、根室市、上士幌町、浦幌町、豊頃町、清里町、別海町、中札内村、上川町で行った。上川町は道北地域に属するが、上士幌町から連続した山岳地帯である大雪山系でもあるため、この場で報告する。採集は主に道沿いのオオイタドリ、ウド、オオハナウド、エゾニュウ、エゾノヨロイグサ、ホザキシモツケ、ムラサキツメクサなどの花に訪花している個体を対象に行った。

有剣ハチ類の同定は主に多田内・村尾(2014)および寺山・須田(2016)を参考に行った。科階級群は Aguiar *et al.* (2013) に従った。標本の一部は現在筆者が保管しているが、すべて九州大学農学部昆虫学教室(ELKU)と九州大学農学部附属演習林に収蔵予定である。

¹ 研究当時の所属 previous affiliation; ² 現在の所属 current affiliation

結果と考察

セイボウ上科 Chrysidoidea

セイボウ科 Chrysididae

1. ホシツヤセイボウ *Pseudomalus punctatus* (Uchida, 1927)
1 F, 13. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ.

クモバチ科 Pompilidae

2. シラキトゲアシクモバチ *Caliadurgus ussuriensis* (Gussakovskij, 1933)
1 M, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷.
3. チシマヒゲクモバチ *Dipogon kurilensis* Lelej, 1986
1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
4. アカゴシトゲアシクモバチ *Priocnemis kunashirensis* Lelej, 1988
1 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
5. カオコブトゲアシクモバチ *Priocnemis mitakensis* Ishikawa, 1954
1 M, 4. VIII. 2019. 豊頃町ウツナイ.
6. リュウキュウクロクモバチ *Anoplius ryukyuensis* Tsuneki, 1990
1 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷.
7. カタヅメクロクモバチ *Anoplius separatus* (Haupt, 1929)
1 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 1 F, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.

コツチバチ科 Tiphidae

8. キスケコツチバチ *Tiphia juliana* Parker, 1937
1 M, 4. VIII. 2019. 豊頃町ウツナイ.
砂浜海岸で得られた。
9. スジコツチバチ *Tiphia ordinaria* Smith, 1873
8 M, 4. VIII. 2019. 豊頃町ウツナイ.
砂浜海岸で得られた。

スズメバチ科 Vespidae

10. ケブカスジドロバチ *Ancistrocerus densepilosellus* (Cameron, 1911)

8 M, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡; 1 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上; 1 F & 8 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

11. ヤマトスジドロバチ *Ancistrocerus japonicus* (Schulthess, 1908)

1 F (図 1), 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.

国内では青森県から屋久島までで記録があり、北海道での記録はないようである(寺山・須田, 2016; Yamane, 1990)。国外では韓国とロシア(沿海州)に分布している。採集地ではケブカスジドロバチが優占しており、本種は1個体のみ得られた。ケブカスジドロバチやシブヤスジドロバチとの区別点として、頭盾に一对の黄斑があること、腹部第1、2背板後縁に黄帯を持ち第3背板後縁には黄帯を持たないことなどがあげられるが、北海道産のケブカスジドロバチでは腹部第3背板後縁の黄帯は消失する場合がある(Yamane, 1990)。実際、今回報告したケブカスジドロバチは雌雄ともに腹部第3背板後縁の黄帯は消失する個体が多かった。そのため、茨城県産および宮崎県産のヤマトスジドロバチ、北海道産のケブカスジドロバチの形質を比較し、本種と同定した。わかりやすい形質として、ケブカスジドロバチに比べて、ヤマトスジドロバチの頭盾先端の突出度合は小さく湾入部は広いこと、前伸腹節後面は狭く孔も小さいことがあげられる。また、茨城県産および宮崎県産の個体と比較した際、頭盾や前伸腹節の形状などの形質や、斑紋パターンに違いは見られなかった。

12. フタスジスズバチ *Discoelius zonalis* (Panzer, 1801)

1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南; 1 F, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.

13. ニセミカドドロバチ *Euodynerus quadrifasciatus* (Fabricius, 1793)

1 M, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷.



図 1. 北海道上川町産ヤマトスジドロバチ, メス. A: 側面観; B: 頭盾.

14. カタトゲハムシドロバチ *Symmorphus cliens* Giordani Soika, 1975
1 F, 24. VIII. 2019. 中札内村南札内.
15. キオビホオナガスズメバチ *Dolichovespula media* (Retzius, 1783)
1 F, 6. VIII. 2019. 上川町清川; 2 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
16. シロオビホオナガスズメバチ *Dolichovespula pacifica* (Birula, 1930)
2 F, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ; 1 F & 1 M, 6. VIII. 2019. 上川町清川; 2 F, 6. VIII. 2019.
上川町層雲峡; 2 F & 3 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
17. モンスズメバチ *Vespa crabro* Linnaeus, 1758
1 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷.
18. ケブカスズメバチ *Vespa simillima* Smith, 1868
1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
19. ヤドリクロスズメバチ *Vespula austriaca* (Panzer, 1799)
2 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
20. ツヤクロスズメバチ *Vespula rufa* (Linnaeus, 1758)
2 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡; 1 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
21. シダクロスズメバチ *Vespula shidai* Ishikawa, Yamane & Wagner, 1980
2 F, 6. VIII. 2019. 上川町清川; 2 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡; 1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
22. キオビクロスズメバチ *Vespula vulgaris* (Linnaeus, 1758)
1 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.
- ミツバチ上科 Apoidea
ギングチバチ科 Crabronidae
23. ニッポンツヤアナバチ *Alysson cameroni* Yasumatsu & Masuda, 1932
1 F & 1 M, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷; 1 F, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.
24. オオトゲアワフキバチ *Argogorytes mystaceus* (Linnaeus, 1761)
1 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
25. コウライアワフキバチ *Gorytes laticinctus* (Lepeletier, 1832)
2 F & 1 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

26. ヒメドロバチモドキ *Nysson trimaculatus* (Rossi, 1790)
3 F, 17. VIII. 2019. 上土幌町三股 .
27. ヤマトドロバチモドキ *Nippononysson rufopictus* Yasumatsu & Maidl, 1936
2 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀 .
28. シブヤギングチ *Crossocerus shibuyai* (Iwata, 1934)
3 F & 1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .
本地における優占種の一つで、花を埋め尽くすほどの個体が訪花していた。
29. ヒゲアシギングチ *Crossocerus barbipes* (Dahlbom, 1845)
1 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ ; 2 F & 4 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .
30. エグレギングチ *Crossocerus emarginatus* (Kohl, 1899)
1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .
31. ヤスマツギングチ *Crossocerus yasumatsui* (Tsuneki, 1947)
4 F, 15. VIII. 2019. 上土幌町三股 .
32. ミズホギングチ *Ectemnius radiatus* (Pérez, 1905)
1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .
33. メスキングチ *Ectemnius lapidaries* (Panzer, 1803)
1 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀 .
34. ヒラズギングチ *Ectemnius ruficornis* (Zetterstedt, 1838)
1 F, 15. VIII. 2019. 上土幌町三股 .
35. ナミギングチ *Ectemnius continuus* (Fabricius, 1804)
2 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 3 F & 5 M, 6. VIII. 2019. 上川町清川 ; 3 F & 3 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀 .
36. クララギングチ *Ectemnius rubicola* (Dufour & Perris, 1840)
1 M, 6. VIII. 2019. 上川町清川 ; 1 M, 21. VII. 2021. 別海町西春別 .
37. ジョウザンギングチ *Ectemnius spinipes* (Morawitz, 1866)
1 M, 6. VIII. 2019. 上川町清川 ; 5 F & 1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 ; 1 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀 .

38. オオギングチ *Ectemnius fossorius* (Linnaeus, 1758)
2 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
39. クビワギングチ *Lestica collaris* (Matsumura, 1912)
2 F & 3 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
40. クラマギングチ *Lestica reiteri* (Kohl, 1915)
1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
41. ヤマトトゲアナバチ *Oxybelus strandi* Yasumatsu, 1935
1 F, 6. VIII. 2019. 上川町清川.
42. クロホソギングチ *Rhopalum latronum* (Kohl, 1915)
7 F & 5 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南; 1 F, 21. VII. 2021. 別海町西春別; 1 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
各地で個体数は多かった。
43. チャタテギングチ *Rhopalum gracile* Wesmael, 1852
7 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
44. ワタナベギングチ *Rhopalum watanabei* Tsuneki, 1952
1 F, 6. VIII. 2019. 上川町清川; 1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
45. エゾジガバチモドキ *Trypoxylon figulus* (Linnaeus, 1758)
1 F, 6. VIII. 2019. 上川町清川.
46. ヤマトジガバチモドキ *Trypoxylon frigidum* Smith, 1856
1 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.
47. ハエトリバチ *Mellinus obscurus* Handlirsch, 1888
1 F & 3 M, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ; 1 F & 1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
48. ジュズダマイスカバチ *Passaloecus monilicornis* Dahlbom, 1842
1 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
49. オオグシアリマキバチ *Pemphredon lethifer* (Shuckard, 1837)
3 M, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.
50. エナシエンモンバチの一種 *Spilomena* sp.
1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南; 1 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

上森ら(2022)で「エナシエンモンバチの一種 *Spilomena* sp.」とした個体と同種と思われ、メスが記載されている日本産種の特徴とは一致しなかった。オスのみが記載され、かつ北海道で記録されているジョウザンエナシエンモンバチ *S. djozankeiana* Tsuneki, 1986 のメスの可能性が考えられる。現地での個体数は多かったが、オスは見られなかった。

51. コブヨコバイバチ *Mimesa lutaria* (Fabricius, 1804)

1 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

52. サメシマヨコバイバチ *Mimumesa atratina* (Morawitz, 1891)

2 F & 8 M, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 1 M, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ ; 1 M, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.

53. ウスヒゲヨコバイバチ *Mimumesa dahlbomi* (Wesmael, 1852)

1 M, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.

54. カオキンヨコバイバチ *Psen aurifrons* Tsuneki, 1959

1 F, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.

55. オオアゴマエダテバチ *Psenulus anomoneurae* (Yasumatsu, 1938)

1 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.

56. クロアシマエダテバチ *Psenulus laevigatus* (Schenck, 1857)

2 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.

57. ペレーマエダテバチ *Psenulus lubricus* (Pérez, 1905)

1 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.

58. ニッコウマエダテバチ *Psenulus nikkoensis* Tsuneki, 1959

1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

59. ヒメエンモンバチ *Stigmus convergens* Tsuneki, 1954

1 F & 1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

60. ナミツチスガリ *Cerceris hortivaga* Kohl, 1880

1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 ; 3 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

61. ニッポンツチスガリ *Cerceris nipponensis* Tsuneki, 1961

1 M, 6. VIII. 2019. 上川町清川.

ムカシハナバチ科 Colletidae

62. ババムカシハナバチ *Colletes babai* Hirashima & Tadauchi, 1979
3 F & 2 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上.
63. ツノフトメンハナバチ *Hylaeus pfankuchi* (Alfken, 1919)
5 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
64. ズグロメンハナバチ *Hylaeus niger* Bridwell, 1919
4 F & 1 M, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡; 1 F, 17. VIII. 2019. 上士幌町三股.
65. アルマンメンハナバチ *Hylaeus globula* (Vachal, 1903)
2 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南; 1 F, 24. VIII. 2019. 中札内村南札内; 1 F & 1 M, 25. VII. 2021.
根室市別当賀.
66. マツムラメンハナバチ *Hylaeus matsumurai* Bridwell, 1919
4 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
67. ノウメンハナバチ *Hylaeus noomen* Hirashima, 1977
1 F, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ.
68. ニッポンメンハナバチ *Hylaeus transversalis* Cockerell, 1924
1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南; 1 F, 21. VII. 2021. 別海町西春別.
69. ヒョットコメンハナバチ *Hylaeus paradiformis* Ikudome, 1989
1 F & 1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南.
70. オモゴメンハナバチ *Hylaeus submonticola* Ikudome, 1989
2 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

ヒメハナバチ科 Andrenidae

71. ヒロズキバナヒメハナバチ *Andrena valeriana* Hirashima, 1957
3 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷.
72. アブラナマメヒメハナバチ *Andrena semirugosa* Cockerell, 1924
2 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.
73. アキノヤマテヒメハナバチ *Andrena mitakensis* Hirashima, 1963
3 F, 24. VIII. 2019. 中札内村南札内.

74. エゾヒメハナバチ *Andrena ezoensis* Hirashima, 1965

2 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷.

コハナバチ科 Halictidae

75. ニジイロコハナバチ *Lasioglossum apristum* (Vachal, 1903)

27 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南; 1 F, 21. VII. 2021. 別海町西春別; 2 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

76. タカネコハナバチ *Lasioglossum calceatum* (Scopoli, 1763)

1 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上; 3 F, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

77. ヨイヤミコハナバチ *Lasioglossum caliginosum* Murao, Ebmer & Tadauchi, 2006

1 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上; 1 F, 21. VII. 2021. 別海町西春別; 28 F & 8 M, 25. VII. 2021. 根室市別当賀.

78. ホクダイコハナバチ *Lasioglossum duplex* (Dalla Torre, 1896)

1 F, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ.

79. ニセキオビコハナバチ *Lasioglossum hoffmanni* (Strand, 1915)

1 M, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.

80. ニッポンコハナバチ *Lasioglossum nipponense* (Hirashima, 1953)

1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

81. ヌプリコハナバチ *Lasioglossum nupricola* (Sakagami 1988)

1 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡.

82. ヒゲナガコハナバチ *Lasioglossum vulusm* (Vachal, 1903)

2 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

83. クラカケチビコハナバチ *Lasioglossum allodalum* Ebmer & Sakagami, 1985

4 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上.

84. ケナガチビコハナバチ *Lasioglossum villosulum* (Kirby, 1802)

8 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷.

85. ミヤベアオコハナバチ *Lasioglossum miyabei* Murao, Ebmer & Tadauchi, 2006

10 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南.

86. ヒラシマアオコハナバチ *Lasioglossum problematicum* (Blüthgen, 1923)
2 F, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ ; 1 M, 4. VIII. 2019. 豊頃町ウツナイ ; 3 F, 6. VIII. 2019.
上川町層雲峡 ; 3 M, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上 ; 5 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南 ; 1 F & 3 M,
17. VIII. 2019. 上士幌町三股 .

87. ハラナガツヤコハナバチ *Lasioglossum laeviventre* (Pérez, 1905)
1 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷 .

88. エゾカタコハナバチ *Lasioglossum kansuense* (Blüthgen, 1934)
2 M, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷 .

89. モリノヤドリコハナバチ *Sphecodes geoffrellus* (Kirby, 1802)
1 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 1 F, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .

90. アマクサヤドリコハナバチ *Sphecodes longulus* Hagens, 1882
1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .

91. エサキヤドリコハナバチ *Sphecodes simillimus* Smith, 1873
1 F & 1 M, 15. VIII. 2019. 清里町江南 .

ケアシハナバチ科 Melittidae

92. シロアシクサレダマバチ *Macropis tibialis* Yasumatsu & Hirashima, 1956
2 M, 4. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ .
畑脇のクサレダマを訪花していた。

ハキリバチ科 Megachilidae

93. ツルガハキリバチ *Megachile tsurugensis* Cockerell, 1924
1 F, 4. VIII. 2019. 上川町清川 .

ミツバチ科 Apidae

94. モモグロキマダラハナバチ *Nomada hakusana* Tsuneki, 1973
1 F, 13. VIII. 2019. 浦幌町川上 .

95. ハイイロヒゲナガハナバチ *Eucera sociabilis* Smith, 1873
3 F & 1 M, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷 .

96. エゾオオマルハナバチ *Bombus hypocrita sapporoensis* Cockerell, 1911
1 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 7 F, 6. VIII. 2019. 上川町層雲峡 .
97. セイヨウオオマルハナバチ *Bombus terrestris* (Linnaeus, 1758)
7 F, 10. VI. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 2 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷 .
98. エゾナガマルハナバチ *Bombus consobrinus yezoensis* Matsumura, 1932
1 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷 .
99. ニセハイイロマルハナバチ *Bombus pseudobaicalensis* Vogt, 1911
4 F, 31. VII. 2019. 帯広市十勝川河川敷 ; 2 F, 13. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ .
100. シュレンクマルハナバチ *Bombus schrencki albidopleuralis* Skorikov, 1915
1 F, 13. VIII. 2019. 浦幌町トイトツキ .

謝 辞

清里町での調査時に同行いただいた外村俊輔氏、井藤竜大氏に厚く御礼申し上げる。本研究の一部は令和3年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金制度およびJST次世代研究者挑戦的研究プログラム(JPMJSP2136)の支援を受けて行われた。

引用文献

- Aguiar, A. P., A. R., Deans, M. S., Engel, M., Forshage, J. T., Huber, J. T., Jennings, N. F., Johnson, A. S., Lelej, J. T., Longino, V., Lohrmann, I., Miko, M., Ohl, C., Rasmusen, A., Taeger & D. S. K., Yu, 2013. Order Hymenoptera. *Zootaxa*, **3703**(1): 51–62.
- 霧多布湿原ナショナルトラスト, 2018. 霧多布湿原生きものリスト 2018. 115 pp., 特定非営利活動法人 霧多布湿原ナショナルトラスト, 浜中町 .
- 釧路昆虫同好会, 1993. 霧多布湿原の昆虫 . 150 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路 .
- 釧路昆虫同好会, 1995. 釧路湿原の昆虫 . 177 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路 .
- 釧路昆虫同好会, 1999. 根室半島の昆虫 . 322 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路 .
- 釧路昆虫同好会, 2010. 摩周湖の昆虫 . 152 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路 .
- 釧路昆虫同好会, 2011. 釧路市春採湖の昆虫 . 174 pp., 釧路昆虫同好会, 釧路 .
- 多田内 修・村尾竜起 編, 2014. 日本産ハナバチ図鑑 . 479 pp., 文一総合出版, 東京 .
- 寺山 守・須田博久 編著, 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑 . i-xxxvi+735 pp., 東海大学出版部, 平塚 .
- 土屋慶丞・渡辺恭平, 2025. 飯島一雄氏寄贈 北海道東部産ハチ類標本目録 - 膜翅目有剣類 - . 釧路市立博物館紀要, **43**: 1–8.
- Uemori, K. & T., Hishi, 2025. Independent Aculeata communities assemble in low-moor wetlands and deciduous forests around Akkeshi–Bekanbeushi Wetland, northeastern Japan. *Wetlands Ecology and Management*, **33**(3): 36.

上森教慈・三田敏治・清水 晃・菱 拓雄, 2022. 北海道足寄町の森林においてイエローパ
ントラップを用いて採集された有剣ハチ類. 九州大学農学部演習林報告, (103): 45-51.
Yamane, Sk., 1990. A revision of the Japanese Eumenidae (Hymenoptera, Vespoidea). *Insecta
matsumurana, New series*, **43**: 1-189.

上森教慈: uemori_kazushige510@ffpri.go.jp

[訂正: Errata]

千葉県松戸市におけるキバラハキリバチの記録の訂正. 渡邊賢司 (千葉県松戸市)
Correction of *Megachile (Amegachile) xanthothrix* (Yasumatsu & Hirashima, 1964) record in Matsudo City, Chiba Prefecture, Japan. Kenji Watanabe (Matsudo, Chiba, Japan)

本誌第1号にて報告した標記報告(渡邊,2022)にて報文中の記録が千葉県初記録としたこと、引用文献中の年号に誤りが判明したので訂正する。

千葉県での本種の記録について、斎藤洋一氏が流山市にて採集した記録(斎藤,2020)を見落としていた事が判明したものである。したがって「千葉県では初記録」を削除したい。また、引用文献にある千葉県動物誌の年号は報告では1990となっているが正しくは1999のため、併せて訂正する。

引用文献

斎藤洋一, 2020. 流山市のハチ3種の記録. 房総の昆虫, (67): 98.

渡邊賢司, 2022. 千葉県松戸市にてキバラハキリバチの記録. すがれおい, (1): 16–18.

山本・渡辺(2023)「ウスキキヌガサタケに飛来したツルガハキリバチ」の訂正. 渡辺恭平¹・山本栄治²(¹〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館; ²〒791-3511 愛媛県喜多郡内子町吉野川1127 山本森林生物研究所)

Erratum of Yamamoto & Watanabe (2023): *Megachile tsurugensis* Cockerell (Hymenoptera, Megachilidae) visiting a mushroom, *Phallus lutetus*. Kyohei Watanabe¹ & Eiji Yamamoto² (¹Kanagawa Prefectural Museum of Natural History, Iriuda 499, Odawara, Kanagawa 250-0031, Japan; ²Yamamoto Institute of Forest Biology, Yoshinokawa 1127, Uchiko, Ehime 791-3511, Japan)

筆者らは本誌にてウスキキヌガサタケに飛来したツルガハキリバチの記録を報告した(山本・渡辺, 2023)。今回、これらの報告で図示した個体を含め、少なくとも一部の個体において同定に誤りがあったため、種名を下記の通り訂正する。

誤) ツルガハキリバチ *Megachile tsurugensis* Cockerell, 1924

正) 少なくとも一部の個体(図1の図示個体を含む)はサカガミハキリバチ *Megachile remota sakagamii* Hirashima & Maeta, 1974

末筆ではあるが誤同定をご指摘下さった濱西 洋氏に感謝申し上げます。

引用文献

山本栄治・渡辺恭平, 2023. ウスキキヌガサタケに飛来したツルガハキリバチ. すがれおい, (4): 83–85.

— 会員通信 —

会員通信欄には会員各位へのお知らせやお願い、書籍の紹介、近況報告などを掲載できます。学術報告と異なり、連絡先の掲載は任意です。本誌は会員向けに公開後、一定の期間の後に一般にも公開されますので、投稿される方はその点についてご留意ください。

次号(第10号)へ掲載するコメントを募集します

渡辺恭平

有難いことに、本誌は創刊以降順調に号を重ね、次号で第10号となります。毎号100ページを超えるボリュームで、かつ想定よりも早いペースで発行が実現できていることに、投稿いただいた著者の皆さんに感謝しております。今後の更なる発展にむけて、そしてともに「すがれおい」第10号達成を祝うために、次号の会員通信には、会員の皆さんからの感想やご意見、お祝いのコメントなどをいただければと考えております。原稿は2月末を締切とします。お待ちしております。

与那国島・西表島探蜂記(前編)

渡辺恭平

今年の秋に、与那国島と西表島でハチを探してきました。今回はその前編として、与那国島の探蜂記を書きます。採集したハチのリストは次号の学術報告に掲載する予定です。こちらにも一部ハチの情報を掲載していますが、会員通信である本稿は引用せずに、それを引用するようにしてください。

はじめに

博物館の学芸員にとって、夏休みは超繁忙期である。観察会、学芸員実習の対応、その他イベント、各種相談対応等、休む暇なく業務が押し寄せてくる。おまけに最近の父親は家庭サービスもぬかりなく行う必要がある(調査で家を空けることが多い昆虫研究者にとっては、家族の理解は不可欠)。そんなわけで今年の8月の予定は4月に公私とも完全に埋まってしまった。

夏休みが終わった9月に、頑張った自分へのご褒美(?)として、南西諸島でハチ探しをすることにした。実はこの時期の南西諸島(特に八重山)は調査不足であり、私自身もほとんど調査したことがない。なぜ調査不足か、理由はいくつかある。一つ目は台風シーズンであり、予定に余裕がないと行きにくいこと、二つ目はこの地域のお盆シーズンであり、飲食店が臨時休業したり、サービスを取りやめたりすることが多いこと、そして三つ目は暑すぎて虫の数が少なく、人気のある昆虫の出現期ではない(と思われている)ため敬遠されがちのことによる。しかしながら、ハチの中には暑さにやたらと強い種も多く、こんな時期にどんなハチが見られるのかを知るのも楽しいし、何よりも変わったハチに出

会えるかもしれないというワクワク感もある。せっかくなので行ったことが無い与那国島と、10年近くご無沙汰している西表島に行くことにした(さらに言えば、これらの島には2種ほど特に出会ってみたいハチがいる)。西表島は最近色々規制が増えており、クワガタムシの採集者が起こした数多のトラブルにより、昆虫採集への風当たりも強いとの噂も聞くので、西表島で良く調査をしている友人の河合秀樹さんに最新の情報を教えてもらい、念入りに準備した。今回は林野庁に国有林の入林許可をもらい、それで足りる場所のみ調査することにした。国有林の入林所はインターネットで申請書のファイルが入手でき、必要情報や入る予定の林班を記入して申請したが、案内がわかりやすく、許可も1か月程度でおりた。古くからの虫友でカメムシの専門家である千葉県立中央博物館(今は県庁に異動中)の伴 光哲さんと、博物館ボランティアでチョウ好き(といいながら最近甲虫や蛾にもはまっている)大前 寛さんが参加することも決まり、夏前には航空券や宿の手配を終え、出発日に向けて夏の業務に取り組んだ。

与那国島への移動

今回の旅程は9月2日に東京羽田空港から石垣空港へ直行便で移動し、その後与那国空港行きの便に乗り換え、与那国島に4日夕方まで滞在。4日夕方に飛行機で石垣島に戻り、石垣市内で宿泊の後、西表島に移動して8日朝まで滞在、8日に那覇空港経由で東京羽田空港に戻るルートにした。羽田空港から石垣空港へのJAL直行便は朝6:40に出発する。当日朝に自宅(神奈川県西部)を出ても間に合わないため、前日(9月1日)にファーストキャビンという空港内の宿に宿泊した。いわゆるカプセルホテルだが、ファーストクラスとビジネスクラスの2タイプあり、広い方の前者にした。これが正解で、後者はベッドとその下の収納スペースしかなく、スーツケースも広げられない部屋であった。私が選んだ前者の部屋は荷物が置ける広さがあるので、たくさんの荷物がある私でも余裕で寛げた(ただし周囲の音がかなり響き、早朝から周囲がドタバタとやかましいので、いびきや足音などが気になる人には不向きだと思う)。

いよいよ初日(9月2日)だ。早朝の羽田空港は朝早いにもかかわらず人が多い。運悪くこの時間の飲食店はほとんどしまっているの、コンビニ飯で朝食をとる。その後飛行機では植物の予習をしつつうたた寝をし、気づいたら飛行機は石垣空港に近づき旋回するところであった。過去に数十回南西諸島に来ていてもなお、いつみても海の青色には感激する(が、虫探しばかりのために海で泳いだことは無い)。飛行機は石垣空港に着く、新しい石垣空港は今回で2回目であるが、やはりハイソな雰囲気になじまず落ち着かない。羽田空港の混雑で乗っていた飛行機の到着が遅れ、与那国島行きの飛行機は私たちを待っていてくれた。なんとかほぼ定刻に間に合い、今度は与那国島へ飛び立つ。ここからは初めての経路で、途中西表島の真上を通る、大きな川と深い緑色が素晴らしい景観である。海の美しさともども感激していると、30分程度で飛行機は与那国空港に到着した。タラップを降りた第一印象は「涼しい」であった。後で日差しと湿度の洗礼を受けるが、気温だけでみれば、神奈川の方が南西諸島よりも暑いのである。

空港から島で一番大きい祖納(そない)に移動し、「与那国ホンダ」という店で伴さんが手配した車を借りる、ここの店員さんはチョウ屋らしく、こちらが昆虫採集であることを瞬時に見抜かれたが、ハチを採集するのだというと、あんな刺す虫を…と少々驚かれた

様子であった。祖納の集落で「あざみそば」という島のアザミを使った麺を用いた八重山そばをいただく、通常の八重山そばのごわごわした麺と異なり、つるりとした麺が旨い。ちなみに、祖納という地名は西表島にも地域名としてあるため、ラベルを書く時にはかならず島名や町名を併記する必要がある。

与那国島でハチ探し

腹ごしらえも済んだので、早速ハチ探しに出かける。試しに車で5分程度の比川(ひがわ)集落にある比川浜(図1)で採集を試みる。この場所はドラマ(Dr.コトー)の撮影地とのことで、数名の観光客がいたため、そこから少し離れたところでハチを探す。センダングサの花を見るとタイワンツヤハキリバチのオスが多数飛び交っている。少し探すと青色に鈍く光るメスも見られた。また、クメジマコハナバチとオキナワチビアシナガバチも多く、1頭だけトゲアシツヤハナバチも採れた。クメジマコハナバチはモンパノキの花にも多かった。そのほか、モモアカコオロギバチやヨツボシツチバチ、フカイドロバチなど、次々に色鮮やかなハチが姿を見せる。久々の南国的な光景に心が躍るが、ふと、案外ハチ相が貧弱であると冷静になり、今度は集落に移動する。こちら暑さのためか虫は少な目であるが、久々にみるツマグロスズメバチに加え、スダキヌゲハキリバチの姿も見られた。暑さに強い種が多く、炎天下の街中でもいろいろな種に出会えるのがハチの魅力である。



図1. 比川浜(右手樹木の奥にDr.コトーのロケ地がある).

次に与那国岳（どなんだけ、と読む）の北側を走る満田原林道（図2）に移動する。林道の適当な場所で降ろしてもらい、満田原林道の途中にある公園まで歩くことにした。相変わらずセンダングサにタイワンツヤハキリバチが多い。ふと茂みの奥を見ると、ツマグロスズメバチがある木の周囲をまわりつくように飛んでいる。どうやらカクレミノの花が咲いているようだ。最近神奈川県内の緑地でカクレミノの花にはハチが来ることを知っていたため、同様にこの花にも色々来ると考え、偏光サングラスをかけて観察する。小さなハチの影が見えたので掬うと、イリオモテメンハナバチであった。また、梢の花をスweepするとツマグロスズメバチに加えてヨナグニツヤハナバチも入った。出会いたかったハチである。満田原林道を歩きながらスweepしてゆく、暑さでカラカラなために虫は少ないが、コマユバチやゴキブリヤセバチなどが網に入る。また、ヤエヤマヒメトガリヒメバチも網に入る。八重山特産の美しいヒメバチである。そしてハチではないが、ノブオオオアオコメツキという美しい甲虫も網に入った。コメツキムシなのに（失礼！）全身が青光りする大型の種で、与那国島特産種である。

しばらく歩くと、ハチの羽音が上から聞こえる。いつ聞いても心が躍る音だ。こういう時は近くに花がある。案の定、カラスザンショウの花が咲き誇っている。アカアシセジロクマバチとツマグロスズメバチが乱舞し、小さなハチが花の周りを多数飛び交っている。小さなハチはほとんどすべてがイリオモテメンハナバチとサキシマツヤハナバチで、両種あわせて優に100頭以上は網に入った（もちろん必要数を除き残りは逃がした）。また、時折大型で見事なムラサキオオクモバチ（＝シランオオベッコウ）が飛来し、一頭だけツマキツチバチも飛来した。網が届かなかったが、梢をキンモウアナバチも飛んでいた。アカアシセジロクマバチは網をゆっくりと降ると、逃げないで近寄ってくる個体があり、ゆったりと弧を描く動きが刺激となっているのかもしれない。さらに歩くと満田原公園に到着した。この周囲の花にはセイヨウミツバチが見られた。公園の周囲の木々にテリハノブドウが絡みついており、ムラサキオオクモバチやイリオモテメンハナバチが来ていたが、この花を掬って驚いた。網の中に見たこともないシリアゲコバチのオスが入っていた。実に幸先が良い。

採集を終えた二人と合流し、祖納にある「崎原商店」（与那国島で一番大きな商店、滞在中とにかくお世話になった）で夕食と翌日の朝食を調達し、久部良（くぶら）集落にある宿泊予定の「民宿もすら」に向かう。満田原林道から比川の集落を通り、南牧場を通る道路を通って久部良に向かう。南牧場は海沿いで、その眺めは絶景である（図3）が、私の目線は瞬時にその手前にあるハマゴウ（ミツバハマゴウ）に移った。先ほど調べた比川浜にはハマゴウがほとんどなく、今回初めて見るまとまった量のハマゴウである。同行者にお願ひし、少し網を振らせてもらおう。調べてみるとタイワンツヤハキリバチ、アカアシセジロクマバチ、ミナミアオスジハナバチ、アオスジフトハナバチに交じり、探していたサキシマキヌゲハキリバチが見られた。クマバチ以外、どの種も案外すばしっこく、岩場に生えたハマゴウということもあり網がひっかかりやすく採集は少しやりにくいだが、何とかいくつかの個体を採集することができた。夜は湿地脇で灯火採集をしたが、カメムシ狙いの場所であったことと、月齢が悪く、コウラコマユバチの仲間が若干来たくらいであった。明日もあるので適当な時間で切り上げて宿に戻り、早めに寝る。



図 2. 満田原林道 .



図 3. 南牧場南側の海岸 (手前にミツバハマゴウの群落がある).

二日目(9月3日)は島の東寄りにあるイランダ林道(図4)に向かう。遠くに雨を降らしそうな雲が見えるので、恵みの雨が降りそうだ。前日同様林道沿いで採集するが、林に入り込めそうな小路があったので林内に入り、クワズイモの隙間や林内をスイープする。ゴキブリヤセバチの仲間(日本産既知種ではない)に加えて、ミノガトガリヒメバチの仲間(*Ateleute*)が多数採集された。この仲間は今までトガリヒメバチ亜科に含まれていたが、最近独立の亜科にされ、ミノガに寄生することが知られている。その後、林縁を歩くとカラムシの周囲を執拗に飛ぶオオフタオビドロバチを見る、獲物を狩るのではないかと思っただが、逃げそうになったので捕獲した。さらに歩くと道路沿いにセンダングサが多い場所があった。道路わきの花は生えている場所の奥行きが重要で、道路の際にしか花が無い場所にはあまりハチがいない。そのような点ではこの場所はすばらしく、いつものタイワンツヤハキリバチ(図5)とクメジマコハナバチに加え、タイワンキゴシジガバチやヒメコオロギバチ、コクロアナバチ、ツマグロスズメバチ、ヨツボシツチバチ(図6)などが飛び交う。ハチの羽音がするので周囲に注意すると、クサギの花にアオスジフトハナバチが盛んに来ている。この仲間は花の好みが独特である。センダングサだけだと似たような種ばかりが採れるので、周囲の茂みに注意する。テリハノブドウの花にイリオモテメンハナバチやツマグロスズメバチ(図7)、オオムラサキシキブの花にはヨナグニチビツヤハナバチが来るようだ。ヨナグニチビツヤハナバチはとても小さなハナバチで、花に飛来する様子が目立たず、網の中でも注意していないと、ハエの仲間かと思いい見落とす恐れがある。



図4. イランダ林道.



図5. センダングサ類に訪花する台湾ツヤハキリバチのメス.



図6. センダングサ類に訪花するヨツボシツチバチのメス.



図7. テリハノブドウに訪花するツマグロスズメバチのワーカー。実に美しいハチである。

花を掬えばかなりの確率で網に入るので、それほど珍しい種ではなさそうだ。ハチが良く来るはずのアカメガシワの花は時期が遅い為か不調だが、オオバギの花が満開の木が1本あり、遠目に見て小さなハチが乱舞している。早速掬うとイリオモテメンハナバチとオキナワツヤハナバチが多数入るが、これらに交じって見た目が違うハチが多数飛んでいる。なんと出会いたかったサキシマコハキリバチであった。いくつも採集できたが、与那国島では結局この木のみで採集された。その後、アカアシセジロクマバチに加えて中型のハナバチが来たので採集すると、台湾ンツヤハキリバチであった。この種は実に様々な花に来るようだ。強烈な日差しと暑さの中でも元気に訪花している。その後雨雲が接近し(図8)、猛烈だが待ちに待っていたスコールが降る。猛暑と乾燥でバテ気味だったので有難いし、降った後は多くのハチが活動するだろう。その後、比川集落で奇跡的に開店していたそば屋でテレビチそばを食べる。この店は量が多く、おまけに大盛りにしたので満腹である。

午後は比川集落の西側にある海岸に行ってみる。観光客が出入りしないためか、多数漂着したゴミがそのまま残っているが、植生は比川浜より豊かである。同じようなハチが採れるが、ここではリュウキュウスナハキバチが見られた。砂地を掘る姿は健気である。また、グンバイヒルガオが咲いていたので少し観察したが、台湾ンツヤハキリバチばかりで、時々付近を飛ぶトゲアシツヤハナバチの方が嬉しかった。スコールの後もどんよりとした天気でも虫の活性が悪く、海岸を後にして昨日ハマゴウを見た場所に向かうが、ハマゴウにはほとんど虫がおらず、道路わきのクサトベラの周囲を飛ぶヒメトックリバチモドキ



図8. 左手に迫る待望の雨雲. その後雨雲は私の頭上を通過し, 強烈なスコールを降らした.



図9. 比川集落西側の海岸.

とトウヨウキイロヒラタヒメバチを摘み、集落でススキの葉の隙間に巣材を運び込むタイワンツヤハキリバチ(図10)を目撃したくらいで終了となった。夜は満田原林道の開けた場所で灯火採集をしたが、今回もカメムシ狙いの場所であったことと、月齢がさらに悪く、コウラコマユバチの仲間が少しと、ホシアメバチの仲間が1頭来たくらいであった。

三日目(9月4日)は与那国島滞在の最終日であり、夕方に空港へ行く必要がある。今日は久部良の集落から満田原まで林道(図11)をゆっくり歩くことにし、伴氏に終点でのピックアップを依頼して別れた。密かに出会いたいヒマラヤルリモンハナバチを探すべく、スイープをしながら道中のセンダングサをもれなく見て歩く。しかしながら、残念ながら今回の旅では姿を見ることはなかった。いれば確実に視認できる種なので、時期を外したと考えている。この道では今までに出会ったハチに加え、途中の湿り気がある場所でチビコハナバチとクモバチ、若干のヒメバチが得られたのが良かった点である。一年で最も暑く、乾燥した季節なので、湿った場所が好きなハチはだいぶ居場所が限られている印象を受けた。一か所壮観だったのは実がついたガジュマルの木で、おびただしい数のツマグロスズメバチとコアオハナムグリが飛来してきたことで、本当にこの2種しか見られなかったものの、その個体数は道中見た数の中では群を抜いていた。その後、天気の良いので昨日訪ねた海岸を再訪し、リュウキュウスナハキバチのオス個体を追加する。オスは砂



図10. ススキの葉の隙間に巣材を運び込んだ後に飛び立つタイワンツヤハキリバチのメス。この個体は逃げてしまい、少し待っていたが帰巢しなかった。巣には葉片が数枚運び込まれていたが、展開時に落ちてしまった。時間の制限もあり長居できず、写真もピンボケしていた。観察失敗である。



図 11. 久部良集落から満田原に向かう林道。

浜の後ろにあるクサトベラなどの葉上に飛来する。その後ハマゴウの場所も数分立ち寄り、サキシマキヌゲハキリバチの追加個体を得て、与那国島での調査を終える。趣ある与那国空港を出て（こういう雰囲気の良い）、わずか30分のフライトで石垣空港、その後市内に移動して離島ターミナルそばのビジネスホテルに泊まる。有難いことにユニットバスの宿であった。頻繁に来島していた学生時代（もう10年以上前！）はとにかく貧乏で、風呂がある宿など夢のまた夢だったのを思い出しながら、どっぷり湯につかる。炎天下で消耗した体が見る見る蘇ってくるのがわかった。夕食はいかにも観光客向けの店でチャンプルーを食べる、値段は高く、味はイマイチだったが、ひさびさにたっぷり野菜を食べられたのが嬉しい（与那国島ではお盆ということもあり、営業していない飲食店も多く、朝と夜、最終日の昼は商店でおにぎりや菓子パン、カップ麺を食べていた）。

（次号、後編につづく）

最近のハチ類コレクション動静3

三田敏治

ご家族がご自宅で管理されていた田埜 正さんのコレクションは、関係者との協議の末、国立科学博物館に収蔵されることとなった。快く受け入れていただいた井手竜也さんには感謝の言葉もない。11月16日に田埜さんの自宅から段ボール箱で合計128箱が搬出され、翌日の17日につくばの標本館に無事搬入されたとのことである。

田埜さんのコレクションは、福井県を中心とした日本各地の有剣類の他、台湾、フィリピンをはじめとして海外の蜂類が多数含まれていることが特徴となっている。室田忠男さんのコレクション同様、本人や常木勝次氏の論文・報文で使われた個体も多く、国内の蜂友諸氏だけでなく海外の研究者にとっても重要なコレクションであるといえる。東南アジア諸国でも日本同様、ハチ類の生息環境の劣化が著しい折、半世紀前の当地の多様性を記録した標本群として、今後も長く活用されることを期待する。

常木氏とその徒弟によるハチ類コレクションの多くは、福井を離れ、国内の拠点的な研究機関へと管理の場所を移している。一方で、福井県立大学年に今年新設された恐竜学部に、化石ハチ類の専門家である大山 望さんが着任された。福井ではこれから、今までにないかたちのハチ類研究拠点ができることだろう。

田埜さんのコレクション移転と時を同じくして、私自身は阿部純大君とともに中国は浙江省杭州市の浙江大学へ標本調査に行っていた。中国のセイボウ上科研究の大家であった故・許 再福 (Xu, Zaifu) 教授 (華南農業大学、中国) のタイプ標本とコレクションの管理状況を確認することが目的であった。

許氏は浙江農業大学 (現・浙江大学) で何 俊華 (He, Junhua) 教授に師事していたこともあり、タイプ標本の多くは浙江大学が収蔵先に指定されている。許氏が華南農業大学に着任して以降のタイプの多くは、そちらが収蔵先となっている。しかし、昨年同大学を訪れ、王 興民 (Wang, Xingmin) 教授のはからいで徹底的にハチ類の標本を探索したが、わずかなセイボウ科とハエヤドリクロバチ科を除くと、許氏の業績に関わる標本は探し出せなかった。

このこと自体はある程度予見していたことだった。というのも許氏に師事していた劉 経賢 (Liu, Jingxian) 氏や陳 華燕 (Chen, Huayan) 氏より、許氏のコレクションが浙江大学へ移転している可能性を事前に知らされていたためである。しかし、劉氏が広州市のキャンパスを離れて以降は、研究室に専門家がいなかった状況が続いていた。そのため、だれも現在の正確な状況を把握できる環境になく、自身の目で確認し、記録にとどめておく必要があった。遠回りであったが、華南農業大学でのタイプ標本不在を確認したうえで浙江大学の調査を進めることは、タイプ標本への正確なアクセスに重要な手順であった。

さて、肝心の浙江大学には、許氏が記載に関わった分類群のタイプの多くが確かに収蔵されていた。たいてい分類群ごとの標本箱に収められており、タイプの有無については箱の外見から判断することは難しかったが、何氏とともに記載した膨大なシロボソクロバチ科のタイプに関しては格段によく整理されていた。阿部君も同行していたのは、これらを

検討するためであった。許氏の業績全体を見通すには時間が足りず歯がゆい思いがあるが、カマバチ科を中心に特に重要な部分については状況を整理することができた。まず、浙江大学を収蔵先に指定しているタイプは基本的に現存する。次に、華南農業大学から衣装ケースサイズのコンテナ数箱分がこちらへ移動している。華南農業大学が収蔵先に指定されている *Cleptes* などセイボウ科の少なくとも一部のタイプは確認できたが、カマバチ科のホロタイプは運ばれてきた標本箱中にみつからなかった。そして、コレクションの管理状況だが、もともと浙江大学にあったカマバチ科のタイプの多くはメス前脚あるいは雄交尾器が取り外され、別途プレパラートとして保管されている。このプレパラートには学名や採集データが記入されている場合もあるが、基本的にタイプステイタスを確認できる文字や印がない。学名やタイプシリーズとの照合は標本IDを参照することで可能だが、東洋区(Xu et al., 2013, Zootaxa, 3614)、旧北区東部(Olmi & Xu, 2015, Zootaxa, 3996)のリビジョンにはその情報の掲載がない。これに関しては、一度、IDとタイプ標本のリストを作成してしまえばよい。浙江大学で見つからなかったタイプは、最晩年まで活発に許氏と共同研究を進めていた故・Massimo Olmi氏(Tuscia University, Italy)のコレクションに残されているはずだと考えている。世界各国から借りたまま返却できていないものがあるらしいことは、陳華燕氏の他、Celso O. Azebedo教授(Universidade Federal do Espírito Santo, Brazil)からも伝え聞いている。

滞在期間中は、カマバチ科のマウント標本の検討をすませ、プレパラートの照合の途中でタイムリミットを迎えた。セイボウ科、アリモドキバチ科、イトヒキバチ科、ハエヤドリクロバチ科等々直接の問い合わせ先のない分類群はまだ残されているが、これらに関しては今後の宿題である。最近昆明に異動したアリガタバチ科の専門家の王春紅(Wang, Chunhong)氏が、たまたま我々の調査期間中に当地を訪れており、直接会うことができたのは幸いだった。今回の調査が滞りなく実現できたのは、セイボウ上科タイプの所在に関する有用な情報を提供していただいた劉氏、Azebedo教授、昨年の調査で多大なご協力をいただいた華南農業大学の王教授、華南植物園の陳氏、本年の調査で多岐にわたりご協力いただいた唐璞(Pu, Tang)副教授、Cornelis van Achterberg名誉教授、龔家宝(Gong, Jiabao)氏はじめとする浙江大学農業生物技術学院の教職員、学生諸氏のおかげである。この場を借りてお礼申し上げる。

イベント企画、募集中です

渡辺恭平・三田敏治

本会のイベントは各自で自由に企画できます。すがれおいに案内を掲載できるほか、メーリングリストで会員への連絡ができますので、ぜひ皆様に企画いただき、全国各地で実施いただければ幸いです。例えば、参加者から参加費を集めて、貸会議室を利用して集まるような実施形態も可能です。企画についてのご相談については随時受け付けておりますので、お気軽にご相談ください。今のところ、加藤優羽さんにより2月の土日に神奈川でサロンができないか、検討中とのことです。詳細が決まりましたらメールで周知いたします。

すがれおい 第9号

(ISSN 2758-2914)

編集：渡辺恭平／編集補助：大對桂一

発行者：膜翅目研究会

2025年12月26日 電子出版

膜翅目研究会ウェブサイト

URL: <https://sites.google.com/view/makushimoku/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

本誌に掲載されている全てのコンテンツの著作権は各著者に帰属しますが、正当な科学的活動を円滑に進めるために、クリエイティブ・コモンズのCC-BY-NCとして扱います。このルールで自由な利用が認められていない商用目的の利用については、著者に許諾を求めることとします。

Sugare-oi No. 9

(ISSN 2758-2914)

Editor: Kyohei Watanabe / Assistant editor: Keiichi Otsui

Published by Hymenopterists Research Association, Japan

Published online on 26 December 2025

Website of Hymenopterists Research Association, Japan

URL: <https://sites.google.com/view/makushimoku/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

Copyright in all content published in the journal is held by the author(s), and all content is distributed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial (CC BY-NC) license. Any other uses must be approved by the author(s).

